

大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念に関する研究

平成28年1月

日本大学大学院理工学研究科博士後期課程

建築学専攻

勝原 基貴



## 目 次

### 序章

1. はじめに
2. 既往研究の検討と問題点
  - 岸田日出刀個人に関する研究書など
  - 岸田日出刀の諸活動に関する個別的研究書等について
  - 包括的な近代建築史研究所等における岸田日出刀の評価と位置づけ
3. 岸田日出刀の一次資料について
4. 岸田日出刀の生い立ちと経歴
5. 研究の方法と本論文の構成

### 第1章 岸田日出刀の自己形成：大学入学から営繕課勤務時の海外渡航まで

#### はじめに

- 第1節 東京帝国大学工学部時代（大正9年4月から大正11年3月まで）
- 第2節 東京帝国大学営繕課時代（大正11年3月から大正14年11月まで）
  - 2-1. 安田講堂と大隈記念講堂の設計競技
  - 2-2. 関東大震災とキャンパス復興
- 第3節 大正末の欧米出張（大正14年11月から大正15年12月まで）
  - 3-1. 大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について
  - 3-2. 面会した建築家と見学した建築作品の印象に関する記述
    - シンドラー、ノイトラ、フェラーら米国で活動していた若手建築家／
    - ベルンハント・ミーロー／ストックホルム市庁舎（エストベリ設計）
    - ／ダルムシュタットの建築群／アメリカの高層建築

#### 小 結

### 第2章 洋行後にみられる建築理念の変容 - 新たなる理論形成に向けて

#### はじめに

- 第1節 評伝本『オットー・ワグナー』の出版
  - 1-1. 明治末・大正期におけるワグナーの紹介記事
    - ゼセッションの受容期（田邊淳吉，岡田信一郎）
    - 分離派建築会の活動期（大内秀一郎，石本喜久治）
  - 1-2. 講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」の開催
  - 1-3. 岸田の評伝本と講演録「オットー・ワグナーに就いて」
- 第2節 博士論文の執筆
  - 2-1. 長谷川輝雄の卒業論文
  - 2-2. 博士論文『欧州近代建築史論』

#### 小 結

### 第3章 講義ノート「意匠及装飾（形体篇）」にみる岸田日出刀の建築造形理念

はじめに

#### 第1節 講義原稿「意匠及装飾」（昭和12年）

- 1-1. 史料の概要
- 1-2. 叙述内容の分析
  - 総論
  - 形態論
  - 建築的形体

#### 1-3. 考察

#### 第2節 墓碑・銅像台座の設計

- 2-1. 斯波忠三郎記念碑（吉田三郎『航空』銅像台座）
- 2-2. 工学博士藤山常一先生胸像台座
- 2-3. 塚本家之墓地

小 結

### 第4章 講義ノート「建築計画」にみる岸田担当科目の講義方針とその理論的特質

はじめに

#### 第1節 講義原稿「建築計画」（昭和12年）

- 1-1. 史料の概要
- 1-2. 叙述内容の分析
  - 建築計画総論
  - 建築計画通論

#### 1-3. 考察

#### 第2節 東京帝国大学講義要目にみる「建築計画」の変遷

#### 第3節 前任・塚本靖の「建築計画」と岸田の講義の変化

小 結

### 第5章 「建築の日本趣味」論に対する岸田日出刀の見解

はじめに

#### 第1節 「建築の日本趣味」に関する岸田の言説

- 1-1. 「学校らしい表現」をめぐる発言
- 1-2. 日本建築界に流行していた所謂日本趣味建築に対する批判

#### 第2節 報告書『日本的趣味意匠の研究（草稿）』

- 1-1. 史料の概要
- 1-2. 叙述内容の分析
  - 我が国将来の建築様式
  - 「建築の日本趣味」論に対する批判
  - 現代建築の発展

### 欧州に於ける現代建築の発展

#### 1-3. 考察

第3節 ゴルフ場クラブハウスの建築作品

第4節 ベルリン五輪大会の会場視察とナチス独逸の建築統制に対する批判

4-1. ベルリン五輪大会の会場視察と芸術競技への参加

4-2. ナチス独逸の建築統制に対する批判

小 結

## 第6章 大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念の性格及び特徴

はじめに - 各章の考察からみえてきたこと

第1節 建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の「新化再現」

1-1. 構造と材料の根本方針と建築の形体との関係（内的要因）

構造と材料の一致

日本の風土的特異性と建築の関係

「形式感」の向上

1-2 時代精神という建築新化の外的要因

伝統と因襲の区別

社会構造と価値観の変化

- ・ 見るための建築から使うための建築へ（実用性の満足）

- ・ 建築の経済化（経済を中心として）

- ・ 美の変化（簡明な形体と無装飾）

第2節 岸田の近代建築理念に基づいた「建築意匠学」確立に向けた取り組み

2-1. 建築の芸術的側面の留保

2-2. 建築の創造に貢献する建築史の存在意義

## 結 論 大正・昭和戦前期の岸田日出刀が戦中・戦後の日本建築界にもたらしたもの

第1節 分離派建築会と同世代の岸田日出刀が果たした成果

第2節 伊東忠太の後継としての岸田日出刀

第3節 岸田が前川國男、丹下健三、浜口隆一ら後進に与えた影響

資料編

講演録「オットー・ワグナーに就いて」

報告書「建築ニ於ケル日本的趣味及ヒ意匠ノ研究」抄録

講義ノート『意匠及装飾（形体篇）』（昭和12年度）抄録

講義ノート『建築計画総論』（昭和12年度）抄録

参考文献

関連業績

## 図版リスト及び出典

### 第1章

- 図 1-1 東京帝国大学工学部建築学科校舎（設計辰野金吾）  
(建築学科・建築学専攻沿革：<http://arch.t.u-tokyo.ac.jp/about/history-of-our-department/> )
- 図 1-2 東京帝国大学工学部建築学科製図室（写真帖『東京帝国大学』、1900年）
- 図 1-3 卒業設計「監獄の建築」透視図①
- 図 1-4 卒業設計「監獄之設計」平面図
- 図 1-5 卒業設計「監獄の建築」透視図②（『岸田日出刀』）
- 図 1-6 豊多摩監獄（設計後藤慶二）
- 図 1-7 「東京大学物理一号館」（筆者撮影）
- 図 1-8 ハンス・ペルツィヒ「ルボン（Lubon）の化学工場」
- 図 1-9 「呉市公会堂及び図書館」透視図①（東京都公文書館蔵）
- 図 1-10 「呉市公会堂及び図書館」スケッチ①（金沢工業大学蔵）
- 図 1-11 「呉市公会堂及び図書館」透視図②（東京都公文書館蔵）
- 図 1-12 「Y銀行独身者倶楽部」（金沢工業大学蔵）
- 図 1-13 「東京帝国大学大講堂透視図」（『建築世界』、1924年1月号）
- 図 1-14 「安田講堂」（筆者撮影）
- 図 1-15 安田講堂図面の捺印（東京大学施設部蔵）
- 図 1-16 「安田講堂」内田祥三素案（左）と岸田案（右）（東京大学施設部所蔵）
- 図 1-17 「安田講堂」内部（筆者撮影）
- 図 1-18 安田講堂のシャンデリア（東京大学総合研究博物館小石川分館所蔵）
- 図 1-19 安田講堂の石膏模型をつくる岸田（『岸田日出刀』）
- 図 1-20 安田講堂石膏模型（金沢工業大学蔵）
- 図 1-21 安田講堂演壇の斥候模型（金沢工業大学蔵）
- 図 1-22 「安田講堂」スケッチ①（金沢工業大学蔵）

- 図 1-23 「安田講堂」スケッチ②（金沢工業大学蔵）
- 図 1-24 「安田講堂」のエスキススケッチ画①（金沢工業大学蔵）
- 図 1-25 「安田講堂」のエスキススケッチ画②（金沢工業大学蔵）
- 図 1-26 「早稲田大学大隈記念講堂」のエスキススケッチ画①（金沢工業大学蔵）
- 図 1-27 「早稲田大学大隈記念講堂」断面図（『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』）
- 図 1-28 「早稲田大学大隈記念講堂」透視図（『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』）
- 図 1-29 東京帝国大学大講堂建築実行部（金沢工業大学蔵）
- 図 1-30 「大学教官食堂」（『建築世界』、1924年5月号）
- 図 1-31 「大学教官食堂」と思われるスケッチ画（金沢工業大学蔵）
- 図 1-32 「バラック御殿」（金沢工業大学蔵）
- 図 1-33 バラック御殿の石膏模型（東京都公文書館蔵）
- 図 1-35 「理想的グラウンドの設計図」
- 図 1-36 「東京帝国大学本郷キャンパス復興計画」
- 図 1-37 帝都創案復興展ポスター（東京都復興記念館蔵）
- 図 1-38 「犠牲者供養塔」（『建築新潮』、1924年6月号）
- 図 1-39 「学士会館建築設計懸賞当選図案」（『建築雑誌』、1924年12月号）
- 図 1-40 「震災記念堂設計競技案（透視図）」（『建築雑誌』、1925年1月号）
- 図 1-41 「夜間診療所」（筆者撮影）
- 図 1-42 「東京帝国大学図書館建築参考設計草案」（『建築雑誌』、1925年1月号）
- 図 1-43 「東京大学医学部納骨堂」（筆者撮影）
- 図 1-44 大正末の洋行での日誌（金沢工業大学蔵）
- 図 1-45 ホノルルのスケッチ（金沢工業大学蔵）
- 図 1-46 建築家アントン・フェラー（金沢工業大学蔵）
- 図 1-47 アントン・フェラーの事務所（金沢工業大学蔵）
- 図 1-48 ロンドンでの下宿先募集の新聞記事（金沢工業大学蔵）
- 図 1-49 洋行の日誌帳（金沢工業大学蔵）



図 1-50 長谷川輝雄（『長谷川輝雄遺稿集』）

図 1-51 木造家屋火災実験（1933年8月28日、東京帝国大学構内）

## 第2章

図 2-1 「海外に於ける建築界の趨勢」（日本建築学会図書館蔵）

図 2-3 石本喜久治の批判記事（『東京朝日新聞』、1928年3月16日）

図 2-4 雑誌『建築ト裝飾』の特集「せせつ志よん号」の表紙

図 2-5 「建築家オットー・ワグナー十年祭」ポスター（デザイン 蔵田周忠）

図 2-6 「国民新聞社講堂」（設計 岡田信一郎）

図 2-7 博士論文『欧州近代建築史論』

## 第3章

図 3-1 形体の初源的な形（『現代の構成』）

図 3-2 齊々哈爾（チチハル）の忠霊塔

図 3-3 哈爾浜（ハルビン）の忠霊塔

図 3-4 「藤山博士胸像台座」竣工写真

図 3-5 「藤山博士胸像台座」図面（『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』、1937年）

図 3-6 「藤山博士胸像台座」

図 3-7 「塚本家之墓」

図 3-8 「塚本家之墓」図面（金沢工業大学蔵）

図 3-9 「航空」像台座（安楽俊作撮影）

図 3-10 「航空」像台座図面（金沢工業大学蔵）

## 第5章

- 図 5-1 下田菊太郎による国会議事堂案
- 図 5-2 「東京帝室博物館」(『葦』)
- 図 5-3 「赤羽学生会ゴルフ倶楽部」クラブハウス内部(金沢工業大学蔵)
- 図 5-4 「学生会ゴルフ倶楽部」配置図(金沢工業大学蔵)
- 図 5-5 「学生会ゴルフ倶楽部」立面、断面図(金沢工業大学蔵)
- 図 5-6 「学生会ゴルフ倶楽部」平面図(金沢工業大学蔵)
- 図 5-7 「学生会ゴルフ倶楽部」各階平面図(金沢工業大学蔵)
- 図 5-8 「武蔵野カントリークラブハウス(六実)」(金沢工業大学蔵)
- 図 5-9 「霞ヶ関カントリークラブ」(1929年)
- 図 5-10 「大森クラブ」(筆者撮影)
- 図 5-11 「大森クラブ」ベランダ(筆者撮影)
- 図 5-12 「日立ゴルフ倶楽部」(金沢工業大学蔵)
- 図 5-13 「日立ゴルフ倶楽部」詳細図(東京都公文書館蔵)
- 図 5-14 「戸田パブリックゴルフコース」(筆者撮影)
- 図 5-15 ベルリンオリンピック大会芸術競技大会の会場
- 図 5-16 オリンピックベルリン大会視察時のシベリア鉄道の切符(金沢工業大学蔵)
- 図 5-17 マックス・タウト(金沢工業大学蔵)
- 図 5-18 6月のIOC総会に合わせて作成された会場案(『朝日新聞』、1937年5月6日)
- 図 5-19 「岸記念体育館案」

## その他

- 図 e-1 金沢工業大学岸田日出刀資料
- 図 e-2 伊東忠太にインタビューする岸田日出刀(『建築学者 伊東忠太』、1945年)
- 図 e-3 1951年ごろの岸田日出刀

- 図 e-4 1955年頃の岸田日出刀(手前)と前川(左)丹下(右)(Rem Koolhaas and hans Ulrich Obrist Project Japan, Taschen, 2011)
- 図 e-5 「和風飲泉小屋」(『飲泉小屋設計図集』)
- 図 e-7 「水原邸」(金沢工業大学蔵)
- 図 e-8 「読売新聞社主催囲碁日本最強決定戦優勝杯」(『読売新聞』、1958年5月10日)
- 図 e-9 「普陀宗乘之廟(承德)」(筆者撮影)
- 図 e-10 「清風寺」(『壁』)
- 図 e-11 「聖光学院」(金沢工業大学)
- 図 e-12 「最上稲荷教総本山妙教寺」仁王門(筆者撮影)
- 図 e-13 「倉吉市庁舎」(筆者撮影)
- 図 e-14 「生長の家本部」(筆者撮影)
- 図 e-15 「浄土真宗本願寺派本願寺津村別院」(筆者撮影)
- 図 e-16 「高知県庁舎」(筆者撮影)
- 図 e-17 「高知県庁舎」模型(金沢工業大学蔵)
- 図 e-18 「中ノ島リバーサイドビル」(筆者撮影)
- 図 e-19 「日光東照宮宝物館」(筆者撮影)
- 図 e-20 「日光東照宮宝物館」透視図(『岸田日出刀』)



## 序章

1. 研究の背景と目的
2. 既往研究の検討と問題点
  - 岸田日出刀個人に関する研究書など
  - 岸田日出刀の諸活動に関する個別的研究書等について
  - 包括的な近代建築史研究所等における岸田日出刀の評価と位置づけ
3. 岸田日出刀の一次資料について
  - 金沢工業大学所蔵の岸田日出刀関連資料について
  - 内田祥三文庫（東京都公文書館所蔵）の岸田日出刀関連資料について
  - 国立国会図書館
4. 岸田日出刀の生い立ちと経歴
  - 生い立ち：東京帝国大学工学部入学まで
  - 経歴
5. 研究の方法と本論文の構成

## 研究の背景と目的

本論文は、大正末から戦後再建にかけて活躍した建築学者・建築家である岸田日出刀（1899 - 1966）の講義ノートと草稿・原稿類に着目し、大正・昭和戦前期における岸田の近代建築理念の性格及び特徴を探ることを目的としている。

明治、大正、昭和の時代を生きた岸田は、明治時代後期の1899（明治32）年2月、福岡市箕子町に生まれた。第一高等学校を経て、1920（大正9）年、東京帝国大学工学部建築学科に入学する。これは、分離派建築会を結成した中心メンバーらが在籍した第39回生の2年下の学年にあたる。大学卒業後は、内田祥三率いる東京帝国大学宮繕課に勤務し、1923（大正12）年から講師嘱託として後進の指導にあたり、1925（大正14）年には助教授に就任する。この頃、約1年間の海外渡航を経験し、1929（昭和4）年、博士論文『欧州近代建築史論』を書き上げ、30歳の若さで教授に就任。伊東忠太の後継として期待されていた長谷川輝雄の急逝を受け、岸田は一時的に日本・東洋建築史を講じるなど戦前期の若手不在の建築教室を支えながら、1959（昭和34）年の退官まで約36年間の長きに渡り、建築意匠の学問的な確立を目指した学者として研究・教育活動を行った。この間、研究室から前川國男、立原道造、丹下健三、浜口隆一、吉武泰水らを輩出し、その後の日本建築界を代表する建築家、建築学者、建築評論家を数多く直接指導した。

また、彼の活動は学内だけにとどまらず、建築設計競技の審査員、日本建築学会会長、明治神宮造営委員、1940年と1964年の2度の東京五輪施設委員など、数多くの要職を務めた。多芸多趣味でもあり、ゴルフに関しては、その盛時には日本選手権競技に出場する腕前で、歌唱では新潟の『相川音頭』に心酔し、その他にもテニス、囲碁などの愛好家でもあった。1950年に日本芸術院賞、1957年に丹下と共に、倉吉市庁舎の設計で日本建築学会賞、1965年には、オリンピック施設の企画設計で日本建築学会特別賞を受賞。定年退官後の晩年は、東京大学名誉教授となり、自らの事務所である岸田建築研究所で設計活動を続け、日本道路公団へのデザインポリシーの指導なども行っている。そして、生涯に渡り設計活動、専門書から一般向け随筆集に至るまで執筆活動にも活発に取り組み、新聞雑誌

記事など、膨大な数の著作、80以上の建築作品を残している。

このように極めて多岐にわたる活動を展開した岸田は、世代としては、日本建築界の基礎を作り上げた辰野金吾ら第一世代から数えると第三世代にあたる。明治・大正の日本建築界を支えた伊東忠太、塚本靖、関野貞、佐野利器、内田祥三ら、第二世代から指導を受けた。そして、前川、丹下ら、主に戦後を中心に活躍した第四世代以降の後進の建築家、建築学者、建築評論家たちを数多く指導し、大学教員の職分だけでなく、多岐にわたる活動を展開し、戦前、戦中、戦後を通じて、日本の近代建築の展開に多大な影響を与えた人物の一人である。

岸田に関しては、その活動の幅広さから、これまでに様々な場面で紹介されてきた。しかし、意外にも包括的な日本近代建築史の研究書では、帝都復興創案展におけるラトー建築会の活動に言及される程度であった。また、建築家としても、安田講堂以外の設計が取り上げられることは殆どなく、これまで寡作であるとみなされてきた。このように、岸田は、建築史上において注目される建物の設計者としてではなく、むしろ設計競技の審査員の立場を利用し、在盤谷日本文化会館、大東亜記念造営物、広島平和記念公園といった設計競技で、まだ当時、無名であった丹下健三を一等当選案に押し立て、教え子の丹下を世に送り出したことや、唯一の若手審査員であった東京帝室博物館の設計競技において、前衛的な作品のよき理解者としての立場を示し、「当時のモダニズム全体の取りまとめ役」であったこと、さらには、洋行で手に入れたばかりのル・コルビュジエの著書を前川國男や牧野正巳に貸し出し、彼らの卒業論文の課題とさせ、卒業後、コルビュジエのアトリエに向かうきっかけを与えたエピソードが取り上げられるなど、丹下や前川との関連で語られることが多く、背後から戦略的に日本の近代建築を展開していった人物としてその重要性が語られてきた。

このような側面は、磯崎新の一連の著作にみられる「日本が近代建築を受容し、定着させ、独自の展開をしていくプロデューサーだった」という岸田の人物像に対する評価によって代表され、これまでに広く一般に定着していると言えるが、一方で、多面的かつ多様な活動を支えた岸田の中核を為す、彼の建築観なり建築理念といったものについては、これまで詳しく検討されてこなかった。さらに、岸田にとって活動の拠点であった東京大学で、長年に渡りたずさわった建築教育に関しては、これまで取り上げられることがなかった。

本研究における大正・昭和戦前期とは、岸田が東京帝国大学に入学する1920（大正9）年から1930年代までの期間を指している。本研究で対象とした1920年から1930年代は、日本の近代建築史において、日本の近代建築運動の先駆をきった分離派建築会が結成されるなど、歴史主義からモダニズムへと大きく推移していく段階にあたる。この時期、塚本靖、伊東忠太ら明治・大正期の東京帝国大学の建築教育を担った教授陣が昭和初期に一斉に定年を迎え、岸田は若手不在の建築教室を支えることとなる。この頃の岸田は、表現主義に傾倒し、分離派建築会の影響を受けながら震災後の帝都復興創案展でラトー建築会の小グループを結成したと、語られてきたが、分離派建築会の主要メンバーの2学年下にいた同世代の岸田もまた、ラトーの小グループでの活動にとどまらず、新たな建築の在り様を模索していたはずである。しかし、これまでの近代建築史では、前述の通り、後進の前川、丹下との関係が多く語られてきたものの、彼の建築観なり建築理念といったものについては、これまで詳しく検討されてこなかった。伊東ら先代と丹下らの間の世代にいた岸田自身の内実が十分に解明されていなかったことにより、それぞれの世代間で断絶していた側面がある。このような領域を埋めることが本研究の最終的な目標である。

なお、本研究において戦前期を1930年代までと設定したのは、1937（昭和12）年の日中戦争の勃発による資材統制の強化により建築活動、とりわけ民需用の大型建物の建設が縮小していくこと、そして、岸田も『葦』所収の「昭和十二年の建築意匠」において、昭和12年を戦前における「建築の発展段階の一つの終止符」とみており、上述の目標をおよそ達成できるからである。日本近代建築の渦中で多岐にわたる活動を展開した岸田の大正・昭和戦前期の近代建築理念を考究することは、日本の建築におけるモダニズムを再考する上でも、重要な作業であると考えている。

## 既往研究の成果と課題

これまでも岸田は、その活動の幅広さから様々な場面で紹介、あるいは各々の研究において考察の対象とされてきた。ここでは、岸田日出刀に関する既往研究について、つぎの3



つの側面に分けて検討を行いたい。

1. 岸田日出刀個人に関する研究書など
2. 岸田日出刀の諸活動に関する個別的研究書等について

ここでは、具体的な岸田日出刀に関する個別研究の状況を指摘し、どのような考察がなされてきたのか検討する。

3. 包括的な近代建築史研究所等における岸田日出刀の評価と位置づけ

ここでは、これまで岸田がどのようなかたちで日本の近代建築史の解釈の枠組みに評価、位置づけられてきたかを考察する。

これらを踏まえて、本研究の課題を明確にしたい。

岸田日出刀個人に関する研究書など

◇ 『岸田日出刀 上下』（相模書房、1972年）

本書は、岸田の没後、前川國男を委員長として編纂され、関係者を対象に500部限定で刷られた追悼本である。岸田と関係が深かった相模書房から出版された。函入り上下巻、約700頁からなる大著で、上巻には、年表、勝子夫人の言葉、岸田の写真や主要作品の図面、卒業論文の抄録、日記帳の一部、内田祥三をはじめとする交流のあった建築家や関係者から寄せられた追悼文、門下生を3世代に分け開催された座談会の記録などが収められている。一方、下巻は、岸田の研究論文の巻となっており、岸田の博士論文「欧州近代建築史論」と評伝本『オットー・ワグナー』が収録されている。また、付録として、市川自邸の図面と『相川音頭』『黒田節』といった岸田の歌唱を録音したソシノートが付いている。

本書は、岸田個人に関するモノグラフとしては唯一の書物である。量、質ともに最大のものであり、岸田研究の定本とされてきた。岸田に関してまとまった情報を提供してくれる資料であり、当時直接関係のあった人物による思い出話や証言の数々は、岸田の人となりや幅広い人物関係を知るうえでも貴重な情報源と言える。

しかし、その内容は、追悼メッセージと論文の紹介を中心としたもので、当然ながら岸田の建築理念に関しては詳しく論及されていない上、追悼本という性格から無批判に岸田を礼

賛する傾向があることは否めない。また、口伝による情報も多く、特に年表には、門下生の曖昧な記憶に基づく記載が多い。年号の誤りも散見され、岸田の建築作品も網羅しているとは言いがたい。

本書の存在は、今日の岸田の人物像に多大な影響を与えており、「建築家としては寡作だった」とする印象も本書の年譜によるところが大きいように思われる。加えて、錚々たる面々がメッセージを寄せており、本書の大きさゆえに、かえって研究の停滞を招いていた側面もあった。

◇ 五十嵐太郎「岸田日出刀：丹下健三を世に送り出した男」『建築文化』（2000年1月号）  
雑誌『建築文化』において、日本の建築におけるモダニズムを再考する特集「日本モダニズムの30人」が組まれた。その中の一人として、岸田が取り上げられている。日本の建築におけるモダニズムを考えるうえで、岸田が重要な人物のひとりであることが示されている。ここで、五十嵐は、表題にも記しているように、「大東亜建設記念営造計画（1942）」、「在盤谷日本文化会館（1943）」、「広島平和記念公園（1949）」といった戦中、戦後の設計競技の審査員を務め、丹下健三を一等に推したエピソードを紹介し、「丹下健三を世に送り出した」人物との評価をしている。まだ十分に名の知れていなかった弟子の丹下を世界的な建築家に押し立てるために、岸田が審査員という立場を利用して、何をしたのかという点の記述が中心である。岸田自身の建築理念については、ほとんど重要視されず、むしろ「丹下健三の立役者」とみる日本近代建築史上における位置付けは、後述の既往研究にも頻繁にみられる。近代建築の展開を包括的に把握、理解を図る際、岸田は、とくに丹下健三との関係で語られることが多い。

また、近年の研究成果として、岸祐による日本建築界の言説群を辿った研究がある。

◇ 岸祐『「貫戦」期日本におけるモダニズム建築の言説・表象・実践 - 近代性による「日本的なもの」の構築 -』（博士論文）

岸の博士論文は、1920年代末から1940年代の日本建築界において「日本的なもの」がどのように議論されてきたものなのか、特に岸田日出刀の言説に着目し、「貫戦期」という表現を用いることで、これまで試みられていなかった戦前・戦時・戦後の連続性と非

連続性を捉えようとしている。そのため、本研究は、岸田個人を体系的に論じたものではないものの、建築界の言説における戦前と戦後の連続的把握を試みるために、とりわけ岸田の言説に対し、かなりの頁数が割かれている。戦前、戦後を通じて活躍した岸田の言説を用いることによって、建築界の言説における戦時と戦後の連続的把握する試みは、ある意味において、非常に有効なものと考えられるが、一方でやはり中心となる岸田の近代建築理念が明確になされていないことから、新たな見解を示すまでには至っていない。

#### 岸田日出刀の諸活動に関する個別的研究書等について

岸田の諸活動の個別的内容を扱った研究書としては、出版年代順に列挙すると次のようなものがある。

- ① 佐藤利之「1940年前後に日本で実施された記念建造物の設計競技 それらを中心に展開された近代建築の『記念』の形態」『芸術学研究』（1998年）
- ② 藤岡洋保「日本の建築家がル・コルビュジエに見たもの―戦前のル・コルビュジエ評価を中心に」『ル・コルビュジエと日本』（鹿島出版会、1999年）
- ③ 佐々木宏「ル・コルビュジエと日本の建築家たち」『ル・コルビュジエと日本』（鹿島出版会、1999年）
- ④ 佐々木宏『巨匠への憧憬 - ル・コルビュジエに魅せられた日本の建築家たち』（相模書房、2000年）
- ⑤ 五十嵐太郎「直線か、曲線か--伊東忠太と岸田日出刀を中心に」『10+1』（INAX、2000年6月号）
- ⑥ 佐藤利之「国家記念の場に関する岸田日出刀の構想と見解 - 『靖国神社神域拡張計画』について(1)立案の歴史的経緯」『建築史学』（2001年9月号）
- ⑦ 藤尾直史「東京大学の震災復興と岸田日出刀 学術標本一般・建築・物的基盤の生産に関する基礎的研究（2）」（日本建築学会四国支部研究報告集、2004年）
- ⑧ 早川典子「岸田日出刀設計「永積邸」について～建築系博物館における建築資料研究～」（日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、2004年）

- ⑨ 西村将洋「岸田日出刀（1899 - 1966） - オリンピックの建築家代表」『言語都市 ベルリン』（藤原書店、2006年）
- ⑩ 梅宮弘光「岸田日出刀のカメラアイ - 1930年代における「構成」の位相」東京都庭園美術館『建築の記憶 - 写真と建築の近現代』（2008年）
- ⑪ 三島雅博「岸田日出刀の『日本建築史』に見られる近代主義者の態度について」（日本建築学会学術講演梗概集、2008年）
- ⑫ 速水清孝「市浦健設計『日光龍頭山の家』に見るアントニン・レーモンドの影響」（日本建築学会計画系論文集、2009年5月号）
- ⑬ 西村将洋「日本建築とモダニズム以後」『『Japan To-day』研究 - 戦時期『文藝春秋』の海外発信』（作品社、2011年）
- ⑭ 河田健「第12回オリンピック東京大会駒沢会場の計画案について」『学術講演梗概集』（2011年）
- ⑮ 梅干野成央、土本俊和「百瀬家文書中の檜ヶ岳殺生ヒュッテとヒュッテ西岳に関する昭和初期の建築史料」（日本建築学会大会学術講演梗概集、2012年）
- ⑯ 豊川斎赫「外苑も候補地に挙がった『幻の東京五輪』」『日経アーキテクチャ』（日経BP社、2014年3月10日号）
- ⑰ 豊川斎赫「競技施設群を1人で指揮 岸田日出刀の統率力」『日経アーキテクチャ』（日経BP社、2014年3月25日号）
- ⑱ 青井哲人「北御堂（本願寺津村別院）の建築 斜めから、正面を。」『関西のモダニズム建築』（淡交社、2014年）
- ⑲ 梅干野成央「『百瀬家文書』における殺生小屋と西岳小屋の設計図書について」（日本建築学会技術報告集、2014年）

これらは、その主題から大きく5つに分けられる。

A) モダニズムと記念性                      ①、⑥

- B) ル・コルビュジエの受容 ②、③、④
- C) 「日本」の表象 ⑤、⑩、⑪、⑬
- D) オリンピックの施設委員 ⑨、⑭、⑯、⑰
- E) 建築史料、作品の紹介 ⑦、⑧、⑫、⑮、⑱、⑲

①と⑥の佐藤利之による研究は、「モダニズムと記念性」という側面から岸田について言及が為されている。日中戦争からアジア・太平洋戦争へと至る1940（昭和15）年前後の数年間は、忠霊塔の建設運動、「大東亜建設記念營造計画」、「靖国神社神域拡張計画」など、記念建造物の建設や計画が盛んに行なわれた時期にあたる。これらの設計競技で審査員を務めた岸田の言説や参考図として提示された図案を基に、岸田が「記念」の形態に対し、どのような構想と見解を示していたのか、について考察を行っている。忠霊塔の建設運動や「大東亜建設記念營造計画」に関しては、戦時下の建築界の動向について詳細な分析を行っている井上章一も取り上げているが、「靖国神社神域拡張計画」について触れられているのは、佐藤による⑥の論考が唯一である。岸田が関わったそれぞれのコンペは、別個の計画であったが、モダニズムの理念との両立が困難であった「記念性」の問題に対して、彼の関心が一つの連続的な流れになっていることを指摘している。しかし、国家的な広場に対する岸田の構想を提示している点で評価できる反面、検証の対象とされている事例と時代が限定されており、包括的な検討が為されていない。岸田の建築理念の実像が解明されておらず、なお課題が残されている。

②、③、④は、日本建築界における「ル・コルビュジエの受容」という側面から岸田について言及が為されている。これらは、1997年2月に開催された国際シンポジウム「世界中のル・コルビュジエ - ル・コルビュジエと日本」をきっかけに、コルビュジエに魅せられた日本の建築家たちに関する論考が相次いで発表された。海外で買い求めたコルビュジエの著書を牧野正巳や前川國男に貸し出し、彼らが東京帝国大学卒業後、コルビュジエのアトリエに入門するきっかけをつくったエピソードのほか、学会パンフレット「海外に於ける建築界の趨勢」において、岸田がどのような理解をもってコルビュジエを紹介していたか、な

どについて考察している。とりわけ佐々木宏による論考（③および④）では、大正末の洋行後に岸田が執筆し、日本建築学会が出版した学会パンフレット『海外に於ける建築界の趨勢』（1927）の叙述内容を詳細にわたって分析し、岸田がコルビュジエを日本建築界にいち早く紹介した点だけでなく、英国のレリー教授のコルビュジエに関する論説を持ち出すなどして、かなり意図的にコルビュジエを讃美し、その将来性を説明している点を高く評価している。

藤岡による②の論考では、当時の日本の建築家たちの理解度を示す一例として、コルビュジエ設計のサヴォア邸の壁と柱の関係について、岸田が「壁から少し離れて柱が立っていることを問題」にし、「柱と壁の間の空間は無駄だと述べている」とされる文章を取り上げている。そして、本来、コルビュジエにおいては、支える要素と空間を覆う要素を分節化するという認識をもって行われていたものを「細部の処理の仕方という、局部の問題」として捉えていることから、岸田をはじめとする当時の建築家たちは「合目的性の提唱が観念的なレベルにとどまり、創作の問題につなげる意識が希薄だった」と指摘している。

当該箇所の記された文章の出典が記されていないため、岸田のどの発言を引用しているのか、シンポジウムの講演録である文中からは理解できないが、岸田の「合目的性」に対する解釈、創作への問題意識の有無を今日的な理解を以て判断するのは、やや拙速な結論であるように思われる。また、岸田は、当時の日本建築界に建築批評家の誕生を望んでいた。今日的なコルビュジエの設計理念等に関する理解に比べれば、当時の岸田の理解は勉強不足であったと言えるかもしれないが、サヴォア邸に対し、何らかのクリティカルな視点を投げかけようと挑戦していたのではないか。これもまた、なぜ岸田がコルビュジエに関心を寄せたのか、岸田自身の建築理念が十分に解明されていないことによる、やや否定的な評価であるように思われる。

⑤、⑩、⑪、⑬は、岸田が日本建築をどう見たかという『『日本』の表象』という側面から岸田について言及が為されている。

⑤の五十嵐太郎の論考は、デザインの問題を取り上げ、伊東忠太と岸田の生きた時代の違いによって生じた理念の相違を曲線と直線という対置する特徴をもって論じている。法隆寺

中門の柱にみられる曲線が、ギリシャにあるパルテノン神殿の柱の比例と酷似することからエンタシスであることを指摘し、当時ファガーソンらによって示されていたギリシャ・ローマ建築を本流とする世界建築史に、傍流として捉えられていた日本建築を結び付けようとした伊東に対し、岸田は、神社の直線性にこだわった。「中国の影響を受けた装飾の多い曲線的な仏教建築に対し、神社建築は日本の純潔を維持し、単色性・開放性・無装飾・直線的なものだ」との主張が、モダニズムの美学に直結するもので、「直線＝国際的モダニズム＝日本的神社建築＝機能的＝称賛すべきものに対し、曲線＝中国的仏教建築＝非合理＝排除すべきもの」という神社とモダニズムが互いに補強しあう構図を作り、こうした曲線排除ともいえる傾向を「デザイン論における神仏分離」のようなものであったと指摘している。また、「直線と曲線の強引な二分法は、純粋な日本建築という虚構を成立させるために、日本建築の内部に巣くう悪しき他者を中国に押しつけるものだった」だけでなく、そこには、曲線を多用する表現主義からの脱却を目指した岸田の意思も反映されていると指摘している。曲線から直線への移行という点や二分法によって分類する建築論に関しては、多くの有益な見解を示しているが、岸田は、同時に、曲線のなかには「長い年月の経過のうちにすっかり日本的な清純さに淳化されたといふやうなものも決して少なくない」と言い、単純に「直線性＝モダニズムの美学」という説明だけでは割り切れない様子を表現にとどめている。しかし、五十嵐は、この点には詳しく触れていない。岸田の建築理念を解明するには、より慎重な検討の必要性がある。また、デザイン論における相違点は、曲線と直線という志向の違いによって明確に示されているが、一方で、伊東から継承した側面については触れられていない。したがって、これによって戦前期の岸田の近代建築理念のすべてが解明された訳ではない。

⑩の梅宮弘光による写真集『過去の構成』と『現代の構成』に関する論考は、東京都庭園美術館で行われた展覧会『建築の記憶 - 写真と建築の近現代』のカタログに掲載されたものである。前述のとおり、写真集『過去の構成』は、過去の日本の伝統的なものをカメラのフレームで切り取り、モダニズムを介しての解釈を生み出した殆ど最初の仕事とされ、岸田の試みた日本の古建築の取り出し方は、堀口捨己、丹下ら多くの建築家に影響を与えたことで知られている。

梅宮は、1920年代の建築運動については、「反歴史主義を掲げ来るべき時代の建築様式を集団で模索した」ものの、「夢想的なドローイングの多くが製図版の上にとどまった10年間」とし、より現実性を活動の指標とする実践重視の建築運動が展開された1930年代を「ポスト建築運動」と位置づけ、この転換期ともいうべき状況下に出版された岸田の写真集『過去の構成』（1929年12月）と『現代の構成』（1930年4月）の2著の意味を考察している。

ここで梅宮は、岸田が『過去の構成』で示してみせた構成は、その後、「モダニズムを経由した伝統理解として戦略的に宣伝されていく」ことになるが、ブルーノ・タウト来日前の1930年というタイミングにおいて、国際的潮流であるモダニズムと日本的伝統は通底しているというロジックを意図的に持ち、写真集をまとめたという点については疑問を投げかけている。むしろ、初版が刷られた段階では、当時「モダニズムの先鋭的な一団が主張し始めていた『構築』概念への対抗」という意識が強かったのではないかと推測している。ただし、限られた紙面での発表でもあり、それを立証する具体的な論述は為されていない。

⑩の三島雅博による論考は、岸田が昭和7年に記し、藤島亥治郎の『支那建築史』と合わせた形態で1冊の書物として雄山閣から出版された『日本建築史』を対象に、岸田の建築史観を考察したものである。本書は、当時としてはまだ珍しかった『日本建築史』の通史書であり、伊東忠太、関野貞、天沼俊一、塚本靖ら建築史の先学の研究成果を基に、岸田の独自の視点をもってまとめられたものである。

三島は、岸田の『日本建築史』における時代区分や各時代の建築物の評価に着目し、伊東や関野、天沼らの建築史家が仏教寺院建築に多くの頁を割いているのに対し、岸田が神社や茶室建築に重点を置いていた点などを指摘している。三島は、こうした岸田の側面について、「近代主義者であるタウトが伊勢神宮や桂離宮などを評価した観点は、岸田が神社建築や茶室建築を高く評価し、茶室建築の精神を現代的と評したことにも現れているように、岸田と同じ方向性にあったことは明らかである」と述べている。しかし、本書が出版されたのは、タウト来日の前年のことである。加えて、タウトの伊勢神宮や桂離宮の評価も近年の研究の進展により大きく見直されつつある。この三島の研究は、それまで殆ど取り上げられること



のなかった岸田の『日本建築史』を対象に、示唆に富む多くの内容を提示している反面、岸田とブルーノ・タウトという出自の異なる二人の方向性を同一のものと結論付けており、詳細な部分の論証性に欠けるところがある。さらなる検討の余地を残す。

⑬の西村将洋の論考は、雑誌『文藝春秋』を出版する文藝春秋社が海外発信していた菊池寛責任編集の英文雑誌『Japan To-day』の研究書に掲載されているもので、岸田の寄稿文「Japanese Architecture」（1929年12月号）の解説文として書かれたものである。

ここで西村は、吉田鉄郎、ブルーノ・タウトとの関連を検討し、吉田の著書『日本の住宅』とのスタンスの違い、タウトの考えに影響を受けて、後の『文藝春秋』に「兼好の建築観」を執筆していることなどを指摘している。

本寄稿文が、岸田の随筆集『堊』<sup>かべ</sup>収録のエッセイ「建築の日本らしさ」の冒頭部分を大幅に省略し、第2章の部分を翻訳した英文であることは西村が指摘する通りであるが、「建築と気候との関連性」を強調していることから吉田の『日本の住宅』の内容が念頭にあったという指摘は、やや強引に当て嵌めようとしている感が拭えない。吉田の『日本の住宅』の邦訳が出版されたのは遙か後の2002年のことであり、岸田がドイツ語の原著を読んでいたかも明確ではない。「吉田が民族の固有性を重視したのに対して、岸田は日本人の固有性をやすやすと手放し、環境が人間の趣味や感情までも規定すると主張している。」との指摘も、確かに両者の主張との間には相違がみられるものの、本寄稿文の原典であるエッセイ「建築の日本らしさ」が執筆された昭和13年4月より以前の岸田の文章でも同様の記述が確認でき、さらにタウトの考えに影響を受けて、後の『文藝春秋』に「兼好の建築観」を執筆しているとあるが、タウトの講演より前の昭和8年5月に執筆した、と書かれている「兼好の建築観」（随筆集『堊』所収）が存在することから、これも実態の把握が正確とは言い難い。

⑨、⑭、⑯、⑰は、岸田が務めた1940年と1964年の「オリンピックの施設委員」について取り上げているものである。とりわけ、2020年のオリンピック東京大会の開催決定を受けて浮上したメインスタジアム建設問題をきっかけに、1940年と64年の両五輪で施設委員を務め、主会場の敷地問題などで積極的に発言を行い、新聞紙上を賑わした岸田の発言が再び注目されている。

⑨の西村将洋の論考は、1861年から1945年までの間に、ベルリンを訪問あるいは留学した日本の知識人たち25人の現地での体験を取り上げ、ベルリンから日本の知は何を学んだのかについて考察した研究書『言語都市・ベルリン』（藤原書店）に掲載されたものである。

岸田のベルリンでの行動のうち、競技場施設の調査だけでなく、同時に参加したオリンピック芸術競技にも触れられている。岸田のオリンピック施設委員に関する論考の多くが、帰朝後の報告や東京大会主会場の敷地問題に対する発言に注目しているのに対し、オリンピック芸術競技の出品作を取り上げ、その理念に迫る検証を展開している。岸田の設計したゴルフ場のクラブハウスが「自然との一体感を喚起している」「室内と外部空間がほぼ全面ガラス張りとなっており、空間の開放性を演出している」「柱が垂直に交差し、直線的で『単純明快』な造形性を表現している」といった特徴を有している、と建物の建築的特徴を指摘している。西村は、ここでも前述の⑬の論考と同じく、岸田の芸術競技への出品作が「おそらく岸田は吉田の本を知っていて、戦略を考え抜き、自分の作品を制作したのだろう。」と指摘している。前述のとおり、こうした岸田の価値観や美意識は、吉田の著書の出版以前から確認できるものであり、加えて、岸田と吉田の関係は、取り立てて意見を交換したりするような間柄であったとは思えない。

⑭の河合健による論考は、幻に終わった1940年の第12回オリンピック東京大会の計画案のひとつであった駒沢案について、東京市臨時建築部が参考にしたとみられているベルリン大会の主会場との比較検討を行い、具体的に建築計画上どのような点を取り入れていたのかについて考察している。

しかし、その内容は、岸田によるベルリンの競技場視察に関する報告、東京市臨時建築部が設計した駒沢案の概要を記述するのみで、特別学術的な指摘が為されているわけではない。また、ベルリンまで視察に向かった岸田と最終的に駒沢案を手掛けた東京市臨時建築部との関係についても全く言及されていない。

⑯と⑰の建築史家・豊川斎赫による論考は、雑誌『日経アーキテクチャ』に掲載された、過去の東京大会の会場計画を振り返る連載記事である。豊川は、1940年と1964年の

オリンピック東京大会に関する既出の資料をもとに、岸田の視点から神宮外苑を舞台としたメインスタジアム建設問題の顛末を追っている。

1940年の幻のオリンピック東京大会では、開催地決定後に主会場の敷地問題が発生する。月島案、神宮外苑案、青山練兵場案、駒沢案などが示されたが、月島案には、風の問題があり、青山練兵場案も陸軍の立ち退き拒否があるなど、紆余曲折の末、最終的に駒沢案へと収斂していった。岸田は、10万人収容の大スタジアムと広大な広場を有するベルリンオリンピック会場を視察した経験から、神宮外苑案に対し、「①敷地面積の狭あい、②神宮外苑の風致を害すること、③既存スタンド（4万人収容できる旧神宮外苑競技場）の取り扱い」という理由からメインスタジアム会場の再考を促した。そして、陸軍のバッシングにも屈せず、青山練兵場案や駒沢案を提案した。第12回オリンピック東京大会は、日中戦争の激化による参加拒否国の増加により返上されることとなるが、早い段階から上記の3点を主張した見識の高さと、39歳の若さで新聞紙面に外苑案不支持を明確に打ち出した。そのような岸田の果敢な姿勢は、豊川だけでなく、2020年の東京オリンピック主会場の建設問題に揺れる中、さまざまな場面で発言を行っている松隈洋らも、岸田が果たした業績のひとつとして高く評価している<sup>1)</sup>。

⑦、⑧、⑫、⑮、⑱は、岸田に関する建築史料、作品の紹介である。

⑦の藤尾直史による論考は、『東京帝国大学新聞』の記事を基に、関東大震災後のキャンパス復興計画での岸田の役割について紹介している。⑧の早川典子による論考では、江戸東京博物館に寄贈された岸田設計の住宅「永積邸」の設計図書に関する報告が行われている。⑫、⑮、⑱は、岸田が国立公園協会との関わりで設計に関与した山小屋に関する建築資料について、⑱の青井哲人による論考は、戦後建設された大阪の「北御堂（本願寺津村別院）」に関する紹介である。

---

注1) 1940年の返上となった幻の東京オリンピックの誘致活動や主会場問題については橋本一夫『幻の東京オリンピック』（日本放送出版協会、1994年）、1940年と1964年の両東京オリンピックを都市・建築の視点から読み込んだものに、片木篤『オリンピック・シティ東京1940・1964』（河出書房新社、2010年）、明治神宮外から日本の近代スポーツ史を描き、国立競技場の経緯について詳しく論じているものに後藤健生『国立競技場の100年』（ミネルヴァ書房、2013年）がある。

### 包括的な近代建築史研究書等における岸田日出刀の評価と位置づけ

最後に、包括的な近代建築史研究書等において、岸田の評価が如何になされてきたのか、またどのような位置づけがされてきたのか、という点について言及しておきたい。日本の近代建築史全般を扱った著作のなかで、岸田日出刀に関する記述のある著作等を以下に列挙する。

- ① 稲垣栄三『日本の近代建築 - その成立過程』(丸善、1959年)
- ② 村松貞次郎『日本建築家山脈』(鹿島出版会、1965年)
- ③ 村松貞次郎『日本近代建築の歴史』(日本放送出版協会、1977年)

①の稲垣栄三による『日本の近代建築 - その成立過程』は、この中で岸田は、安田講堂の共同設計者として、また、帝都復興創案展におけるラトー建築会とともにその名が登場する。②の村松貞次郎による『日本建築家山脈』では、岸田は、東大内田山脈の一員として描かれている。③の『日本近代建築の歴史』では、佐々木宏の『近代建築の目撃者』の記述を引用する形で、前川が佐々木の質問に答えた岸田からコルビュジエの本を借りたエピソードを紹介されている。

そのほか、岸田日出刀に言及のある研究書などとしては、前川國男に関する研究書、丹下健三に関する研究書、戦時下の日本建築界に関する研究書、万国博覧会日本館に関する研究書などが指摘できる。それらを以下に列挙する。

- ① 松隈洋『前川國男の戦前期の建築思想の形成について』(博士論文)
- ② 藤森照信『丹下健三』(新建築社、2002年)
- ③ 井上章一『戦時下日本の建築家 - アート・キッチュ・ジャパネスク』(朝日新聞社、1995年)
- ④ 山本佐恵『戦時下の万博と「日本」の表象』(森話社、2015年)

まず、前川に関する研究書で、岸田に言及されているものとして、松隈洋による前川國男の戦前期の建築思想の形成に関する研究(①)があげられる。1905年に生まれた前川國男は、1899年生まれの前田と6歳しか年齢差がないが、岸田研究室の最初期の卒業生であり、戦後の日本の建築界をリードした建築家のひとりである。前川事務所の図面資料等は、

戦災により大半が失われてしまったこともあり、戦後の建築活動に対する研究に比して、戦前、戦中の研究が不足していた。その空白域に取り組んだのが、松隈の博士論文である。近代建築の実現のための技術の確立、日本の伝統から近代建築の空間構成のエッセンスを見つけ出そうとする意識など、戦後に展開される前川の建築思想の核心部が、戦前期から形成されてきたことを明らかにしている。文献や作品を徹底的に調査してまとめ上げられた700頁超の本論文は、前川の戦前、戦中期を知る上での資料性も高い。

とりわけ、日本体育協会の資料を基にして整理されている、1940年の第12回オリンピック東京大会への前川、岸田ら東京帝国大学のメンバーの関わりについては、最も網羅的かつ詳細にわたり記述している。1940年の段階における前川、丹下、岸田の関係を指摘している。

戦時下の建築界の動向について詳細な分析を行っている③の井上章一の研究書は、それまで昭和初期のナショナリズムやファシズムの台頭により出現し、流行したと説明されてきた「帝冠様式」が、戦後建築史由来の否定的な評価であることを指摘し、ナチスのつくりあげた建築様式、第三帝国様式とは似つかぬものであり、日本の建築界はむしろ大東亜共栄圏による国家宣伝とは縁が薄く、日本ファシズムが推進した建築様式ではないと主張している。

本書の中で、岸田は、主に「挑発者の処世術」の章に登場する。前川國男が「建築様式ハ内容ト調和ヲ保ツ必要アルヲ以テ日本趣味ヲ基調トスル東洋式トスルコト」との規定を無視し、多くの応募案が瓦屋根をのせ「日本趣味ヲ基調トスル東洋式」に応えたなか、陸屋根の提案で応募、日本インターナショナル建築界が応募拒否の声明を発表したのに対し、さらに前川は「負ければ賊軍」<sup>2)</sup>を発表するなど、若手建築家たちがプロテストの姿勢を示し、物議を醸した東京帝室博物館の設計競技がある。この設計競技の応募規定をめぐる「保守的な姿勢を示した佐野利器、伊東忠太ら古老」と「新進気鋭の若手建築家」との間に起きたモダニズム定着に向けた闘争で、審査員のなかで唯一若手であった岸田が、若手建築家のよき理解者であったと描かれている。このような位置づけは、藤森による「モダニズム全体の取り

---

注2) 前川國男「負ければ賊軍」『国際建築』（1931年6月号）

まとめ役」と同様である。また、井上の著書では、オピニオンリーダーとしての立場を守るため、審査後、講評の発言を計画的に行い、巧みな処世術を発揮した様子が描かれている。

④の山本佐恵の研究書では、万国博覧会という国家宣伝の場において、戦時下の日本が欧米に対し、どのような「日本」のイメージを提示しようとしていたのか考察している。このなかで、公文書の記録等を元に、岸田が設計<sup>3)</sup>したニューヨーク万博の日本館をめぐる様々な建設までの経緯と作品の分析を行っている。山本は、前出の五十嵐や西村による論考を参照しつつ、「単に外国人向けに『日本らしさ』を宣伝した和風建築」として片づけるわけにはいかず、「岸田が日本館で試みたのは、モダニズム建築と『日本的なもの』の接合という課題に対する実践であった可能性もあるのではないだろうか。」とまとめている。ニューヨーク万博日本館における建設経緯を詳細に分析しているが、その作品面に関しては「モダニズムと伝統の融合」の可能性を指摘するにとどまり、それを立証する具体的な論述は為されていない。

また、必ずしも学術的な手続きを踏んだものではないが、建築評論家の宮内嘉久、建築家の松畑強や磯崎新による一連の著作も岸田の人物像の定着に大きな影響を与えている。

- ① 宮内嘉久『建築ジャーナリズム無頼』（晶文社、1994年）
- ② 松畑強『建築とリアル』（鹿島出版会、1998年）
- ③ 磯崎新『建築が残った 建築の保存と転生』（岩波書店、1998年）
- ④ 磯崎新、二川幸夫「特集：世界から見た日本の現代建築① 日本建築の価値を決めたモノ」『GA JAPAN』（2009年）
- ⑤ 磯崎新、日埜直彦「岸田日出刀/前川國男/丹下健三--日本における建築のモダニズム受容をめぐる」『磯崎新 Interviews』（LIXIL 出版、2014年）

建築家・磯崎新は、建築評論家の宮内嘉久（1926 - 2009）について「宮内嘉久さんは、アカデミズムはすべて反動であるという視点を貫いている。アカデミズムを打倒することが唯一、建築家の前衛としてやるべきことで、大学にいる連中は叩き潰さないといけな

---

注3) 実際の建設にあたっては、材料・労働力の経費削減のため、現地在住の建築家であった松井保生と本多次郎によって設計内容が縮小変更された。

い。そしてそのアカデミズムの悪の根源が岸田日出刀さんだという位置づけだったと思われる。」<sup>4)</sup>と述べている。

宮内は、第二次世界大戦中に大学に入学し、戦後に卒業した世代にあたる。宮内は①で、戦後最初の岸田の授業に出席した感想として「つい昨日まで、ナチス礼賛とまでは行かなかったにもせよ、大勢に便乗してものを言ってきた人間が、一夜明ければこの様である。心底怒りを覚えた。」と語っている。このように、終戦後の岸田には「反動教授」というレッテルが張られていた側面がみられる。岸田は、とりわけ戦後左傾化した人物からきちんとした評価が為されず、けむたがれた存在でもあった。

建築家の松畑強は、②において「岸田日出刀は美的には必ずしもモダニストというわけではなかったが、しかし昭和初期において岸田ほどモダニズムとともに最も体系的に日本建築史や日本の伝統的美学について多くものしたのは、おそらくほかにいまい。」と述べている。しかし「美的には必ずしもモダニストというわけではなかった」との指摘に対し、それ以上の詳細な言及はない。やはり、ここでも岸田の近代建築理念は、明らかにされてはいないことが指摘できる。

建築家の磯崎新（1931 - ）は、学生時代から生前の岸田と親交があり、自らの著書など（②、③、④）において、岸田について最も多く発言してきた人物である。東京大学工学部建築学科の丹下研究室に学んだ磯崎にとって岸田は、丹下健三の師という関係だけでなく、大学院在籍時には、岸田に依頼のあった「高崎山・万寿寺別院計画」（1958）のプロジェクトを任された間柄でもある。このプロジェクトは、計画案に終わったが、「新宿ホワイトハウス」と「大分県医師会館」の間に設計された磯崎の初期作のひとつである。

磯崎は、大分にパトロネージュされる契機に岸田が関わっていたと、自らの体験を語っているが、丹下の仕事の大部分も岸田監修となっており、「若年の丹下健三は岸田日出刀のプロデュースとパトロネージュによって、建築家としてデビューしたといえる。」<sup>5)</sup>と述べてい

---

注4) 磯崎新、日埜直彦「岸田日出刀／前川國男／丹下健三——日本における建築のモダニズム」『10+1』、2005年12月号

注5) 磯崎新編著『建築が残った 近代建築の保存と転生』（岩波書店、1998年）

る。そして、岸田が「日本の建築におけるモダニズムを定着させる上での重要人物」であったと高く評価している。

とりわけ、磯崎は、岸田の業績として、以下の点をあげている。

1. 戦中の日本にモダニズムを最初に持ち込み、戦略として組み立てたこと
2. 過去の日本の伝統的なもの、それまで様式や形式でみていたものをカメラのフレームで切り取ったこと
3. コルビュジエを選択し、前川國男や牧野正巳に影響を与えたこと

このような評価は、②、③、④のいずれの著書にも共通するところである。近著の④では、「日本が近代建築を受容し、定着させ、独自の展開をしていくプロデューサーだった」と記し、日本の建築におけるモダニズムを背後から戦略的に展開していった人物と評価している。

以上岸田日出刀に関する既往研究について検討してきた。その結果、明らかになったことを以下にまとめる。

岸田は、その活動の幅広さから様々な場面で紹介されてきた。岸田に関する既往研究を通覧すると、とりわけ、ここ20年来の研究において「モダニズムと記念性」「ル・コルビュジエの受容」「『日本』の表象」「オリンピックの施設委員」といった様々な視点から、個別的次元では、かなり深く掘り下げられてきたことに気づかされる。

しかし、包括的な日本近代建築史では、帝都復興創案展におけるラトー建築会の活動に言及される程度であり、建築家としても、東京大学安田講堂の設計以外が取り上げられることは殆どなく、これまで寡作であるとみなされてきた。安田講堂や卒業設計にみられる特徴から表現主義に傾倒し、分離派建築会の影響を受けながら震災後の帝都復興創案展でラトー建築会の小グループを結成したと語られ、分離派建築会の扱いに比べると小さなものであった。

また、「日本が近代建築を受容し、定着させ、独自の展開をしていくプロデューサーだった」といった磯崎新の一連の著作に代表される、岸田の人物像に対する評価が定着している一方で、多面的かつ多様な活動を支えた岸田の中核を為す、彼の建築観なり建築理念といったものについては、これまで詳しく検討されてこなかったことが指摘できる。とりわけ、岸



田にとって活動の拠点であった東京大学で、長年に渡りたずさわった建築教育に関しては、これまで取り上げられることがなかった。

## 岸田日出刀の一次資料について

これまで、岸田日出刀に関する研究を困難にしていた要因のひとつに、残存する一次資料の少なさという問題点があった。比較的入手が容易な著作を基にした限られた範囲での読解に留まっていただけでなく、一次資料に基づく実証的な手続きの不足を招いていた。そこで、本論文の執筆に先立ち、没後、全国各所に散逸してしまった岸田関連の資料調査・渉猟に勤めた。

その結果、以下の図書館、アーカイブズ等で、岸田関係資料の所在を確認した。

金沢工業大学建築アーカイブズ研究所：岸田日出刀資料

東京都公文書館内田祥三文庫：東京帝国大学宮繕課関連史料やその他の図面

国立国会図書館：雑誌記事

東京大学施設課：安田講堂などの図面

東北大学図書館：雑誌「朗」などの岸田研究室旧蔵本

江戸東京博物館：「永積邸」<sup>6)</sup>関連の図面、書類資料と岸田設計の家具

日本大学：ベルリンオリンピック視察時の写真、図面等

とりわけ、金沢工業大学建築アーカイブズ研究所所蔵の岸田日出刀資料<sup>7)</sup>は大きな役割を

---

注6) 岸田の没後、自宅にあった蔵書の大部分は、古地図や地誌、産業史等を専門に扱う神田の古書店・秦川堂書店が買い取った。同書店と顧客関係があった古地図のコレクターでもある建築家の山下和正が購入し、長年所有していた。山下氏が、平成23年11月に建築関連の資料を金沢工業大学建築アーカイブズ研究所に寄贈した際に、岸田日出刀資料も一緒に移管された。

注7) 「永積邸」は、岸田が昭和6年に設計した最初の住宅作品である。2002年に永積太郎氏が、江戸東京博物館に図面、支払関係の書類等の資料、現存していた家具一式を寄贈した。椅子等家具も岸田の設計によるもので、東京大学との取引もあった寿商会が作製している。施主である永積寅彦は、昭和天皇の学友であった人物で、長年侍従を務め、大葬では祭官長を務めた。千代田区三番町に建てられ、岸田の著書『焦土に立ちて』に登場する「N邸」のことであるが、昭和20年の空襲で焼失している。九州大学の工学部長であった寅彦の父である「永積純次郎と岸田の間に交流があり、息子の自邸建設にあたり紹介した」とご遺族に伝わるそうだが、岸田の著書では異なる経緯が書かれている。収蔵資料と製図上の特徴については、早川典子「岸田日出刀設計「永積邸」について：歴

果たした。筆者は、数次にわたり金沢工業大学建築アーカイブズ研究所を訪問し、寄贈時のまま未整理の状態であった資料の整理作業を行った。直筆の図面や原稿類の発見によって、戦前期を中心に、彼の東京帝国大学の在学時から定年退官するまでの時期の多くの新事実が明らかとなった。

#### 金沢工業大学所蔵の岸田日出刀関連資料について

金沢工業大学建築アーカイブズ研究所が、平成21（2009）年1月、岸田日出刀に関連する資料（以下、金工大資料）を受け入れた。ダンボール箱12箱分に及んだこれら資料群は、受け入れ時の順序を保ったまま中性紙箱60箱に移し替えられ、同研究所内で保管されている。金工大資料は、写真、原図、青焼き図面、日誌、スケッチブック、原稿、大学ノート、岸田が務めた各種委員関連のファイルなどの書類等から成り、状態、量・質ともに国内最大である。

同研究所では、受け入れた他の建築関係者の資料を含め、資料公開に向けて、順次、段階的に整理作業が進められているが、これまで岸田に関する資料は、その点数が膨大であることから未整理のままの状態であった。そこで筆者は、金工大資料の状態を把握するため、まず、史料の整理作業に着手した。

史料を1点ずつ確認し、撮影、寸法実測、内容、容態等を記入した一覧を作成するとともに、検索性の向上と全体像を把握するためデータベースを作成した。『岸田日出刀』の年表に記載されていない情報等は、雑誌等の文献資料と照合を行い、その内容について検討を行ってきた。

その様態は分類すると表1のようになる。

---

史系博物館における建築資料研究』『日本建築学会学術講演梗概集』（2004、p.p.421-422）に詳しい。

表 1 金沢工業大学建築アーカイブズ研究所所蔵の岸田日出刀史料の内訳

写真資料	5758(内、図面を写した写真445枚)		図面	原図(手書き)	62	
				複写図	213	
原稿・ ノート類	研究	論文ファイル	4	書類	教育関係	1
		研究ノート	1		委員関係 文化財	2
	著作原稿		21		学術研究会議	4
	教育関係	講義ノート	12		建築学会	2
		授業プリント	1		オリンピック	3
		その他	18		その他	8
	その他	スケッチブック	2		記事抜刷	10
		旅行の日記	4		審査員関係	3
		出張	1		作品関連	1
		作品集	2		その他	2
		ゴルフ	4		その他	6

資料の大半は、写真や雑誌記事挿図の切り抜きを張り付けた台紙である。それら写真は合計で5,758枚におよぶ。図面資料は、出版物の挿図や設計の参考にするために岸田が収集したと思われる他の建築家の図面を含めると720枚(内、手書きの原図が62枚、青焼きが213枚、図面を撮影した写真が445枚)ある。図面資料と写真の他にも、封筒やフォルダなどで束ねられているまとまりやノート・バインダー1冊を1件と数えると原稿・ノート類、書類等は109件におよぶ。

これら資料の作成時期は、学生時代から岸田が東京大学を定年退官するまで、大正11年頃から昭和34年頃までの約37年間にあたり、岸田が建築活動を行った時期の大部分を占めている。中には、没後に編纂された追悼文集『岸田日出刀』(相模書房、1972年)の年表等に掲載されていない内容も散見され、岸田の建築活動の空白域を埋める一次資料が多く含まれている。

特に本研究では、金沢工業大学等の現存する建築資料のアーカイブを丹念にあたり、未整理のものについては、整理作業を行うことで、研究上の用途に資するものとともに、岸田の東大退官までの時期に関する手つかずの第一次資料を豊富に用いた。

内田祥三文庫(東京都公文書館所蔵)の岸田日出刀関連資料について

東京都公文書館所蔵の内田祥三文庫も大きな役割を果たした。岸田の恩師である内田祥三の資料群であり、このなかに岸田が大学卒業後に勤務した東京帝国大学営繕課に関する資料が多数含まれている。資料は、昭和58(1983)年に内田の妻・内田美彌氏より東京都公文書館に寄託されたもので、その内容は、原図、青焼きの図面、営繕課の給与明細等の資料、建築設計競技の審査記録など多岐にわたる。これら資料の一部は、建築設計競技の審査記録を中心に、さまざまな研究において用いられてきたが、内田文庫に存在する図面資料の内容を調査したものはなかった。

資料の目録は、「内田祥三資料目録(Ⅰ)、(Ⅱ)」の2冊にまとめられているほか、近年、東京都公文書館の情報検索システム(<http://www.archives.metro.tokyo.jp/>)に反映され、インターネット上に公開されている。

同公文書館は閉架式で、請求の後、閲覧できるため、内田祥三文庫の目録から設計図を含む資料及び「岸田」の名がキーワードに記載されている資料を検索した。その結果、該当する資料は249件(「岸田」の名がキーワードに記載されている資料:19件、図面資料:232件、うち2件は「岸田」の名がキーワードに記載されている資料と同じ)であった。

主に岸田が営繕課に勤務していた時期の作品や営繕課での岸田の雇用関係等が判明したほか、金工大資料と照合することにより「呉市公会堂及図書館」の設計を岸田が行っていたことなど新事実が明らかとなった。営繕課の退職後も内田との関係は続いており、内田と関わりがあった日立製作所の社用ゴルフ場クラブハウス「日立ゴルフ倶楽部(現、大甕クラブ)」や戦後の「衆議院議長公邸」等の図面資料が含まれている。「龍岡町応急診療所(現、東京大学広報センター)」の平面図は、目録に記載されていなかったが、調査の過程で資料に挟まれていた状態の図面を発見した。

東京都公文書館及び金沢工業大学所蔵の図面資料を、表2に示す。

東京都公文書館及び金沢工業大学には、34作品119枚の図面資料があり、このうち24作品については、本研究の調査によって、新たに明かにしたものである。

資料整理および調査から判明した34作品の内、25作品は、岸田が東京帝国大学教授に

就任した昭和4年から昭和19年ごろまでの時期に集中している。住宅、山小屋、ゴルフ場のクラブハウス、商店、万博・オリンピック関連施設、墓碑・銅像台座と幅広い種類の作品を手掛けていたことが明らかとなった。

金沢工業大学および東京都公文書館所蔵の岸田日出刀関連の図面資料が占める戦後の作品は5作品に限られ、その割合は少なかったが、帝大営繕に勤務していた時期と教授就任からの戦前の時期に関しては、多くの作品の存在が判明し、また、設計過程のわかる図面を見出すことができた。

表2 金工大資料・内田文庫における岸田の関与が認められる図面一覧

作品名	No.	判断基準	作成年 (括弧内は推定)	配置	平面	立面	断面	透視	詳細	備考	縮尺	寸法 [cm] W x H	材質	技法	作者	所蔵
興市公会堂及図書館(廃案)	1		大正11年7月	1						第一階平面図	1/100	92.3 x 54	美濃紙	墨	S.UCHIDA	東京都公文書館
	2		大正11年7月	5						第二、三、四、五、六階平面図	1/200	54.8 x 70.5	美濃紙	墨	S.UCHIDA	東京都公文書館
	3	C	大正11年7月		1					正面立面図	1/100	98 x 76.3	美濃紙	墨	S.UCHIDA	東京都公文書館
	4		大正11年7月							透視図	1/300	79.3 x 59.2	美濃紙	墨	S.UCHIDA	東京都公文書館
	5		大正11年7月	1						断面図	1/300	79.3 x 59.2	美濃紙	墨	S.UCHIDA	東京都公文書館
Y銀行独身者倶楽部	6	A	大正12年7月18日	2						一階、二階平面図	1/300	27.5 x 36.3	美濃紙	墨	H.K.	
	7		大正12年8月29日	1						一階平面図	1/600	32 x 57	美濃紙	墨		
校舎設計案	8	A	大正12年8月29日	1						二階平面図	1/600	32 x 57	美濃紙	墨		
	9		大正12年8月29日	1						三階平面図	1/600	32 x 57	美濃紙	墨		
藤岡町応急診療所	10	B	(大正14~15年)	2						第一階平面図	1/100	40 x 75	美濃紙	墨		東京都公文書館
	11		昭和9年6月	1	5			3		客室、門前	1/50	69.4 x 51.5	美濃紙	墨	岸田	
大山邸	12	A	昭和9年6月	2	4					東南、東北、南面、北西	1/50	69.4 x 51.5	美濃紙	墨	岸田	
	13		昭和9年6月	2	4					平面、屋根平面(1/100)	1/50、1/100	69.4 x 51.5	美濃紙	墨	岸田	
	14	A	昭和9年6月	2	4					一階、屋根平面図、断面図	1/100	68.7 x 50.2	美濃紙	墨	岸田	
佐々木別荘(池の平)	15		昭和9年6月	2						一階、二階平面図	1/100	68.6 x 51	美濃紙	墨	岸田	
	16		昭和9年12月	2						断面図	1/100	79.7 x 58.4	美濃紙	墨	岸田	
	17		昭和9年12月	2						断面図	1/100	80.4 x 56	美濃紙	墨	岸田	
横岳養生小屋	18	A	昭和9年12月	1						一階平面図	1/100	79.8 x 56	美濃紙	墨	岸田	
	19		昭和9年12月	1						二階平面図	1/100	80.4 x 56	美濃紙	墨	岸田	
	20			1						測量図	1/100	28 x 58	方眼紙	墨	岸田	
	21		昭和9年12月	1						新築小屋位置関係図	1/100	78.9 x 56	美濃紙	墨	岸田	
西蔵小屋	22		昭和9年12月	1						新築小屋位置関係図	1/100	80.4 x 56	美濃紙	墨	岸田	
	23		昭和9年12月	1						測量図	1/100	79.8 x 56	美濃紙	墨	岸田	
	24		昭和9年12月	1						断面図	1/100	80.4 x 56	美濃紙	墨	岸田	
	25	A	昭和10年3月	1				1		一般詳細図	1/30	79 x 54.2	美濃紙	墨	岸田	
	26		昭和10年3月	1	3	2	1			断面図	1/100	79 x 54.2	美濃紙	墨	岸田	
	27			1						測量図	1/100	43 x 58	方眼紙	墨	岸田	
	28			1						測量図(縦横断面図)	1/200	79 x 56	方眼紙	墨	岸田	
	29	A	昭和9年12月	1	1	1	1				1/20、1/100	80.2 x 58.3	美濃紙	墨	岸田	
小浜喫茶寮(瀬戸内海上津井町)	30	A	昭和10年1月	2						一階、二階平面図	1/100	79.8 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
	31	A	昭和10年2月	4	1	1	1			二階出窓詳細図(1/20)	1/100、1/20	79.8 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
	32		昭和10年2月	1						断面図	1/100	79.8 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	33		昭和10年2月	1						一階平面図	1/100	79.8 x 54.3	美濃紙	墨	岸田	
	34		昭和10年2月	1						二階平面図	1/100	79.9 x 54.7	美濃紙	墨	岸田	
	35		昭和10年3月	1	4	2				東西南北立面図、断面図	1/100	79.3 x 54.4	美濃紙	墨	岸田	
	36	A	昭和10年3月	2						一階、二階屋根伏図	1/100	56.2 x 80.4	美濃紙	墨	岸田	
	37		昭和10年3月	1						二階平面図	1/100	79 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
	38		昭和10年3月	1						一階平面図	1/100	79.2 x 54.3	美濃紙	墨	岸田	
	39		昭和10年5月	1	4					断面図(1/100)、配置図(1/500)	1/100、1/500	80 x 54.3	青焼き	岸田		
	40		昭和10年6月	1						屋根平面図	1/100	79.3 x 54.2	青焼き	岸田		
	41	A	昭和10年6月	1						一階平面図	1/100	79 x 54.4	美濃紙	墨	岸田	
愛山溪ホテル	42		昭和10年6月	2						二階、地下室平面図	1/100	79 x 54.1	美濃紙	墨	岸田	
	43		昭和10年6月	2						二階、地下室平面図	1/100	79 x 54.2	青焼き	岸田		
	44		昭和10年5月	3						断面図	1/100	78 x 54	美濃紙	鉛筆	岸田	
	45	A	昭和10年6月	1						建物配置、土手断面	1/200	79 x 35.5	美濃紙	墨	岸田	
東山荘(屋根改修)	46		昭和10年6月	1	4	4				断面図	1/100	78.8 x 53.9	美濃紙	墨	岸田	
	47		昭和10年6月	1						断面図	1/100	79.8 x 54.3	美濃紙	墨	岸田	
	48	A	昭和10年5月	1				2		屋根平面(1/100)、詳細(1/20)	1/100、1/20	54.5 x 39.5	美濃紙	墨	岸田	
	49		昭和10年10月28日	2						平面計画(第一次)	1/50	80 x 56	美濃紙	鉛筆	岸田	
	50	A	昭和11年3月	2	1					南・東立面、断面図	1/50	79 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
	51		昭和11年3月	2	1					北・西立面、断面図	1/50	79 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
日立ゴルフ倶楽部	52		昭和10年10月31日	1						新築平面図	1/100	80 x 56.4	美濃紙	鉛筆	岸田	
	53		昭和10年11月	1						クラブハウス配置図	1/500	80 x 56.4	美濃紙	鉛筆	岸田	
	54		昭和10年12月	1	2					一階、二階平面図	1/100	79 x 55	美濃紙	墨	岸田	
	55		昭和10年12月	1						一階、下階平面図	1/500	79 x 55	美濃紙	墨	岸田	東京都公文書館
	56	A	昭和10年12月	1						マイク	1/100		マイク	墨	岸田	東京都公文書館
	57		昭和10年12月	1						マイク	1/100		マイク	墨	岸田	東京都公文書館
	58		昭和10年12月	1						マイク	1/100		マイク	墨	岸田	東京都公文書館
	59		昭和10年12月	3	2					マイク	1/100		マイク	墨	岸田	東京都公文書館
	60		昭和11年1月	1				3		食堂兼談話室、ヴェランダ部詳細図	1/20		マイク	墨	岸田	東京都公文書館
手白澤山荘(奥日光)	61	A	昭和11年2月	1	5	1				平面計画案	1/100	80 x 54	美濃紙	墨	岸田	
	62		昭和11年4月	1						平面計画案	1/100	78.3 x 109	美濃紙	墨	岸田	
	63	B	昭和12(1937)年	1						建築平面計画案	1/100	78.3 x 109	美濃紙	墨	岸田	
	64		昭和11年4月	1						基字図面	1/200	51.3 x 57.3	美濃紙	墨	岸田	
水澤邸	65	A	昭和12年3月	2						一階、二階平面図	1/100	39.6 x 40.5	美濃紙	墨	岸田	
	66	A	昭和12年3月	3	4	2				一階、二階平面図	1/100	78.8 x 58.6	美濃紙	墨	岸田	
	67	A	昭和12年5月7日	2	2	3				一階、二階平面図	1/100	67.4 x 48	青焼き	岸田	星野	
	68		昭和12年10月	1	2	3				一階、二階平面図	1/20	79.8 x 55.3	美濃紙	墨	岸田	
	69		昭和13年3月3日	1				1		透視図、初期案	1/200		青焼き	墨	岸田	
ニューヨーク万 日本館	70	A	昭和13年3月11日	1				1		透視図			青焼き	墨	岸田	
	71		昭和13年3月11日	1						配置図、平面図	1/100		青焼き	墨	岸田	
	72		昭和13年3月11日	1		1				正面図	1/100		青焼き	墨	岸田	
	73		昭和13年3月	2						一階、二階平面図	1/100	55.4 x 39.8	美濃紙	鉛筆	岸田	
岸体育館プール	74		昭和13年3月	3	2					一階、二階平面図、屋根伏(1/100)	1/50、1/100	78.8 x 54.5	美濃紙	墨	岸田	
	75		昭和13年3月	3						50メーター競泳プール	1/200	49.5 x 39	美濃紙	鉛筆	岸田日出刀、前川國男	
	76		昭和14年3月5日	1	1					50メーター競泳プール	1/200	48.8 x 38.7	青焼き	墨	岸田日出刀、前川國男	
兼雄山小屋	77		昭和14年3月5日	1	1					一階平面図	1/100	79.8 x 55.2	美濃紙	墨	岸田	
	78	A	昭和14年3月10日	3	4	1				一階、二階平面図	1/100	51.1 x 36	青焼き	鉛筆	岸田	
	79	A	昭和15年5月25日	2						一階、二階平面図	1/100	51.1 x 36	青焼き	鉛筆	岸田	
菅野家宅(市川自邸)	80		昭和15年10月30日	1						一階平面図	1/100	39.7 x 55	青焼き	墨	岸田	
	81		昭和15年8月21日	1	1	8				便所、浴室、台所、三帖	1/50	38.7 x 55	青焼き	墨	岸田	
	82	A	昭和15年9月16日	1	6					座敷(十帖)	1/50	39.7 x 55	青焼き	墨	岸田	
	83		昭和15年9月13日	1	8	1				玄関、ホール、書斎	1/50	39.7 x 55	青焼き	墨	岸田	
	84		昭和15年10月11日	1	4	3				一階平面図	1/50	80 x 55	青焼き	墨	岸田	
	85		昭和15年10月19日	1	2	12				居間、茶の間、四帖半	1/50	39.7 x 55	青焼き	墨	岸田	
	86	A	昭和16年7月23日	1						正面、側面図	1/50	78.8 x 49	美濃紙	鉛筆	岸田	
	87	A	昭和24年5月				1					24.5 x 16	青焼き	墨	岸田	PROF. HIDEO KISHIDA
生長の家 東郷神社 共同会館	88		昭和25年11月10日	2						東・南立面図	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	89		昭和25年11月10日	2						北・西立面図	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	90		昭和25年11月10日	3						増部、4・5・6階	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	91		昭和25年11月10日	1							1/200	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	92	A	昭和25年11月10日	2						講堂部、地階、一階	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	93		昭和25年11月10日	1							1/600	54.5 x 80	青焼き	墨	(?) (筒村)	
	94		昭和25年11月10日							講堂部二階、会館部一階	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	95		昭和25年11月10日			2					1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	96		昭和25年11月10日							講堂部三階、会館部二階	1/100	54.5 x 80	青焼き	墨	(岸田)(郭)	
	97		昭和25年8月25日	1							1/300	53.4 x 38.4	青焼き	墨	岸田	
清風寺	98		昭和29年8月25日	1						一階平面図	1/100	77.5 x 53.5	青焼き	墨	岸田	
	99		昭和29年8月13日	3						屋根、3階、地階平面図	1/100	77.5 x 53.5	青焼き	墨	岸田	
	100			1						第23宿治室 家具配置図	1/50	40.9 x 26.7	青焼き	墨	岸田	
	101			1						宿治室客台	1/10	40.9 x 26.7	青焼き	墨	岸田	
	102	A		1						宿治室寝テラス二人用	1/10	40.9 x 26.7	青焼き	墨	岸田	
	103			1						宿治室寝テラス一人用	1/10	40.9 x 26.7	青焼き	墨	岸田	
	104			1						宿治室茶卓子	1/10	40.9 x 26.7	青焼き	墨	岸田	
	105		昭和29年8月25日	2	2					東側面、正面、縦断面、横断面	1/100	77.3 x 54	青焼き	墨		

## 国立国会図書館

岸田は、生涯にわたり活発な執筆活動を展開したことから、新聞・雑誌記事等各種刊行物の蒐集にも努めた。既往の研究では、『藁』『扉』といった岸田の記した一般向け建築随筆集や写真集『過去の構成』、『現代の構成』の巻頭文やキャプションを基にしたものが大半を占めていた。『建築雑誌』『現代建築』などの建築系雑誌や東京帝国大学新聞への寄稿記事は、これまでも僅かながら取り上げられることがあったが、その他の雑誌媒体が用いられることは殆どなかった。

近年、国立国会図書館の所蔵雑誌のデジタル化作業が進展したことにより、これまでデータベース上に必ずしも反映されていなかった目次などの詳細な情報が記録されたことにより、建築分野以外の雑誌投稿記事の存在が明らかになった。

この他にも、東北大学図書館には、岸田研究室旧蔵の雑誌『朗』がある。上記の他にも古書店等で岸田の著作物の蒐集を行った。雑誌・新聞記事等の一覧は、本論文の末巻部分の資料として掲載した。

本研究では、こうした岸田直筆の講義原稿やスケッチ、日誌、作品の図面や写真、著作などの一次資料を基に検証を行う。

## 岸田日出刀の生い立ちと経歴

生い立ち:東京帝国大学工学部入学まで

岸田日出刀は、明治32（1899）年2月6日、士族、裁判所の官吏・岸田稔、母ゆき（旧姓杉本）の次男として九州の福岡市簗子町に生まれる<sup>8)</sup>。父が北栄町江北出身で、母の実家が現在の湯梨浜町はわい長瀬にあったために親族が倉吉周辺に住んでいたことから、幼少期から帰省先は鳥取であった<sup>9)</sup>。幼少期は、父・稔の転任に伴い、全国を転々とする。ア

注8) 岸田の出身地を「鳥取県」と説明する文献も多いが、鳥取県倉吉市は郷里であるものの出身地ではない。

注9) 1945年3月の東京大空襲の後には、一時的に一家で倉吉に疎開している。



アメリカで貿易商を営む親戚の存在もあり、舶来品に触れる環境が身近にあった<sup>10)</sup>。一家はその後、山梨に移住し、岸田は、山梨県中巨摩郡の飯野にある尋常小学校に入学する。富士山や南アルプス、そして八ヶ岳を見渡す地で尋常4年まで修了する。終戦間際には、山梨県長坂駅付近<sup>11)</sup>に研究室で疎開している。山家育ちの岸田であったが、尋常5年のはじめ（明治42年の暮れ）に東京の浅草にある小島小学校（現、台東区）に転校。その後、本所江東橋の府立第三中学校を経て、第一高等学校（二部甲類、以下一高）を卒業している<sup>12)</sup>。

一高は全寮制で、寄宿舎で共同生活を送る。同期には晩年まで親交が厚く、通信碁などの対局相手でもあった香坂要三郎や土浦亀城らがいた。香坂は、病氣療養で十年近く闘病生活を送るが、復帰後、応用科学の分野で関西大学を築いた人物である。また、土浦は、岸田と同じ東京帝国大学建築学科に進学する。土浦は、大学卒業後にライトのタリアセンに入所、帰国後の昭和初期に、日本における建築のモダニズムを代表する住宅作品を残した建築家である。土浦とは、異なる寄宿舎であったが、乾式構法による住宅の設計で協力し、一緒に熱河遺跡の調査に出掛け、共著で写真集『熱河遺跡』を出版するなど、大学卒業後も同時代を生きた建築家として、交流を深め、ともに親しく建築活動を行っている。

岸田が述懐するところによると専攻科目を建築に決めたのは、高等学校在学中の二年の頃で、「一人こつこつと仕事するようなものが、性に向くだろう」というような考えから何の躊躇もなく建築学科を選択したとある。中学の頃は、得手不得手という科目もなく、父親の職業であった法科の類を志望することもできたそうだが、人前で話などをするのは自分の性

---

注10) 岸田は、当時一般にまだ普及していなかったカメラを大学入学時から所持していた。大正末の洋行時には、アメリカの東海岸滞在時に親戚の世話になっている。写真集『過去の構成』には、学生時代に撮影したものも含まれている。

注11) 「わたくしどもの教室はその殆どすべての研究室が職員共々山梨県下へ疎開することとなった。場所は中央線長坂駅から一里あまり東へ行った、ちょうど八ヶ岳の裾野が長くゆるやかに南に伸びたところである。」（『焦土に立ちて』）とある。昭和20年6月ごろ、大学院の学生と前年卒業したばかりの卒業生2、3人の計10人ほどと共に疎開し、「国民学校の教室を研究室に貸し出してもらった」と書かれている。終戦後も東京都心部の混乱が続いていたため、研究室は山梨に留まった。年明けの1月からは、農閑期の村人を対象に講座「八峯塾」を開講している。

注12) 岸田日出刀「(学校形態批判) 学校の建物」(『郷土教育』、1933年5月)

に合わないと感じ、高校受験時に二部甲類（現在でいう理系）の工学部の大学へ進学するコースを選択している。しかし、中学校時代に比較的得意であった代数や幾何学などの数理関係の科目に興味を持てなくなり、一高に入ってから、試験ごとに及第点を取れず注意点表に名を連ね、なんとか落第こそはしなかったが、クラス全員80名の成績順も下から数える方が早い始末になってしまう。奇しくも大正8年の新学年から、それまで九月半ばであった始業時期が四月始まりとなる関係から、岸田の学年だけ大学への進学試験がなくなり、成績順位によって大学への入否を決することになる。一高から建築学科への枠は、4名であった。戸塚端、小田島兵吉、土浦亀城、岸田日出刀。志望者は倍の8名いたが、辛うじて4番目の成績で建築学科の学生になっている<sup>13)</sup>。

#### 経歴

東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、内田祥三率いる同大営繕課に勤務する。1923年2月から講師嘱託として後進の指導にあたり、1925年6月に助教授、1929（昭和4）年6月には、30歳の若さで教授に就任している。これには、昭和初めに伊東忠太、塚本靖、佐野利器らが相次いで退任したこともあり、若手不在だった建築教室を再建する中心的役割を背負わされた事情もあった。1959（昭和34）年の退官まで、約36年間の長きに渡り、建築意匠の学者として東京大学で建築教育の一翼を担った。

そして、岸田は、研究室から前川國男、立原道造、丹下健三、浜口隆一、吉武泰水らを輩出し、その後の日本建築界を代表する建築家、建築学者、建築評論家を数多く指導した。彼の活動は学内だけにとどまらず、建築設計競技の審査員、日本建築学会会長、明治神宮造営委員、1940年と1964年の2度の東京五輪施設委員など、数多くの要職を務めた。

また、生涯に渡り設計活動、専門書から一般向け随筆集に至るまで執筆活動にも活発に取り組み、80以上の建築作品、500編を超す新聞雑誌記事など、膨大な数の著作を残している。とりわけ、写真集『過去の構成』は、過去の日本の伝統的なものをカメラのフレーム

---

注13) 岸田日出刀「田辺平学君のこと」（田辺平学先生13回忌記念事業会『田辺平学』、相模書房、1966年6月）

で切り取り、モダニズムを介しての解釈を生み出した殆ど最初の仕事とされ、岸田の試みた日本の古建築の取り出し方は、堀口捨己、丹下ら多くの建築家に影響を与えたことで知られている。

多芸多趣味でもあり、ゴルフに関しては、その盛時には日本選手権競技に出場する腕前で、歌唱では新潟の『相川音頭』に心酔し、その他にもテニス、囲碁などの愛好家でもあった。

1950年に日本芸術院賞、1957年に丹下と共に、倉吉市庁舎の設計で日本建築学会賞、1965年には、オリンピック施設の企画設計で日本建築学会特別賞を受賞。定年退官後の晩年は、東京大学名誉教授となり、自らの事務所である岸田建築研究所で設計活動を続け、日本道路公団へのデザインポリシーの指導なども行っている。

関東大震災、第二次世界大戦という2つの国家的危機を経験し、敗戦後の日本で開催された国際的なイベントであった東京オリンピックを終えた翌々年の1966年5月3日、丹下らが出席していた大阪万国博覧会（1970年）の準備に向けた会合が開かれていた最中、岸田は山梨県山中湖畔の別荘で急逝した。没後、勲二等瑞宝章を受ける。葬儀は、訃報を受け、慌ただしく帰京した丹下らが準備にあたり、伊東忠太設計の築地本願寺で開かれた。まだ着工間もなかった日光東照宮宝物殿は、所員であった加藤寛二らが工事監督を引き継ぎ、竣工。これが彼の遺作となった。

表3 岸田日出刀の経歴

和暦	西暦	月	事項
明治32	1899	2	福岡市箕子町に父岸田稔、母ゆきの次男として生まれる。
明治38	1905		山梨県中巨摩郡の飯野にある尋常小学校に入学
明治42	1909		小島小学校（現、台東区）に転校
大正5	1916	3	東京府立第三中学校卒業
大正8	1919	7	第一高等学校第二部甲類卒業
大正11	1922	3	東京帝国大学工学部建築学科卒業
大正12	1923	3	東京帝国大学大講堂建築実行部技師嘱託
大正12	1923	2	東京帝国大学工学部講師嘱託 第一講座分担
大正13	1924	7	任東京帝国大学技師 叙高等官七等
大正14	1925	6	兼任東京帝国大学助教授、工学部勤務
大正15	1926	11	欧米各国出張被命
大正15	1926	8	陸叙高等官六等、叙正七位
大正15	1926	11	任東京帝国大学助教授兼東京帝国大学技師
昭和2	1927	6	工藝審査委員会委員被仰付
昭和3	1928	12	陸叙高等官五等、叙従六位
昭和4	1929	4	授工学博士学位
昭和4	1929	6	任東京帝国大学教授 建築学第二講座担当
昭和4	1929		叙高等官五等
昭和6	1931	5	陸叙高等官四等、叙正六位
昭和7	1932	6	陸軍経理学校講師嘱託
昭和8	1933	12	陸叙高等官三等、叙従五位
昭和11	1936	6	ベルリン五輪大会視察（十月帰朝）
昭和12	1937	3	陸叙高等官二等、叙正五位
昭和12	1937	11	叙勳四等授瑞寶章
昭和14	1939	7	輸出工藝振興委員会委員仰付
昭和14	1939	9	工藝品輸出振興展覧会審査委員依嘱
昭和14	1939	12	演劇映画音楽改善委員会委員仰付
昭和15	1940	11	満洲国国都建設局嘱託依嘱
昭和16	1941	10	興亜技術委員会委員仰付
昭和16	1941	11	叙勳三等授瑞寶章
昭和17	1942	4	叙従四位
昭和17	1942	4	高等学校高等科教員検定試験臨時委員依嘱
昭和17	1942	4	陸叙高等官一等
昭和17	1942	8	大政翼賛会調査委員依嘱
昭和21	1946	6	学術研究会議委員依嘱
昭和22	1947	1	大学教授連合評議員
昭和22	1947	3	国土計画審議会臨時委員被仰付
昭和22	1947	4	都市計画東京地方委員会委員
昭和22	1947	4	国立公園中央委員会委員
昭和22	1947	4	建築学会会長就任
昭和22	1947	7	鉄道会議専門委員
昭和22	1947	8	都市美審議委員会委員
昭和22	1947	11	会計検査院技術顧問
昭和22	1947	12	鉄道広告協議会委員
昭和23	1948	7	中央特定契約委員会委員
昭和23	1948	7	経済復興計画委員会技術部会委員
昭和25	1950		日本芸術院賞
昭和32	1957		倉吉市庁舎の設計で日本建築学会賞
昭和40	1965		オリンピック施設の企画設計で日本建築学会特別賞を受賞
昭和41	1966	5	山梨県山中湖畔の別荘で心筋梗塞のため死去
昭和41	1966		没後、勳二等瑞宝章を受ける

## 研究の方法と本論文の構成

本章第3節でも詳しく取り上げたように、論文の執筆に先立ち、没後、全国各所に散逸してしまった岸田関連の資料調査・渉猟に勤めた。とくに金沢工業大学建築アーカイブズ研究所所蔵の岸田関連資料はこれまで未整理のまま、その全容を把握するため許可を得て当該資料の整理作業に取り組み、検索の可能なデータベースを構築した。そのなかには従来知られてこなかった岸田の活動を示す資料も含まれており、こうした未見あるいは新出資料の検証作業が本研究の基礎をなしている。

本論文は、序章、本論6章、結論の全8章で構成される。

序論では、研究の目的、既往研究の成果と課題、一次資料について、岸田の生い立ちと経歴、研究の方法と本論文の構成について述べた。

本章第1章「岸田日出刀の自己形成：大学入学から営繕課勤務時の海外渡航まで」（計3節）では、岸田が東京帝国大学に入学してから卒業後務めた大学営繕課勤務時に経験した約1年間の海外渡航までの期間（1920年4月から1925年11月まで）を扱い、岸田が大学教官として本格的な歩み始めるまでの様々な体験が岸田に与えた影響について考察した。

その結果、学生時代から分離派建築会の面々との接触があり、営繕課では大学関連施設の設計にとどまらず、従来考えられていた以上に幅広い種類の作品を残していたことが明らかとなった。「呉市公会堂及図書館」などの当該期の岸田の設計活動（16作品）を初めて提示した。複数の様式を組み合わせ折衷した「東京帝国大学医学部納骨堂」、複雑な面を組合せて立体操作を行った「東京帝国大学教官食堂」などの設計を通じて、新たなる建築表現の領域開拓を目指し、様々な習作を重ねていた。岸田は、分離派建築会の展覧会に足を運んでいたが、高次曲線を多用するなど表現主義の個人主義的な側面に没入していた彼らの作品群に違和感を感じ取っていた。そして、大正末の世界一周の洋行で訪問したダルムシュタットでは、分離派の影響を受けた建築作品の作品に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識する。

第2章「洋行後にみられる建築理念の変容 - 新たなる理論形成に向けて」(2節)では、岸田が、洋行からの帰朝後に執筆した評伝本『オットー・ワグナー』と講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」での講演録、博士論文「欧州近代建築史論」の分析を通して、洋行後にみられる建築理念の変容について考察した。

帰朝後の岸田は、急逝した長谷川輝雄の後継として日本建築史の学習を始める。彼の遺志を継ぐように美術史家リーグルが導入し、ヴォリンガーが継承した「芸術意欲」を参照し、各時代特有の時代精神の把握を大切にするスタンスを示すようになる。このような理解の深まりをもって、オットー・ワグナーの評伝本を出版、軽視されがちであったバロック以降の建築を取り上げた博士論文『欧州近代建築史論』の執筆に取り組み、地誌学的な歴史叙述や考古学・文献等による実証的な追求とは異なる時代精神の変化を意識した建築史を提示するとともに、「過去に例のないものを求める」という徒に珍奇なものを漁る意識や折衷主義に対し異を唱えるようになる。

第3章「講義原稿『意匠及装飾(形体篇)』にみる岸田日出刀の建築造形理念」(4節)では、岸田が担当した必修科目「意匠及装飾」の講義原稿(1937年)を元に、岸田が展開した建築教育の内容を初めて提示し、同時期に設計された建築作品ならびに墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に関する講演に敷衍して分析し、岸田の建築造形理念を考察した。

「因襲(Convention)とはちがう」「日本の伝統(Tradition)を充分考えなければいけない」という伝統を意識した見解を示し、没個性化をもたらすと捉えていたインターナショナルの傾向を危惧し、ローカリティーを重要視していた。装飾否定の立脚点となるモダニズムについて解説し、『建築をめざして』(1923)にあるコルビュジエの主張を援用しながら、初等幾何学の純粹にして識別しやすい形体、「平面」と「建築的秩序」の重要性を主張していた。京都大学で教鞭を執った武田五一の著書を参照しながら、当時最新の理論として広く波及したハンビッジのダイナミック・シンメトリー理論に関心を寄せ、それらを建築の立体造形へ応用しようとする姿勢が看取された。ここでは、建築の「数学公式の如き解答がえられない」側面を個々の建築家の「形式感」と呼び、その向上を企図したものが「意匠及装飾」の講義であった。さらに、同時期の墓碑・銅像台座や建築作品の設計を通じて、自らの造形理念の

具現化を試み、また、同時代の多くの建築家たちが参加した忠霊塔の設計競技の場においても講義と同様の主張を展開していたことを検証した。

第4章「建築の日本趣味」に対する岸田日出刀の見解（3節）では、これまで明らかでなかった未発表史料『日本的趣味意匠の研究（草稿）』（1935年から1937年ごろ）を中心に、岸田の執筆した「建築の日本趣味」論に関連する草稿、原稿類を読み込んでいくことで、「建築の日本趣味」に対して、岸田がどのような見解を示していたのか検討した。

まず、「日本趣味」に関する発言は、昭和2年ごろから現れ、徐々に建ちあがりつつあった復興小学校を対象にしたものであった。ここで岸田は、学校建築の表現に関して「（何故）相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべき」「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築に模倣することに価値がない」「建築の意義と、その目的、要求に合致していること」という、ワグナーの評伝本とも共通する主張を展開していた。さらに、昭和10年から12年にかけて啓明会助成金で行われた「日本的趣味意匠の研究」では、明治末から大正期に盛んに行われた様式論争の延長上に自らの考えを示し、「①現代建築の発展、②日本建築の再検討、③日本の風土的特異性と建築の関係」という3つの検討事項を見出し、「新建築運動への関心と理解とが殆どなされていない」「安易な折衷や表面上の形相を借りてきた過去の建築様式の模倣再現」「構法、材料の不一致」という点に強い問題意識を抱いていたことを明らかとなった。岸田は、草稿で示した検討事項に沿うように、自らの著書である『高層建築』や『日本建築史』を引用して掲載し、写真集『過去の構成』の再版を行っている。当時の岸田の近代建築の理解をめぐる枠組みにおいて、3つの検討事項が、重要な基盤であった。同時期に設計されたゴルフ場のクラブハウスでは、日本建築の要素を積極的に取り入れ、「土地々々の郷土色」を意識した設計を行っているだけでなく、これらをベルリン五輪の芸術競技に出品した。また、ベルリン五輪大会の会場視察後に発表したナチスの建築統制に対する批判文では、「建築家の個性や主観が極めて低く評価されている」「単に古典的傾向を基調にただで中世独逸の新化再現が為されていない」という点に失望の念を示している。ここからは、岸田が歴史的伝統の「新化再現」との意識を有していたことが浮かび上がる。

第5章「講義原稿『建築計画』にみる岸田担当科目の講義方針とその理論的特質」（3節）では、岸田が担当した必修科目「建築計画」の講義原稿（1937年）を元に、岸田の講義方針を読み取り、東京帝国大学工学部講義要目と前任者・塚本靖の講義項目との比較から岸田の建築教育の理論的特質を考察した。

その結果、工学偏重の学問整備が進む中、岸田は「建築非芸術論」への反駁を意識し、ワグナーの言説を援用しながら建築の芸術的側面を留保していたこと、「計画」を「Planning」ではなく「Design」の和訳として捉え、「建築を計画（Design）する」ための学問として、塚本靖から形式的に引き継いだ講義項目を改編させながら、自らが担当していた「建築計画」、「意匠及装飾」の講義を体系立て、歴史、意匠、計画という性格を兼ね備えた、当時のカリキュラムには存在しなかった新たな建築教育を展開していたことを明らかにした。

第6章「大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念の性格及び特徴」（2節）では、前5章の知見を整理し、大正・昭和戦前期における岸田の近代建築理念の性格及び特徴について考察した。

ワグナーの評伝本によって深まっていったより普遍的な近代建築に対する理解、その後の建築教育での展開、そして、日本の建築的独自性をどう表すか、これらが重なりあったところに、戦前期の岸田の近代建築理念の特徴があった。それらを集約すると、日本の風土的特異性の反映として現れる「構造と材料と諸計画と形体意匠との間の融和」ならびに「時代精神という建築新化の外的要因」の把握を大切にするスタンスがみられる。これらを統合した「建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の『新化再現』」を目指すものが岸田の近代建築理念であった。そして、このような理念が、東京帝国大学の建築教育における「建築意匠学」確立に向けた取り組みに表れており、「建築非芸術論」への反駁を意識した論理、また、歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする意志がみられることなどを明らかにした。

そして終論では、総体としてどのようなことが明らかになったのかについてまとめた。彼の理念形成の端緒には、分離派建築会の存在があり、岸田にとっての歴史主義からの分離というひとつの試みであったこと、歴史というものを創作論に直結させようとする伊東の意志



を別の形で継承しつつ、それを新しいモダニズムの理論に直結させようとした努力が岸田のテーマとしてあった。その後の前川や丹下の思想的下地となり得る近代建築理念を戦前期の岸田が具備していたことを明らかにした。



## 第1章

### 岸田日出刀の自己形成：大学入学から営繕課勤務時の海外渡航まで

はじめに

第1節 東京帝国大学工学部時代（大正9年4月から大正11年3月まで）

第2節 東京帝国大学営繕課時代（大正11年3月から大正14年11月まで）

2-1. 安田講堂と大隈記念講堂の設計競技

2-2. 関東大震災とキャンパス復興

第3節 大正末の欧米出張（大正14年11月から大正15年12月まで）

3-1. 大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について

3-2. 面会した建築家と見学した建築作品の印象に関する記述

シンドラー、ノイトラ、フェラーら米国で活動していた若手建築家／ベルンハント・ミーロー／ストックホルム市庁舎（エストベリ設計）／ダルムシュタットの建築群／アメリカの高層建築

小 結

## はじめに

本章では、岸田日出刀が東京帝国大学に入学してから卒業後務めた大学宮繕課勤務時に経験した約1年間の海外渡航までの期間（1920年4月から1925年11月まで）を扱い、洋行からの帰朝後、大学教官として本格的な歩みを始めるまでの、自己形成の時期に経験した様々な体験が岸田に与えた影響について考察する。

## 東京帝国大学工学部の在学時

1919（大正8）年、岸田は、東京帝国大学工学部建築学科に入学する。同期には、長谷川輝雄、土浦亀城、田辺平学、蒲原重雄、上浪朗、石川純一郎、吉田宏彦ら20名がいた。ちょうど分離派建築会を結成した世代（石本喜久治、滝沢真弓、堀口捨己、森田慶一、山田守、矢田茂。以下、分離派世代）の2年下となる学年である。岸田の在籍した大正8年入学の学年（第41回生）は、始業時期が秋から4月へ変更となったことから、2年半の短い学生生活であった。

岸田は、わずか約3カ月間という短縮された第一学年を過ごす。伊東忠太による西洋建築史も「はしょって話す」が口癖になる程、急ぎ足で物足りないものだったようである<sup>14)</sup>。短縮分のしわ寄せは、夏休み期間中にも続いた。製図室では先輩たちが自主的に後輩に課題を出し、指導にあたったというエピソードが残されている。2年生の夏休みは日光に長期滞在し、実測やスケッチをする夏合宿があることから、当時、3年生であった分離派世代との直接的な接触の多くは、製図室であったと考えられる。その後、我が国で最初の建築運動を引き起こす先輩たちの野心的な姿勢に、岸田も大いに刺激を受けたであろう。

当時の建築学科の校舎は、明治21年に建てられた煉瓦造二階建ての建物で、辰野金吾による設計であった。（図1-1）中庭を囲む口の字状の校舎で、二階に大きな製図室があり、壁にはさまざまな建築物の詳細図や写真などが飾られて、学生たちには各々の机が与えられた。

---

注14) 藤島亥治郎「私の受けた建築教育」（日本建築学会『建築雑誌』、1975年12月号）

ここで授業以外の大半の時間を過ごし、与えられた製図課題に取り組んだり、議論や歌を唄ったりと学年間を超えた交流が行われたサロンのような空間であったと言う。(図 1-2) 製図室には、夜間の照明がなく、用紙を水貼りで製図板に張り付けていたため持ち帰ることもできず、提出直前の時期は日没まで課題に取り組んだ。岸田の師・内田祥三は、岸田や吉田宏彦は、1年生の時からデザインが上手かったと述べている。岸田の製図課題の成績は優秀で、製図室前の廊下に掲示されていたと言う<sup>15)</sup>。

この頃の建築学科の教官は、教授として中村達太郎、伊東忠太、塚本靖、佐野利器、助教授として関野貞(留学中、大正9年より教授)、内田祥三(大正10年より教授)、堀越三郎、田中(江国)正義(大正9年より)、岩元禄(大正10年)、講師に新海、大正9年から大江新太郎、中村、山下といった顔ぶれであった。時の工学部長は造船・航空工学の寺野精一(大正9年6月まで、同年7月から塚本靖)で、総長は物理学者の山川健次郎である。建築学科では、塚本・伊東・関野の三氏が主導的に指導を行っており、壁に、3メートルに及ぶ龍門石窟の写真や伊東忠太の描いた5メートルにも及ぶ世界の高層建築物の絵が飾られていたという。塚本・伊東・関野ら教授陣が、一人二部屋を使っていたのに対して、鉄骨の権威者として聞こえた佐野利器や鉄筋コンクリート造、建築法規の立案者として活躍していた内田祥三の両助教授は、正面入り口左右にある狭い隅櫓のような形状の部屋を折半していた。

当時のカリキュラムをみると、まだ関東大震災の発生前という時期でもあり、意匠や歴史関係に重きが置かれ、構造、材料、施工などの講義時間は少なかった。また、購入図書も意匠・歴史関係はもとより、絵画・彫刻・工芸に及ぶ芸術関係の書が圧倒的に多く、丸善が持ち込む図書は、値段の如何を問わず買い込んでいたという。

- 1年 数学・応用力学・建築計画・同材料・同構造・建築史・自在画・設計製図
- 2年 建築計画・同構造及び演習・意匠装飾および演習・設計製図
- 3年 建築施工・同構造演習・意匠装飾演習・設計製図

---

注15) 藤島亥治郎「岸田さんと私」(『岸田日出刀』、相模書房)

これらが必修科目で、このほかに衛生工学・東洋建築史・工芸史・美学・彫塑・地震学・電気工学・建築行政・法政大意・経済大意といった選択科目のほか、学部の許可による他学部の講義を受講することができた<sup>16)</sup>。

建築設計の基礎は、塚本靖の「建築計画」の講義からであった。講義はまずマンションからはじまった。庭園やテニスコートなどのある大邸宅の話で、車寄せを入るとクローク・ルームがあり、ロビー、食堂、配膳室、調理場、テラス、ビリヤード等々、どんな部屋をどう使うか、どう設計するかといった内容で、それは外国を知らない学生たちにとっては、洋風生活の話聞きに行くようなものだった。そして、ほとんど毎日のように日本・西洋・東洋の建築史が伊東忠太、関野貞により講じられ、建築家としての学習は古今東西の様式を習得することを基本としていた。

「圧倒的に時間数の多かった建築計画は塚本靖先生が全部を勢力的に担当されたが、その内容の大半は、西洋の各種建築やインテリアの歴史的な対象を事こまかに述べられるのに止まり、現代の建築をどう計画するかについての欠陥をすべての人が不満に思った。」<sup>17)</sup>

これは岸田の一学年下にいた藤島亥治郎が残した塚本の講義に対する感想である。藤島は、現代の建築を計画する際の方法論に繋げるには距離のある塚本の講義内容に不満を感じていたようである。「建築芸術観についても、建築史観を建築教育の基礎と信じつつも、それらから抽出昇華された、純建築芸術論に渴えていた。」<sup>18)</sup>とも語っている。分離派建築会の運動に代表されるような変革を望む野心的な活動が始まる時期で、蒼古たる建築計画の欠陥は、多くの学生が感じていたようである。

---

注16) 武藤清「私の受けた建築教育」(日本建築学『建築雑誌』、1975年12月号)

注17) 藤島亥治郎「私の受けた建築教育」(日本建築学会『建築雑誌』、1975年12月号)

注18) 前掲注17

その不満を払しょくするような新鮮な建築意匠論が、この時期に講師を務めた岩元禄（1893 - 1922）により講じられていた。岩元は逓信省に入省後、建築の芸術性を追求した独創的なデザインの作品を設計し、1921（大正10）年1月から母校の教壇に立ったが、同年の秋に病床に伏し、1922（大正11）年、結核により早世した人物である。堀越三郎による講義も同様に、講義とは異なり、最新の取り組みを講じるもので、新鮮な印象を学生たちに与えたようである。

意匠系の助手には、木村貞吉がいた。主に学生の製図の世話をした。一方で、構造方面で相談相手になる人（助手）はいなかった。そして造形の探求には、石井柏亭画伯、新海竹太郎彫刻といった教員が応えた。

このように、岸田が東京帝国大学で過ごした学生生活は、講義時間や学生に対するサポート体制も意匠や歴史関係に重きが置かれていた。また、分離派世代との直接的な接触もあり、新しい時代の建築を如何に表現するか、若い建築家の多くが悩んでいた時期であった。

1922（大正11）年の春、岸田は「監獄」をテーマにした卒業論文と卒業設計を提出する。東京帝国大学工学部建築学科の卒業計画図集<sup>19)</sup>をみると監獄建築を卒業計画の題材に選んでいるのは、明治から大正11年までの歴代の卒業生のなかでも、岸田と岡本鑒太郎<sup>20)</sup>（明治23年7月卒）の2名しかいない。岡本の「A PRISON」は、中世の要塞刑務所風のデザインで、立面の装飾技法を披露するようなものである。岸田の卒業設計とは全く趣が異質であり、これをきっかけに監獄建築を選択したとは考えにくい。同期の卒業設計をみても蒲原重雄（住宅）、吉田宏彦（美術館）、長谷川輝雄（美術館）、土浦亀城（教会）、田邊平学（大連市都市計画）、石川純一郎（穀物倉庫）といった具合である。周辺の学年を見渡しても、ホテル、図書館、美術館、庁舎など、比較的好く選ばれている建物種別<sup>21)</sup>に比べると、岸田の選択した監獄建築は、珍しいビルディングタイプであったと言える。

注19) 木葉会編『東京帝国大学工学部建築学科卒業計画図集 明治・大正時代』（洪洋社、1928年）

注20) 岡本鑒太郎（おかもとそうたろう、1867 - 1918）は、1901（明治34）年から1913（大正2）年まで清水組四代技師長を務め、澁澤倉庫や清水組本店など数多くの設計を手掛けた。

注21) 明治期の卒業論文は、年次ごとに課題が定められており、原則として学生は、その課題に取り組んでいた。そのため、共通するテーマが数多くみられる。

岸田は、卒業論文「監獄建築之研究」の緒言に、以下のような監獄建築を選択した理由を述べている。

「卒業論文トシテ監獄建築ノ研究ヲ、ソシテ卒業計画ニ同ジク監獄ヲ選ンダノハ、敢テ特別ノ理由カラデハナク、従来コノ種ノ研究ナク、更ニ監獄建築ノ重要性トソレニ興味ヲ認メタカラデアアル。又ハ浪漫的な私ノ心情ガコノ題目ヲ選バシメタノカモシレヌ。」<sup>22)</sup>

監獄建築を選択した理由について、①重要性を認めるが既往の研究がないこと、②浪漫的な自らの心情が作用したかもしれないという2点をあげている。堀口捨己や同期の吉田宏彦が述懐するところによると、ちょうどこの時期に後藤慶二（1883 - 1919）の代表作である「豊多摩監獄」（1915）の見学会があり、また、花形と言われていた逓信省や通信省とは違い、司法省の建築に新風を巻き起こした後藤の作品は、当時の学生たちの間では非常に刺激的な存在だったという<sup>23)</sup>。また、吉田宏彦が座談会の場で指摘しているように、裁判所に勤務する父親の職業もテーマ選択のどこかに影響を与えたのかもしれない。

卒業論文の第十章「監獄ノ建築的表現」では、以下のように述べている。

「監獄ノ建築的表現ハ莊重、正義、善、等ノ概念ヲ象徴スルモノデナケレバナラヌコトハ言ヲ俟タヌ。ソシテコレラノ概念ヲ象徴スル表現ハ監獄建築ノモツ実用性ヲ完全ニ満足シヤウト建築家ガ忠実ニ努力スル時、自ラソコニ達成サレルモノデアアル。カクシテ生ズル新時代ノ監獄建築ニハ些カノ虚飾モナク、<sup>シンプル</sup>単<sup>クリアー</sup>ニシテ明快ナルモノデアアル。」<sup>24)</sup>

監獄の建築表現は、「莊重、正義、善、等」の概念を象徴するものであり、実用性を満足したもので、虚飾なくシンプルにして明快なるものである、と述べている。実用性の満足、

---

注22) 「岸田日出刀」編集委員会編『岸田日出刀』（相模書房、1972年）

注23) 前掲注22

注24) 前掲注22



装飾の否定、単純で明快な造形、という意識があったことがわかる。

提出された卒業設計をみると、細部まで書き込まれている平面図と異なり、2枚の透視図は、樹木が途中までしか描かれていないが、フリーハンドで描いたようなラフな線を引き、表現主義の影響を感じる作風である。それは、まるで平面の重要性を訴えているようにもみえる。特に正面の透視図は、当時、『建築雑誌』などに掲載されていた豊多摩監獄の写真を参照したようで、建物外観の視点や形態、植栽の配置がほとんど一致する。また、下部に「1922 MARCH 22nd」と「1922 MARCH 23rd」と荒々しい筆致で日付が書かれていることから、透視図を極めて短期間に仕上げた様子がわかる。

(図1-3、図1-4、図1-5)

岸田は、短い大学生活の最後に、実用性を追求した監獄の平面計画に興味を抱き、煉瓦に代わるRCによる監獄建築の表現をテーマに、卒業設計と卒業論文に取り組んだ。

### 東京帝国大学営繕課勤務

東京帝国大学工学部卒業後、岸田は、内田祥三率いる東京帝国大学営繕課勤務となる。東京都公文書館内田文庫に残る当時の営繕課の資料を確認すると、彼の肩書は、「東京帝国大学大講堂建築実行部技師嘱託（大正11年3月）」となっている。大講堂（以下、安田講堂）の建築実行部として雇用され、同部には小野薫、藤島亥治郎などが名を連ねていた。

営繕課は、卒業したての若手が実践的なインターンシップを熟す内田のアトリエ兼建築家育成所のような場所であった。当時の営繕課は、辰野金吾の時代からの旧態依然な工部大学流の予算や施工方法が続いており、これを打破しようと内田が断行した営繕課改革の直後であった。内田は、新しい技術に挑戦し、新たな知識を吸収しうる人物以外の技師を全員解雇した。そのため、あとは古い現場を知らない卒業したての若手しかいない状態であった。岸田も、内田の部下として雇用された卒業したての若手技師の一人であった。給与上の所属としては、大講堂建築実行部であるが安田講堂以外の設計も手掛けている。

例えば、最初に手掛けたのは理学部一号館の東面のデザインであった。南面は小野薫が担

当し、岸田は、現場監督も任された。連続する半円窓は、出隅部分や窓の縁が柔らかい曲面となるよう処理しており、ドイツ表現主義を代表する建築家ハンス・ペルツィツヒが設計したルボンの化学工場のような外観を有している。

この時期に作成された図面に、「呉市公会堂及び図書館」、「Y銀行独身者倶楽部」といった大学キャンパス以外の作品もある。特に「呉市公会堂及び図書館」の図面に記された年記は、大正11年6月から7月のもので、営繕課勤務となってから日が浅い時期の作品である。図面には、内田祥三を示す「S.UCHIDA」と鉛筆書きで署名が記され、捺印されているが、金沢工業大学の資料にある岸田のスケッチブックに、「呉市公会堂及び図書館」と書かれたエスキスや図面の写真が残されていたことから岸田が手掛けていたことが判明した。

「呉市公会堂及び図書館」は、最終的に廃案<sup>25)</sup>となり、実施には至らなかったが、平面図には普通閲覧室、児童閲覧室、新聞雑誌閲覧室のほか、オーディトリウム、ギャラリー、貴賓室、会議室、大食堂、酒場、娯楽室といった居室が記されており、採光のための中庭も配されている。公会堂と図書館を併設し、複合化を図ることで、都市の近代化により増加する市民の要望に対応しようとする姿勢が感じ取れる。

「呉市公会堂及び図書館」の設計は、公会堂と図書館という2つのビルディングタイプを複合したもので、その後、安田講堂や東大図書館を担当した岸田にとって、貴重な経験になったと思われる。

#### 安田講堂と大隈記念講堂の設計競技

1922（大正11）年12月に着工した安田講堂は、基礎工事が進む途中で関東大震災に遭い工事中断を余儀なくされたが、1924（大正13）年4月に工事を再開し、無事に竣工式を迎えるに至った。翌7月7日付の東京日日新聞は次のとおり報じている。

「善美を尽した東洋一の大講堂 安田家の寄附で出来上がった帝大の大講堂の落成式は、

---

注25) 図面が収められていたファイルの背表紙に「呉市公会堂及図書館 廃案」とある。(東京都公文書館蔵)

六日午後三時から文部大臣を初め各省高等官及び局長級、安田保善社幹部等来賓約四百余名を招じて盛大に挙行された。同講堂は内田祥三博士の設計でゴシック式、音響試験装置は中村博士の設計である。…正面中央の玉座には両陛下の御真影を奉置し…貴賓室、控室、各室ともあらゆる設備はその壮麗と相俟って、さすがに東洋一の名に恥じないものがある。」<sup>26)</sup>

ここでは、設計者の名が内田祥三となっているが、岸田は、安田講堂の設計では、内田による基本設計に手を加えるような形で、立面の設計を担当したほか、講堂内部のシャンデリアや演壇周りの装飾を手掛けている。大正13年1月号の雑誌『建築世界』に掲載された「大講堂透視図」には、岸田の名前と「1923. 1. 22」（大正13年1月22日）の日付がある。また、東京大学施設課に残る安田講堂の図面にある捺印欄には、製図を行った技師欄に岸田の印が確認できる。

岸田は、関東大震災後の帝都復興展覧会にも安田講堂関係の作品を出品している。佐藤武夫が、展覧会の会場準備をしている岸田を訪れると熱心に舞台周り石膏模型の飾り付けを検討していたと述べているほか、『岸田日出刀』には石膏模型を作製する岸田の写真が掲載されている。当時のスケッチブックにも、その石膏模型と思われる写真が張り付けられており、壁画のスケッチを描いていることから、かなりの大部分を任されていたことがわかる。(図1-20 ~25)

村松貞次郎による晩年の内田祥三へのインタビューによれば、内田が最初に描いた基本設計図をもとに、岸田がかなり自由に任されながら実施段階へと設計が進んだようである。「内田はネオ・ゴシック建築様式を好み、岸田は、建築家エーリヒ・メンデルゾーンやペルツイヒといったドイツ表現主義の影響を受けていたため、安田講堂のデザインはいわゆる内田ゴシックをベースとしながら、岸田固有のデザインを加えたものとなった。」と両者の違いを説明している。

---

注26) 『東京日々新聞』、1924（大正13）年7月7日

内田の素案と岸田が手を加えた後の図面を比較すると、中央にある時計塔の高さが高くなり、立面の削り形を強調することで垂直性が増しているほか、講堂内部の装飾も曲線を多用し、動的な内田の豪華絢爛な装飾に対し、ゼセッション風の直線や幾何学文様を使用し、簡素で、静的な印象に仕上げている。

また、この頃実施された大隈記念講堂の設計競技に出品<sup>27)</sup>し、岸田は、佳作六等に入賞している。スケッチブックには、安田講堂の検討図と大隈記念講堂の透視図が1冊のなかに混在している。両大学の講堂は、当時としては類を見ない大規模なもので、時を同じくして進められたことから早稲田大学の大隈記念講堂の設計競技で当選案となった佐藤武夫が、東京帝国大学宮繕課を訪ねるなど、建設に際して技術的な交流もあったようである。大隈記念講堂の設計競技にも参加し、両講堂に設計案を提案している岸田は、照明の確保の問題に対して、講堂天井上部に採光用の窓を設ける工夫をしている。さらに、岸田が設計した天吊りのシャンデリアは、照明としての機能だけでなく、物理学者の中村清二博士が考案の細いピアノ線が張られ、講堂の天井に張り巡らされた鉄線による音響試験装置としての役割を担っていた。

大正12年2月7日から岸田は、東京帝国大学工学部講師嘱託となり、第一講座を分担するようになる。宮繕課で設計に携わりながら、このころから、講師として東京帝国大学の大学教育にも関わるようになる。

#### 関東大震災とキャンパス復興

安田講堂の工事が進む中、大正12年9月1日、関東大震災が発生する。煉瓦造の校舎の多くが倒壊・壁面亀裂の被害に見舞われる。本郷キャンパスでは、倒れた薬品棚から出火し、2日間におよぶ連鎖的大火災が発生する。18棟の建物が焼失し、建築学科の入る工学部の校舎を含む本郷キャンパスの3分の1が壊滅的被害を受けた。図書館も懸命の救出活動が行われたが、約75万冊におよぶ膨大な書物がすべて灰と化してしまう。岸田は、震災時、大

---

注27) 早稲田大学故大隈総長記念事業部編『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』（洪洋社）

学構内におり、煉瓦や石がもの凄い地響きを立てて落下するのを目の当たりにしている<sup>28)</sup>。そして、火が迫る中、図書館から汗みどろになりながら書籍を運び出した。「書架を工夫するなど建築家のちょっとした設計上の配慮があれば被害を最小限に防げた」と語っており、火災が迫る中、書庫が倒れ、貴重な本の持ち出しを困難にした苦い経験は、耐震性を強化した鉄製の書庫、正面玄関前の噴水の水を火災時に消火を図る設備として使えるよう深く掘るなど、東大図書館の再建時に活かされることになる。震災後、岸田は治安が不安定な中、後に妻となる勝子の安否を気遣い、鶴見でタイヤをパンクさせながらも自転車と徒歩で鎌倉まで向かい、しばらく鎌倉で生活をしている。

大学構内は、10月下旬まで3000人近い一時避難者で溢れ、仮設診療所が設けられ、混乱状態に陥る。しかしそのような状況下で、内田祥三は、震災の数日後から復興計画の立案に取り掛かっている。そして、キャンパス移転などの議論もあったが、本格的な復興が始まるまでの応急措置として、早くも大正13年の年明けに、岸田の設計によるバラック小屋が完成する。焼失した山上御殿の跡地に建てられ、『帝国大学新聞』では「バラック御殿」と呼ばれた。バラック小屋は、岸田資料に残る写真から判断すると本郷キャンパス内に少なくとも2棟建てられたものと思われ、その内の一つは大正13年5月号の雑誌『建築世界』に、「東京帝国大学教官食堂」（以下、教官食堂）として写真掲載されている。いずれも建物全体は幾何学的な形態で、片流れや切妻の組み合わせた複雑な屋根形状の平屋建て木造建築である。岸田は、このバラック建築の設計意図について、大正13年1月2日の『東京帝国大学新聞』の記事「岸田技師の設計で山上御殿が新様式 複雑な面の組合せで変化の美を尽くす」に設計者として以下の発言を残している。

新しい時代の真実の建築は、如何に表現さるべきかであると云ふ事は、今日の醒めた若い建築家の誰もが抱く苦難の問題です。此の若い建築家の一つの習作として生まれたのが、今度の御殿のバラック建築です。「バラックなるが故に、此様な出鱈目の形を造つたのか」

---

注28) 『東京帝国大学新聞』

と云う人があるならその人は既に時代に落伍した衰れな人だらうと思ひます。建築は要するに線から成り立つてある面を、如何に組合せて、如何なるボリュームの立体を形成するかにあるのだらうと思ふのです。単調な面を組合せて単一の美を現すのも一つの方法ですが、又複雑した面を巧みに組合せて変化の美を現すのも一つの方法です。御殿バラックはその後者に属するものと言へるでせう。<sup>29)</sup>

岸田は、これらバラック建築を新しい時代の建築を意識し、複雑な面を組合せて変化の美を現したボリュームの習作であると述べている。岸田は、バラック御殿や教官食堂の設計に至るまで、いくつかの実作を手掛けていたが、その多くは部分的に担当するか或いは計画案に止まっていた。営繕課勤務時に手掛けた作品としては比較的小規模であった教官食堂等バラック小屋は、自らの考えを多分に反映することができ、実施に移された数少ない作品の一つであったと思われる。岸田にとって、新たなる建築表現の領域開拓を目指す意欲作であったと考えられる。

本郷キャンパスの復興計画は、前述の通り、大混乱をよそに震災後週日を出ないで内田祥三を中心に立案が進められた。震災前から大学キャンパスの再開発整備では、予算や設計方針の決定で学部間の調整が難航したこともあり、内田は、全体計画の円滑な実施のために総長を説得し、学部ごとに分かれていた予算編成のプロセスに改革を行い、無断で業者変更等が為されないような仕組みを導入し、さらに営繕課の体制を強化している。そして、本郷キャンパスの復興計画に伴う建設が本格化し始める大正13年7月7日付で、岸田は東京帝国大学嘱託の立場から内閣の官職として東京帝国大学技師（高等官七等）に任官する。

内田のキャンパス復興基本計画の策定に参画した岸田は、大正14年6月5日に一人の建築家としての希望と断りを入れながらも、大学構内の建築の在り方について、①建物相互の関係、②道路、③附属屋式の小屋を捨てること、④建物は出来る丈け大きくのんびりと、⑤運動場とその設備、⑥全大学共通の大陳列館、⑦遊歩道、⑧病院に関する個人的な意見を残

---

注29) 『東京帝国大学新聞』、1924（大正13）年1月2日

している。これには、当時、営繕課の全体計画に反して、各学部が独断で木造の便所小屋や倉庫を建てたり、建物相互の関係や空地を意識的に設けたにも関わらず台無しになっていた状況に対する若手技師・岸田なりの、立場としては精一杯の批判が込められていた。

この頃、学士会館（大正13年／）、大連駅（大正13年7月15日締め切り／）、震災記念堂（大正14年2月28日締め切り／）といった設計競技に出品し、いずれも入賞を果している。

### 大正末の欧米渡航

1925（大正14）年7月6日、安田講堂の竣工記念式典が挙行される。金沢工業大学に残る岸田のアルバムには、安田講堂の竣工直後に撮影されたと思われる内田祥三ら正装した建築実行部の職員が、講堂内部の廊下で図面囲んで眺めている写真が残されている。

大講堂建築実行部のプロジェクトが終り、新図書館の設計がすすむ中、内田の助言もあり、岸田は図書館視察の名目で世界一周の欧米出張に出かける。新図書館の学内コンペが開かれ、岸田案が選ばれたが、内田が名案ではないと判断し、設計をやり直している。

この図書館視察を名目とした約1年間の世界一周の旅は、岸田にとって最初の洋行であったが『岸田日出刀』（相模書房、1972年）をはじめ、これまでの年譜では、その期間が正確に記録されておらず、その詳細が明らかではなかった<sup>30)</sup>。没後に前川國男らが発起人となり編纂された『岸田日出刀』に収録されている門下生による追悼座談会のなかでも、この大正末の洋行での体験が岸田に与えた影響を重要視している意見がみられるが、アメリカ経由でドイツに向かったこと以外は誰もよく知らなかったようで詳しく言及されていない。また、佐々木宏は岸田の洋行について「もし明確なことが分かったら訂正したい。」としながら、前川の証言などから「1926年で一年足らずの期間だったのではないか」とし、牧野正巳の遺族が所有している岸田が帰国後に行った講義ノートの内容から1927年の3月に

---

注30) 『岸田日出刀』（相模書房、1972年）に載る岸田日出刀の年譜には経歴欄に「昭和1・第一回渡欧」とだけ記載されている。

は帰国していたのではないかと推定するにとどまっていた<sup>31)</sup>。

金沢工業大学建築アーカイヴ研究所所蔵の岸田日出刀資料に、幸いにもニューヨークからヨーロッパ滞在中の2月2日から8月19日までの日誌（4冊<sup>32)</sup>）が現存していた。（図 1-49）

この日誌には、毎日の感想の他、その日に面会した人物の名刺や地図、レストランのメニュー、電報、ホテルの領収証やバスの切符の半券に至るまで、日別に丁寧に貼り付けられており、約半年間分の詳細な足取りがわかる。

この他に、公文書の記録<sup>33)</sup>や新聞・雑誌・著作等に書かれている回顧録等をつなぎ合わせることで、海外渡航の期間や地域的な移動経路が明らかになった。

---

注31) 佐々木宏『巨匠への憧憬』（相模書房、2000年）p.p.117-134

注32) 3月26日から28日までの3日日間を除く。計4冊。3冊は米国製A4サイズ、1冊はA5サイズの大学ノートで、いずれも横長に使用し、インクペンで記述している。その日の天候や行動録のほか、ホテルやレストランの領収証、バスや鉄道の切符、観劇時の半券やプログラム、面会した人物の名刺などが日別に丁寧に張り付けられている。

注33) 国立公文書館、東京都公文書館所蔵の資料、建築雑誌掲載の会員動静欄を参考にした。



表4 大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市と足取り

横浜	12/10ごろ	
ホノルル	12/20	初めての異国の地
サンフランシスコ	12/25～1月初頭	土浦亀城夫妻に会う
ロサンゼルス	1月初頭	ノイラ、シンドラーに面会し、ライトの住宅作品を案内してもらう
カンザス州	1/5	サンタフェを走行中の車窓のスケッチ
シカゴ	1/8	缶詰工場「ユニオン・ストック・ヤード」を見学
▽4冊の日記により判明した行動		
ニューヨーク	～3/12	日本人倶楽部に長期滞在
ボストン	2/21～24	ボストン美術館ほか
ワシントン	2/28～3/3	スミソニアン博物館ほか
バルティモア	3/3～4	
フィラデルフィア	3/4～6	フィラデルフィア万国博覧会(3/5)、独立ホール
ニューヘブレン	3/9	イエール大学図書館
(船): ニューヨーク～サウザンプトン、3/12-19		
ロンドン	3/19-5/1	新聞で下宿先を募り、郊外フィンレーの家庭に長期滞在
パリ	5/3-6/9	ルーブル宮、エッフェル塔ほか
ベルリン	6/10-6/14	
ハンブルグ	6/14-15	市内観光、動物園
コペンハーゲン	6/16-17	グリプタク美術館
ヒレゼス、ヘルシンゲル	6/16	クロンボー城、フレデリクスボー城
オスロ	6/18-19	工業博物館、美術館
ストックホルム	6/20-21	市庁舎、国立美術館、市裁判所、
(船): マルメ、サスニッツを経由しベルリンへ		
ベルリン	6/22-27	
ポツダム	6/23	サンスーン公園
ライプツィヒ	6/27	
ドレスデン	6/27-28	グローセル・ガルテン公園で行われている博覧会を見学
ブラハ	6/28	
ウィーン	6/28-29	シュテファン寺院。オペラも美術館も見ず、外観だけを見る
ブダペスト	6/30	議事堂、美術館、ナショナル・ヒストリー・ミュージアム
ザグレブ	7/1	
ヴェネツィア	7/2-3	サンマルコ寺院、ドゥカレレ宮殿、サンティジョ・バンニエパオロ教会
フィレンツェ	7/3	サン・スピリト教会、大聖堂、サンタ・クローチェ聖堂ほか
ローマ	7/4-7	バチカン、ボルゲーゼ美術館ほか
ナポリ	7/8-9	美術館、水族館
ボンベイ	7/8	ボンベイ見学
ミラノ	7/10-11	ドゥオモ大聖堂、美術館、サンタ・マリア・デル・グラツィエ教会ほか
コモ	7/11-12	
スイス(山岳都市)	7/12-14	フリエンから船でルツェルンへ
ルツェルン	7/12	
ジュネーヴ	7/15-17	長谷川輝雄(5/15没)の訃報に接する
パリ	7/18-23	
(船)		
ロンドン	7/23	
オックスフォード	7/24	アッシュモレアン博物館ほか
バーミンガム	7/24-25	
リヴァプール	7/25-26	
アンブルサイド	7/26-27	
エジンバラ	7/27-28	
インヴァネス	7/28-29	カローデン古戦場、船でネス湖に乗り、フォート・オーガスタスへ
フォート・オーガスタス	7/29-30	
グラスゴー	7/30-31	大聖堂、美術館、グラスゴー大学、公園「グラスゴー・グリーン」
エジンバラ	7/31-8/1	カトリーン湖、ローモンド湖などを巡る
ロンドン	8/1-5	
ケンブリッジ	8/3	
パリ	8/6-10	
ルーアン	8/10	セック・デ・トゥルネル博物館(鉄工芸博物館)
アミアン	8/10	アミアン大聖堂
リール	8/10-11	
ブリュッセル	8/11	ウォータールー見学、ブルーバード公園
アントワープ	8/11-12	
アムステルダム	8/12-13	王宮、国立美術館
ケルン	8/13	ケルン大聖堂
フランクフルト	8/14-15	ケルンからライン河を船でフランクフルトへ移動
ダルムシュタット	8/15	展示館、芸術家コロニーほか
ハイデルベルグ	8/15-16	
カールスルーエ	8/16	
シュトゥットガルト	8/16-17	
ベルリン	8/17-19	
旅	9月	4月に書かれた予定表に「旅」とある。ウィーンなどを巡ったと思われる。
パリ	～10/15	
シベリア鉄道	10月末	満洲里までシベリア鉄道で移動
帰朝	11/10	奉天(瀋陽)、安東(丹東)、下関を経由し帰国
太字: 複数回訪問都市		

#### 大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について

岸田は、大正14年の12月10日ごろから翌、大正15年11月10日まで、欧米諸国を巡る約11か月間の世界一周の旅に出かける。震災の傷跡が残る横浜港から出港した。横浜港へは、長谷川輝雄をはじめ多くの友人たちが見送りに来た。10日後に最初の外国となるホノルルに寄港する。岸田は、甲板から見たホノルルの街並みや港で釣りをする人々の様子をスケッチブックに残している。(図 1-49) 日記帳には、「珍しい果物が食べられ、街の空気もぱつと明るく、日本人も多いのだが、街全体にピチピチとした活気が溢れ、アメリカの都市の明朗さを始めて現実みで、言ひしれぬエクゾチックな感じを受けた。」<sup>34)</sup>と初めて体験した外国の都市について、感想を残している。

それから5日後、年末のサンフランシスコに上陸する。サンフランシスコのホテルでは、帰国間近の土浦亀城夫妻<sup>35)</sup>と面会している。一高時代からの朋友である土浦は、フランク・ロイド・ライト (Frank Lloyd Wright, 1867-1959) の事務所タリアセンを退所し、中古で購入した自動車でアメリカ横断旅行を終えたところであった。

岸田は、1930 (昭和5) 年に、リチャード・ノイトラ (Richard Joseph Neutra, 1892-1970) が来日した際に、「当時氏の名は亜米利加建築界に於ても余り知られてをらず、國を發つまで氏に就いては少しの予備知識も持ち合わせず突然会つた」<sup>36)</sup>と語っているように、アメリカの若手建築家に関する最新の情報には詳しくなかったようである。

サンフランシスコのホテルで面会した土浦からの情報提供と紹介を受け、岸田は、早速ロサンゼルスに移動している。ロサンゼルスでは、ノイトラの自邸を訪問し、彼の近作や諸計画案を見たほか、ルドルフ・シンドラー (Rudolf Michael Schindler, 1887-1953) と面会。さらにフランク・ロイド・ライトの最新の住宅作品のいくつかを一緒に見学している。

「1月5日」と日付が書かれた、荒野に敷かれたレールを描いた、車窓からの景色のスケッチがある。ロサンゼルスでの若手建築家との交流を終えた岸田は、早くも鉄道でサンタフ

注34) 岸田日出刀『焦土に立ちて』(乾元社、1946年)

注35) 土浦亀城の大陸横断旅行については、田中厚子『土浦亀城と白い家』(鹿島出版会、2014年)に詳しい。

注36) 岸田日出刀「亜米利加の建築とノイトラ氏(講演要旨)」『国際建築』(1930年7月号)

ェを通過<sup>37)</sup>し、シカゴに向かったようである。そして、シカゴでは、建築家アントン・フェラー（Anton Martin Feller, 1892-1973）に面会している。（図 1-46、図 1-47）1月8日には、塚本靖の「建築計画」の講義で取り上げられていたと言うスウィフト社の屠場と缶詰工場「ユニオン・ストック・ヤード」を見学しており、この時の様子を随筆集『麓』の中で綴っている<sup>38)</sup>。その後、そのまま鉄道でニューヨークに移動した岸田は、1月中旬から3月12日までニューヨークの日本人倶楽部に約2か月間滞在する。

ニューヨークでは、図書館建設の寄付金を受けたジョン・ロックフェラー・ジュニア氏を表敬訪問している。残念ながらバカンス中で面会は果たせなかったようだが、「生憎同氏は南の方へ避寒中不在で会へなかつたが、その部屋からニューヨークの港が手にとるやうに見え、自由の女神像のあたりから、出船入船を玩具のやうに見下ろすことができた。」と、社長室に案内された時の感想を述べている。

まだ、岸田がニューヨークに滞在していた頃、エンパイヤ・ステートビル（1931年竣工）は存在しておらず、世界で最も高いビルであったキャス・ギルバート設計のウールワース・ビルディング（241.4m）に登っている。大学の図書館視察として、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの図書館（1月26日）にも行っている。そして時折、ニューヨークに住んでいた叔父といとことともにボストンやフィラデルフィア、ワシントンに数日程度の小旅行に出かけている。あまり建築に関しては、ワシントンからの帰りの道中には、フィラデルフィア万博、独立記念館も見学している。2月4日に、ベルンハント・ミーロー（Bernhardt E. Muller）のニューヨーク事務所を訪ね、マイアミのオパロックカに建設予定であったプロジェクトの設計段階を見学している。

3月12日、ホワイトスターライン社のR. M. S. マジェスティック号の2等客室に乗船し、イギリスのサウザンプトンへ向かう。1週間後、3月19日のサウザンプトン到着後は、そのままロンドンに向かったようである。「ナショナル・ホテル」でのホテル暮らしの後、ロンドン・タイムズの新聞で下宿先を募り、十数件の候補の中からロンドン郊外のフィ

注37) サンタフェを通過する鉄道の車窓からの風景をスケッチに残している。

注38) 岸田日出刀「古日記より」（『麓』、相模書房、1937年）

ンチリー（Finchley）にある住宅に決めている。2階建ての小さな住宅<sup>39)</sup>で、ウォルフォード家の子供と一緒に描いた家の図面が挟まれている。幼い子供のいる家庭であったようである。ロンドンでもミュージカル等の観劇をし、近くにあるテニス倶楽部で大会に出場するなどテニスに興じている。5月1日にパリに向かうまで、約1か月半、ロンドン郊外に滞在している。

5月3日から6月9日まで約1か月間パリに滞在し、ルーブル宮殿、エッフェル塔などを見学。6月10日から14日までベルリンに滞在し、この後、ベルリン、パリ、ロンドンに何度か戻りつつ、欧州各地をほぼ1日1都市のハイペースでめぐる旅を繰り返している。

まずはじめは、北欧に向かったようである。

ベルリンを6月14日に発ち、ハンブルグで市内観光、動物園等を見学し、翌日コペンハーゲンに移動、グリプトテク美術館を見学。ヘルシングボリからヘルシンゲルに渡り、島の突端にあるクロンボー城を見学、ヒレズではフレデリクスボー城に立ち寄り、18日にオスロに到着している。工業博物館や美術館を見学し、翌日に鉄道でストックホルムに向かっている。この車内で、たまたま乗り合わせた乗客との会話からストックホルム市庁舎に対する市民の関心が高さがあることを認識する。6月20日にストックホルムに着き、市庁舎、国立美術館、市裁判所などに足を運んでいる。1泊した後、船に乗り、マルメ、サスニッツを経由し、6月22日、再びベルリンに戻っている。

6月22日から27日まで、途中23日に、日帰りでベルリン近郊のポツダムに向かいサンスーシ公園を見学しているが、約1週間ベルリンに滞在している。

今度は、ドイツ郊外からイタリア、スイスへと足を延ばしている。

6月27日にライプツィヒ、ドレスデンではグローセル・ガルテン公園で行われていた博覧会を見学。28日にプラハを経て、ウィーンへと向かいシュテファン寺院を見学。オペラハウスや美術館は、中に入らず外観だけを見て周ったようである。ワグナーの作品を見に行った記述はなく、ウィーンに1泊の後、30日は、ブダペストを訪れ、議事堂、美術館、ナ

---

注39) 建物は、現存（2015年現在）している。

ショナル・ヒストリー・ミュージアムなどを見学している。7月1日にザグレブを訪れ、イタリアに向かい、7月2日にヴェネチアに到着。サンマルコ寺院、ドゥカーレ宮殿、サンティジョバンニパオロ教会などを見学、翌3日には、フィレンツェに向かい、サン・スピリト教会、大聖堂、サンタ・クロチェ聖堂などを拝観している。そして、7月4日から7日までローマに滞在し、パンテオン、ボルゲーゼ美術館を見学。8日ナポリに向かい、そのままポンペイに足を運んでいる。10日にはミラノで、ドゥオモ大聖堂、美術館、サンタ・マリア・デル・グラツィエ教会などを見学。コモを経て、7月12日から14日かけてスイスの山岳都市をめぐる。フリェレンから船でルツェルンへと移動し、7月15日にジュネーヴに到着する。ジュネーヴには、17日まで滞在した。この際、長谷川輝雄の訃報（5月15日没）に接している。「夢の如き心地す」とその悲しみの胸中を3頁にわたって綴っている。そして、7月18日にパリに戻り、23日まで滞在した後、船で再びロンドンへと向かっている。

7月23日のロンドン到着後は、イギリスの北へと向かい、オックスフォードでアシュモolean博物館を見学、24日にバーミンガム、25日にリヴァプール、26日にアンブルサイド、27日にエジンバラへと移動し、28日から31日までインヴァネス地方を巡っている。カローデン古戦場などを訪れ、ネス湖で船に乗り、フォート・オーガスタスに行き、カトリン湖、ローモンド湖を巡り、グラスゴーでは、大聖堂、美術館、グラスゴー大学、グラスゴー・グリーン公園に足を運んでいる。8月1日から5日まで、途中3日に日帰りでケンブリッジに向かっているが、ロンドンに滞在し、8月6日から10日まで再びパリに滞在している。

その後、フランスとドイツ郊外を巡る旅に出ている。

8月10日にルーアンでセック・デ・トゥルネル（鉄工芸）博物館、アミアンでアミアンの大聖堂を拝観、リールに向かい、11日にブリュッセルでウォータールー、ブルーバード公園を見学。アントワープで宿泊し、12日にアムステルダムにて王宮と国立美術館を見学。13日にケルンへと移動し、ケルン大聖堂を拝観。ケルンからライン河を船で移動し、14日にフランクフルトに到着。15日、ダルムシュタットで中央駅、展示館、芸術家コロ

ニーなどを訪れている。その後、ハイデルベルグに移動し、宿泊、16日にカールスルーエに向かい、17日、シュトゥットガルトを経由して、ベルリンに戻っている。

8月17日から再びベルリンに滞在している。日記は、この2日後の19日を最後に途切れており、4冊の日誌帳からは、この後の正確な足取りはわからないが、4月に書かれた予定表には、9月に「旅」とあることから、この後もヨーロッパ各地を転々と移動したものである。帰朝後の『オットー・ワグナー』には、夏にウィーンでワグナー作品に触れたとあることから、ウィーンも再訪したものである。岸田は、10月15日にパリを出発している。ロシアのモスクワに立ち寄り、レーニン廟を訪れている。満洲里までシベリア鉄道に乗車し、奉天（瀋陽）、安東（丹東）などの後に満州となるエリアを通過、下関を経由し、11月10日ごろ帰国している。

#### 面会した建築家と見学した建築作品の印象に関する記述

欧州各地を転々とめぐる旅は、ほぼ1泊2日で1都市を見て回るハイペースなもので、長期滞在したニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルリンを除き、じっくりと特定の建築に時間をかけて見学するというよりかは、なるべく多くの都市に足を運び、その様子を目に焼き付けてくるようなものであった。それゆえ、日記帳への建築に関する記述はわずかであったが、面会した建築家や見学した建築作品の印象に関する記述がいくつか見られた。

#### — シンドラー、ノイトラ、フェラーら米国で活動していた若手建築家

アメリカ大陸に上陸した岸田は、宿で帰国途中の土浦亀城夫妻に偶然会い、その紹介でロサンゼルス郊外にあるリチャード・ノイトラ（Richard Joseph Neutra、1892-1970）の自邸を訪問している。近作や諸計画案を見たほか、ルドルフ・シンドラー（Rudolf Michael Schindler、1887-1953）とも面会。さらに一緒にフランク・ロイド・ライトの住宅作品をいくつか見学している。

まだこのころは、シンドラーに誘われ、ノイトラがカルフォルニア州のシンドラー邸に生活と活動拠点を移してから間もないこともあって、渡米するまで岸田はノイトラとシンドラ

ーについてあまりよく知らなかった<sup>40)</sup>ようである。岸田は、ノイトラの来日時に「亜米利加にもかういう新しい傾向の建築家があることを初めて識つて寧ろ意外の感に打たれた。」<sup>41)</sup>と、その時の印象を語っている。

また、シカゴ滞在時には、建築家・中村與資平の事務所で勤務経験があるオーストリア人建築家、アントン・フェラー（Anton Martin Feller, 1892-1973）に面会<sup>42)</sup>している。フェラーとの面会も土浦の紹介であった<sup>43)</sup>。

#### ーベルンハント・ミーロー（Bernhardt E. Muller, 1878-1964）

岸田は、2月4日に、ベルンハント・ミーローのニューヨーク事務所を訪ね、マイアミのオパロックに建設予定であったプロジェクトの設計段階を見学している。

ミーローのアラビアンナイトを連想させるような中東風の意匠は、岸田にとってあまり関心するものではなかったようである。洋行中の日記には、「スケッチは幼稚だがドラフトマンの力で立派なパースになっている。」と、実に正直な感想を残している。

米国では、土浦の助けもあってシンドラーやノイトラなど、若手建築家と面会し、彼らの活動に触れ、アメリカの建築界にも新しい傾向があることを知ったが、米国の過去4世紀にわたる建築の推移に照らしわせると、彼らは「亜米利加建築家らしくない建築家である。」

---

注40) 岸田日出刀「亜米利加の建築とノイトラ氏（講演要旨）」『国際建築』（1930年7月号）

注41) 前掲注40

注42) 岸田の日記帳には「フェラーという人」としか書かれていなかった。筆者が、アントン・フェラーの存在を知るに至ったのは、『「フェラーという人」とは、アントン・フェラーではないか」という西澤泰彦先生のご教示による。アントン・フェラーについては、西澤泰彦「建築家中村與資平の経歴と建築活動について」（日本建築学会計画系論文報告、1993年8月）において、その一端を知ることができる。

注43) 2014年2月1日に日本建築学会建築歴史・意匠委員会近代建築史小委員会が主催して行ったシンポジウム「近代建築史の最先端 第9回 近代（日本）× 近代（西洋）- 中東欧のモダニズムとその拡がり そのⅡ」にて、田中厚子氏が発表された「土浦亀城と海外建築家たちとの交流—フォイエルシュタイン、ノイトラ、あるいはモーザー—」において、土浦とフェラーとの書簡のやり取りが紹介された。フェラーが土浦に宛てた書簡に、紹介を受けた岸田に会ったことが記されている。

44)と述べている。あくまでも「ロサンゼルスで会ったシンラー氏、ノイトラ氏、シカゴで会ったフェラー氏はみんな他の国から来た人。」と書き残しており、彼ら、アメリカの地で新しい傾向の建築に取り組んでいる建築家たちが、ヨーロッパ出身者で自国出身者でないことを指摘している。

#### ーストックホルム市庁舎（エストベリ設計）

1926（大正15）年6月21日、ラグナール・エストベリ（Ragnar Östberg、1866-1945）設計のストックホルム市庁舎を訪れ、「傑作に驚く」、「東京の議事堂もエストベリの作風であったらどんなによいことだろう」、「今回の外遊中、最も印象深いものになろう」と日記帳に感想を残し、その建築を高く評価している。

帰国後、岸田は、市庁舎見学の印象を執筆し、『建築雑誌』（1927年4月号）に詳しく20頁にわたり寄稿している。

「この建築に直面した時受ける感じの最初のものは「東洋的」といふことであり、次いでそれは「様式の超越」といふ偉大なるものに変つて来る。」<sup>45)</sup>

「遠望して「東洋的」といふ感じを抱きし後に、この建物を仔細に点検して見れば、サラセン、ロマネスク、ゴシック、支那、時にクラシック、ルネサンスとさへ思はれる程度の諸種の要素が随所に発見される。完全にそれは「折衷主義」に属する。」<sup>46)</sup>

「而もこれ等の折衷主義的諸要素に就いて、云為しようといふ気になる前に、まづこの建築のすべての部分から発散する異常な力強い精神に圧倒され、恍惚とした建築雰囲気に包まれてしまふのを覚える。そこでは過去様式に対する、意識的挑戦の苦悩に接するよりも、寧ろこれ等過去様式を悠然と眺め、これを吾がものとし、すべての過去に徹して過

---

注44) 岸田日出刀「亜米利加の建築とノイトラ氏（講演要旨）」『国際建築』（1930年7月号）

注45) 岸田日出刀「ラグナー・エストベルグ ストックホルム市廳舎建築に就いて」『建築雑誌』（1927年4月号）

注46) 前掲注45



去を解脱した悠久の世界を見出す。」<sup>47)</sup>

岸田は、ストックホルム市庁舎にある議場の「天井から吊り下げられた瓏珞や、議長席上の垂幕、壁面に張られた織物の文様など」に、「東洋といふ気分が非常に濃厚に感ぜられ」と述べている。さらに、議場の装飾文様だけでなく、市庁舎の遠望からも「東洋的」な印象を受けると述べている。彼が、ストックホルム市庁舎の遠望に感じた「東洋的」との印象が、具体的にどのような部分を指しているのかは文中に記されていないが、造船技術を駆使したとされる反りの付いた屋根、塔の頂部におかれた王冠を模した金装飾に、社寺仏閣の屋根や仏塔の相輪を重ね合わせた印象なのかもしれない。

そして、ストックホルム市庁舎は「折衷主義」に属するが、ヨーロッパ各地や中国の建築様式の折衷でありながらも、それが単なる各様式の要素の陳列にとどまらず、「過去に徹して過去を解脱した悠久の世界を見出」しているという点を、高く評価している。

北欧スウェーデンは、地理的にも、文化発信地との関係としても、イギリス、フランス、イタリアといったヨーロッパの中心諸国というよりも、周辺の地域に位置する。

日本もヨーロッパ文化の中心諸国からみれば、周辺地、むしろ地理的には、その辺境の地にあたる。このような意味において、日本も、北欧諸国と似たような境遇にある。日本における新しい建築表現の形を模索していた岸田にとって、「様式の超越」を実感できたエストベリのストックホルム市庁舎は、「東京の議事堂もエストベリの作風であったらどんなにいいことだろう」と書き残しているように、ひとつの理想像に映ったようである。このように、欧州の遠隔地域での近代建築の展開に関心を寄せていたことがわかる。

岸田は、ストックホルムに2日間滞在している。短い限られた滞在期間中に、エストベリとの面会を試みたようであるが、時間の都合で実現していない。

---

注47) 岸田日出刀「ラグナー・エストベルグ ストックホルム市廳舎建築に就いて」『建築雑誌』（1927年4月号）

## 一 ダルムシュタットの建築群

あまり建築物についての感想を残していなかった岸田だが、ダルムシュタットの芸術家村については、夏の熱い中、汗だくになりながら駅から延々と歩いて行ったが、見るべきものはなかったという、辛辣な文章を3ページにもわたり、日記帳に記している。

「オルブリッヒ作の停車場と展示館以外は見る価値がない。」と、ダルムシュタッド中央駅の駅舎と展示館については、その価値を認めているが、「ゼセッション初期の名建築家を輩出した町として期待していたが、ダルムシュタッドに失望した。」とある。そして、芸術家コロニーも「大いに普通の郊外住宅地で、ホッホツァイト塔内のバラック式意匠も感心しない」と述べている。岸田は、分離派の影響を受けた建築作品の作品に対し、失望の念を示している。

## 一 アメリカの高層建築

岸田は、帰国後に執筆した学会パンフレット『海外に於ける建築界の趨勢』（昭和2年）の最初に出てくるアメリカの章で、フランク・ロイド・ライトの紹介とともに、「スカイスクレーパー」について取り上げている。そして、しばらくした1930（昭和5）年に、その内容を増補させた『高層建築』（三省堂）を出版している。本書で岸田は、「数年前私は復興前の横浜を発ち、半月後にサンフランシスコの港に着いて、汽船の上からその町のスカイスクレーパーの集団を眺めたが、その時の夢みるやうな気持ちは、世界一周中の数ある思ひ出のうちでも、最も印象深い忘れることのできないものの一つとなつてゐる。」と述べ、洋行の最も印象深い思い出の一つとして、サンフランシスコの高層建築群を船上から眺めたことをあげている。

岸田がアメリカで立ち寄った、シカゴ、デトロイト、フィラデルフィア、ニューヨークのいずれの都市にも、当時既に高層建築群があり、三越呉服店（現、三越デパート）の高塔（52メートル）が、日本で最も高い建築物であったのに対し、200メートルを超すアメリカの高層建築を目の当たりにして、相当な衝撃を受けたようである。実際、「日本からヨーロッパ諸国の都市を訪れても、さう大して異つた外国にきたといふ感じはしないけれど、

アメリカ諸都市の高層建築群の中に立つと、知らぬ外国に来たといふ感じが最も強い。」と感想を残しているように、日本国内で洋風建築を目にしていた岸田にとって、アメリカの高層建築ほど、新鮮な印象を受け、外国に来た実感が得られた建築はなかったようである。

岸田は、アメリカの高層建築について、いくつかの感想を残している。

まず、「今日のスカイスクレーパーは、どこまでも使はれることを目標としてをる。地上を離れた数百尺の上に事務机がある、手洗があり便所があり、そして寝台がある。スカイスクレーパーは地上の輩を雲上人にまで引き上げてくれた。それは何とデモクラティックなそして現代的なことではなからうか。」<sup>48)</sup>と述べ、高層建築が実用性を主眼としたものであり、デモクラティック、そして現代的であると評価している。

そして、建築法規と高層建築の関係について、「セットバックをすれば、建築の輪郭線に面白い変化の美が生まれ、立体と立体との調和や対照からくる美が生ずるものである。そして小さな部分の局部的装飾などといふものは、あまり重要でなくなってくる。」「建築物に細かな装飾をくちやくちやつけることの間違つてをるのが期せずして了解されるもの面白い。」

「セット・バックは高層建築にピラミッド的の剛快さと、力強いドラマティックな構想とを興へるもので、スカイスクレーパーの形の上からも積極的によい法律と言へる。」<sup>49)</sup>と述べ、法律的な制限が建築の形を効果的に抑制し、装飾の必要性を否定している点を評価している。

しかし、岸田は、高層建築の多くが「ギリシャやローマ時代に盛えた古典式や、中世期に行はれた初期キリスト教式・ビザンチン式・ロマネスク式或はサラセン式や、文芸復興時代に旺んであつたルネッサンス式、更に十九世紀に流行した古典主義・浪漫主義及至折衷主義」などの建築様式の折衷であり、「ウールワース・ビルディングも、またシカゴのシカゴ・トリビューンの建築も共にゴシック様式に據つたもので、その形のよいというのも結局ゴシック伽藍の均衡美と装飾に近い美しさをもつてをるから美しいとされるので、新鮮な新しい美は更に求められない。その美は中世の美を根拠とした美であつて、新時代の美的感情を根拠とした美では更でない。」「折角雲を掴むやうな厩大な摩天楼を造りながら、その意匠は内

---

注48) 岸田日出刀『高層建築』(三省堂、1930年)

注49) 前掲注48

部も外部も、前に記したようなヨーロッパの過去の建築様式をそのまま不器用に拝借して平気である。何んとそれは惜しいことではなからうか。」<sup>50)</sup>と批判している。

アメリカのスカイスクレーパーは、20世紀になって生まれた新しい材料と構造法とからできた新しい建築であるにもかかわらず、古い歴史や伝統を持たないアメリカが、かえって「さういふ古い歴史や伝統に心を惹かれてそれに強く憧れ、それを求めやうとする心理に支配され」ているのは、「大きな矛盾」<sup>51)</sup>であると述べている。

そして、「新しい建築の本場は、今日フランスでありドイツであり、オーストリア或はオランダ等であつて、決してアメリカではない。」<sup>52)</sup>と感想を残している。

岸田は、アメリカの高層建築が、実用性を主眼としていること、デモクラティックな性格を有していること、法律的な制限が建築の形を効果的に抑制し、装飾の必要性を否定している点といったモダニズムの美意識につながる点を評価している一方で、ヨーロッパの過去の建築様式の折衷に陥っている点を批判している。新しい材料と構造法とからできた新しい建築には、それにふさわしい建築の表現があることを主張していた。

さらに、アメリカの地で新しい傾向の建築に取り組んでいる若手建築家たちが、ヨーロッパ由来のもので自国出身者でないことを指摘しているように、新建築の発信地がアメリカではなく、「フランスでありドイツであり、オーストリア或はオランダ等」であることを認識する結果となった。

また、岸田は、ストックホルム市庁舎のローカリズムの主張と模索に関心を寄せ、様式の折衷に終わらない姿勢を高く評価している一方で、アメリカの高層建築にみられるヨーロッパの過去の建築様式の折衷を批判している。こうした折衷主義の批判は、その後の岸田の理念に通ずる発見でもあった。

---

注50) 岸田日出刀『高層建築』(三省堂、1930年)

注51) 前掲注50

## 小結

本章では、岸田が東京帝国大学に入学してから卒業後務めた大学宮繕課勤務時に経験した約1年間の海外渡航までの期間（1920年4月から1925年11月まで）を扱い、洋行からの帰朝後、大学教官として本格的な歩み始めるまでの様々な体験が岸田に与えた影響について考察してきた。

まず、岸田が東京帝国大学で過ごした学生生活は、講義時間や学生に対するサポート体制も意匠や歴史関係に重きが置かれていた。また、分離派世代との直接的な接触もあり、新しい時代の建築を如何に表現するか、若い建築家の多くが悩んでいた時期であった。当時、3年生であった分離派世代との直接的な接触の多くは、製図室であった。岸田は、始業時期の変更による変則的な学年に在籍したこともあり、夏季休暇には、その不足を補うため先輩が後輩たちに自主課題を出していた。その後、我が国で最初の建築運動を引き起こす先輩たちの野心的な姿勢に、岸田も大いに刺激を受けたと考えられる。

岸田は、短い大学生活の最後に、実用性を追求した監獄の平面計画に興味を抱き、煉瓦に代わるRCによる監獄建築の表現をテーマに、表現主義の影響を感じる卒業設計と卒業論文を提出する。その後、勤務した内田祥三率いる東京帝国大学宮繕課では大学関連施設の設計にとどまらず、従来考えられていた以上に幅広い種類の作品を残していたことが明らかとなった。「呉市公会堂及図書館」「Y銀行独身者倶楽部」などの当該期の岸田の設計活動（16作品）を初めて提示した。「東京帝国大学医学部納骨堂」では、さまざまな建築様式を折衷し、「東京帝国大学教官食堂」や「バラック御殿」では複雑な面を組合せて立体操作を行うなど、新たな建築表現の領域開拓を目指し、様々な習作を重ねていたことが明らかとなった。

「大正末の欧米渡航」では、これまで、その期間が正確に記録されていなかった大正末の海外渡航について、日記帳等を元に、その詳細を明らかにした。大正14年の12月10日ごろから大正15年11月10日までの約11か月間であり、ホノルルへの寄港後、サンフ

---

注52) 岸田日出刀『高層建築』（三省堂、1930年）

ランシスコに上陸し、シカゴ、ニューヨークとアメリカ大陸を横断し、ロンドン、パリ、ベルリンを拠点としながら欧州各地を巡り、シベリア鉄道で帰国した世界一周旅行であることが判明した。

アメリカの高層建築が、実用性を主眼としていること、デモクラティックな性格を有していること、法律的な制限が建築の形を効果的に抑制し、装飾の必要性を否定している点といったモダニズムの美意識につながる点を評価している一方で、ヨーロッパの過去の建築様式の折衷に陥っている点を批判し、新しい材料と構造法とからできた新しい建築には、そこにふさわしい建築の表現があることを主張していた。「様式の超越」を実感できたエストベリのストックホルム市庁舎は、「東京の議事堂もエストベリの作風であったらどんなによいことだろう」と書き残しているように、ひとつの理想像に映ったようである。日本における新しい建築表現の形を模索していた様子が伺え、岸田が、日本と同じ境遇の立地関係に属する欧州の遠隔地域での近代建築の展開に関心を寄せていたことがわかる。ダルムシュタットでは、分離派の影響を受けた建築作品の作品群に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識する。また、アメリカの若手建築家たちが、自国出身者でないことを指摘し、新建築の発信地がアメリカではなく、「フランスでありドイツであり、オーストリア或はオランダ等」であることを認識する結果となった。

岸田は、ストックホルム市庁舎のローカリズムの主張と模索に関心を寄せ、様式の折衷に終わらない姿勢を高く評価している一方で、アメリカの高層建築にみられるヨーロッパの過去の建築様式の折衷を批判している。こうした折衷主義の批判は、その後の岸田の理念に通ずる発見でもあった。

## 第2章

### 洋行後にみられる建築理念の変容 - 新たなる理論形成に向けて

はじめに

第1節 評伝本『オットー・ワグナー』の出版

1-1. 明治末・大正期におけるワグナーの紹介記事

ゼセッションの受容期（田邊淳吉，岡田信一郎）

分離派建築会の活動期（大内秀一郎，石本喜久治）

1-2. 講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」の開催

1-3. 岸田の評伝本と講演録「オットー・ワグナーに就いて」

第2節 博士論文の執筆

2-1. 長谷川輝雄の卒業論文

芸術表現における個性の表出に関する考察

ヨーロッパの近代建築におけるオットー・ワグナーの位置付け

2-2. 博士論文『欧州近代建築史論』

小 結

## はじめに

本章では、岸田日出刀が、洋行からの帰朝後に執筆した評伝本『オットー・ワグナー』と講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」での講演録<sup>53)</sup>、そして、その後に提出された博士論文「欧州近代建築史論」を通して、洋行後にみられる岸田の建築理念の変容を考察する。

## 評伝本『オットー・ワグナー』の出版

岸田日出刀は、約11ヶ月に及んだ世界一周の旅行から帰国した後、日本建築学会の「パンフレット刊行委員会委員」に任命<sup>54)</sup>され、学会パンフレット『海外に於ける建築界の趨勢』（昭和2年）を執筆する。80頁の小冊子は、「アメリカの建築」「フランスの建築」「ドゥースブルの新建築論」「ロシアの建築」「ベルギーの建築」の5章からなる。ダルムシュタットで分離派の影響を受けた建築作品に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識した岸田は、こうした洋行の際に実見してきた欧米建築界の様子を豊富な写真資料とともに報告している。当時の建築家たちにとって海外建築界の最新動向を理解する上での一助となっただけでなく、本書が、日本建築界にいち早くコルビュジエを紹介したのとして知られている<sup>55)</sup>。『海外に於ける建築界の趨勢』では、欧米建築界の最新の動向を報告することを主眼としたものであったが、岸田は洋行の際に、もうひとつ取り組んでいたことがあった。オットー・ワグナーの研究である。

---

注53) 講演会の内容については、『建築新潮』（昭和3年6月号）及び『建築画報』（昭和3年6月号）を参照。

注54) 『建築雑誌』（大正15年11月号）の国会記事欄に、パンフレット刊行委員会委員として、岸田ら15名の名がある。

注55) 学会パンフレット『海外に於ける建築界の趨勢』の叙述内容を詳細にわたって分析し、岸田がコルビュジエを日本建築界にいち早く紹介した点だけでなく、欧州の建築批評家の評価を用いるなどして、コルビュジエの将来性を説明している点を高く評価している論考に、佐々木宏「ル・コルビュジエと日本の建築家たち」『ル・コルビュジエと日本』（鹿島出版会、1999年）、佐々木宏『巨匠への憧憬 - ル・コルビュジエに魅せられた日本の建築家たち』（相模書房、2000年）がある。



岸田は、洋行も終わりに近づいた9月に、ワグナーの建築作品を見学した。そして、この時、「この建築巨匠の生活発展の経路を明らかにしたいと言ふ念を起し」<sup>56)</sup>たと述べている。

帰国後、岸田は約半年間の歳月を掛けて、オットー・ワグナーに関する評伝を書き上げ、1927（昭和2）年12月に『オットー・ワグナー』を岩波書店から出版する。洋行前から既に雑誌等に建築に関する随筆や小論を寄稿していたが、この本が岸田にとって初めて出版した書籍となった。

本書には、222頁の本文に加え、石本喜久治からシュタインホーフ教会堂の写真を借りるなどしてまとめた約50葉の写真や図面の図版が掲載されている。布装された定価5円の本は、一般向けというよりかは、専門家向けの豪華本であった。

しかし、出版の三ヶ月後に、朝日新聞紙上に石本喜久治による「今更にワグナーを憶う岸田日出刀君の新著を読んで」と題する痛烈な批判文が掲載される<sup>57)</sup>。

石本は、岸田が記した『オットー・ワグナー』の内容は、オーストリアの建築批評家アウグスト・ルックス（Joseph August Lux、1871-1947）の『OTTO WAGNER』（1914年）をもとにしたもので、「『著』ではなく『訳』と書くのが正しい」と述べ、本の内容のオリジナリティに疑問符を付けた。

このような背景には、詳しくは後述するが、石本自身もオットー・ワグナーに関心を寄せており、自らも発表の機会をうかがっていたという事情もあったと思われる。岸田の『オットー・ワグナー』が、我が国で出版されたワグナーに関する最初の評伝本となった。

同書について、岸田は戦後に、「わたくしも若かった頃、アウグスト・ルックスの独逸語で書かれた『オットー・ワグナー』を克明に訳し、それを基として若い未熟なわたくし自身の主観や批判を織りませ『オットー・ワグナー』として、岩波書店から出したことがあるが、

---

注56) 岸田は、評伝本『オットー・ワグナー』の「自序」において、「昨夏維也納に遊ぶことができ、親しく彼の建築作品に接することを得て、この建築巨匠の生活発展の経路を明らかにしたいと言ふ念を起し、帰来公務の余暇約半歳を費やしてできたのがこの小著である」と述べている。

注57) 『東京朝日新聞』（昭和3年3月16日）

洋書を和訳することのむずかしさをしみじみ味わったことを思い出す。」<sup>58)</sup>と語っている。岸田本人も認めているように、1914年に出版されたルックスの著書『OTTO WAGNER』を訳出し、そこに岸田の主観や批評を加えながらまとめたものであった。

明治末・大正期におけるワグナーの紹介記事

・ゼセッションの受容期（田邊淳吉，岡田信一郎）

我が国で、オットー・ワグナーについて書かれた雑誌記事を探ると明治末頃まで遡ることができる。このころからゼセッションの潮流を紹介する記事のなかで、近代建築の始祖と認識されていたワグナーが取り上げられるようになる。

1912（明治45）年7月、雑誌『建築ト装飾』が、ゼセッションに新建築、新意匠の活路を期待する特集「せせつ志よん号」を発行する。目次をみると伊東忠太、大熊喜邦、田邊淳吉、武田五一、塚本靖、黒田鵬心らが執筆者に名を連ねている。この中で、田邊淳吉が訪欧米時の体験を元に「『オットー・ワグナー』と維納」と題した記事を寄稿している。また、同号には、後に伊東忠太が昭和3年の講演会の場でもその論の一端を紹介した、岡田信一郎による「中形の浴衣とライスカレー」と題するゼセッション論も掲載されている。

岡田は、同号の執筆陣の中では唯一若干30にも満たない若手であったが、「食べ物でも折衷的なライスカレーやチキンライスが歓迎されている所にゼセッション式が持ち込まれた故大歓迎を受けるのも不思議はない」と当時日本が受容している状況を語り、「一体ゼセッションと言うことが旧来からの分離であるならば、日本人程自由なゼセッションニストは他にはない」と批判した。

「せせつ志よん号」において、実名をあげてワグナーを取り上げたのは田邊淳吉であったが、その内容は、訪欧米時の体験を記した簡単な記事であった。その後は、田邊ではなく、岡田信一郎が、オットー・ワグナーに関する記事を数多く記している。岡田は、ワグナーの言説や作品との関連にも触れ、より踏み込んだ考察を展開している。

---

注58) 岸田日出刀「ギョーディオンの「空間・時間・建築」『学燈』（1955年9月）

岡田は、雑誌『学生』（大正3年9月号）にて、「セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル」を發表している。雑誌『学生』は「立志号」と題され、各界の偉人を紹介する特別号であった。ここで岡田は、建築界の代表としてワグナーを取り上げている。そして、セセッションの動向の紹介にとどまらず、まだ当時存命中であったワグナーの業績を高く評価し、「SECESSION とは」「新運動第一の振鈴」「若きワグネル」「建築は人智の最高表現」「簡単に印象深い建築」「清新にして而も穩健」「セセッション団の勇士」「奥太利の誇り」の8章を通して、近代建築の進展に先導的な役割を果たしたワグナーの意義を伝えている。

さらに、その3カ月後、雑誌『学生』にて発表した「セセッション建築の泰斗オットー・ワグネル」を増補した原稿「オットー・ワグネル」を、雑誌『現代之建築』に1914（大正3）年12月から3号にわたって連載している。岡田のセセッションならびにワグナーに関する言説を考察した菊池重郎も指摘する<sup>59)</sup>ように、本連載が掲載されたのは、A.ルックスによる評伝本の出版と同年であるが、岡田のものは、自身が執筆した既出の記事を増補した原稿である。そのベースとなった記事は、ルックスの評伝本を待たずに著されたものである。そのため、岡田の評伝はルックスのものと内容が大きく異なり、見解の相違もみられる。

#### ・分離派建築会の活動期（大内秀一郎，石本喜久治）

岡田の大正3年から翌4年にかけて連載されたワグナーの評伝が発表された後は、しばらくワグナーに関する記事は姿を消す。そして、分離派建築界の活動が盛んになる頃、大内秀一郎が大正12年にワグナーを取り上げている。自らの著書『欧州近代建築の潮流』（大正12年）の中で、ワグナーの建築活動に触れ、「近代建築とオットー・ワグネル」と題した章を載せている。わずか2頁の短い文章ではあるが、この中で大内は「使用すべき物質と構造に応じて、建築物の正面を充分個性を帯びたものに作り上げる場合に最も強く客観性と実用性を望んで止まなかった。」とワグナーの建築作品の傾向をみている。

大内は、分離派建築会の一員である。石本喜久治が述懐しているところによると、分離派

---

注59) 菊池重郎「岡田信一郎とゼツェションとオットー・ワグナー」（日本建築学会大会学術講演梗概集、昭和56年9月）

建築会の活動の一環として各会員がセセッション運動に関わりのある人物の伝記を一人ずつものしようとする計画があった。石本は、ヨゼフ・ホフマンの担当となったそうだが、欧州への渡航でワグナーの作品に触れてから関心をいさぐようになり、帰国後はワグナーの担当を志願したようである。管見の限りでは、大内がワグナー担当であったとの記録を見出すには至っていないが、当時の分離派建築界の面々の著作を見渡すと大内の『欧州近代建築の潮流』にのみ、ワグナーが取り上げられていた。このような点から推測するに、どうも大内がワグナー担当となり、その後、上述の経緯で石本がワグナー担当となったようである。

岸田の評伝本『オットー・ワグナー』（昭和2年）の出版を受けて、石本が新聞紙上に前述のような批判記事を投稿した背景には、石本自身もオットー・ワグナーに関心を寄せており、自らも発表の機会をうかがっていたという事情もあったと思われる。しかし、岸田の評伝本をみると確かにルックスの著書を参照している部分もあるが、一方で岸田なりの視点をもってワグナーをみている部分も多分に認められる。石本による「単なる翻訳本」との批判は、必ずしも的を射ていないことがわかる。

#### 講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」の開催

岸田による評伝本の出版を契機に、岡田信一郎が石本に対し、ワグナーを記念する懇談会の開催を提案する。石本は、分離派建築会に懇談会開催の提案を行うが、「会として独占的に開催すべきでない」との結論に至り、分離派建築界のメンバーに限定せず、広く若手建築家の会合とすることになる<sup>60)</sup>。

1928（昭和3）年4月28日、石本喜久治、今井兼次、岡田捷五郎、大内秀一郎、蔵田周忠、佐藤武夫、岸田の7名が発起人となり、岡田信一郎が設計した国民新聞社内にある国民講堂において、ワグナー没後十周年を記念する講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」が開催される。岡田信一郎（病氣療養のため不演）、瀧澤眞弓、岸田、伊東忠太の4人が講演を行い、司会は石本、ポスターの作者は蔵田周忠であった。参加者には、洪洋社の絵

---

注60) 『建築新潮』（昭和3年6月号）

葉書が配布された。分離派建築会の会員だけでなく、広く若手建築家の会合とする狙い通り、若手の建築家の多くが足を運んだようである。このような一建築家を記念する講演会という催しは、当時、珍しかったこともあり、500席ある座席は満席となり、会場から聴衆が溢れる盛んな会となった<sup>61)</sup>。

岸田の講演「オットー・ワグナーに就いて」の内容については、次節にて詳しく取り上げるが、その他3氏による講演内容は、以下の通りであった。

表5 「建築家オットー・ワグナー十年祭」の発起人と講演題目及び講演者

東京	京都
日時：1928(昭和3)年4月28日 午後6時から 会場：国民講堂(国民新聞社内)	日時：1928(昭和3)年5月11日 会場：京大友会館
<b>講演題目及び講演者</b>	<b>講演題目及び講演者</b>
新建築と伝統 岡田信一郎 ゲルマン民族と文化 瀧澤真弓 オットー・ワグナーに就いて 岸田日出刀 セセッションの回顧 伊東忠太 (司会) 石本喜久治	はじめの言葉 岡田孝男 ワグナーに就いての感想 東畑謙三 感想 森田慶一 ウィーンを訪れた当時の思出 武田五一 おはりの言葉 服部勝吉
<b>発起人(イロハ順)</b>	
石本喜久治 蔵田周忠 今井兼次 佐藤武夫 岡田捷五郎 岸田日出刀 大内秀一郎	

### 伊東忠太「セセッションの回顧」

岸田、瀧澤に続いて登壇した伊東忠太は「セセッションの回顧」と題した講演を行い、初めて「ゼツェツション」との言葉を耳にしたエピソードを紹介しつつ、ゼツェツションと当時の日本建築界の置かれている状態に対する私見を述べている。

伊東が、はじめて「ゼツェツション」に触れたのは、明治末の世界旅行の際であったようである。伊東は、中国の奥地を隈なく周り、ミャンマー、インドを巡歴し、西アジアからトルコを経る、1902(明治35)年から3年間にもおよぶ学術調査大旅行に出かけた。1904(明治37)年3月下旬、「ゴチャ」というドイツ船籍の客船にインドのボンベイか

注61) 『建築新潮』(昭和3年6月号)

ら乗船した時、窓のカーテン、壁のパネル、酒場の前にあるステンドグラスに、見たことのない「不思議千万な装飾模様」があり、それをスケッチブックに写生していたところ、たまたま居合わせたオーストリア人に「お前これを写生してるのか、これはゼツェツションだよ」と教えてもらったのが、「ゼツェツション」との言葉を聞いた最初だったという<sup>62)</sup>。当時の伊東の野帳には、装飾模様のスケッチとともに「"Secession" "Gothia"内の Decoration」とメモ書きが残されている<sup>63)</sup>。伊東は、「明治三七年三月日本の建築家でゼツェツションと云ふ言葉を聞いたのは私の外にないだらうと思ふ。」と述べ、日本で一番早く耳にしたと語っているが、その前年に武田五一が、ゼツェツションの作品をみにウィーンに出掛け、さらにワグナーへの面会を試みていることを鑑みると一番ではないものの、かなり早い段階にゼツェツションとの言葉に触れた人物のひとりであることは確かである。その後、訪れたオーストリアやドイツで、船で耳にした「Secession」なるものを探しても、まだ当時はベルリン郊外に少ししかなく、古建築調査に専念していたこともあり、それ以上、詳しく知ることはなかったようである<sup>64)</sup>。

しかし、その後しばらくして、日本の様々な分野に怒涛の如き勢いを以て、ゼツェツションが流入する。その頃に組まれた特集が、本章の冒頭で取り上げた雑誌『建築ト装飾』の「せせつ志よん号」（明治45年7月号）であった。伊東は、明治末の時点では、「ゼツェツションの真相がなかなか分からない又分る筈もない」<sup>65)</sup>状態であったが、「ゼツェツションと云ふものは直線で組立てた図案で、直線と云つても垂直線を沢山使へばいいと云ふやうに、ゼツェツションと云ふものを図案の一つの型のやうに思つて居るのは根本的に間違つて居る。ゼツェツションと云ふのは主義の名であつて型の名でない。」と述べ、形は二の次問題であつて、これはスタイルではなく、ひとつの主義であると主張した、と岡田信一郎の「中形の浴衣とライスカレー」を紹介しながら、当時のゼツェツションの理解が手探りの状況であつ

注62) 『建築新潮』（昭和3年6月号）

注63) 伊東忠太資料「野帳」第九巻・土耳其（日本建築学会建築博物館デジタルアーカイブス）

注64) 前掲注62

注65) 前掲注62

たと回想している<sup>66)</sup>。

そして、伊東は「ワグナーの作は、ワグナーの心事を見るところに価値があるので、形はどうあつても宜しい。心が分れば即ち建築の心が分れば宜しいのであります。」と述べ、岸田の作品の表面からワグナーを解釈してはいけない、との意見に賛同している<sup>67)</sup>。

さらに、伊東は、建築の長い歴史をみると、そこにサイクルがあり、「心の建築」と「形の建築」の波を繰り返していると述べている。「心の建築」に波は始まり、段々と発達し、次第に「形の建築」になってくると下り坂になり滅びる、との意見である。そして今、「ギリシャクラシック建築の始まりからローマクラシックの滅亡まで」の第一波、「キリスト教芸術が第四世紀から興つてゴシックに大成し、その衰えるまで」の第二波、「十四世紀から十九世紀までのルネッサンス」の第三波が終わって、第四番目の波がワグナーの力によって現れたと説明している。

それゆえに、今日の建築は、まだ波の始まりであり、形の建築にはなっていない、「ゼツェツシヨンの建築は形にはなつて居らない、心ばかりの建築と云つて宜しい」というのが、伊東の講演の趣旨である。

ワグナー十年祭は、翌月11日に異なる面々が登壇し、京都・京大楽友会館でも行われる。当時の建築界にとって、内外から広く注目を集めたイベントとなった。

京都の講演会で登壇した森田慶一は、分離派建築会を設立した当時、「分離派は唯美主義的傾向を多分に持ってゐたから、当時唯物主義者と解釈して居たワグナーに作品の上でも、思想の上でも余り影響を受けなかった」と述べ、分離派建築会結成時にワグナーにあまり関心を寄せなかったことを認めている。武田五一は、ヨーロッパ留学中の1903（明治36）年に、ゼツェツシヨンの作品を見る目的でウィーンに1週間滞在し、同地に留学中であった精神科医の今村新吉を介して、ワグナーとの面会を試みたことや、新材料の不具合で評判が悪かったことなどを紹介している。そして、ワグナーについて「新建築の道を拓いた先駆者としての功績は、永久に忘るべからざるものであります。」と述べている。京都でのワグナ

---

注66) 『建築新潮』（昭和3年6月号）

注67) 前掲注66

一十年祭は、ワグナーを回顧するエピソードの紹介が中心であった。

#### 岸田執筆の評伝本と講演「オットー・ワグナーに就いて」

岸田の講演「オットー・ワグナーに就いて」の講演録は、雑誌『建築新潮』（昭和3年6月号）と『葦』に掲載されている。まず、ルックスの評伝本の内容と比較してみたい。ルックスによるワグナーの評伝本と岸田によるワグナーの評伝本の目次を比較すると「ワグナーの作品」「ワグナーの言葉」「ワグナー一派」の章と晩年の記述に関する部分は、章のタイトルがほとんど一致していることがわかる。

岸田は、ルックスの評伝本の内容を参照しつつ、自身で出版した評伝本では、新たに「ワグナー以前」「維也納市立博物館の建築とワグナー」「都市計画家としてのワグナー」など、ルックスの評伝本ではみられない章を付加している。そして、評伝本出版の翌年に行われた「建築家オットー・ワグナー十年祭」の講演では、「ワグナーの偉大な点」という項目にも触れている。評伝本と講演の内容は、本の内容を縮小し、作品よりも、ワグナーの生涯とその時代背景に限定するなど、部分的に取り上げているといった違いはあるものの、ワグナーの生きた時代精神を把握したうえでワグナーをみる、という人物や建築を理解する際の基本姿勢は共通している。

そして、ルックスと岸田の比較で最も異なる、岸田が付記した新たな点として、「ワグナー以前」という章が設けられていることがあげられる。講演では、実に4分の1にあたる発言が、この「ワグナー以前」という部分に充てられている。

#### 講演「オットー・ワグナーに就いて」

岸田は、講演の冒頭で、まずワグナーについて「新しい建築様式を最初に始めた人」とであると紹介している。ここでの「新しい建築様式」とは、建築の専門家だけでなく聴衆を意識し、新しい建築、新しい傾向の建築デザインを容易に理解してもらおうと話すのに使った言葉であろう。評伝本では、「建築をして過去様式の羈絆から解放せしめた最初の一人」と紹介している。



「欧州大戦直後盛んに行はれた表現主義は、強いて言ふならば浪漫主義的、或は感情的乃至非科学的と云ふことが出来ますが、最近のフランスの傾向は浪漫主義に対して言ふと古典主義的、或は感情的に対して理智的、更に非科学的に対して科学的と言ふことができ、何処までも合理的である。」

流行していた表現主義に変わって、古典主義的、理智的、科学的、そして合理的な傾向がみられるフランス建築界の最新動向を伝え、新しい傾向の建築といえども、そこにさらに大きな変革の波がみられることを説明している。そして、「目覚ましい発展をとげているが、その源を探ると、先ずワグナーまで遡るのが順当である。」と述べ、こうした様々な新しい傾向の建築も、その源を探ると、始祖としてワグナーをあげることが適当であると説明している。

そして、ワグナーの建築を理解する際の注意点として、

- ① 作品の表面からワグナーを解釈してはいけない。
- ② 現代を標準として - 現代の新しい建築を標準としてワグナーを批評してはいけない。

という2点を挙げ、「ワグナーの時代を考へその時代はそう云ふものであつたか、ワグナー時代の建築、更に建築の背景をなしたところの当時の社会はどう云ふものであつたか、それを精しく見る必要がある」と主張している。

ワグナーの時代、即ち19世紀の最後の30年間の建築を考える上で、19世紀の建築と更に建築の背景をなしたところの当時の社会について概説している。

「19世紀の建築は、古典主義が興り、其反動として浪漫主義が興り、更にルネッサンシズムとか折衷主義とか色々な思潮が起きる。ヨーロッパの建築が非常に行詰った八方塞りの時代であつた。」と説明し、当時の社会は「建築とは関係なしに科学において又社会的思想

において非常な進歩を遂げていた。」「当然当時の建築界に何等かの新しい運動が起こらなければならないと云ふ状態にあった。」「ワグナーがこの新しい建築精神を発揚するためにセセッション運動の間の主唱者となつた。」と述べ、科学や社会的思想において、さまざまな変革が起こっていた時期に、ワグナーが間接的な主唱者となり、ゼツェッション運動が起こり、「団体の力によって成功を修めた。」と説明している。

続いて、ワグナーの生涯を「①ベルリンの帝室建築学院で建築学を研究した修業時代」、「②ウィーンのアカデミーの教授に就任するまでの約30年間」、「③美術学校の教授に任命されてからその死に至るまで」の3つの時代に区分して説明している。

最後に岸田は、ワグナーの偉大さについて「現代生活を正しく見た」、「人としてのワグナーの生活（非常に天真爛漫であった）」、「ワグナーは決して齢を取らなかった。」という3点をあげている。

## 博士論文の執筆

長谷川輝雄の卒業論文『近代建築思潮と表現』からの影響

岸田と同期の学友で、卒業後もラトー建築会でともに建築運動を展開した朋友に、長谷川輝雄（1896 - 1926）がいる。長谷川は、その類稀なる才能が既に学生時代より注目されており、伊東忠太の後継として、その道が期待されていた人物であった。1921（大正11）年の東京帝国大学卒業後は、大学院に進学し、直ぐに同大工学部助教授に就任。「四天王寺建築論」「将来の宗教建築を如何にすべきや」を記すなど、建築史の研究を進めていたが、30歳という若さで病没する。長谷川の没後には、岸田らが中心となって、彼の遺稿集がまとめられた。

岸田が長谷川の訃報（5月15日没）に接したのは、彼が洋行でヨーロッパ各地を巡っていたところで、7月15日、ジュネーヴ滞在中であった。岸田は、海外渡航に出掛ける前から講師嘱託として、既に建築学科の第一講座を部分的に担当していたが、昭和初めに伊東忠太、塚本靖らの定年退官が近づいていた事情もあり、洋行出発の約半年前にあたる1924（大正14）年6月12日、助教授に就任している。助教授に就任した岸田は、それまでの営繕課技師という仕事だけではなく、本格的に教員の道に進むことになる。まず、岸田に課せられたのは、当時の大学教授の多くが当然のように経験していた、博士論文の執筆と海外への留学であった。岸田が図書館視察の名目で、約1年間の海外渡航に出掛けたことは、前章で既に触れた。

帰国後もしばらくは、営繕課の技師を兼務していたようだが、長谷川の急逝を受け、岸田に求められる役割は、さらに一変する。岸田は、長谷川が務めていた建築史の講義を、適当な後任者が決まるまで臨時的に担当することとなったからである。そして、岸田は、藤島玄治郎が着任するまでの約3年間、伊東、関野両博士の指導のもと、日本建築史と東洋建築史の学習をすることとなる<sup>68)</sup>。岸田は、この頃、長谷川の遺稿集にも収録されている彼の卒業

---

注68) 『宝雲』（1934年10月）に載せた岸田日出刀「日本建築史の諸問題」の冒頭で、「数年前長友長谷川輝雄君の死後生前同君が担当してゐた東京帝国大学工学部建築学科に於ける建築史なる講義を適当なる後任者が決まる

論文にも目を通したであろう。

### 芸術表現における個性の表出に関する考察

長谷川の卒業論文のテーマは、『近代建築思潮と表現』であった。「四天王寺建築論」における日本の社寺建築の寸法体系を実証的に分析した論文と全く異なり、卒業論文での長谷川は、ヨーロッパの近代建築に着目し、芸術表現における個性の表出に関する考察を行うなど、かなり革新的な論文を提出している。

長谷川は、卒業論文の冒頭で、ヨーロッパの近代建築に関する研究をはじめた動機について、以下のように説明している。

「最近の中欧諸国（独逸）の建築は、いはゆるゼツエツシヨン以来、非常な変化を示しましたが、其の軌近のものは如何なるものであるか？又それは如何に斯様に变化して来たのか？これは我々の予ねて知りたと思つて居た所でした。これが此小論文を書かした第一の動機であります。」<sup>69)</sup>

ヨーロッパの軌近の動向、とりわけオーストリアのゼツエツシヨン以降にみられる近年の建築界の動きが如何なるものなのか、その変化の要因とはなんであるのかを理解したい、と思ったことが研究の動機であると述べている。

長谷川の卒業論文は、全部で6章からなる。

そして、序章の最後に、卒業研究を通じて、「私は造形美術の表現は、其の基礎をなす思潮、即ち国民思想や、文藝音楽、哲学、宗教に立ち還つて研究せねば駄目だといふことを深く信じさせられる」に至ったと、造形美術の表現の基礎をなす思潮の理解の重要性に気づいたと述べている。

---

まで臨時的に担当しなければならぬ事情となり、恩師伊東・関野両博士の指導の下に熱心に日本及び東洋建築史の研究に専念したことがある。」と述べている。

注69) 長谷川輝雄「近代建築思潮と表現」『長谷川輝雄氏遺稿』（長谷川輝雄氏遺稿刊行会、1927年）

「建築界の泰斗は言ふ迄もなくオット・ワグナーである。」<sup>70)</sup>

「彼はその著「近世建築」によりて、今迄、スタイルの絶望的盲従に沈滞し来った維納建築界の青年たちの自覚と猛省を促した。青年達は茲に、無意味なる機械的模倣と伝統の絶対拘束とが何等価値なきことを初めて悟った。斯くして、「建築の暁」が来た。」<sup>71)</sup>

「建築家にとつての先見は近代生活の総ての要求を満足せしむることなので、即建築の目的を明らかにし夫に適當なる材料を解決することにある。目的と材料の二要素あつて始めて形式も様式も決定して来るのであるから広く一般に適用せらるゝ様式といふものがある筈がない、洋式は常に変わりゆく此の二要素から生ずる結果で、其決定は地方、気候、風土等の相対的關係に依りて生ずるものである。夫れで新しい手法とか考案とか、愉快的設備等は見逃さずに取り入れねばならぬ。」<sup>72)</sup>

長谷川は、「四天王寺建築論」をはじめとする、日本の社寺建築の寸法体系に関する論文でその業績が知られているが、卒業研究では、いち早くヨーロッパの近代建築に着目し、芸術表現における個性の表出に関する考察を行うなど、かなり革新的な論文を提出していた。そして、本論文では、オットー・ワグナーに触れ、彼を「歴史的構造派」と位置付けていた。成瀬無極の『近代独逸文芸思潮』を参照するなどし、長谷川は、造形美術の表現をみるうえで、時代思潮の研究の重要性を訴えていた。

---

注70) 長谷川輝雄「近代建築思潮と表現」『長谷川輝雄氏遺稿』(長谷川輝雄氏遺稿刊行会、1927年)

注71) 前掲注70

注72) 前掲注70

### 博士論文『欧州近代建築史論』

講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」が開催された1928（昭和3）年4月28日の翌年、1929（昭和4）年4月18日、岸田は、教授就任を控え、博士論文『欧州近代建築史論』を東京帝国大学に提出<sup>73)</sup>。そして、1929（昭和4）年6月11日、岸田は、30歳という若さで教授に就任する。

岸田は、博士論文の緒言で、ヴォリンガーが継承した「芸術意欲」を参照し、ここでも、各時代特有の「時代精神の把握」を大切にするスタンスを示している。

「ドイツの美術史家、ウィルヘルム・ヴォリンガー一派の美術史家は、過去の建築又は美術を考究理解せんとするに当って、先ず第一に重要視するところのものは、結果された美術又は建築の個々の作品に就いての評価ではなくて、各時代特有の芸術意欲 (Kunstwollen) である。」<sup>74)</sup>

当時、軽視されていたルネッサンス以降の建築史の叙述に取り組んだ。それは、ワグナーが出現するまでの歴史を描いたものであった。折衷主義によって、さまざまな様式が乱立し、八方ふさがりの状況に陥った様式主義を乗り越えるために、間接的ではあったもののゼツェッション運動というものに取り組んだワグナーを生み出した時代の時代精神がなんであったのかを伝えようとした。確かに、外見的には古典的な傾向もみられるが、その内面では、様式主義を乗り越える革新的な意識があった、そこをいつまでも建築を外形的な特徴で判断し続けていると見誤ると、新しい建築の観方の有効性を示そうとした。

このような様式主義を乗り越える理論構築を目指すうえで、前節で取り上げた長谷川や岸田が、ドイツの美術理論に関心を寄せていた。また、岸田は、ヨーロッパでの歴史主義から脱却に取り組んだ最初の人物であったワグナーを自らの置かれていた立場と重ね合わせてい

---

注73) 岸田の博士論文は、1928（昭和3）年の6月号から9月号にかけて4回に分けて『建築雑誌』に掲載されている。

注74) 岸田日出刀「欧州近代建築史論」『岸田日出刀』（相模書房、1972年）

たとも考えられる。

## 小結

本章では、岸田日出刀が、約1年間の海外渡航から帰朝後に執筆した評伝本『オットー・ワグナー』と講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」での講演録、そして、その後に提出された博士論文「欧州近代建築史論」を通して、洋行後にみられる建築理念の変容について考察してきた。その結果、大正末の洋行を境にして、新たな理論形成がみられた。

帰朝後の岸田は、急逝した長谷川輝雄の後継として日本建築史の学習を始める。岸田は、彼の遺志を継ぐように美術史家リーグルが導入し、ヴォリンガーが継承した「芸術意欲」を参照し、時代精神をもって建築をみるという、建築の変化の要因として、各時代特有の時代精神の把握を大切にするスタンスを示すようになる。

早世した長谷川は、「四天王寺建築論」をはじめとする日本の社寺建築の寸法体系に関する論文で、その業績が知られているが、卒業研究では、いち早くヨーロッパの近代建築に着目し、オットー・ワグナーに触れ、成瀬無極の『近代独逸文芸思潮』を参照するなどして、時代精神から建築を読み取る視点を提示していた。海外渡航への出発前まで表現主義に傾倒していた岸田であったが、洋行後にみられる意識の変化は、この長谷川の卒業論文からの影響があったと考えられる。

このような近代建築の理解の深まりをもって、岸田は、帰朝後、約半年間の歳月をかけて評伝本『オットー・ワグナー』を執筆し、出版、軽視されがちであったバロック以降の建築を取り上げた博士論文『欧州近代建築史論』の執筆に取り組み、地誌学的な歴史叙述や考古学・文献等による実証的な追求とは異なる時代精神の変化を意識した建築史を提示するとともに、表現主義にみられた「過去に例のないものを求める」という徒に珍奇なものを漁る意識や折衷主義に対し異を唱えるようになる。そこには、「歴史主義からの分離」を宣言しながらも、ドイツ建築の外形的な模倣や個人主義的な側面に没入していた分離派建築会の作品群に対し、異議を申し立てた側面もあった。

そして、ワグナーの評伝本出版後に開催された「建築家オットー・ワグナー十年祭」は、早くからワグナーに注目していた岡田信一郎を軸に、分離派建築会の会員、伊東忠太、『オ



ットー・ワグナー』を出版した岸田を含めて行われ、その後、京都でも開催されるなど広く注目を集めたイベントとなった。

岸田は、評伝本と講演会を通して、表面的に、かつ今日的な尺度でワグナーの作品を解釈してはならないことを示し、ワグナーの時代の建築と当時の社会的な背景を分析した上で、その生涯について評価を行っている。新しい建築の活路を見出す上でワグナーに着目している点は、他の執筆者と共通していたが、それは「古典主義の臭味を帯びている」<sup>75)</sup>といった、単に表面上からワグナーの作品をみただけの否定的な評価とは異なる視点を持つものであった。そこには、やはり建築を生まれ変わらす要因が、時代精神であるとの岸田の考えとが反映されている。ヨーロッパでの歴史主義からモダニズムへの結節点にワグナーがおり、活躍した人物という評価を自らの立場と重ね合わせていたものと思われる。

---

注75) 例えば、本野精吾は『建築ト装飾』(明治45年7月号、増補三版)において、ワグナーの作品について「未だ歴史的形式の臭味を脱しえない」との所見を寄せている。



## 第3章

### 講義ノート「意匠及装飾（形体篇）」にみる岸田日出刀の建築造形理念

はじめに

第1節 講義原稿「意匠及装飾」（昭和12年）

1-1. 史料の概要

1-2. 叙述内容の分析

総論

形態論

建築的形体

1-3. 考察

第2節 墓碑・銅像台座の設計

2-1. 斯波忠三郎記念碑（吉田三郎『航空』銅像台座）

2-2. 工学博士藤山常一先生胸像台座

2-3. 塚本家之墓地

小 結

## はじめに

本節では、岸田日出刀が担当した必修科目「意匠及装飾」の講義原稿（1937年）を元に、岸田が展開した建築教育の内容を提示し、同時期に設計された建築作品ならびに墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に関する講演に敷衍して分析し、岸田の建築造形理念を考察する。

## 資料の概要

講義原稿『意匠及装飾（形体篇）』は、東京帝国大学工学部の学科目「建築意匠及装飾」<sup>76)</sup>の講義用原稿として、岸田が記したものである。金沢工業大学建築アーカイブズ研究所の岸田日出刀資料には、「意匠及装飾」と題された講義原稿とノート類が2冊（⑥、⑫）あり、大学ノートに書き込まれた1冊（⑥）は、1928年度の海外雑誌の目録が折り込まれていること、ノートの種類が他資料の中でも昭和2年から昭和3年ごろに書かれたもの（⑭、⑮等）と同じ製品であることから、昭和初年に記された可能性が高い。しかしながら、執筆された年号が特定できないこと、記述内容が断片的にしか残存しておらず、講義内容の全体像を把握することが困難であった。そのため、昭和12年との年記が認められる「意匠及装飾（形体篇）」（⑫）を用いることとした。

「意匠及装飾（形体篇）」（⑫）は、手書きの原稿用紙（A4版罫線紙）70枚と図版資料4枚<sup>77)</sup>、期末試験問題1枚<sup>78)</sup>から成り、2穴のバインダーファイルに綴じられている。罫線

---

注76) 学科目「建築意匠及装飾」の歴史的な過程を遡ると、明治16年に「造家」が、その後の建築史系となる「造家式沿革」と「造家装飾」に分離した際の「造家装飾」の流れを受けた科目であることがわかる。大正6年に「工芸史」を分派し、大正8年に「意匠・装飾」、大正13年に「建築意匠及装飾」へと改称している。（『近代建築学発達史』（丸善、1972年））

注77) 図版資料は、ル・コルビュジエとの「オートウイユの二軒の住宅」と「ガルシェの家」、神殿柱頭部の指標線分析の図版が掲載された「形態分析」のほか、「調和矩形・旋回矩形・開平矩形」、「黄金比矩形・面積比矩形」、「長短錯視」と題された図版4枚である。

注78) 試験課題は、「(一) 動的均斉と其応用について、(二) 近代建築と其意匠に就いて、(三) 錯覚とその応用に就いて、(四) 左の語に就き説明せよ (イ) 連続対比、(ロ) 明度、(ハ) 旋廻方形矩形、(ニ) 原色、(ホ) 黄金比」

紙は、縦長のもので、インクペンで横書きに記述されている。中表紙に「意匠及装飾（形体篇）昭和12年度」と、年記が認められる。

講義原稿の全体構成を表6に示す。〈総論〉〈形態論〉〈建築的形体〉の3章で構成されている。〈総論〉での語彙の定義とモダニズムの解説に続き、〈形態論〉で、造形要素や各種均整理論の概説が5節にわたり行われ、最後に〈建築的形体〉について論じている。

---

の4間の設問から成る。「昭和13年3月4日」の記載がある。

表6 講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」の構成

総論	<p>意匠: Designing, Entwurf                  装飾: Decoration, Dekoration                  Ornament(模様)                  Pattern(文様)</p> <p>modernismの意味するところ…                  (1) Internationality                  (2) Democratic (autocraticの反対)                  (3) Mechanical                  A) 単単性、明快性(Einfachheit, Klarheit)                  B) 合目的性(Zweckmassigkeit)                  C) 有用的なること(Funktion)                  D) 経済的なること(Ekonomisch)                  E) 機械美(技術美)に対し正しい理解を持つこと</p>
形態論	<p>1. 曲線 (1) 直線(<math>y=mx+b</math>)                  (2) 円(<math>x^2+y^2=r^2</math>)                  A) 楕円                  B) 双曲線                  C) 放物線                  (3) 螺旋(Spiral)                  A) 等差螺旋                  B) 等比螺旋                  C) 双曲線螺旋                  (4) 垂縄線(Catenary)</p> <p>2. 比例(Proportion)                  -ウイトルウィウス『建築十書』(De Architectura)                  -W.Lloydによるパルテノン神殿の比例美分析(1851)                  -他の均整概念の二三                  (1) フィボナッチ係数                  (2) 黄金分割または神截</p> <p>3. 静的均斉論                  -Dynamic SymmetryとStatic Symmetry                  (動的均斉) (静的均斉)                  -J.ハムビッチ「Dynamic Symmetry: The Greek Vase」(1920)                  { 算術的均斉(一次的)                  幾何学的均斉 { 静的均斉(二次的)                  動的均斉(対数的)</p> <p>-Cesare Cesariano                  -J. Browne                  -Chantrell                  -Roriczer, 1486                  -<math>\sqrt{2}</math>、<math>\sqrt{3}</math>に関するHamvidgeの論                  -Hamvidgeは現代の建築家に警告する</p> <p>4. 動的均斉論(1)                  -論著と動的均斉論の概念                  -藤原咲平博士の論                  -動的均斉の起源                  -動的均斉の発展と消滅</p> <p>5. 動的均斉論(2)                  -矩形の分析                  -<math>\sqrt{3}</math>矩形</p>
建築的形体	<p>-形の基本                  -立体                  -表面                  -平面                  -建築を観る場合を考える                  -正しいよい平面とは</p>

## 叙述内容の分析

### ・総論

〈総論〉は10頁におよび、まず初めに「意匠」と「装飾」の言葉の定義を行っている。「意匠」には、「Designing、Entwurf」と、英語とドイツ語が併記されている。

意 匠： Designing、Entwurf
装 飾： Decoration、Dekoration
Ornament（模様） Pattern（文様）

ついで、新しい建築と過去の建築との大きな差異は「Zweckmassigkeit（合目的性）」にあると言い、「過去の建築にみるままな平面的（絵画的）な又立体的（彫刻的）な装飾がないという点、求めないという点」であり、「別の言葉で言えば合理性、実用性の満足。」と説いている。「新しい建築は何故建築の意味の装飾を否定するか。大きく言えば今日の建築はmodernism に立脚するからである。」と述べ、「modernism」という言葉を使用している。そして、この「平面的（絵画的）な又立体的（彫刻的）な装飾がない、求めない」という装飾否定の立脚点となるモダニズムについて、

- |                         |
|-------------------------|
| (1) International ということ |
| (2) Democratic          |
| (3) mechanical なること     |

という三つの理念を提示し、「International ということ」「Democratic」「mechanical なること」の各項目に対応する建築における特質について解説している。

《(1) International ということ》は、「建築では1925年ごろにドイツのグロピウスが、現代の建築の目標として強く掲げた」とその端緒を開いた人物としてグロピウスを紹介し、

「今日ではすべての事物が International されつつあるが、建築もこの大きな潮流に逆つ訳にいかぬ。然し今日の建築はすべて現代生活を基としてつくられるという点に於いて International ではあるが、(国々) 国家の自然と伝統的な人の生活から規定される建築 Locality は飽迄存在しなければならず、事実存在する。」と述べている。

また、「各国民性のちがう様にその形式感が異なる」とし、「ドイツとフランスの場合には大して齟齬を来さないが、ドイツと日本となると地方性 (Locality) が決定的な要素になる」と述べている。

更に日本の伝統 (Tradition) を充分考えなければならず、「伝統 (Tradition) と因襲 (Convention) とはちがう。前者は positive、後者は negative、現代性のない因襲は勿論去るべきも伝統は然らず。」と述べ、因襲と伝統の違いを明確に主張している。

《(2) Democratic》では、「ほかの社会的運動のすべての方向について言えるところ、近代的社会の特質である此傾向が直接間接建築を支配する。建築をつくるのは直接技術的には建築家ではあるが、建築家を支配する根本の力は社会であり、建築家も社会の一員として社会の進まんとする大勢に順応するは自然の勢い、この意味で建築家は社会意識にめざめねばならぬと言われ、かかる大勢に逆行するままな建築をつくる中、単にそれが意匠上の場合でも、時代錯誤の建築家と言われる。」と、建築家の置かれている社会的立場を述べ、「過去における変化をみれば、中心の指導的建築が、宮廷建築ではなく一般社会公共の建築であるという建築種別の上からも Democratic の傾向が認められる。」と述べている。

《(3) mechanical なること》については、更に下記の 5 項目をあげ、具体的な説明を行っている。

- (A) 簡単性、明快性 (Einfachheit, Klarheit)
- (B) 合目的性 (Zweckmassigkeit)
- (C) 有用的なること (Funktion)
- (D) 経済的なること (Economisch)
- (E) 機械美 (技術美) に対し正しい理解をもつこと



これらは「建築家の形式感を現代的に進める上に大いに役立つ」としている。簡単性、明快性については、「錯雑と不明瞭の反対。建物全体の outline は勿論、各部の取扱、空間、面、線の取扱その他すべて simple - clear なること」を要求する。また、「建築に容れる生活が極めて functional ゆえ、建築も functional になる。それに応じて意匠装飾も functional となる。」と説き、また経済的なることについては、材料・工費等の価格は貴族的判断ではなく、耐久、耐火、耐水等の物理上、科学上の実用性を全て満足する場合には、経済的な材料の方が好ましいとし、更に施工の簡便性からシンプルな線と面の必要性を強調している。

最後に「機械美は如何にして生々しいかという理論こそ学ぶべきであるが、結果された形を真似るのは誤りである。」と警告している。しかし、建築美を満足させるための設計上での具体策は述べておらず、「形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。できるだけ多くの実例に接し批判吟味すること。」と助言するにとどまっている。そして、形の面白さを感じるために、まずは多摩墓地（現、多磨霊園）へ行くことを薦めている。

#### ・形態論

<形態論>では、物の形を論ずるにあたり、まず1節で線の幾何学的な定義や線の種類について説明している。そして、2節において「比例論の最古の文献として価値をもつ程度で希臘建築の正しい解析としては価値なきもの」としながらも、ウィトルウィウス『建築十書（De Architectura）』における神殿の比例分析について解説し、ついで近代に古典建築を解析した研究史をそれぞれの見解とともに略述している。

近代における古典建築の解析が、十六世紀中ごろのヴィニョーラ（Giacomo Batocchio Vignola, 1507-1573）の研究が始まりであると紹介し、十九世紀の古典主義の発展とともに、再び盛んに研究されるようになり出版された研究書の中から、1851年にペンローズ（Penrose）が編纂した"The Principles of Athenian Architecture"を取り上げ、同書第二章にあるパルテノン神殿の比例分析を紹介している。

そして、他の比例理論として、フィボナッチ数、黄金比を取り上げている。R.E.ハルトマ

ンらの美学者がこれらの比率を基礎として、美学の一体系を形成しようとしたこと、また、黄金比を根拠とした均整論が1917年、ドイツ人のツェーダーバウラーにより発表されたことを述べるが、いずれも「均斎論の自然科学必然性を全然缺く感あり」、「黄金截に準拠するすべてのこれらの均斎観念もその比率の真の意味を把握せず。」と述べ、ダイナミック・シンメトリー理論（以下、DS理論）がハムビッチにより唱えられるのに及んで、これ等の欠点がその中に包括させたと説明している。

以降、〈形態論〉の半分にあたる30頁を割いて3章から5章にかけて、ハムビッチのDS理論とその諸論について詳しく解説している。これらは飽く迄も「希臘式面積的解析」と評し、DS理論を建築に応用した場合の問題点として、以下の二点を導出している。

1. 「平面計画がDSによりつくられる時、個々の立面も自らDS理論によりつくられる。かくして生ずる立体にも或種のDSが成立する。」
2. 「建築の美は決して平面の美ではないが、個々の面の取扱の解析も建築美考察の重要な素をなすと考へるならば、古代芸術に応用された面的均斉理論の研究も決して価値なしとしない。」

#### ・建築的形体

〈形態論〉が、主に古代の造形芸術を基にした比例論者による学説の紹介が中心であったのに対して、〈建築的形体〉は、《形の基本》、《立体》、《表面》、《平面》の各節に分け、それぞれについて建築的視点から局限して解説している。

《形の基本》、《立体》では、初めに「建築は三 dimension のもの、立体、空間、更に時間の要素が入れば四 dimension になる。」と述べ、四次元時空の概念を持ち出している。「建築とは光線の下に集められたる立体の専門的な正確なる技術である。」とし、「建築を表現する要素は表面と立体であり、この立体と表面とは建築では平面（plan）により決定される。」

と言い、設計活動における平面の優先度を説明している。

形体の初源的な形として「球、円柱、円錐、立方体、角柱、角錐」の六種をあげ、それらは輪郭が瞭然としていて、「形態上の美しさが結果される」と述べている。ついで、エジプト、ギリシャ、ローマの建築は、円、錐体、立方体、円柱に立脚しているが、中世のゴシック建築では、身廊には単純な形の表出があるが、基本形から出発しておらず「現代の眼を以て中世寺院建築をみると、第一次的の建築形体美なるものはみられぬ」と説明している。絵画的効果という点ではまた別の観方があるとしながらも、「Drama の如き面白さたるに止まるか、更に荷重に対する人の straggle 又は感傷的なる ordnung の感覚が示されるに止まる。」と述べ、輪郭が整然とした、純粹にして識別しやすい形体を推奨している。

《表面》では、「立体は表面により包まれる。一つの表面は立体の準線と構成線とによって分割される。」「立体性と表面性は稍其の特質を異にするが、順序としてまず表面を活かすことが第一に考えられなければならぬ。」と言い、立体と表面では、表面の優先度が高いとしている。壁面の取り扱いでの重要な点として、壁面の取扱を規定するものとして「建築的軸部の構造法、壁面処理の材料が大きな要素となる。」と述べている。

《平面》には、「建築を観る場合を考える」と「正しいよい平面とは」という 2 つの断章がある。

「建築を観る場合を考える」では、「立体が明確なるものであり、不適當の裝飾もなく、立体相互の中に秩序と明快なるリズムが表出されておる時、それらは互いに関係のない空間の堆積物ではなく、更に立体と空間との関係が正しい比例をなすならば、吾人の眼に脳髓に均整 (balance) の感じを与え、それにより精神は秩序の満足を感じ得る。茲に建築芸術がある。」と述べ、また「正しいよい平面とは」では、「すべて平面 (plan) に示された規則に従って developpe される。美しい形の多様性、幾何学法則による統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、茲に建築芸術が作られる。平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。」と主張している。

平面の優先度を再び主張するとともに、「よい平面の中には Rythum がなければならぬ。リズムとは単一又は複雑なる比例から、又 Contrast により生ずる Balance である。」と『リ

ズム…方程式』の必要性を提示し、コルビュジエの名をあげている。最後に「Symmetry、Repetition、Contrast、Tonetics の活用により、この方程式は解かれよう。」と述べ、稿は終了する。

## 考察

講義原稿の大半をハムビッチのDS理論の解説に充てていること、期末試験で動的均斉や錯覚の説明を求め、さらにその応用を設問としていることから、平面的な西洋絵画の芸術に大きく関わってきた古典的な構図理論や形体分析の手法を積極的に摂取し、立体造形に応用しようとする姿勢が確認できる。また、輪郭が瞭然としている純粹にして識別しやすいシンプルな形体をよしとし、単純な幾何学形体への強い思い入れと確信が感じ取れる。こうした物体を単純化するシンプルな造形への志向は、「大学教官食堂」（大正13年、図2）や「東京大震災記念建造物」（大正14年、図3）といった大学卒業直後の最初期の建築作品にも認められるが、例えば、昭和5年に岸田が出版した写真集『現代の構成』にも表れている。形体の初源的な形を示したスライド（図1）は、写真集の2枚目に登場する。意識的に取り上げていると言え、純粹幾何学や機械の有する静的な秩序に注目しており、幾何学的で合理的な美を理想とする純粹主義に感化された岸田の一側面を表している。

1910年代から20年代にかけて、ハムビッチが発表したDS理論は、日本建築界においては、安井武雄がいち早く紹介し、武田五一、村田治郎らが、プロポーション研究の中で、同理論に注目していたことが知られている<sup>79)</sup>。とりわけ理論的な側面の紹介は、『アルス建築大講座』（昭和5年）に収録されている武田五一と元良勲が執筆した「意匠及装飾篇」に載る造形の要素や均整論に関する叙述と同様の内容である。講義内で紹介した内容は先駆的とは言いが、岸田もまたDS理論をとりあげ、高い関心を示していたと言える。「立体にも或種のDSが成立する」と推察しているように、平面的な諸均整理論をいかにして立体に

---

注79) 佐藤篤、市川秀和「J.ハムビッチの比例論と日本近代の建築家：西洋プロポーション理論の受容に関する建築思潮研究」（日本建築学会北陸支部研究報告集、2006年）を参照。

応用するか、という点を課題としていた。

〈総論〉では、モダニズムの意味を説明しており、ここにはモダニズムに対する岸田の基本的な態度が示されている。岸田によるモダニズムに関する説明が有する特徴は、以下の点にあると言える。一つは、単純性 (Einfachheit)、明快性 (Klarheit) の解釈で、岸田は「建物全体の outline は勿論。各部の取扱、空間、面、線の取扱その他すべて」をその対象とし、単純性と明快性を同列に併記していることである。専ら形の問題として捉えており、ミースによる「構築の単純性 (Einfachheit)、技術的手段の明快性 (Klarheit)、素材の純粹さ (Reinheit) が、根源的な美しさの輝きを支える。」<sup>80)</sup>という解釈を活用して比較するならば、岸田の「明快性」という語彙の解釈には、「技術的手段の明快性」という観点が希薄であったと言えよう。「machine は動き、建築は動かず、機械美といい建築美と言うその(美)は同じなるも、目的を異にするもの」と述べていることから、建築美と機械美を対置させ、その二項の違いを明確化したと思われる。

また全体としては、国際化の潮流に身を置きながらも、「各国民性のちがう様にその形式感が異なる」とし、地方性 (Locality) の重要性を主張している。この際、伝統と因襲を区別し、伝統を重んじ、「現代性のない因襲」を否定する。過去との連続を拒絶するのではなく、とるべきものは活かし、伝統とモダニズムとの交流を志向する理念が看取される<sup>81)</sup>。

最終章では、設計上の優先度を「平面>表面>立体」という順序で捉えて、平面の重要性

---

注80) (ドイツ語原文)「Die Einfachheit der Konstruktion, die Klarheit der Tektonischen Mittel und die Reinheit des Materials tragen den Glanz ursprünglicher Schönheit.」(フリッツ・ノイマイヤー『芸術なき言葉 (Das kunstlose Wort)』より)

注81) 岸田日出刀「建築における特殊性：モダニズムと伝統の交流」『セルバン』(昭和10年)における言説にも、岸田のモダニズムと伝統に対する志向が顕著に表れている。こうした岸田の側面は、これまでに多くの論者が指摘している。西村将洋「日本建築とモダニズム以後—岸田日出刀とブルーノ・タウト」『Japan To-day』研究—戦時期『文藝春秋』の海外発信』(作品社、2011年)、西村将洋「岸田日出刀(1899—1966)—オリンピックの建築家代表」『言語都市 ベルリン』(藤原書店、2006年)では、岸田による伝統の「新化再現」がみられるとし、後者では、吉田鉄郎の『日本の住宅』との関連性を考察している。山本佐恵『戦時下の万博と「日本」の表象』(森話社、2012年)では、第五章で「モダニストと「日本的なもの」と題し、岸田が関わったニューヨーク万博日本館の建築作品を考察している。

を再三にわたり主張する。「すべて平面 (plan) に示された規則に従って *develope* される。美しい形の多様性、幾何学法則による統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、茲に建築芸術が作られる。平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。」<sup>82)</sup>や「観者の眼は街路や家屋によつて形作られた一つの環境の中を移動し、その周囲に屹立する建築またはその部分に突き当つてそこに或種の感動を惹き起す。この場合その立体が明確なるものであり、不適當の装飾もなく、立体相互の中に秩序と明快なるリズムが表出されてをる時、それらは互いに関係のない空間の堆積物ではなく、更に立体と空間との関係が正しい比例をなすならば、吾人の眼に脳髓に均整の感じを与え、それにより精神は秩序の満足を得得する。茲に建築芸術がある。」<sup>83)</sup>といった文章は、いずれも『建築をめざして (*Vers une architecture*)』(1923)の中で、ル・コルビュジエが述べた主張に等しく、岸田が同書を参照していたのは明らかである。〈総論〉ではドイツ語の対訳が付されているが、〈建築的形体〉の章では、語彙の対訳が英語であることから、『建築をめざして』の英語版<sup>84)</sup>を入手していた可能性も考えられる。

---

注82) Le Corbusier, "Towards a new architecture", Dover Publications, 1986, p.48 原文では「The whole structure rises from its base and is developed in accordance with a rule which is written on the ground in the plan : noble forms, variety of form, unity of the geometric principle. A profound projection of harmony: this is architecture.」

注83) "Towards a new architecture", p.47 原文では「The eye of the spectator finds itself looking at a site composed of streets and houses. It receives the impact of the masses which rise up around it. If these masses are of a formal kind and have not been spoilt by unseemly variations, if the disposition of their grouping expresses a clean rhythm and not an incoherent agglomeration, if the relationship of mass to space is in just proportion, the eye transmits to the brain co-ordinated sensations and the mind derives from these satisfactions of a high order: this is architecture.」

注84) 1927年に Frederick Etchells の翻訳による英語版が、ロンドンの The Architectural Press 社から発売されている。

## 講演録「忠霊塔の造形意匠に就いて」（昭和 14 年 10 月 3 日）

### 資料の概要

大日本忠霊顕彰会発行の小冊子『忠霊塔図案応募指針』に収録されている講演録で、既往研究の原典とされてきた新聞・建築系雑誌掲載の断片的な記述と異なり、岸田の発言がすべて収録されている。なお、新聞・雑誌記事に掲載されている内容は、10月19日に朝日新聞社の大広間で行われた講演「忠霊塔の設計と意匠に就いて」を要約あるいは、忠霊塔そのものに対する個人的見解を示したものであるが、本稿で検討する講演内容は、建築学会が開催したもので、10月3日に帝國鉄道協会講堂で行われたものである。

講演題目にあるように忠霊塔の造形意匠に対する見解が示されている。岸田のほかに、冒頭で建築学会会長の内田祥三が挨拶を行い、陸軍中将・中村明人、建築家・佐藤功一が講演を行った。

忠霊塔の建設に就いて	陸軍省兵務局長 陸軍中将	中村 明人
忠霊塔図案の設計に就いて	工学博士	佐藤 功一
忠霊塔の造形意匠に就いて	工学博士	岸田日出刀

### 講演内容の分析

講演の機会を得たことに対する謝辞に続き、募集規定の総則（二）にふれ、忠霊塔の建築競投設計の目的はここにあると述べる。伊東忠太、内田祥三、小林政一、佐藤功一、佐野利器ら十二名が審査員を務めているが、「決して全審査員団の見解を代表しているものではない」、「私個人の考」と前置きした上で、〈忠霊塔の意匠の要旨〉、〈建設の主旨〉、〈忠霊塔の造形問題〉について順に説明を行っている。

まず、〈忠霊塔の意匠の要旨〉として、募集規定の「本忠霊塔建設の主旨に鑑みその意匠

は素朴、簡明を旨とし忠死者の英霊を最も崇高荘重に表頌すべきものとす。」を読み上げ、これが根本の方針であると述べる。「忠霊塔はあくまで忠霊塔である。寺院でもなく又神社でもない独自の純粹至高の意味をもつ」、「もっと純粹な崇高な意味を有つものですが、詮ずるところそれは一つの記念建造物である」と説き、忠霊塔の性格と〈建設の主旨〉について述べている。

〈忠霊塔の造形問題〉では、

- 《1. 単純といふこと》
- 《2. 明快であること》
- 《3. 無装飾であること》
- 《4. 現代性といふこと》

の4点を、忠霊塔の造形として考慮すべき問題として掲げている。

《1. 単純といふこと》では、複雑なあまりに変化のある形は「荘重さに欠く」といい、忠霊塔の形はつとめて簡単にするという立場をとっている。

「建築的な立体或は空間の基本形式としては球、円錐、円柱、立方体、角柱、角錐、この六つが考えられます。」と述べ、この六つの形式からあまり離れないことを説く。また、齊々哈爾（チチハル）と哈爾濱（ハルビン）の忠霊塔が造形上特に優れている好例とし、その理由に形の単純さをあげている。

《2. 明快であること》では、「単純なものといふことと、荘重といふことから当然明快であることの必要さが考へられます。」と述べ、形が瞭然としているよう求める。

《3. 無装飾であること》では、「参拝者の眼を外に逸すといふことは忠霊塔の本質から云ひまして百害あって一利もない」と述べ、

《4. 現代性といふこと》では、「満州の大規模の忠霊塔のあるものにもこの種懐古的の意匠を全体的に又部分的に持っているものがございます。これは悪口でもなんでもございませぬ。これは私個人の主観かも存じませぬけれども、それは意匠をしてどんなに優れているも



のであつても、なんとなしに不純なものが感ぜられてならぬのであります。」と述べ、単純に古きになぞらえる懐古主義を批判する。

また、「造形意匠といふものはその形状が単純なものであればあるほど難しいもの」と述べ、「墓石といふやうな簡単なものでさへもいい形といふものはなかなかない」と述べ、多摩墓地へ見学に行くことを薦めている。そして、「簡単なものは一寸した形の上の破綻でもそれが殊の外強く外へ現れる」と指摘し、形の破綻をできるだけ少なくすることのために「我々は比例といふことを唯一無二の解決方法としていろいろな方面から検討しなければなりません。部分と部分の間の比例であるとか、部分と全体との間の比例、更に全体と周囲との間の比例、さういふものの中に間然する所のない諧調があつて始めて調和のある形といふものが生まれる」と比例の重要性を説く。

ついで、「黄金律であるますとか、動的均斉の理論であるとかいろいろの比例論も唱へられてはいますけれども、それは主として平面的なものであつてそれを立体に及ぼし得るものかどうか疑問であります。」と指摘し、「仮に立体に或程度応用できたとしてもそれをそのまま忠霊塔の造形意匠に当嵌めて成功するかどうか、これは到底期待することができなからうと思います。」と述べ、造形意匠上での問題点を提供する。

最後に、「コンクリートの打ちつばなしでそれを磨いたものは、経費の関係などで石が貼れないといふやうな場合には極めて潑漑、清新とした一つの仕上げの手段だらうと存じます。更に色彩計画色彩意匠の上でも、色々素朴、明快崇高といふ風なことが考へられます。」と仕上げの問題に触れ、講演を終了する。

## 考察

本講演による岸田の忠霊塔の造形意匠に対する理念を集約するならば、「単純・明快な形体で無装飾であり、非懐古的な現代性をまとったもの」と言えよう。忠霊塔が記念建造物という性格を有することから、「荘重さ」の表現手段やその造形手法について説いている。平面对して言及していないのは、同講演会において建築家・佐藤功一が「忠霊塔図案の設計

に就て」と題し、平面と簡単に構造について触れているためとも考えられるが、「意匠及装飾」の叙述内容と比較すると、立体と表面の仕上げの問題に限定して述べている。

造形意匠に対する基本的な理念は、「意匠及装飾」の講義原稿での主張と同様のものであると言える。ここでも岸田は、求められる造形理念について、「単純、明快、無装飾、現代性」という語彙を用いて説明している。《1. 単純といふこと》、《2. 明快であること》と唱え、「単簡性、明快性」に類する言葉を用いるが、ここでは明確に「形が明快なものは当然単純」であるという意味で用いている。また、《4. 現代性といふこと》については、懐古主義を批判するが、「この問題に就きましてはこれ以上ここに詳しく述べません」と言い、「意匠及装飾」と異なり、強いて伝統の重要性には言及していない。

また、この講演においても多摩墓地に足を運ぶことを推奨しており、単純な形状の難しさを述べるとともに、比例論の重要性を説いている。しかし、ここでは平面的な比例理論を立体に応用できるかは疑問であると打ち明け、「造形といふものに対する各自の持つている鋭敏な感覚と深い経験といふものとだけが最後の切札になる」と言い、立体への比例の引用の限界に言及し、建築家の主観的な働きに委ねている。

岸田は、最終的に広東出張の延長を理由に審査員を辞退しているが、日本工作文化連盟の機関誌『現代建築』の中で、「忠霊塔競技設計入選案をみる」<sup>85)</sup>と題して、忠霊塔設計競技設計の入選案を講評している。

審査結果は不満である意思表示し、「二三の例外を除き、入選図案の造形意匠は微弱にして、貧弱である」と断じている。一等以下各等入選作にむしろ優作があるとし、第一種では二等二席（蒲生久敏）、二等三席（高木茂雄）、第二種では二等一席及び二席（吉村順三、杉山雅則）の簡素単純な形体で無装飾の作品を評価している。「簡明な均斉美により多くの長所を見出す。」「各部の比例や取り扱ひに於いて優るものがある。」と評価しており、岸田の造形理念は、設計競技の前後を通して一貫している。多くのモダニスト達が関与した忠霊塔設計競技の場でも、一貫して同一の理念を主張していた。

---

注85) 『現代建築』（日本工作文化連盟、1940年2、3月合併号）

## 墓碑・銅像台座の設計作品の分析

### 各設計作品の概要と特徴について

前章で取り上げた講義原稿「意匠及装飾」は、1937（昭和12）年に記されたものであるが、1935（昭和10）年から1937（昭和12）年にかけて、岸田は墓碑と銅像台座を設計している。各設計作品の特徴を読み取り、講義原稿の叙述内容と現実の設計作品との関連を考察したい。

#### ・斯波忠三郎記念碑(吉田三郎『航空』銅像台座、昭和10年)

昭和9年の帝展に出品した銅像『航空』（吉田三郎）の台座を岸田が設計した。銅像は、東京帝国大学航空研究所風洞実験室（現、東京大学駒場Ⅱキャンパス1号館）の前庭に置かれ、台座は昭和10年4月に建立された。作者吉田の「どこか航空の縁のある場所に置きたいものだ」との意向があり、また、航空研究所の田中敬吉と吉田がパリ留学時代の旧友であったこと、航空研究所創立時の貢献者である斯波忠三郎を記念する目的で、有志が二千元を貯金していたことなどから設置された。台座にある斯波博士のレリーフと銅像『航空』は、吉田から無償で寄贈された<sup>86)</sup>。

図面は、美濃紙、墨書きで、正面図、平面図、断面図、配置図が描かれており、各部の寸法が入っている。「昭和10年3月 岸田」と署名があることから、竣工の一月前に描かれたことがわかる。現存する竣工作品と比較すると台座部分の全体形状が異なる。計画案は単純な矩形の立方体で、完全なるシンメトリーな構成であるが、実施案では若干の形体操作が行われており、銅像の先端方向の台座が突出し、左右非対称の構成となっている。

立面の面積の小さい側を高く、面積の大きい側を低く抑えることで、体積的には均斉（釣合い）を保っている。著書「意匠上より見たる法隆寺伽藍建築」（昭和10年9月、『叢』所収）のなかで、岸田は法隆寺伽藍の諸堂塔の織り成す形体美を塔と金堂の体積的な均整関係

注86) 「天駆ける姿 斯波男の記念碑 吉田氏作の「航空」」『東京朝日新聞』（昭和10年2月22日）

にあるとし、同様の説明を行っている。

前方に泉池が設けられており、台座は人造石の洗出し仕上げで、隅のエッジ部に金属板を埋め込むことで輪郭に鋭敏な印象を与えている。3つの設計作品のなかで、唯一配置図があるが、植栽と接道箇所が書き込まれている程度で周囲の環境との関わりを重視していたとは考えにくい。泉池の両側に、左右対称の配置で櫟の植栽がある。

・工学博士藤山常一先生胸像台座(昭和12年5月)

宮城県仙台市郊外の三居沢の地で、日本で初めてカーバイドの工業生産に成功した藤山常一博士の功績をたたえる銅像<sup>87)</sup>で、昭和12年5月に竣工している。除幕記念式の際に関係者に配布された絵葉書<sup>88)</sup>には、岸田が銅像の横に立ち、そのキャプションに「岸田日出刀先生設計」とある。(図3-4)

当時、岸田はオリンピック会場計画のため多忙を極めており<sup>89)</sup>、設置場所の見分には参加していない。そのため、配置計画は、銅像の作者である彫刻家・堀進二と施工を行った富田

---

注87) 藤山の銅像は、戦時中の金属供出でセメント製のものに置き換えられた。昭和19年の水害で水没倒壊したが、台座を昭和24年に当初の石材を用いて再建。胸像も昭和32年11月に再建されている。最初の銅像は、彫刻家・堀進二により製作された。『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』によれば、「東京帝国大学工学部応用科学教室の亀山直人に発起人会が製作者の選定を依頼し、建築学教室の諸教員の意見から堀を推薦される。発起人会は岸田を訪ね、堀への胸像製作打診を依頼。昭和11年11月19日に胸像製作の依頼を引き受けた堀が、台石その他配置計画を岸田に依頼した。」とある。石材は福島県相馬郡石神村より採集し、南千住の明治石材商會が加工を行った。

注88) 絵葉書は3枚組で2500部が印刷された。写真は、除幕式(5月9日)の直前、5月6日に撮影された。「設計者岸田を迎えるにあたり、松を直ちに植えるように指示するも貧弱な小松が胸像の両側に植え付けられており、写真撮影の前日に目黒の樹木屋で小松を購入し、夜行で仙台に搬送した。」というエピソードが残っている。(『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』)

注89) 競技地調査員を務めていた岸田は、会場視察のため昭和11年6月20日にシベリア鉄道の日本選手団特別列車に乗車、7月3日にベルリンに着く。7月15日から8月16日まで行われたオリンピックの会場等を見学し、同時開催された芸術競技に、自らが設計したゴルフ場クラブハウスの写真と図面をまとめた「Golfing in Japan」を出品している。約3か月間の滞在を終え、10月中旬に帰朝している。帰国後は、各方面での報告会や会場計画の意見書、計画案の提出が続き、多忙を極めていた。「第十一回オリンピック伯林大会芸術競技調査報告」(大日本体育芸術協会、昭和11年)によれば、岸田が台石その他配置計画の依頼を受けた昭和11年11月19日にも、大日本体育芸術協会の大会報告会が行われている。

工務所の富田佐二郎が行っている。寄付金のうち、銅像と台座の製作費に充てられた費用は八千円であった<sup>90)</sup>。依頼から竣工まで半年という期間で設計している。

2 尺ほどの高さの基壇の中央部に、上方に向かって逡減した台座が設けられ、その上部に胸像が据えられている。正面と側面に題字と撰文が彫り込まれた銘板がある。その背部に 10 尺ほどの高さの壁体があり、銅像の両側に家紋の装飾があしらわれている。基壇には銅像を中心に、左右対称の配置で小松が植えられている。

#### ・塚本家之墓地(昭和 12 年)

多磨霊園に眠る岸田の恩師・塚本靖(昭和 12 年 8 月 9 日没)の墓で、南面する 1 種区画の定型敷地に建立された。図面は、美濃紙、墨書きで、平面図、断面図、正面図、立面図、正面側石断面図、正面段傍断面図が描かれており、各部寸法が入っている。「塚本家之墓地設計図」との記入に加え、「昭和 12 年 10 月」の年記を有する。

上部に向かってわずかに逡減している一辺 3.4 尺、高さ 4.4 尺の量塊性ある中央の棹石が特徴的で、頂部は、円形にわずかに盛り上がっている。その他の花立て、水鉢、大柱、側石等も白御影石の矩形の石材で構成し、外柵に単純な幾何学形体を反復させている。水鉢に刻まれた家紋を除き無装飾である。中央の敷石が、「玄室」と記された納骨室への入り口となっており、玄室内の上部は円弧を描いており、「アーチ」と記載がある。拝石の両側に、左右対称の配置で小松が植えられている。

#### 考察

いずれの作品からも岸田の言う「単簡性」、「明快性」という語彙で形容されるシンプルな造形への志向が認められる。

塚本家之墓地では、上台以下すべてを矩形の立方体で構成するなど、形体の初源的な形を意識しており、ここからも単純な幾何学形体への強い思い入れと確信が感じられる。家紋を

---

注90) 『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』

除き無装飾であることから、岸田が「意匠及装飾」で述べたモダニズムの手法を援用していると言える。

斯波忠三郎記念碑では、台座の隅に金属板を埋め込むことで、輪郭の明瞭さを強調させている。左右対称の配置で小松や欒の植木を植えたシンメトリーな構成や構成上対称が用いられていない場合に釣合いの形式を用いている点、量塊性による安定感、幾何学的形態の反復など、全体的に美の規範を「対称、釣合い、反復」といった形式原理に求めている。岸田は左右対称について、「一つの建築物に表現上の記念性なり端正な美しさを表はそうという場合に、整つた形体とするためへの意図から、規則正しい左右対称形の形式が採用されるのは蓋し自然のことだと思ふ。」「今日の建築は実用の上に立つものであるから、単に形を整へるといふ理由だけからのために、家の間取りや外観を左右対称形とするが如きは愚かしいことである。」<sup>91)</sup>と述べている。記念性の表現上、建築物の対称性を意識的に取り上げていたと言える。

また、「塚本家之墓地」が多磨霊園にあることから、墓碑・銅像台座の設計を通じて、自らの造形理念の具現化を試みていたと考えられる。

---

注91) 「左右対称」『學鑑』42(10) (丸善、1938年10月)

## 小 結

本節では、岸田日出刀が担当した必修科目「意匠及装飾」の講義原稿（1937年）を元に、岸田が展開した建築教育の内容を提示し、同時期に設計された建築作品ならびに墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に関する講演に敷衍して分析し、岸田の建築造形理念を考察してきた。

墓碑銅像台座の作品や講義ノート等の言説からは、初等幾何学への強い思い入れと確信が感じられる。「対称、釣合い、反復」といった古典的な美の形式原理をあてがい、先進の均整理論の立体への試行や建築におけるモダニズムの説明で自らが示した特質を援用することで、それらを建築へ応用しようとする姿勢が看取される。岸田もまた、当時、日本の建築界において注目されていたハムビッチのダイナミック・シンメトリー理論に高い関心を示していた。

モダニズムの解説では、単純性と明快性を専ら「簡明」という形の問題として捉えており、技術的手段に対する視点が希薄であった。また、国際化の潮流に身を置きながらも、土地の特殊性に起因する「地方性」を重要視する。因襲と伝統を区別して捉え、伝統を肯定し、「現代性のない因襲」を否定する。過去との連続を拒絶するのではなく、とるべきものは活かし、伝統とモダニズムとの交流を志向していた。

そして、「意匠及装飾」の講義ノートにみられる特徴として、モダニズムの解説において普遍性だけでなく「ローカリティ」という個別性を説明していること、建築の形体をまとめあげるうえで、「平面」と「建築的秩序」の重要性を主張し、その導き手として、コルビュジエを掲げていること、そして、幾何学的秩序を元につくられる建築形体の新たな建築家の造形面での美意識を「形式感」と呼び、その向上を求めていることがあげられる。

建築の形体に対する岸田の理念は、ル・コルビュジエの著書『建築をめざして』に記されている主張と符合する箇所が多い。墓碑・銅像台座の設計を通じて、自らの造形理念の具現化を試み、岸田の言う「形式感」の模範を示していたと考えられる。





## 第4章

### 講義ノート「建築計画」にみる岸田担当科目の講義方針とその理論的特質

はじめに

第1節 講義原稿「建築計画」（昭和12年）

1-1. 史料の概要

1-2. 叙述内容の分析

建築計画総論

建築計画通論

1-3. 考察

第2節 東京帝国大学講義要目にみる「建築計画」の変遷

第3節 前任・塚本靖の「建築計画」と岸田の講義の変化

小 結

## はじめに

本節では、岸田日出刀が担当した必修科目「建築計画」の講義原稿（1937年）を元に、彼の担当科目の講義方針を読み取り、東京帝国大学工学部講義要目と前任者・塚本靖の講義項目との比較から岸田の建築教育の理論的特質を考察する。

## 講義原稿「建築計画総論」（昭和12年）の内容分析

### 資料の概要

金沢工業大学が所蔵する岸田日出刀関連資料<sup>92)</sup>には、岸田が記した講義原稿とノート類が17点（表3）ある。「建築計画」と表題が記された史料は3冊（⑦、⑧、⑨<sup>93)</sup>）あり、うち2冊（⑦、⑧）は、陸軍経理学校の講義用に記されたものである。陸軍経理学校用の1冊

注92) 講義原稿は、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料の中から見出したもので、ノート類を合わせると計17冊が確認できた。（表3）

表7 講義原稿とノート類一覧（金沢工業大学所蔵）

	資料名称	作成年 (括弧内は推定)	形態	頁数	
				記述	図版
1	朝鮮建築史		大学ノート	97	15
2	支那建築論		大学ノート	77	0
3	支那建築史(Ⅱ)		大学ノート	47	0
4	COLOR(Ⅰ)	(昭和2年頃)	大学ノート	100	2
5	COLOR(Ⅱ)		大学ノート	69	0
6	意匠及装飾	(昭和3年)	大学ノート	51	3
7	建築計画		ファイル	25	8
8	建築計画(陸経講義)	昭和15年	大学ノート	42	2
9	建築計画総論	昭和12年	ファイル	127	7
10	江戸時代(二)明治以降		大学ノート	41	4
11	日本建築史(第一巻)	(昭和3年)	スケッチブック	267	0
12	意匠及装飾(形体篇)	昭和12年	ファイル	70	4
13	Bridge Architecture		大学ノート	25	0
14	Russian Architecture	昭和2年	大学ノート	35	0
15	鎌倉時代 藤原時代	(昭和3年)	大学ノート	59	2
16	建築家ト其作品	(昭和8年頃)	大学ノート	13	0
17	工場建築	昭和13年	ファイル	75	28

※ 冒頭の番号は説明のため付記した。括弧内の年号は、叙述内容と挟み込まれていた手紙等から推定した。

注93) 丸内の番号は、表7に附した番号に対応している。

(⑧)には、表紙に「昭和15年」とある。しかし、いずれ(⑦、⑧)も内容が断片的で、かつ「昭和12年」の年記が認められる1冊(⑨)の内容を活版印刷した状態の頁が含まれているため、昭和12年の手書きの講義原稿(⑨)が、これらの原本と判断できる。

講義原稿「建築計画総論」(昭和12年)は、手書きの講義原稿A4版罫線紙127枚と図版資料7枚から成り、講義原稿「意匠及装飾」と同様に、2穴のバインダーファイルに綴じられている。罫線紙は縦長のもので、インクペンで横書きに記述されている。

<建築計画概論>に続き、<建築計画通論>、<住居建築計画>の3章から構成される。全体の目次構成を表8に示す。

表8 講義ノート「建築計画総論」(昭和12年)の目次構成

建築計画総論	頁数
- 建築とは何かということ	1-5
- 建築計画の建築基礎学科としての位置	5-6
建築計画通論	
I 自然(環境)と建築との間の密接なる関係	7-10
II 中に容れる人間の生活をよく考えること	10
III 建築の目的要求を正しく視ること	12
IV 経済的思考	12-13
V 現代日本の建築家としての自覚	14-15
VI 建築計画講義の方針	15
VII 参考書	16-17
住居建築計画 第一 住宅建築	
- 住宅建築	1
- 西洋における住宅建築の変遷	
(1) 埃及の住宅建築	1-4
(2) 西方アジアの住宅建築	5-6
(3) 古代Greece、Rome時代の住宅	6-14
古代に於ける北欧の住家	15-16
(4) 欧州中世の住居建築	17-24
(5) 文芸復興時代住居	24-26
(6) 十九世紀の住宅建築	26-33
- 日本住宅史講	
(1) 先史時代	1-3
(2) 原始時代	4-8
(3) 飛鳥奈良時代	8-12
(4) 平安時代	13-21
(5) 中世(鎌倉、室町時代)	21-34
(6) 桃山江戸時代	35-64
- 満州の住居建築	65-75

文中に「住宅、学校、病院 etc.等の各種建築計画の各論に入るに先ち」と記されていることから、第3章の〈住居建築計画〉の後ろに、学校建築、病院建築等に関する内容が続いていた可能性も考えられる。なお、年号が確認できないため同時に作成されたものかは不明だが、「工場建築」と題されたノートがあり、この他にも「事務所建築」、「ホテル建築」、「図書館建築」、「病院建築」といった建築種別ごとの図面、写真資料を集成したファイルがある。

## 叙述内容の分析

### ・ 建築計画概論

〈建築計画概論〉では、まず初めに《建築とは何かということ》と題し、「建築の本質を明らかにする手段」、「建築が芸術か否か」の2点に触れている。次に《建築計画の建築基礎学科としての位置》と題して、「建築計画」が研究対象とするものと建築の研究分野における、その位置付けについて説明している。

### - 建築とは何かということ

まず、岸田は「建築の本質を明らかにする手段」について言及している。「建築が何かということは説明を要さぬ程 simple のものと考えられるが、深く詮索し出すと仲々にむずかしいもの。『宛も芸術とは何か』にひとしい。建築の本質？芸術の本質は何かについて古くから多くの人が論じたが何れも『観』の程度を出でず、確然として定義の如きはなし。この問題がはつきり解決できぬ理由の一つは『美』の本質が明かでないから。美の本体が明かにされれば芸術の本質も又建築の本質も比較的容易に解明されよう」と述べ、古くから多くの人が論じながらも建築の本質に確然とした定義がない理由に、「美」の本質をめぐる問題がはつきり解決できない点を指摘している。

そこで、岸田は「古来建築に就いての定義や解釈は種々あるが、最も容易と考へられるは『建築は人間生活の容器』との定義。一応この定義を正しいと肯定すれば、人間生活というもの明らかにされれば建築も自ら明らかになる筈」と説いている。「建築は人間生活の容

器」との定義を活用し、「建築＝人間生活の容器」であるならば、「人間生活」を解明することが、逆説的に建築の理解につながると考えた。

そして、考究すべき人間生活には、「物質的・精神的の二つの方面がある」と述べ、「一方の満足では不完全な生活である」と言い、「建築はこれら二つの方面をよく満足する様に計画されなければならぬ」と主張している。

このような解釈をもって大正中頃に盛んに議論された建築芸術論・非芸術論を振り返れば、「トルストイの芸術論を楯にとり、建築には人間の感情移入はできぬと論じた建築非芸術論者」の見方は「余りに表面的な見方」とであると批判している。

続いて、建築が芸術か否かについて言及している。「建築のある部分、例えば構造学方面、設備的方面には純科学的な数学的な点もあるが、平面計画、意匠装飾上の計画上にありては、これは全く個々の建築家により別々につくられ表現される」と述べ、また、「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。決して数学を解くように或一つの解答丈けには終わらない。建築のあらゆる問題を機能的に研究して於けば遂には一つの数学公式の如き解答がえられるに至らんと考える向きもあるが、事實は然らず」と言い、構造・設備では数学的な部分もあるが、平面計画・意匠装飾上の計画においては、個々の建築家により造られ、表現されるものであることを理由に、「建築は一つの立派な芸術である」と主張する。また、目的要求をもつ点において、絵画や彫刻等と違う芸術であり、「似たものとしては工藝がある」と説明している。

#### -建築計画の建築基礎学科としての位置

「英語の Design という語の通訳はない。計画と普通いうが、全体をよく言い表はしてはいない」と前置きを入れた上で、建築の研究分野には、「歴史的方面、美的方面（意匠装飾）、数理的方面（構造）、材料的方面、都市計画的方面、社会学的方面」がある中で、建築計画は「専ら建築の計画（Design）方面を研究するもの」と説明している。

図1 岸田が示す当時の建築学の研究分野



建築の計画は「平面計画、設備計画、形体意匠計画、等」に分かれると述べ、「建築計画」の講義では専ら前二者を対象とし、第三者は「意匠及装飾」の講義に譲ると述べている。また、建築計画を分けて以下の2つとし、「Mechanical Design は専ら Engineering 的の立場から、建築の合理性、能率、利便、快適性等の問題を研究解決せんとするもの。即ち建築の実用性を研究するもの。Artistic Design は主として形体及色彩方面」と説明している。

Artistic Design	— 建築の求める人間の精神的方面の満足
Mechanical Design	— 人間生活の物質的方面の満足。実用性

「これら二面は、個々に独立して分けて考えられもするが、骨肉の関係の如く、同時に考えなければならない密接な関係にある」と述べている。

#### ・ 建築計画通論

<建築計画通論>は11頁におよび、建築物の種別に関わらず、「あらゆる建築の種類に応用されるような一般的の法則」として、《I. 自然（環境）と建築との間の密接なる関係》、《II. 中に容れる人間の生活をよく考えること》、《III. 建築の目的要求を正しく視ること》、《IV. 経済的思考》、《V. 現代日本の建築家としての自覚》の5つを挙げ、最後に講義の方針と参考書を提示している。

#### 《I. 自然(環境)と建築との間の密接なる関係》

「あらゆる気象上の条件、一気湿、気温、経度（太陽光線の方向、角度、強さ）風雪雨雲、地震 etc.一が直接間接土地々々の人の生活に影響を及ぼし、建築の形式、内容を規定する」

ことを、寒暖による床形式の差異や雨量による屋根形状の差異が生じる事例をあげて説明している。次いで、「今日の進んだ技術からすれば、窓のない建築も充分実現の可能性がある。即ち照明は人工光線により、温度、湿度、気流の調和は機械的な方法による（artificial light と air conditioning）然しこの如きは単にできると云う丈けのことで経済上其他多くの点で非常な無理を伴うもの」と述べ、「建築はそれが建てるべき土地の自然的条件に飽迄支配され、かかる条件によく順応するのが建築の正しい道」であることを示し、経済的合理性も考慮すべきとしている。

## 《Ⅱ. 中に容れる人間の生活をよく考えること》

「住宅でもその中に住まう人により生活方も趣味も好みもちがう。性別により職業によりても。かかる中での生活の差に応じ建築も当然異なる」とし、「建築は其中に住まう人のためのもので、概念的な流行語などに災かれて自然と人に合わぬような建築をつくるのは建築家の大きな罪悪となる。建築のための建築に終つてはならぬ」、「自然と人の差により世界各国に国相応の差というものは当然生まれる」と述べ、海外の事例をそのまま模倣しても成功しないことを伝え、《自然（環境）と建築との間の密接なる関係》と併せて、自然と人の差異により生ずる「建築における Locality」を考慮することの重要性を主張している。

## 《Ⅲ. 建築の目的要求を正しく視ること》

冒頭で「我に建築家に与へられる課題は建築種別に著しく多い。それら各種の建築のもつ目的要求をより見定めて、それを満足する様な方法手段を建築技術的に見出そうというのが建築計画の目標である。故に各種建築物の目的要求を正しく視ることが重要となる」と述べ、建築物の目的・要求の見極め、満足する様な手段や方法を見出すことが「建築計画」の目標であることを示している。

オットー・ワグナーの「芸術を支配するものは必要だけである。（Artics sola domina necessitas）」との言を持ち出し、「この necessitas（必要：実用）を正しく視ることがまず第一に重要である。」と述べ、建築の目的・要求を見極めることの重要性を説く。さらに、「過

去の建築をみるに、建築は実用性の満足ということのために他の一般芸術 - 絵画、彫刻 - と競争する上に大きな重荷、handicap を負わされてきたかの観がある」、「建築はその実用性がある故に以て他の絵画や彫刻の上に君臨することができる」といい、実用性の追求が芸術分野における建築の優位性につながると考えている。

#### 《IV. 経済的思考》

「材料の適正の使用。地方材料（Local material）の利用、市場品の適用。（market material）経済的で合理的なる構法、意匠装飾上の簡単化」を通して、「Least work で最も maximum Efficiency を求めること」といい、利殖としての利益の追求ではないが、現代の建築家には、最小限で最大の効果を生むことが求められていると述べている。

#### 《V. 現代日本の建築家としての自覚》

I からIVと重複するが、再び「自然と人の差異ということをよく認識すること」と述べ、「日本には日本の自然と人の生活によく合致する建築がなければならぬ」と主張している。

《VI. 建築計画講義の方針》として、「各種建築に従ひ、まずその沿革の大要を述べ、然る后語建築に特殊の計画的要求を述べる。講義の内容は現代を標準すること勿論なるも、過去に於ける発達状況を識ることは是非共必要。現代いくも過去からのつながりに外ならず、過去をしることは間接に現在を識ることの助けになる」と、講義の方針を述べている。最後に、海外の建築系雑誌と『高等建築学』、『建築工学ポケットブック』の2冊を参考書<sup>94)</sup>とし

---

注94) 「建築計画」の参考書として、以下の文献名をあげている。

- |           |   |
|-----------|---|
| (邦書)      | 高等建築学<br>建築工学ポケットブック                        |
| (洋書)      | 各種建築種別にもよるが、雑誌を主とする                         |
| (England) | Architect and Building News                 |
| (America) | Architectural Record<br>Architectural Forum |
| (France)  | Architectural D'aujourd'hui                 |
| (Germany) | Der Baumeister                              |



で紹介している。

## 東京帝国大学工学部講義要目にもみる「建築計画」

### 東京帝国大学工学部講義要目について

ここでは、東京帝国大学工学部講義要目（以下、講義要目）を用いて、岸田の担当した「建築計画」の講義内容と前任者である塚本靖の講義内容を比較することにより、前任との関連を検討したい。

講義要目は、毎年教員が提出した授業計画を元に編纂され、一般学生が修学の参考とするために配布されたものである。工学部全般の講義が「講義」と「実験製図及演習」に大別され、科目名、担当教官名、単位数、実施される時限、授業計画が掲載されている。

東京大学工学・情報理工学図書館工2号館図書室が東京大学工学部の歴史関係の資料として所蔵する、1930（昭和5）年、1931（昭和6）年、1938（昭和13）年、1955（昭和30）年の講義要目のほか、古書店等から筆者が蒐集した1924（大正13）年、1933（昭和8）年、1939（昭和14）年、1952（昭和27）年の講義要目を基に作成した。

図9 東京帝国大学工学部講義要目にもみる「建築計画」講座の授業計画

担当教官	塚本靖	岸田日出刀				岸田日出刀	吉武泰水	平山崇	岸田日出刀	吉武泰水
		建築計画(第一、第二)								
年度	大正13年	昭和5年	昭和6年	昭和8年	昭和13年	昭和14年	昭和27年	昭和27年	昭和30年	昭和30年
授業計画	第一章 建築計画概論 第二章 住居建築 一、邸宅 二、宮殿 三、都市住宅 四、共同住宅 五、別荘等 第三章 社交・娯楽建築 七、喫茶店 八、酒家 九、俱樂部 一〇、公設俱樂部 一一、公浴場 一二、劇場等 第四章 教化建築 一三、学校 一四、図書館 一五、博物館 一六、博覧会 第五章 療養・慈善建築 一七、病院 一八、養老院 一九、孤児院等 第六章 官衛・公署建築 二〇、議院 二一、市庁 二二、公会堂 二三、裁判所 二四、刑務所等 第七章 營業建築 二五、銀行 二六、取引所 二七、手形交換所等 第八章 公共建築等 二八、市場 二九、屠場 三〇、倉庫 三一、工場 三二、停車場等 第九章 宗教建築	第一章 建築計画概論 第二章 住居建築 1. 住宅 2. 共同住宅 3. ぼてる 第三章 商業建築 4. 商店 5. 百貨店 6. 銀行 7. 市場 8. 事務所 第四章 工業建築 9. 倉庫 10. 工場 11. 屠場 第五章 教化建築 12. 学校 13. 図書館 14. 博物館 15. 美術館 第六章 体育建築 16. 各種運動用建築 第七章 社交娯楽建築 17. 料理店 18. 俱樂部 19. 映画館 20. 劇場 第八章 交通建築 21. 停車場 22. 航空機発着場 第九章 官衛公署建築 23. 議事堂 24. 市庁舎 25. 公会堂 26. 裁判所 27. 刑務所 第十章 療養建築 28. 病院 29. 公衆浴場 第十一章 宗教建築					1. 建築計画通論 2. 住宅、アパートメント、ホテル 3. 商店、百貨店、事務所 4. その他各種建築設計計画の概要	第一章 建築気候 1. 気候 2. 温の感覚 3. 室内調湿 4. 室内気候 5. 建物と外気の熱交換 6. 自然換気 7. 機械換気 8. 温水、蒸気、輻射暖房 第二章 建築音響 9. 聴覚と言語 10. 騒音 11. 遮音 12. 建築音響 第三章 日照、畫光照明 13. 日照 14. 畫光照明 第四章 日照 15. 便所、浄化槽 16. 衛生器具、設備	I. 建築計画概論 II. 西洋住宅史 III. 日本住宅史 IV. 住宅計画及設計	I. 各種建築の設計計画 1. 学校 2. 図書館 3. 劇場、映画館 4. 病院 5. その他 II. 平面計画概論 1. 平面計画 2. 規模計画

## 前任・塚本靖の「建築計画」と岸田の講義の変化

岸田は、大正末の洋行<sup>95)</sup>の際にシカゴにあるスウィフト社の屠殺場を訪れている。その様子を記した日記に「塚本先生の建築計画のご講義の時にも、一寸此處の話を拝聴してをるし、異常な興味をもって出かける」<sup>96)</sup>と感想を残していることから、岸田が塚本の「建築計画」を受講していたこと、塚本の講義でスウィフト社のユニオン・ストックヤードが取り上げられていたことがわかる。

講義要目の大正13年度版に載る塚本の「建築計画」の授業計画をみると、第一章の通論に続き、第二章から九章にかけて、建築種別を8種に大別し、さらに細かく32種の建築物を取り上げている。岸田が正式に教授として担当する昭和5年以降<sup>97)</sup>の講義要目には、前章で分析した講義原稿の中にある「建築計画通論」の章がない。少なくとも昭和14年まで掲載内容に変化がみられない。

岸田の昭和5年の講義要目と塚本の大正13年の内容を比較すると、第二章の住居建築、第四章の工業建築、第六章の体育建築といった建築種別の捉え方に違いが見られる。第二章の住居建築では、岸田の講義から「邸宅」と「宮殿」がなくなり、「旅館」は「ほてる」に改められている。塚本が第八章で「公共建築等」として取り上げていた「工場、倉庫、屠場」は、岸田の講義では、第四章に独立した章を設けている。第六章の「体育建築」、第八章の「交通建築」については、塚本の講義にはなかった章目である。

住居建築から邸宅や宮殿の項目がなくなることには、岸田が通論の《IV. 経済的思考》で述べていた「裕福なパトロンを背景として金殿玉楼のみ造り得た時代」とは違い、「経済的思考が必要な時代」との認識が反映されていると言えよう。また、全体として建築種別の章

---

注95) 大正末に図書館建設の為の視察の名目で、大正14年12月から大正15年11月まで約11か月間にわたり欧米各地をめぐった。岸田の海外渡航の詳細については、拙稿「大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2013年)で明らかにした。

注96) 岸田日出刀「古日記から」に載る大正15(1926)年1月8日の日記に、見学時の状況を記している。

注97) 岸田は、昭和4年6月11日に教授となり、建築学第2講座担当となる。その為、通年を教授として担当したのは、昭和5年度以降である。

目が、塚本の場合、公的な性格をおびた建築物が多いのに対し、岸田の建築種別では「営業建築」が「商業建築」に改められ、「事務所」の項目が増えている。塚本の講義では、「工場、倉庫、屠場」を「公共建築等」として取り上げていたが、岸田の講義要目では「工業建築」が「公共建築等」から独立して章立てされている。公的な建築物だけでなく、民間の建築活動にも触れられている。このように岸田と塚本の講義要目を比較すると、建築種別の捉え方に変化がみられる。当時のいずれの建築計画の講義も、各論をやったのがわかる。

岸田は、昭和14年まで同じ授業計画を掲載している。ここには、前節でみてきたような住宅史の内容や通論の項目は反映されていないが、戦後の授業計画に、「Ⅱ西洋住宅史」「Ⅲ日本住宅史」といった項目が表れていることから、塚本の講義形態に前述のような変化を加えながら受け継ぎ、さらに岸田独自の視点を織り込みながら、昭和12年の段階では、図9のような講義内容に改編していたと考えられる。

戦後は、吉武泰水と平山嵩が加わり、授業計画の項目にも変化が見られる。昭和27年の講義要目をみると、建築計画は、第一から第三に分けられ、第一を岸田、第二を吉武、第三を平山が担当している。吉武の欄は、空欄となっているが、建築計画の最初の講義をした時期について「入って二、三年あとでしょう。」<sup>98)</sup>と吉武自身が述べていることから、昭和17年に助教授に赴任している吉武の経歴と照らし合わせると、昭和27年の段階では、建築計画の講義を行っていたと考えられる。在学中に吉武の建築計画を受講していた青木正夫は、昭和20年から昭和21年にかけてのノートを見返したところ、1回目は、ギリシャから始まる劇場史から入り、劇場の舞台・客席廻り、可視線について講義が行われ、2回目の講義内容は、結核診療所についてであったと述べて<sup>99)</sup>いる。

昭和30年の講義要目をみると「Ⅰ建築計画概論」「Ⅱ西洋住宅史」「Ⅲ日本住宅史」「Ⅳ住宅計画及設計」といった、建築家に求められる素養を示した基礎的な内容（建築計画概論）や住宅の設計に関する基礎的な内容を岸田が担当し、日照や便所等の衛生施設、音響、換気など建築環境に関する内容を平山が、学校、図書館、劇場・映画館、病院等、各種建築物の

---

注98) 鈴木成文教授退官記念出版編集委員会『建築計画学の足跡』（1988年）

注99) 前掲注98

平面計画に関する内容を吉武が講義していた様子がわかる。このような各々が担当する講義の大枠については、岸田が決めていたと思われるが、細かい部分の講義内容については、吉武本人に任せっきりだった<sup>100)</sup>ようである。

実際に行われた講義内容と授業計画の項目に違いはあるだろうが、少なくとも戦前の昭和14年までは、変更箇所を反映させずに授業計画を提出していることから、講義内容の改編は、岸田の意向によるものと考えられる。

---

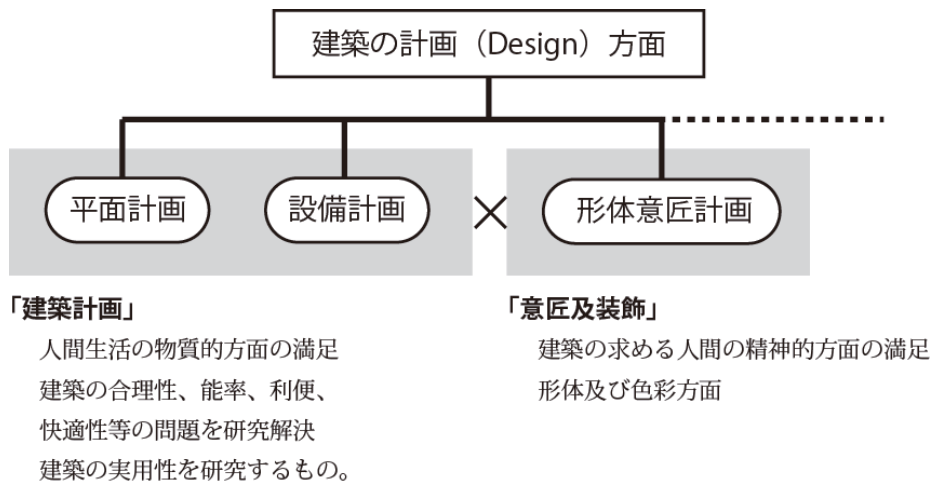
注100) 戦後に建築計画学の礎を築いた吉武泰水は、岸田との講座の運営について「それは非常に任せっきりだったですね - あなたはあなたで勝手にやりなさいという感じで。」と語っている。鈴木成文教授退官記念出版編集委員会『建築計画学の足跡』（1988年）

## 岸田による「建築計画」の講義方針とその特質

- ・ 講義の方針:精神的方面(美)と物質的方面(実用)

「建築計画通論」の章から「建築計画」の最終的な目標が、「建築の目的・要求の見極め、その目的・要求が満足する様な手段や方法を見出すこと」であったことがわかる。そして、「意匠及装飾」が「建築の求める人間の精神的方面の満足」を扱い、「建築計画」は「人間生活の物質的方面の満足」を研究するという位置付けであった。「建築計画」と「意匠及装飾」のそれぞれの講義が研究対象とするところの領域と両講義の関係性を整理すると図2のようになる。

図2 「建築計画」と「意匠及装飾」の講義内容とその位置づけ



「建築計画概論」の冒頭で述べていたように、岸田は「建築は人間生活の容器」という定義を利用し、人間生活を考究することが、逆説的に建築の本質の解明につながると考えた。そして、つぎに、人間生活を物質的な方面と精神的な方面の二面に分けて、これらを建築における実用性（物質的な方面の満足）と美（精神的方面の満足）に結び付け、人間生活が両者を過不足なく要求する様に、建築においても実用性と美は、骨肉の関係の如く、切り離せない関係性にあり、これら両面を全的に捉えなくてはならないと論じた。

講義としては別々の単限であったが、自らの担当科目である「建築計画」と「意匠及装飾」を“建築を計画（Design）する”ための学問として、一体のものとして捉えていたことがわかる。

・芸術への意識：建築を芸術の範疇に位置づける論理

このような科目の捉え方に至った背景には、東京帝国大学における建築教育の再考を行った内田祥三の影響も考えられるが、建築衛生（計画原論）や建築材料、都市計画の講座開設を力説していた内田の建築教育像<sup>101)</sup>を考慮すると、むしろ岸田が概論で述べていた「建築は一つの立派な芸術である」との主張を自らが担当する講座で示す狙いがあったと考えられる。

岸田は、建築を芸術の一分野とみなしていた。「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。」と述べ、そして、オットー・ワグナーが『現代建築』の中で残した「芸術を支配するものは必要だけである」との一文にある「必要（necessitas）」を「実用」と解釈し、標語の言い換えを行った。つまり、換言すると「芸術を支配するものは実用だけである」という意味で捉えた。建築には実用性を満足しなければならない点があり、この点が他の芸術分野と比べて、不利な状況をつくり出していると考えていた岸田にとって、ワグナーの言葉は、暗闇を照らす一筋の光のように思えたに違いない。しかし、これだけでは建築が単なるプラティカルな存在になってしまう。そこで、担当する建築家が異なるに応じて、建築作品にも差が出ることを述べ、「建築計画」（実用性）と「意匠及装飾」（美）が一体である関係性を概論で説明することにより、「建築が芸術である」と捉えることができるだけでなく、絵画や彫刻といった他の芸術に対

---

注101) 日本建築学会編『近代日本建築学発達史』（丸善、1972年）の中で、関野克は、当時の講座と教授陣について、「内田〔祥三〕は第二の辰野となり、絶大な指導力を発揮して、建築学の新鮮な分野を開拓し、従前の講義に再考を行なった。かくして昭和5年、第2講座に岸田日出刀、昭和8年7月、第5講座に藤島亥治郎を新任し、昭和10年4月、第3講座に武藤清を当て、第4講座は内田の兼任とした。内田は建築衛生（計画原論）・建築材料・都市計画の3つの講座の開設の必要を力説していたが、講座の新設はきわめて困難であったので、昭和14年建築学第4講座を建築原論に転換し、建築材料と都市計画はこれを一本とて、都市防火を内容とする建築学第6講座の新設を行なった。」（〇 括弧内は筆者）と述べている。

して、建築が優位的な立場に立てると唱えたのである。

このように岸田は、実用性の存在を根拠に、他の芸術分野に対する優位性を語っている。建築が芸術ではなく科学だという工学技術に偏重した意識が台頭していた当時の状況<sup>102)</sup>を振り返れば、優劣を論じまですても、優越感を与えさせ、建築を芸術という範疇に位置づけようとする意図があったと考えられる。

・ローカリティー(特殊性)の説明:歴史的視点の導入

表紙の見返し部分にメモ書きがある。

「材料、構造、配置、法規、各種建築、設備、通風採光、造形意匠(形、色)・仕上げ材量、防災、歴史」とあり、設計計画上の要件が箇条書きしている。冒頭の「構造」は、二重線で訂正され、「材料」と書き換えている。「構造」を構造体となる材料の違い程度にしか捉えていないことがわかる。技術的視点が希薄であることは、「意匠及装飾」の講義原稿の叙述にも表れていた<sup>103)</sup>が、ここにも構造技術的な側面を軽視している建築観が表れている。最後の「歴史」にはアンダーラインが引かれ、その重要性を強調している。他教科にそれぞれを専門とする教員がいる中で、自らが担う「建築計画」の講義方針を模索した痕跡と考えられる。

---

注102) 1915(大正4)年、佐野利器の「家屋耐震構造論」(正式には「家屋耐震構造要梗」と野田俊彦の「建築非芸術論」が発表される。『建築雑誌』に載る「建築非芸術論」は、野田の卒業論文の一部で、佐野利器と共に指導教官であった内田祥三の推薦により掲載されている。野田は、岸田が講義原稿で述べていたように、トルストイの言葉を引用して、「実用品としての建築」を主張し、建築の美と建築の表現性を全面的に否定する。当時の大学と学会を中心に、このような建築が芸術でなく科学だという工学技術に偏重した考え方に共感する者も多かった。根強かった芸術軽視の傾向への反発も一因となって、建築的芸術表現を突出させた分離派建築会が結成される。内田は、歴史様式を使う設計手法を全面否定する分離派の動きに、概して否定的であったと言われている。(藤岡洋保「『科学』から『方法』へ」『建築ジャーナル』(1995年2月号)、藤森照信「佐野利器論」『材料・生産の近代』(東京大学出版会、2005年))

注103) 「意匠及装飾」の講義原稿に書かれているモダニズムの解説について、拙稿(拙稿「講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」(昭和12年)にみる岸田日出刀の建築造形理念-昭和初期の墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する言説に敷衍して-」(日本建築学会計画系論文集、2013年12月))で考察した。簡単性と明快性を専ら「簡明」という形の問題として捉えており、技術的手段に対する視点が希薄であった。



具体的な講義内容は、各建築種別に求められる平面計画上の要件に関する解説や西洋、日本、満州における住宅建築の史的考察の稿へと進んでいく。そのような講義方針の特徴を求めれば、建築種別ごとの平面計画の概説だけでなく、住宅史の叙述によって、住宅の発展を理論的に後付けようとした点にある。住宅史は、西洋と日本を分けて記述し、最後に満州事情案内所が出版した『満州国の習俗』の「住居」の章を要約した「満州住居建築」を附している。

岸田は、通論で繰り返し、自然と人の差異により生ずる特殊性について触れ、建築におけるローカリティーの重要性を主張している。住宅史の叙述を展開していく「住居建築計画」の章の冒頭で、岸田は、「生活の全般を最もよく表出するのは住居建築である。原始時代に於いてまず穴を掘り、天幕を張りめぐらし、或いは樹上に住まひしよく文化進むと共に次第に建築らしい住居建築の発達をみるに至る。過去に於いて住居建築は如何に変化し来つたか」と述べ、「西洋に於ける住宅建築の変遷」を書き出している。西洋と日本の人間生活の容器である住宅の発展過程とその相違を示すことにより、日本の特質を伝え、西欧モデルの模倣が日本では適切でないこと、自然と人の差異により生ずる特殊性の意味を強調する狙いがあったと考えられる。

岸田は、「建築計画」の参考書として、『高等建築学』と『建築工学ポケットブック』をあげているが、いずれも建築種別ごとに必要とされる要件を紹介する技術書であり、岸田の建築計画の講義に見られるような歴史的な視点から住居建築を解説したものではなかった。

## 小結

ここまで、講義原稿と講義要目を対象に、岸田が担当した講義「建築計画」の講義方針とその理論的特質について考察してきた。

岸田は、「計画」を“Planning”ではなく“Design”の和訳として捉え、“建築を計画（Design）する”ための学問として、自らが担当していた「建築計画」ならびに「意匠及装飾」の講義を体系立て、塚本靖から形式的に引き継いだ講義項目を改編させながら、歴史、意匠、計画という性格を兼ね備えた内容の講義を展開していた。

「建築計画」は、実用性を研究するもので、その最終的な目標は、「建築の目的・要求の見極め、その目的・要求が満足する様な手段や方法を見出すこと」であり、「意匠及装飾」は、精神的方面の満足を研究するものであった。建築のデザインを考えるための学問として、二科目が一体のものであると捉えていた。

概論と通論の各章では、野田俊彦による「建築非芸術論」への反駁を意識し、「建築は人間生活の容器」やオットー・ワグナーの「芸術を支配するものは必要だけである」といった言葉を援用し、建築を芸術の範疇に位置づける論理を組み立て、建築を芸術の一分野とみなす立場をとる。

そして、「建築計画」は、人間生活の理解に欠かせない分析として、住宅史が続く構成になっていた。この住宅史という歴史的な視点を導入した「建築計画」の講義を行いさらに「意匠及装飾」と一体のものとして2科目に関連性を持たせながら展開していた建築教育は、講義原稿の内容は、戦前の講義要目に載る授業計画には表れていない。岸田が提示した参考書や塚本の講義にもなかった講義内容であり、当時のカリキュラムにはみられなかった新しい試みであった。

## 第5章

### 「建築の日本趣味」論に対する岸田日出刀の見解

はじめに

第1節 「建築の日本趣味」に関する岸田の言説

1-1. 「学校らしい表現」をめぐる発言

1-2. 実例の紹介による視点の明確化

第2節 報告書『日本的趣味意匠の研究（草稿）』

1-1. 史料の概要

1-2. 叙述内容の分析

我が国将来の建築様式

「建築の日本趣味」論に対する批判

現代建築の発展

欧州に於ける現代建築の発展

1-3. 考察

第3節 ゴルフ場クラブハウスの建築作品

第4節 ベルリン五輪大会の会場視察とナチス独逸の建築統制に対する批判

4-1. ベルリン五輪大会の会場視察と芸術競技への参加

4-2. ナチス独逸の建築統制に対する批判

小 結

## はじめに

本章では、これまで明らかでなかった未発表史料『日本的趣味意匠の研究（草稿）』を中心に、岸田の執筆した「建築の日本趣味」に関連する草稿、原稿類を読み込んでいくことで、「建築の日本趣味」に対して、岸田がどのような見解を示していたのか検討する。

### 一般向け随筆集における「建築の日本趣味」に関する岸田の見解

日本建築界では、大正期の明治神宮宝物館をきっかけに、日本の伝統的建築にみられる斗拱や瓦屋根といった具象的なモチーフを使って表現した「日本趣味建築」と呼ばれる建築物が表れてくる。とりわけ、満州事変（昭和6年）以後の非常時を叫ぶ社会相の反映から日本趣味を建築に表現することが流行し、こうした建築の表現をめぐる、日本建築界では、様々な議論が展開されるようになる。「建築の日本趣味」について、岸田も、1927（昭和2）年から1937（昭和12）年にかけて、自らの主張を随筆集や雑誌記事の中で、数多く発表している。

岸田の「建築の日本趣味」に関する原稿をあげると、以下のとおりである。

- ① 「学校建築と表現」『建築世界』（昭和2年7月）
- ② 「復興建築を見て感あり」『建築世界』（昭和4年1月）
- ③ 「新しい建築の観方」『文藝春秋』（昭和7年1月）
- ④ 「東京の新建築を語る」『葦』（昭和8年8月）
- ⑤ 「東京の新建築を語る」『改造』（昭和8年11月）
- ⑥ 「日本建築史の諸問題」『宝雲』（昭和9年10月）
- ⑦ 「今日の社会相と建築意匠」『葦』（昭和10年3月）
- ⑧ 「日本趣味の建築と今日の社会相」（昭和10年）
- ⑨ 「日本建築の再検討」『日本文化の再検討』（昭和10年8月）
- ⑩ 「東京の近代的建築」『建築の東京』（昭和10年8月）

- ⑪ 「(通俗講演) 1. 東京の建築について」『工學會大會記録』(昭和11年4月)
- ⑫ 「昭和十二年の建築意匠」『藁』(昭和12年11月)

「東京帝室博物館」の設計競技が実施されたのは、昭和6年のことである。この設計競技では、「日本趣味ヲ基調トスル東洋式トスルコト」との規定がきっかけに若手建築家たちがプロテストの姿勢を示し、物議を醸すこととなる。こうした日本建築界における「建築の日本趣味」に関する議論の高まりに呼応するように、とくに昭和7年以降、岸田の発言数が増していることがわかる。そして、東京帝室博物館が竣工した昭和12年以降を境に、「建築の日本趣味」に関する発言は行われていない。

#### 「学校らしい表現」をめぐる発言

管見の限り、岸田の言説における「日本趣味」の初出は、1927(昭和2)年7月の雑誌『建築世界』に掲載された「学校建築と表現」である。この記事が執筆されたのは、関東大震災後の震災復興の一環として、東京市内にRC造の小学校建築が数多く建設された時期にあたる。震災前とは異なる新たな教育思想と耐震性、耐火性の向上が反映され、木造からRC造へと建築の材料が変化したことにより、学校建築をめぐる表現のありかたが模索されていた<sup>104)</sup>。

「かく表出された「学校らしい表現」の結果を、外から内へと見るのではなくて、逆に内から外へと見ることであります。即ち如何なる理由で、そういふ所謂学校らしい相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべきであります。過去に建てられた学校建築の有数なるものを、引き出してきてそれを比較したりなぞして、決定的の学校建築の表現の基準を求たりなずしてはなりません。」<sup>105)</sup>

---

注104) 小林正泰「関東大震災と「復興小学校」 学校建築にみる新教育思想」(勁草書房、2012年)

注105) 岸田日出刀「学校建築と表現」『建築世界』(1927年7月号)

ここで岸田は、建築を「外から内へと見るのではなくて、逆に内から外へと見ることであります。」と述べ、評伝本『オットー・ワグナー』のなかで、時代精神をもって建築をみる姿勢を示し、ワグナーの作品をみる際の注意点としてあげた「作品を表面から解釈してはいけない」と同様の主張をしている。

「今まで建てられた学校建築の著名の実例を列挙して、それらに共通した表現上の特徴を記して、学校建築の形態的規準はこれこれだといふやうな考へ方はよくないと思ふ。さういふ共通点は結果の上からだけ言へば、偶然一致するかもしれないが、もつとしつかりとした必然的の要求から生まれてきたものだといふことをはつきりと知りたいと思ふ。」

106)

そして、岸田は、学校建築に一定の形態的な規準を定めることに反対の意を表明している。表面上の外形的な特徴から学校建築の共通点を見出し、規準を定め、特定の表現に限定させるのではなく、「(なぜ) 相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべき」<sup>107)</sup>である、と述べている。ここには、建築の表現上の共通項を外側のパッケージだけで判断するのではなく、なぜそのような形態に至ったかという理由なり経緯を理解しなければならないという、岸田の理念が表れている。

また、建物の材料に関して岸田は、都市部の学校建築は、耐震、耐火性の観点から鉄筋コンクリートが必要だが、田舎の小学校は木造で差支えない、としている。

「単的に言えば、西洋臭い木造小学校の建物は各農村の郷土性に調和しない。」<sup>108)</sup>

加えて、周囲の環境と調和するという点から、学校建築に郷土性を表現する必要性を主張

---

注106) 岸田日出刀「(学校形態批判) 学校の建物」『郷土教育』(1933年5月号)

注107) 岸田日出刀「学校建築と表現」『建築世界』(1927年7月号)

注108) 前掲注106

している。そして、その郷土的特色の表現に関して、次のように述べている。

「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築にお化粧させるということで、これは三文の価値もないことを心したい。」<sup>109)</sup>

郷土的特色を表現する際の留意点として、「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築にお化粧」することは価値がないと、形の上の部分的な模倣をするような設計行為を戒めている。その具体的な事例として、社寺建築の屋根や九輪など仏塔の装飾をそのまま乗せている奈良の学校や役所といった公共建築をあげている。

「奈良だからと言つて、学校でも役所でも手当たり次第に、お寺や神社の屋根をつけその上に九輪を乗せたりするの類ひである。」<sup>110)</sup>

しかし、岸田は、郷土的特色を表現するのは、「(すぐれた建築家にとっては簡単なことだが) 意匠上相当むづかしいことは確か」と付記しており、その具体的な表現手法については、曖昧な記述で誤魔化している。この段階では、まだ、岸田が理想とする郷土性を表現した建築の事例を示していない。

さらに、岸田は、学校建築の表現という観点からは、一見無関係のようにも思われるが、学校建築の表現を考えるうえで、「非常の暗示と教訓を與へてくれるもの」として、フランク・ロイド・ライト設計の「帝国ホテル」を取り上げている。

ここで岸田は、ライトの「帝国ホテル」の建築表現は、「見て感心しないで過ぎたことがない」、「例えるものがないほど美しいものである」と高く評価しながらも、「大都市の中央に建てられるべき、ホテル建築の意義と、その目的、要求」を正視した場合、「理論的には一顧の価値もない」と述べている。

---

注109) 岸田日出刀「(学校形態批判) 学校の建物」『郷土教育』(1933年5月号)

注110) 前掲注109

「日本趣味を誨へる」とのライトの口は、余りに広い。」<sup>111)</sup>

そして、岸田は「帝国ホテル」の建築表現は、日比谷という大都市の中央に建てられているということを考えると、その建築の意義と目的、要求に合致しておらず、「日本趣味を誨へる」と発言したライトの「口は、余りに広い。」と批判している。(岸田の「日本趣味」の意識には、)

「学校建築の表現」をめぐる岸田の主張を要約すると、以下のとおりである。

- ① 「(何故) 相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべき」
- ② 「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築にお化粧」することは価値がない
- ③ 建築の意義と、その目的、要求に合致していること

「日本趣味」に関する発言の初出は、徐々に建ちあがりつつあった復興小学校や震災と時期を同じくして竣工したライト設計の「帝国ホテル」など、主に震災復興期に建てられた建築の表現を対象としたものであった。

「窓上に唐破風をつけたり、パラペットに丸瓦を並べて、日本を表はし得たといふような浅薄な考へに堕ちてはならぬ。形の上の部分的模倣で日本を表はさうといふのは、ともすれば吾々の陥り易い誤りである。」<sup>112)</sup>

そして、1929（昭和4）年の「復興建築を見て感あり」（『建築世界』）では、「窓上に

---

注111) 岸田日出刀「学校建築と表現」『建築世界』（1927年7月号）

注112) 岸田日出刀「復興建築を見て感あり」『建築世界』（1929年1月号）



唐破風をつけたり、パラペットに丸瓦を並べて、日本を表はし得たといふような浅薄な考へ」と述べ、郷土性の表現が、単なる外形的な模倣になっている奈良の公共建築を批判したのと同様に、単に、唐破風や丸瓦といった日本建築の要素といえる外形的なモチーフを借りてくる「形の上の部分的模倣」を「浅薄な考へ」と批判している。

「日本趣味を誨へる」と発言したライトを批判し、学校建築の表現に対する岸田の種々の主張がみられるのは、1927（昭和2）年という段階である。日本建築界で日本趣味が流行する前の、震災復興期という早い段階において、既に岸田の意識の中に「日本趣味」という「日本的なるもの」の追求に対する考え存在していたことがわかる。また、その当時、日本の建築界に少しずつ流布していた、形の上の部分的な模倣によって郷土性を表現しようとする設計行為に対し、この段階から否定的な姿勢を示していた。

#### 日本建築界に流行していた所謂日本趣味建築に対する批判

昭和初期の日本建築界では、小尾嘉郎設計の神奈川県庁舎が昭和3年10月竣工し、平林金吾設計の名古屋市庁舎（昭和8年9月）、川元良一設計の軍人会館（現、九段会館、昭和9年3月竣工）など、鉄筋コンクリート造の洋風建築に和風の瓦屋根をのせ、日本趣味の表出に挑んだ日本趣味建築が続々と竣工を迎え、徐々に街にその姿を現し始めた。

岸田が、1932（昭和7）年の『文藝春秋』に発表した「新しい建築の観方」では、新しい傾向の建築物を説明する文中において、徐々に街に姿を現し始めた日本趣味建築を対象とした批判が盛り込まれている。

「古い時代のお寺の建築に施された装飾の如きを、今日の鉄筋コンクリート造や鉄骨造の建築に表はして日本趣味の表出に成功したものだなどとは決して言はれません。」<sup>113)</sup>

「大ビルディングの建物に日本趣味を表はそうとして、まねごとの軒屋根がついたり、マス組がついたり、千鳥破風や唐破風がついたりしてゐた場合、我々はそれを日本趣味の

---

注113) 岸田日出刀「新しい建築の観方」『文藝春秋』（1932年1月）

建築として気持よく眺められるでありませうか。」<sup>114)</sup>

学校建築の表現についての文章で、郷土性の表現が瓦屋根や九輪の装飾など、単なる外形的な模倣になっている奈良の公共建築を批判したのと同様に、ここでは、「古い時代のお寺の建築に施された装飾」、即ち「軒屋根」や「マス組」、「千鳥破風や唐破風」といった外形的な模倣で「日本趣味の建築として気持よく眺められるでありませうか。」と否定的な見解を示している。

さらに、

「今日の建築は、構造と材料と諸計画と形体意匠との間の渾然とした融和の上に築かれなければならぬことは言ふまでもありません。」「かやうな融和を求める時過去の日本の建築の表面だけを形式的に模倣再現することだけで能事畢れりとなすのはこの上ない不合理であり、無意義であり、且つ何よりも時代錯誤であります。」<sup>115)</sup>

と述べ、形式的に模倣再現することの非合理であると主張している。「構造と材料と諸計画と建築意匠との間の渾然とした融和」という、材料と構造法によって形づけられる建築の形体の必然性に対し、関心を示している。

そして、1932（昭和7）年に執筆された随筆集『藁』所収の「東京の新建築を語る」では、一般向けに、対話形式で日本趣味建築の問題点を説明している。

B「日本趣味を主張するのが相当の年輩の建築家であり、さういふ建築家によつて今日の日本の建築界の実権が握られてゐるといふことは不思議はないとして、かやうな日本趣味の強要が次々に行はれた大きな懸賞競技設計でされたから耐りません。賞金目当てに我も我もと有能無能の建築家がその場間に合はせの日本趣味の建築をひねり出し

---

注114) 岸田日出刀「新しい建築の観方」『文藝春秋』（1932年1月）

注115) 前掲注114

たわけです。神奈川県庁舎、名古屋市庁舎、高島屋百貨店、軍人会館、東京帝室博物館など、沢山あります。」

A「成功したかね」

B「とんでもない。洋服を着て下駄を穿いたり、ちよんまげをつけたような格好でしたね。名古屋の市庁舎だからといって塔の上に名古屋城の天守を乗せたり、いくら老舗の高島屋だからだと言つて鉄筋コンクリート造九階建の軒のところに唐破風をつけて、それで日本趣味が表現できたら、建築なんて甘いものですよ。(略)」

A「大分憤慨居士だね。でも君、日本の建築に日本趣味を表はさうといふのは理屈として少しも変でも何でもないと思ふがどうなんだ」

B「仰せの通り、日本趣味を求めるといふことは強ち決して悪いことでもなんでもないが、私が憤慨するのは、その手段手法があまりに浅薄だからなんです」

A「そこんところをはつきり訊きたいね」

B「今まで試みられた日本趣味の建築といふのは、みんな過去の古い日本の寺や神社の建築に使はれた末梢的手法を無断借用してそれを無考へに庁舎やビルディングの一部にとりつけるなどといふ建築といふものに対する認識の不足と錯誤を臆面もなくさらけ出したものです。建築の実用性との関連に於いて結果される必然性ある日本趣味でなければ、ほんとの日本趣味の建築とは言へません」

A「大体判つたやうな気がするが、少し抽象的で未だはつきりとしなないね。ではどんなのがほんとの日本趣味の建築か、実例で示してくれないか」

B「僕のいふやうな日本趣味の実例を挙げよと言はれるとこまるが遠くない将来に必らずこれだといふやうなのが示される時期がくると思ふ。日本の気候風土と今日の日本人の精神生活及び物質生活をその根底まで究め、建築の本質を明かにすることにより具現される建築がとりも直さずほんとの日本の建築となるのだといふことだけをはつきり言つておきませう。」<sup>116)</sup>

---

注116) 岸田日出刀「東京の新建築を語る」『叢』(相模書房、1937年)

このように、「東京の新建築を語る」（昭和8年）では「日本趣味の実例を挙げると言はれるとこまるが、遠くない将来に必ずこれだといふようなのが示される時期が来る」と述べるに留まっていたが、「日本趣味の建築と今日の社会相」（昭和10年）では、歌舞伎座、震災記念堂、東方文化学院東京研究所をあげ、「建物とその内容が一致しているもの」には好感をもつとしている。

しかし、決して岸田は、この3つの建築を日本趣味建築の理想としていたわけではない。歌舞伎座は、岡田信一郎の設計によるもので、震災記念堂は伊東忠太、東方文化学院東京研究所の設計は内田祥三である。内田と伊東は、岸田の直接の師であり、ワグナー十年祭を呼び掛け、日本趣味建築の捉え方について賛同するところの多い岡田である。三氏の作品だけ、特別な扱いをしたと見たほうがよい。

そして、『藁』では、渡辺仁「東京帝室博物館」（昭和12年）を写真入りで掲載し、「所謂日本趣味の建築といふものを代表する最も大きな実例の一つ」とし、日本精神に立脚する建築の発展段階の最後、「一つの終止符」と位置付けている。このような見解からは、資材統制の強化などにより、とりわけ民需用の大型建物の建設が困難になっていた日本の建築状況への苛立ちが読み取れる。

岸田は、日本趣味建築を追求することに対して肯定的であったが、当時流行していた歴史的建築の外形的な特徴を模倣再現しただけの所謂日本趣味建築には否定的であった。加えて、材料と構造法によって形づけられる建築の形体の必然性に対する理解が欠如していることも批判の対象であった。そして、昭和12年以降、強化されることとなる資材統制の影響もあり、岸田の理想とする日本趣味建築の具体的事例は現れることがなかった。

## 『日本的趣味意匠の研究（草稿）』について

当史料は、現在金沢工業大学建築アーカイブズ研究所蔵の岸田日出刀資料所収（以下、金工大資料）の史料であり、横23cm、縦31.4cmの横綴じのバインダーファイルで、鉛筆と万年筆で記された原稿用紙190頁で構成されている。ファイルの背表紙に、筆書きで『日本的趣味意匠の研究（草稿）』と表題が記されている。

金工大資料には、『日本的趣味意匠の研究（草稿）』（①）と内容が同様のファイルが3冊存在する。この他に『日本趣味の建築（稿・複）』（②）ならびに『日本趣味の建築（稿）』（③）と表題が記されたファイルが2冊存在する。しかし、いずれも『日本的趣味意匠の研究（草稿）』（①）の手書きの原稿を活字化したものとその写し<sup>117)</sup>となっている。したがって、『日本的趣味意匠の研究（草稿）』が原本と判断できる。

### 執筆された時期について

いつ執筆されたのか、3冊とも文中に年号の記載は全く見られない。昭和11年4月25日の東京朝日新聞をみると、財団法人啓明会<sup>118)</sup>が24日、岸田の「建築における日本的意匠及び装飾の研究」に対し、研究費援助を行うことを発表したと報じている。また、昭和10年度の財団法人啓明会事業報告書の目次欄をみると「七三 建築ノ日本的趣味及ヒ装飾ノ研究（岸田）」と記載されており、昭和11年度と昭和12年度の報告書には、「建築ノ日本的趣味及ヒ意匠ノ研究（岸田）」とある。

他年度の報告書も確認したが、昭和10年度から昭和12年度の3年間の報告書にのみ、岸田の研究概要が掲載されていた。このことから、研究題目の一部を「装飾」から「意匠」

---

注117) 出版社の担当者が、手書きの原稿を紛失した経験があり、岸田は、必ず手書きの原稿を活字化し、写しをつくることを習慣化していた。そのため、金工大資料には、原稿の写しが数多く存在する。

注118) 財団法人啓明会は、赤星弥之助の長男・赤星鉄馬による寄付金によって大正7年8月に設立され、同郷の男爵・牧野伸顕を顧問に、平山成信を理事長として運営された学術振興のための財団法人である。研究費の援助対象は、機械化学から政治経済、文芸美術等の幅広い学術分野に及んでいる。建築の分野では、伊東忠太が、啓明会の助成金を受け、東京美術学校の鎌倉芳太郎とともに琉球芸術の調査研究や東洋芸術に関する講演を行っている。

に変更しつつ、昭和10年11月から昭和12年までの3年間、啓明会から3,000円の研究費を受けていたことがわかる。

これら3冊の記述内容は、表題からも啓明会の研究助成金で行われた岸田の研究報告書の草稿として、昭和11年から12年ごろにかけて執筆されたものと考えられる。

岸田の研究内容を記した財団法人啓明会事業報告書の「事業」欄には、

「古来日本ニ於ケル建築ハ木骨造ヲ旨トシ其構造及意匠方面ニ於テ独自ノ発展ヲナシ、木造トシテハ正ニ世界ニ誇ルニ足ルモノアリ。然ルニ明治維新以後欧米ノ學術文化移入サルルニ及ヒ、建築ノ學術及材料モ面目ヲ一新スルニ至リ、其ノ構造、計画、設備ニ於テ更ニ意匠及裝飾方面ニ於テ、古来ノ伝統的ニ日本建築ノ形式手法ト全ク其傾向特質ヲ異ニスル欧米風ノ建築ヲ発展セシムルニ至レリ。而シテ日本ニハ日本独自ノモノナカルヘカラス。岸田氏斯ニ見ル処アリ先ツ建築ニ於ケル意匠ノ本質ヲ攻究シ、更ニ建築意匠ニ於ケル日本的特質ヲ解明シ、且ツ如何ニシテ今日ノ建築ニ表現スヘキヤヲ研究セント欲セラレ、昭和十年十一月以来、本会援助ノ下ニ之ヲ遂行セラルルコトナリ、目下進行中ナリ。」

とあり、「建築に於ける意匠の本質を攻究し、更に建築意匠に於ける日本的特質を解明し、且つ如何にして今日の建築に表現すべきか」を研究すると紹介されている。

#### 草稿の目次構成

全体の目次構成を表10に示す。

草稿は、「我国将来の建築様式」、「『建築の日本趣味』論に対する批判」、「現代建築の発展」、「欧州に於ける現代建築の発展」の4章からなる。建築学会の討論会で議論された明治の様式論争や大阪市公会堂指名コンペについて、その要点をまとめた〈我国将来の建築様式〉にはじまり、〈「建築の日本趣味」論に対する批判〉では、前章で要約した各氏の所論に対し、岸田の見解を述べ、これまでの議論や主張の問題点を指摘している。最後に、岸田自身の見解を補足する形で、〈現代建築の発展〉、〈欧州に於ける現代建築の発展〉という2

章がつづく構成となっている。

表10 報告書「日本的趣味意匠の研究(草稿)」の内容

<p><b>我国将来の建築様式</b></p> <p>伊東忠太「建築に現れたる日本精神」(昭和10年11月30日、啓明会講演会)                  座談会「我國将来の建築様式を如何にすべきや」(明治43年5月30日)</p> <p>三橋四郎氏所論の要旨                  関野貞氏所論の要旨                  長野宇平治氏所論の要旨                  伊東忠太氏所論の要旨                  佐野利器氏所論の要旨                  中村達太郎氏所論の要旨                  松井清足氏所論の要旨                  大江新太郎氏所論の要旨                  岡田信一郎氏所論の要旨                  古宇田實氏所論の要旨</p> <p>座談会「我國将来の建築様式を如何にすべきや」(明治43年7月8日)</p> <p>曾禰達蔵氏                  新家孝正氏                  横河民輔氏                  酒井祐之助氏                  辰野金吾氏</p> <p>松井貴太郎「日本趣味を論じて将来の日本の建築に及ぶ」(明治45年)                  井出薫「討論会所感」(明治43年8月)                  関野貞「日本建築将来の様式に就いて」(明治42年)                  大塚保治「日本建築の将来」(明治42年)                  伊東忠太「再び日本建築の将来のスタイルに就いて」(明治42年11月)                  大阪市公会堂建築指名競争設計図案(大正元年)</p> <p>「建築の日本趣味」論に対する批判</p> <p>野田俊彦「所謂日本趣味を難ず」(大正6年)</p> <p><b>現代建築の発展</b></p> <p><b>欧州に於ける現代建築の発展</b></p> <p>(一)十九世紀の建築                  (二)古典主義とその建築                  (三)浪漫主義とその建築                  (四)折衷主義とその建築                  (五)建築の新化                  (六)新建築(其の一)                      (二)欧州大戦後                      (三)アメリカの建築</p>
---

<我国将来の建築様式>

岸田は、冒頭で、建築に於ける日本趣味という問題が論議の対象となることについて、

「私は茲で日本精神の検討を深く試みようとは思はない。」と前置きしつつ、「観念的にはまことに尤もな合理的な主張だ」と言い、こうした議論に一定の有用性が認められることを示している。

「日本の建築が日本的の意匠でありたいといふことは、至極結構なことである。西洋流の様式をそのまま借りてくることは、どの道つまらぬことである。日本に建てられる建築に西洋の衣裳をつけて、それで日本の建築であるとすましてゐることは考への足らぬことである。建築の意匠といふものの上では、日本は古くから日本独自の傑れた技法なり傳統をもつてゐるのであるから、何も西洋流の借物をしてくる必要は更になく、日本の建築は日本風の様式意匠で終始したらよいといふ考へなり主張といふものは、筋道の通つた道理ある言分である。観念的にはまことに尤もな合理的な主張だと考へてよい。」

そして、まずその冒頭においても「西洋流の様式をそのまま借りてくることは、どの道つまらぬことである。日本に建てられる建築に西洋の衣裳をつけて、それで日本の建築であるとすましてゐることは考への足らぬことである。」と述べ、建築の表面だけで形式的に模倣再現することを批判している。

つづいて、議事堂建設をきっかけに建築学会にて行われた1910（明治43）年5月30日と同年7月8日行われた明治時代の座談会「我国将来の建築様式を如何にすべきや」を批判的に取り上げ、三橋四郎、関野貞、長野宇平治、伊東忠太、佐野利器、中村達太郎、松井清足、大江新太郎、岡田信一郎、古宇田實、曾根達蔵、新家孝正、横河民輔、酒井祐之助、辰野金吾ら、両討論会に出席した15名それぞれの意見の要旨をまとめている。

まず、岸田は、出席者の意見からその趣旨を、「将来東西の様式が調和して出現したものが我国の建築様式」とみている三橋四郎、伊東忠太、佐野利器、大江新太郎、岡田信一郎、と「将来の建築様式を論ずる必要なし。現今建築にみる様式が即ち我様式」とみた長野宇平治、松井清足、酒井祐之助の二つに分けている。

そして、佐野利器、岡田信一郎の部分では、岸田の見解が示されている。



・佐野利器

「佐野利器氏のみ独りセセッションを賞し、力学美と無装飾美を強調し、更に現代の建築は簡単を旨とすべきことを主張しているのは敬服に値する所論であるが、日本建築の細部を応用するという点で少々論理の不徹底さがある。」

岸田は、佐野がセセッションを讃えていることや力学美と無装飾美を強調し、現代の建築は簡単を旨とすべきと主張している点には、賛同しているが、日本建築の細部を応用するという意見には、賛同していない。岸田は、瓦屋根の形体などが、なぜそのように形づけられてきたか、その構造と材料、そして風土的特異性による必然的な関係を見ることを重視していた。それゆえ、佐野の「力学美」を強調している点に賛同している。また、「無装飾美」を強調している点には、モダニズムの時代精神と合致する理念を明治期から主張していたという点を評価している。一方で、具象的なモチーフを借り、日本建築の細部を応用するという箇所は、「少々論理の不徹底さ」があると否定的であった。

・岡田信一郎

「漠然とはいしめるが、過去の日本の建築を深く研究して如何なるものが日本建築の特徴かといふことを再検討すべきだと言ってゐるのは、蓋し卓抜の見解である。この卓抜の見解も具体的の説明がないので点睛を缺く憾みがあるが、言外に斗拱の建築を直ちに日本的特質と考へることの誤りを示唆してゐる點は、具眼の論として敬服に値するものがある。」

岸田は、岡田の主張する意見に全面的に賛同している。「過去の日本の建築を深く研究して如何なるものが日本建築の特徴かといふことを再検討すべきだ」という日本建築の再検討を求めていること、「斗拱の建築を直ちに日本的特質と考へる」という外形的なモチーフをそのまま日本的特質と捉えることの誤りを指摘していることを高く評価している。

そして、1912（大正元）年に行われた「大阪市公会堂建築指名競争設計図案」を取り上げている。この設計競技における提案が「日本ルネサンス式とも言うべき安易な意匠に甘んずるという状態」であったと評し、当時の建築様式の探求における限界を示している。

#### <「建築の日本趣味」論に対する批判>

つぎに、<「建築の日本趣味」論に対する批判>について検討したい。岸田は、<我国将来の建築様式>の章で、明治・大正期の議論を概観し、「建築発展段階にあった当時の日本では、結論に到底辿り着かなかった」として、これまでの将来の建築様式の探求方法に対し、主に以下の問題点を指摘している。

1. 当時欧州において新興の一路を邁進しつつあった新建築運動への関心と理解とが殆どなされていない。
2. 日本は最早や西洋の建築を吸収してしまったと豪語していたが、欧州における19世紀中葉の跡をたどる程度だった。（日本ルネサンス式とも言うべき安易な意匠に甘んずるという状態）桃源の夢をむさぼり過ぎていた。
3. 西洋の過去様式と日本の過去様式の中を彷徨して将来の日本の建築を求めようとしたのが、当時の所謂日本趣味建築への探求方法であった。
4. 「将来」の日本の建築の基本となるべき構造材料に対する確固とした見通しがはっきりと正しくついていなかった。
5. 西洋の建築とか日本の建築とかにみられる過去の様式を考へる場合にあって、外形的に形作られた建築の形式そのものを主要の拠点とするといふことは決して当を得たものではない。
6. 即ち過去の建築様式発生の理由なり経緯を明らかにして、或土地の或時代の建築様式は此の如くしてできたものであるといふことへの理解が必要であり大切なのであって、できてしまった個々の建築様式を詮議するのは、尠くも現在又は将来の建築様式を論じよ

うといふ場合にはあまり意味のないこと。

7. 建築の意匠と言へば西洋の過去様式と日本又は東洋の既成様式だけが取り上げられ、これら二つのものを如何に按配し組合せて所謂日本趣味の建築をつくり出さうとしても、それは無理でありまた今日の日本としては意味のないことである。

### <現代建築の発展>

また、岸田は、こうした過去の議論や主張での問題点として、「新建築運動への関心と理解とが殆どなされていなかった」こと、「過去の建築様式発生の理由なり経緯を明らかにして、或土地の或時代の建築様式は此の如くしてできたものであるといふことへの理解が必要」であることを指摘し、今後とるべき将来の建築様式の探求方法として、以下の3点を検討事項として掲げている。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>(一) 現代建築の発展</li><li>(二) 日本建築の再検討</li><li>(三) 日本の風土的特異性と建築の関係</li></ul> |
|--|

岸田は、将来の建築様式を論じる必要性を主張しつつも、従来の議論を批判的に取り上げている。安易な折衷や表面上の形相を借りてきた過去の建築様式の模倣再現だけでは、今日の建築にとって、構法、材料との不一致が生じ、その踏襲再現の妥当性が認められないといった点に、岸田が強い問題意識を抱いていた様子が読み取れる。特に、構法、材料という観点に対し、それまでの建築様式の議論とは異なる新たな近代性を見出している。

草稿は、検討事項Ⅰに取り組むように、アメリカの高層建築にも触れている<欧州における現代建築の発展>の章へと続いている。

その一部は、自身の博士論文である『欧州近代建築史論』や『高層建築』（三省堂）といった同時期に出版された著書を引用している。また、写真集『過去の構成』の巻頭文から、

昭和 13 年に相模書房から再版した際に、この助成金の一部が用いられていることが判る。

## ゴルフ場のクラブハウス

都市計画家の笠原敏郎、福田重義、井坂富士雄の三氏に手解きを受けて以来、岸田日出刀が生涯にわたり親しんだスポーツにゴルフがある<sup>119)</sup>。当時、春夏二回行われていた建築家のゴルフ大会では、横川民輔寄贈の優勝杯をめぐる毎回数十名の参加があった。学生の間にもゴルフ部ができるなど、徐々にゴルフの大衆化が進んだ時期であった。

多芸多才で囲碁やテニスなどもアマチュアの域を超えた腕前を持っていた岸田は、ゴルフでも日本選手権競技に出場するほどの実力をもった人物であった。戦後は、建設大臣杯をかけて毎年行われた建設業界人のゴルフ大会の委員を務める<sup>120)</sup>など、ゴルフへの関心が強かった<sup>121)</sup>。

戦時体制下の中断期を除き、計画案を含む生涯で10件のゴルフ場クラブハウスを設計している。戦時下の昭和19（1944）年には、すべてのゴルフ場が陸軍等に接収される。食糧難を切り抜けるためゴルフコースが畑にされるなど、余暇活動に厳しい目が向けられ、ゴルフは中断を余儀なくされる。そのため、岸田が設計したゴルフ場のクラブハウスも戦中期には建てられず、戦前と戦後に集中している。

1931（昭和6）年に赤羽の荒川沿いに建てられた帝国大学の同窓会組織「学士会」のゴルフ場「学士会ゴルフクラブハウス」を筆頭に、戦前に4棟、戦後に6棟がある<sup>122)</sup>。

---

注119) 昭和9年に書かれた文献に「7年前に」とある。したがって、28歳頃に学生時代から続けていたテニスからゴルフに転向したと考えられる。

注120) 主催者の運営方法に不服を示し、途中で委員を辞退している。

注121) 岸田は、東京五輪の施設委員としてベルリンに視察に行った際、現地で開催された芸術競技の建築部門に参加している。自らが設計したゴルフ場のクラブハウスの写真と図面をまとめた「Golfing in Japan」を出品している。

注122) このうち2015年現在、現存するものは、「日立カントリークラブハウス（現、大甕クラブ）」（1936）、  
「戸田カントリークラブ」（1960）である。「湯河原カントリークラブハウス」（1956）は、平成6年に改築されたが、円筒状のレストラン部のみ部分的に現存している。

- 戦前

1931（昭和6）年	学士会ゴルフクラブハウス（赤羽）
1934（昭和9）年	山中カントリークラブハウス
1934（昭和9）年	武蔵野カントリークラブハウス（六実）
1936（昭和11）年	日立カントリークラブ

- 戦後

1956（昭和31）年	湯河原カントリークラブ
1957（昭和32）年	湯元八幡町ゴルフコース
1959（昭和34）年	唐沢カントリークラブハウス
1960（昭和35）年	戸田カントリークラブハウス
1963（昭和38）年	嵐山カントリークラブ
1964（昭和39）年	東陽城カントリークラブハウス（計画）

ゴルフ場クラブハウスの意匠に関する岸田の言説

岸田は、雑誌『国際建築』（昭和9年6月号）に「クラブハウスのデザイン」と題した記事を寄せている。この中で、日本のゴルフ場クラブハウスの意匠について、以下の4つの傾向がみられるとしている。

- |              |                |
|--------------|----------------|
| (1) 国際建築風のもの | (2) スパニッシュ風のもの |
| (3) 普通の洋風のもの | (4) 日本民家風のもの   |

ゴルフ場のクラブハウスに適切な意匠は、「(1) 国際建築風のもの」と「(4) 日本民家風のもの」であると述べている。更に「(1) 国際建築風のもの」は、鉄筋コンクリート造である場合に良い形式であり、ゴルフ場のクラブハウスは市街地の建築物ではなく火災等類焼の危険性がほとんどない上、大体ヒュッテの場合と同じであることから、「(4) 日本民家

風のもの」の木造とすることが好ましいと述べている。

また、「ゴルフというものの性質やゴルフコースの風致といふやうな方面から考えて、その土地々々の郷土色をよく出した所謂ひなびたものがよいと思ふ。」とも言い、暖房といった設備も近代的な温水暖房やマントルピース式のものより、田舎風のいろいろの方が好ましいとしている。

アントニン・レーモンド設計のゴルフ場クラブハウスに対する岸田の評価

加えて、岸田は、アントニン・レーモンド設計のゴルフ場クラブハウスを取り上げ、ゴルフに精通しているからこそ可能な、平面計画と意匠面での完成度の高さを評価している。

「東京ゴルフ倶楽部のものは、レイモンド氏会心の作でその意匠は最もモダン清新なものである。他の藤沢、我孫子及相模のクラブハウスもレイモンド氏の設計であるが、東京ゴルフクラブのものとはまた別の傾向の意匠で、藤沢のはスパニッシュ風であり、我孫子と相模のものは民家建築等に見る日本の郷土色をかなり強く表出したものである。」<sup>123)</sup>

横浜の政財界人を中心に発足した藤沢カントリー倶楽部（昭和7年）のクラブハウスは、レーモンドによる設計で、屋根に緑色のスペイン瓦をのせたスパニッシュ風の建物である。また、レーモンドは、我孫子や相模で民家建築の特徴を活かしたクラブハウスを設計している。

「レイモンド氏の設計に成る各クラブハウスが、その平面も意匠もすぐれておるといふのは、同氏が優秀な建築家であるばかりでなく、更に長年クラブライフを経験したよいゴルファーであるからだとも思ふ。」<sup>124)</sup>

---

注123) 岸田日出刀「クラブハウスのデザイン」『国際建築』（1934年6月号）

注124) 前掲注123

と述べ、ゴルフに精通した人物の配置計画であると評価している。

また、霞ヶ関カンツリークラブ（昭和4年）の建物は、レーモンドの設計ではないが、繰り返し触れており<sup>125)</sup>、「民家風の特徴を巧みに按配した佳作であり、日本の景色にマッチする。」としている。

部屋の配置や仕切りについては、「クラブハウス等では特別に嚴重に部屋を仕切るといふことはよいことではなく、実際使用上からはがらんとしたやうな配置の方が好ましいものと思ふ。」と述べている。

戦前に岸田が設計したゴルフ場クラブハウスの特徴

#### - 学士会ゴルフクラブハウス（赤羽）

東京市王子区志茂町荒川放水路の河川敷に建てられた学士会ゴルフ倶楽部のクラブハウスである。現在の東京都民ゴルフ場のある場所で、内務省から無償で荒川と隅田川の間にある中州状の河川敷10万坪を借り、コース用地とし、東京帝国大学農学部講師で満鉄嘱託の折下吉延のコース設計による9ホールのコースが造成された。1931（昭和6）年11月に開場した。コースの全長は2725ヤード、パー34で、打ち放し練習場と160ヤードのアプローチ練習場を設けた。翌1932（昭和7）年、会員からの要望でコース改良を行い全長3130ヤード、パー35になった。33年には会員が急激に増加して9ホールでは狭くなったので18ホール、全長6490ヤード、パー72の本格的なコースに拡張された。しかし戦争の影響で他のゴルフ場同様に1943（昭和18）年閉鎖されている。クラブハウスの建物は戦後まで残存していたが、コースは食糧難を補うための農地として完全に転換された。

入会資格が帝国大学の卒業生の同窓会組織である学士会の会員に限られていたが、東京近郊のゴルフ場の入会金が、200円から1000円の時代に学士会ゴルフ倶楽部は、入会金25円で会員を募集した。昭和9年ごろの入会金は、普通会员が50円、週間（平日）会員

---

注125) 『技術日本』といった専門雑誌にもゴルフ講座を連載していた。そのなかで、「霞ヶ関カンツリークラブ」の建物に言及している。



が30円、普通会员の年会費が24円であったという。グリーンフィーも会員30銭、会員家族50銭、ビジター2円（休祭日）1円（平日）と安価であり、インテリ層へのゴルフの普及に貢献した。物理学者・寺田寅彦の「ゴルフ随行記」には、昭和9年6月末に学士会ゴルフ倶楽部を訪れた際の感想が記されている。「クラブの建物はいつか覗いてみた朝霞村のなどに比べるとかなり謙遜な木造平家で、どこかの田舎の学校の運動場にでもありそうなインテリ気分のものである。休憩室の土間の壁面にメンバーの名札がずらりと並んでいる。」（昭和九年八月『専売協会誌』）と、建築には門外漢の寺田にとってはあまり新鮮な印象はなく、ありきたりの建物に見えたようである。岸田も学士会ゴルフ倶楽部の特徴について「学士会ゴルフ倶楽部の赤羽コースは三つの大きな特徴がある。ゴルフが安く楽しめること、をそらく日本中で、一番長いコースといふことである。日本のチャンピオンシップコースの標準全長は十八ホールで六千六百ヤード位であり、赤羽のコースはその標準には達しないのだが、兎に角荒川放水路に沿ふた謂はゞ鰻の巣のやうに細長いコースで、この意味で日本一長いコースの誇りを持つてゐる訳だ。学士会員が安直にゴルフがやれ、且つ東京に近いのが何よりで、時には朝出勤前に行き、四時過ぎに勤めがすんでから又出かけるといふやうな熱心な人もある位である。」<sup>126)</sup>と語っており、東京から近く、安価で楽しめるゴルフ場であると紹介している。学士会ゴルフ倶楽部は、河川敷ゴルフ場の見本となっただけでなく、多摩、浮間ヶ原ゴルフ場とともに、昭和6年ごろから加速する日本のゴルフ大衆化の一端を担ったゴルフ場でもあった。

河川敷の土手を越えた敷地にあるため、岸田は、当初、クラブハウスを3階建てすることも計画していたようである。金沢工業大学に残る図面には、3階建てで設計し、土手までアクセスするための歩道橋が接続している案も残されている。最終的に木造のロッカールーム棟に、民家風のクラブハウスが接続する形が採用されている。クラブハウスの主屋には、談話室が設けられ、天井が張られている。テラスがあり、ガラスの引き戸を多用した開放的な造りは、その後の岸田のゴルフ場クラブハウスにも共通することである。

---

注126) 岸田日出刀「東京近傍のゴルフ場」『技術日本』（1937年4月号）

### - 山中ゴルフ場クラブハウス（富士ゴルフ場）

富士山周辺のリゾート開発の目玉として計画され、山梨県で初めてのゴルフ場として1935（昭和10）年に開場した。富士山麓、山中湖畔の溶岩台地40万坪を切り拓き、明石和衛<sup>127)</sup>のコース設計による18ホール、全長6507ヤードのコースが造成された。明石は、日本最高記録を保持した陸上短距離のスプリンターで、教育用模型の製造した明石製作所創業者でもある。スポーツの分野でも活躍した産業人という異色のコース設計者が手掛けた。昭和21年から昭和27年までは、アメリカ進駐軍に接収されたが、昭和35年に2番目のゴルフ場ができるまで山梨県唯一のゴルフ場であった。戦後、株式会社富士ゴルフ倶楽部に改組され、再出発し、現在も「富士ゴルフコース」として存続している。岸田設計のクラブハウスは、昭和46年には、ロビーとして使われていたが現存しない。岸田は、戦後、ゴルフ場と山中湖の間に造成されたコース真横の敷地に別荘を構えていた。

クラブハウスは、茅葺の民家風のもので、ゴルフコースが一望できるよう、敷地の傾斜による高低差を利用した板張りのテラスが設けられている。

### - 武蔵野カントリー倶楽部（六実）クラブハウス

東京・多摩の平山に作られた武蔵野カントリー倶楽部が、会員増加により手狭となり、千葉県松戸市に移転したのが武蔵野カントリー倶楽部の「六実リンクス」である。所在は、千葉県であるが「武蔵野」の地名を冠していた。大谷光瑞の弟であり、日本ゴルフ協会（JGA）創立にも尽力した大谷光明がコース設計を行い、1926（大正15）年10月に9ホールで開場した。翌27年9月には、18ホールとなった。移転当初の会員は100人程度であったが、その2年後には700人弱に増加。六実に加え、隣接する藤ヶ谷に更に18ホールを拡張した。武蔵野カントリー倶楽部は日本で始めて、一つの倶楽部で36ホールを併有し

---

注127) 明石和衛（1888 - 1956）：明治21年生まれ。1913（大正2）年、東京帝国大学機械工学科を卒業する。日本陸上競技選手権大会の第1回、第2回の優勝経験を持ち、短距離走の日本最高記録を有した陸上選手だった。1916（大正5）年、27歳で明石製作所を創業。極東オリンピックチームの監督、精密工学会の会長・副会長を歴任する。1944（昭和19）年には、工学博士の学位取得している。

たゴルフ場であった。藤ヶ谷コースのクラブハウスは、高橋貞太郎が設計したスパニッシュ風の建物で、1931（昭和6）年に竣工した。拡張後は、ますますメンバーも増え、1940（昭和15）年の時点で約1500人を有した。戦前の日本で、最も会員数を擁するゴルフ倶楽部に成長した。岸田も武蔵野カントリー倶楽部の会員であり、毎週日曜日になると上野から常磐線に乗り、松戸駅まで出掛けていた。六実、藤ヶ谷ともに、1944（昭和19）年、陸軍用地として強制徴用を受けて閉鎖。解散を余儀なくされ、そのまま歴史の幕を閉じた。

六実リンクスは、1926（大正15）年に開業しており、既に簡素なクラブハウスが存在した。岸田は、1934（昭和9）年、このクラブハウス主要部分の拡張を手掛けた。そのため、建物北側にある既存建物に接続するような形で建設されている。既存建物に事務室、ロッカールーム、洗面所、トイレ、風呂などが置かれ、岸田が増築したクラブハウスには、ラウンジ、厨房、バー、女性室、食堂、テラスが設けられている。東に別棟でキャディー室があり、南東にあるロータリーで下車したプレーヤーが、岸田の設計したクラブハウスを通り、奥の既存建物のロッカールームに向かう動線となっている。

岸田が、この六実のクラブハウスの設計について「農家風の意匠でテレース部はこけら板葺、本屋屋根は大部分茅葺で棟と切妻部は一部瓦葺である。平面計画の上ではテレース部分を思ひ切り広くとり、ここで打ち寛ろぎながらコース全体を見渡せるやうにした。食堂と談話室も特別に仕切らず、床の高低で僅かに区別したに過ぎぬ。クラブハウス等では特別に厳重に部屋を仕切るといふことはよいことではなく、実際使用上からはがらんとしたやうな配置の方が好ましいものと思ふ。」<sup>128)</sup>と述べているように、全面にガラス戸が張り巡らされ、内部も間仕切りがなく、囲炉裏を中心に、談話室と食堂の間仕切りも段差と床材の変化のみで、開放的なつくりとなっている。屋根は、大部分が茅葺で、棟と切妻部を瓦葺とする大和棟である。

---

注128) 岸田日出刀「クラブハウスのデザイン【図版参照】『国際建築』（1934年6月号）

## - 日立カントリークラブ

日立ゴルフ倶楽部（現、大甕クラブ）は、日立製作所の工場群のある日立から南に6 kmほどの茨城県日立市大甕町にある。日立製作所の創業社長である小平浪平がゴルフ愛好家であったこともあり、同社の私有ゴルフ場として1936（昭和11）年10月11日に開場した。茨城県初のゴルフ場で、井上誠一設計による18ホール（パー74）の本格的なコースとしてであったものの、戦時中に農場となった。戦後、再開され、現在は敷地の約半分、8ホールが残されている。当時としては珍しい太平洋沿岸のオーシャンビューゴルフコースであった。

日立製作所の社宅などの設計に関与していた内田祥三の関連で<sup>129)</sup>、岸田が、この日立ゴルフ倶楽部のクラブハウスを設計している。岸田が設計した戦前のゴルフ場クラブハウスのなかで、唯一現存<sup>130)</sup>している。戦後、茨城国体の際に昭和天皇の宿泊所となり、その際に木造のロッカールーム棟が取り壊され、新たなエントランスと宿泊棟が増築されているが、主屋と付属の木造の宿泊棟部分は、残存しており良好な状態で維持されている。

戦前のゴルフ場クラブハウスの作品は、いずれも木造である。主張の通り、民家建築の特徴を活かした意匠となっている。屋根の仕上げはそれぞれで異なり、学士会、山中、六実では越屋根（煙出し櫓）がみられ、山中や日立の屋根には千木がある。民家建築、神社建築等の形式と相通する点がみられる。岸田は、六実の設計に際し、「農家風の意匠」を意識したと述べており、テラス部はこけら葺き、屋根は茅葺で軒などを部分的に瓦葺にするなどの工夫もみられる。山中と六実では、化粧屋根裏天井とし、構造体を露わにしている。

山中や日立ではゴルフコースが一望できるよう、敷地の傾斜による高低差を利用した板張りのテラスが設けられている。いずれのクラブハウスも各居室を細かく壁で区切ることなく、ガラス戸を多用し、開放的な空間構成となっている。六実と日立では、外構に泉池を設け、内外部の空間に連続性を持たせている。

---

注129) 東京都公文書館蔵の内田祥三文庫には、この日立ゴルフ倶楽部のクラブハウスの図面が数多く残されている。

注130) 2015年現在

岸田は、郊外のゴルフ場では、木造で日本の民家建築の特徴を活かしたクラブハウスを理想としていた。

岸田は、昭和 11 年に民家建築に対する感想を残している<sup>131)</sup>。民家を造るのは建築家ではなく大工であり、「特別な意匠をふるうわけではなく謙譲な素直な気持ちでその土地々々の昔からの仕きたりに忠実に従っている。」と述べ「都会の建築によくみる焦燥やこれ見よがしの作為がない。」と民家建築を評価している。また、「民芸建築とは建築における<sup>132)</sup>のことであろう。建築における<sup>132)</sup>は何かと考え廻したら農民建築がこれに該当する。」<sup>132)</sup>と述べている。

民家建築を志向した背景には、霞ヶ関カントリークラブでの民家風クラブハウスの体験だけでなく、「モダニズムと伝統をどう建築に織り込むか」という課題が考えられる。岸田は「建築の特殊性がローカリティーに基因すると考へる以上、時代が如何に変化しても、かかるローカリティーから起った正しい伝統といふものは、建築から決してなくなる。」と述べている<sup>133)</sup>。「建築が次第にインターナショナルの特徴と性質をもち、国際建築というような名で呼ばれる傾向がみられる」ことは認めているが「土地々々の人の生活に起因する建築の特殊性」を無視した意匠には否定的であった。

ゴルフ場クラブハウスの意匠に、民家建築の特徴を抜きがたく表出しているのは、ゴルフ場の風致との関係だけでなく、ローカリティーによる建築の特殊性を重要視していた岸田の建築観の表れと考えられる。

---

注131) 岸田日出刀「日本の民家」(『ホーム・ライフ』, 1936年3月号)

注132) 「手工的な民芸はよいが機械的工作から成る工芸品は駄目だといふのは時代を無視した錯誤」であり、「民芸は趣味としてそのよい点を認め、その発展をはかるといふのなら筋も立つ。」とし、機械的工作からなる工芸品にも理解を示している。

注133) 岸田日出刀「建築における特殊性：モダニズムと伝統の交流」(『セルパン』, 昭和10年3月号)

## ベルリン五輪大会の会場視察とナチス独逸の建築統制に対する批判

ベルリン五輪大会の会場視察と芸術競技への参加

### ベルリン五輪大会の会場視察

1936（昭和11）年6月、選手団の本隊とともに出発した岸田は7月3日にベルリンに到着し、10月17日に帰国するまで、ベルリンオリンピック大会の競技場視察に向かう。岸田にとって、10年ぶりのベルリン訪問であった。

### 芸術競技への参加

当時のオリンピック大会では、スポーツ競技とともに芸術競技が行われていた。建築、文学、音楽、絵画、彫刻などの5つのカテゴリーに分けられ、1912年のストックホルム大会から1948年のロンドン大会までの7大会で実施された。この芸術競技大会もスポーツ競技と同様に金銀銅メダルで評価される。全7回の大会中、日本のメダル受賞は少なかったが、1936年のベルリン大会で2つのメダルを受賞している。画家の鈴木朱雀による「古典的競馬」と藤田隆治による「アイスホッケー」の絵画作品である。いずれも銅メダルであった。そして、長谷川義起の彫刻「横綱両構」と、江文也の音楽「台湾の舞曲」の2点が等外佳作として入選している。

これら受賞作を含めた出品候補は、1936年の2月から3月にかけて部門ごとに作品が募集され、審査の後、東京府美術館にて3月29日から4月3日まで国内展覧会が行われた。

『日本美術年鑑』（東京文化財研究所、1936年3月）の記録によると、「出品総数193点の中、日本画3点、洋画11点、版画15点、彫塑1点、合計30点を入選と決定、その外に審査員等無鑑査の作品を加へて都合絵画63点、彫刻11点、建築5点、総計79点」が競技に参加することとなったとある。そして、1936年4月12日、無償輸送を申し出た郵船の照国丸で、横浜からベルリンに向け発送されている。

芸術競技大会の会場は、オリンピックと同時開催されたベルリン博覧会の会場内にあった。長辺120メートル、短辺32メートルの細長い矩形の建物で、全体で面積は、3840㎡

の広さである。エントランスホールを囲うように小部屋が配置され、さらに奥に連なるように各国のブースが配置されている。全体で24か国が参加し、日本部は、会場経路での後半にあたる比較的広い256㎡の一室が充てがわれた。ベルリン博覧会の会場内ということもあり、博覧会の観衆で、同時に芸術競技展覧会を観る者も多かったという。岸田の撮影した会場内の写真<sup>134)</sup>を見ると、日本部のブースの中央には、長谷川義起の彫刻「横綱両構」が置かれている。什器のなかに彫刻作品が置かれ、壁面に絵画や建築のパネルが張られている。

ベルリン大会の前大会であるロサンゼルス大会（1932年）の建築部門には、小林政一が「水泳場 - 神宮プール」と「野球場 - 神宮球場」を、そして石原憲治が「国際文化都市」が出品している。そして、1936年のベルリン大会の建築部門には、内田祥三「弓場」ならびに「プール」、岸田日出刀「日本のゴルフ」、石川純一郎の「野球塔」の5点が出品された。いずれもオリンピック大会に合わせて、スポーツ施設の建築作品が出品されていることがわかる<sup>135)</sup>。

岸田と内田の東京帝国大学勢の作品が出品されるに至った背景は不明だが、『日本美術年鑑』<sup>136)</sup>の記録によると「審査員等無鑑査」の作品に数えられる。東京誘致委員会の小幹事会を務めた内田祥三と小林政一が出品機会を前回大会と分け合ったのか、競技場調査委員として岸田のベルリンへの渡航が決まっていたことや、会場設営を行うなどの役割を担ったからかもしれない。石川と岸田もラトー建築会でともに活動した同期の友人である。しかし、ロサンゼルス大会、ベルリン大会ともに、1940年の東京大会実現に向けて、対外的に少しでもよい印象を残したいという意気込みもあったと思われる。とりわけベルリン大会の直前には、延期されていた次回大会の開催地を決める投票もあった。芸術競技大会の建築部門も決して軽視されたものではなかっただろう。

内田の「弓場」と「プール」は、東京帝国大学の弓道場の写真とプールの平面図と写真で

---

注134) 日本大学理工学部建築学科建築史・建築論研究室蔵

注135) 岸田日出刀「第十一回オリンピック伯林大会 芸術競技調査報告」『オリンピック芸術競技参加記録』（大日本体育芸術協会、1936年）

注136) 『日本美術年鑑』（東京文化財研究所、1936年3月）

ある。石川純一郎の「野球塔」は、夏の甲子園20回大会を記念して大阪の甲子園付近に建てられた野球塔の写真と平面図である。岸田の「日本のゴルフ」には、左上に「GOLFING IN JAPAN」の文字が掲げられ、その下にゴルフボールに日本地図を写したイラスト、そして岸田が設計してきた山中カントリークラブハウス、武蔵野カントリークラブハウス（六実）の写真が、8葉配されたパネルとなっている。雄大な富士山の全景を眺めることができる丘陵地に建てられたクラブハウスの写真やテラス、構造体が露わとなっている内部空間の写真が選ばれている<sup>137)</sup>。

#### 主会場敷地候補をめぐる論戦

岸田は、7月3日の到着から10月まで約3か月間滞在したベルリンでのオリンピック大会会場視察を終え、1936（昭和11）年10月17日、帰国する。ベルリン大会の直前に行われたIOC総会での投票で、次回のオリンピック大会の開催都市が東京に決まったが、まだ東京では主会場をどこの敷地にするのか最終決定がなされていなかった。この主会場をめぐる論戦の真ただ中に帰国した岸田も、主会場をめぐる問題に意見を発信するようになる。そして、各方面でのベルリン大会の視察報告、会場計画案の提示、連日にわたる組織委員会の会議出席など、多忙な日々を送る。

東京大会の主会場は、当初、東京市が提案し、強硬に推した月島案をもとに誘致活動が行われていた。しかし、月島では、東京湾から吹き付ける海風が競技に与える影響や市内からの交通の便の悪さが懸念され、さらには同時開催を予定していた紀元2600年記念日本万国博覧会の会場と近接することから、万博との共催にIOCが難色を示す可能性などの問題視されていた。さらに、大日本体育協会と東京市の足並みにはずれが生じていた。皇紀2600年の記念事業として推進していた東京市に対し、大日本体育協会は、明らかに世界的な水準から立ち遅れている日本スポーツ界の実情からオリンピックの開催は時期尚早と判断し、誘致に必ずしも積極的ではなかったからである。そして、大日本体育協会からは、月島での

---

注137) 岸田日出刀「第十一回オリンピック伯林大会 芸術競技調査報告」『オリンピック芸術競技参加記録』（大日本体育芸術協会、1936年）



開催は万全な案ではないとの意見が出され、別会場が検討されることとなった。

東京市の方針に真っ向から反対した大日本体育協会は、月島案の対抗として神宮外苑案を強く主張し、これを基に急遽、誘致委員会案が作成された。IOC 会長であったラトゥール伯爵の来日時にも、神宮外苑案での説明が行われ、視察を行ったラトゥール伯爵の支持を得ていた。しかし、この誘致段階での神宮外苑案には、既に明治神宮体育会会長の阪谷芳郎から難色が示され、東京市長の牛塚虎太郎も神宮外苑以外の場所を考慮するべきとの意見を出していたため、言わば会長来日に合わせたその場しのぎの仮決定とも言うべきもので、場合によれば変更もあり得るといった条件が付けられていた。

そのような曖昧な主会場の敷地決めのまま、ベルリン大会の直前に次回開催都市が東京に決まったが、喫緊の課題は、主会場をどこにするかであった。岸田が競技場視察を終え、帰朝直後の朝日新聞には、「オリンピック東京大会 “神宮外苑は駄目だ” お土産話をトランクに一杯 爆弾を抱いて帰朝した岸田博士」<sup>138)</sup>と題された記事が掲載されるなど、主会場をめぐる論戦に対し、メディアが注目を寄せていたことがわかる。『神宮外苑は駄目だ』とあるように、帰国後の岸田は、誘致委員会案の無謀さを暴露し、真っ向から神宮外苑案に反対する。ベルリン大会の観衆の円滑な誘導を支えた交通網、広大な会場敷地とそこに設けられた祝祭性を生み出す広大な広場を視察してきた岸田は、神宮外苑の限られた敷地の中で、10万人収容のスタジアム建設方針は、到底実現することが不可能であると異を唱えたのである。このような大日本体育協会の方針に反する意見は、協会に関係する立場の者は、思っただけもなかなか口に出せないような状態にあった。さらに岸田は、神宮外苑の誘致委員会案に対し、その後、敷地と予算の問題、そして狭い敷地に10万人収容のスタジアムを建設した場合、スタンドの高さが周囲の神宮外苑の風致に与える影響などの懸念を示した<sup>139)</sup>。

1936（昭和11）年12月24日、徳川家達を委員長とする組織委員会が結成される。岸田は、準備にむけた会場調査員として、岸田日出刀、小林政一、郷隆、田中徳次、千葉熊治、前田賢次の6人のうちの一人として依嘱された。この会場調査員は、主会場の敷地問題

---

注138) 『東京朝日新聞』（昭和11年10月19日）

注139) 岸田日出刀「第12回オリンピック東京大会会場論」『建築雑誌』（1937年5月号）

の解決のため設けられたもので、主会場ならびに選手村の候補敷地を实地検分し、報告書を提出する役割が課せられていた。1937（昭和12）年1月9日の初会合の場において牛塚副委員長は、「主会場は観覧者10万人を収容し得るを限度とし、之に接近して自動車の置場交通路を除き準備運動場及集合場のため最小限度1万坪の広場を要すること。球技場は約5万人、水泳場は約3万人、体育館は予備のものと共に各5000人の観覧者を収容し得る程度」との要項を満たすよう会場調査員に要求した。神宮外苑の誘致委員会案は、ラトゥール伯爵との公約であるとの意見もあったが、候補地と対案が出され、ひとまず再検討することとなる。午後には、岸田ら会場調査員が自動車3台に分乗し、代々木、駒場、下高井戸、芝浦の实地検分に早速出かけている。その他の候補地については後日、实地検分を行い、1月20日から月末ごろに調査報告を組織委員会に提出する予定となった。

この会場調査員の最終的な報告書は、調査委員のうち建築学の学者であった小林政一と岸田日出刀が中心となってとりまとめたようである<sup>140</sup>。1月16日に選手村の報告書が、1月20日に主会場の調査報告書が書かれている。主会場の敷地として望ましい順に第一から第七までの候補地が示された。

（主会場候補地）

- 第一候補地 代々木（明治神宮に隣接する陸軍練兵場、約28万坪）
- 第二候補地 千駄ヶ谷（外苑競技場西側に接する一帯の民有地、約2万1400坪）
- 第三候補地 青山射撃場跡（約3万9600坪）
- 第四候補地 駒沢ゴルフ場（約14万坪）
- 第五候補地 品川駅付近埋立地（約18万坪）
- 第六候補地 上高井戸（約20万坪）
- 第七候補地 砧台（約20万坪）

---

注140) 答申書には、岸田日出刀と小林政一の名前がある。（金沢工業大学蔵）

(選手村候補地)

第一候補地 砧台および等々力

第二候補地 上高井戸

第三候補地 駒沢ゴルフ場

この時点で、東京市が推していた月島案は候補地から完全に除外される。岸田は、1937年3月ごろ、「諸種なる情勢を総合観察して第三候補地を基本にしたものに決定されるのではあるまいか。」<sup>141)</sup>と述べ、神宮外苑以外となった場合、青山射撃場跡案となる可能性が高いと予想していた。第一候補地の代々木案は、陸軍関連からの反対が予想されたことから、青山射撃場跡案での具体的な会場案の立案を期待していた。

期待していた、というのは、最終的な決定権は岸田ら6名の会場調査員の手にはなかったからである。なかなか決着しない主競技場の敷地問題は、国内だけの問題だけでは済まされず、徐々にIOC側の耳に入ることとなり、東京大会の進捗に懸念を持たれかねない状況になっていた。そこで、早期の解決を迫られていた組織委員会は、会場調査員の報告書が提出された後、第8回組織委員会（昭和12年2月10日）において、会場調査員とは別に、東京市助役の大久保、大日本体育協会長の島、文部省体育課長の河原の3名を小委員会に指名する。そして、この小委員会が作成した計画案が採択され、決定案となった。

それは、神宮外苑陸上競技場を撤去し、工費約500万円を以て、その跡地に7万5千人収容の陸上競技場を新築する案で、神宮外苑案を修正したものであった。これは、会場調査員の報告とも異なる案であり、兎にも角にも大日本体育協会の主張が通る形で、神宮外苑案に落ち着いたと言える。

そして、神宮外苑案に反対していた岸田から10万人収容の主競技場と3万人収容の水泳場が神宮外苑の敷地に配置された東京大会主会場計画案が作成される。この会場案は、前川國男に協力してもらい、作成したものである。新聞にも写真入りの記事が掲載され、広く世

---

注141) 岸田日出刀「オリンピック大会と競技場」『改造』（1937年3月号）

間一般に流布された。しかし、この神宮外苑を敷地とする主会場計画案は、あくまで昭和12年の6月に予定されていたワルソー会議に持参し、IOCに東京大会の準備進捗を説明するために作成されたスケッチであった。1937（昭和12）年5月5日の第6回競技場委員会にて、岸田は、競技部部長郷隆から「ワルソー総会発送文書中二（一）第二室内競技場青写真四葉（二）改造水泳競技場青写真壹枚」を手配するよう依頼を受けている。

大日本体育協会とは無関係の立場であった岸田は、自由に最後まで神宮外苑に対し、敷地面積や風致上の理由から反対意見を示していたが、この記事を見て、神宮外苑反対派の岸田が、推進派に転じたように感じた者もいたようである。岸田は「ジャーナリズムの犠牲」になったと後に述懐<sup>142)</sup>している。さらに、岸田は「決定案は昨春のラツール伯来朝を機に急遽立案作製された、所謂誘致委員会案から一步も出てゐない。むしろ全体の計画としては幾分後退してゐるともみえる。」<sup>143)</sup>と述べ、急遽立案された1年前の誘致委員会案よりも更に劣るもので、決定案とされた東京大会主会場計画案に満足していない様子を示している。そして、この決定案に対して「東京オリンピック大会会場は今のところ神宮外苑に一応決定してゐる。だがその案が何の苦もなく実現されるのだつたら、至極結構なのだが、事はさうやに簡単には納まらないだらう。」<sup>144)</sup>と述べ、従来計画案の問題点が未解決のままでは、再び困難が生じるだろうと指摘している。

決定案が示された後も、岸田の神宮外苑反対の意見は変わることがなかった。しかし、岸田が案じていたように、ようやく決定案として落ち着いたようにみえた神宮外苑案に、明治神宮外苑を管轄する内務省神社局の強固な反対があり、その後、再び会場計画は頓挫してしまふ。風致上の理由からの反対意見、そして期日までに明治神宮に費用を全額奉納し、明治神宮主導で建設工事を行うなどの要求が為されたためであった。代々木案には陸軍の反対もあり、組織委員会もオリンピックの予算確保が困難な状況となり、いよいよ雲行きが怪しくな

---

注142) 岸田日出刀「日支事変とオリンピック東京大会（主として主競技場問題に就いて）」『建築と社会』（1937年11月）

注143) 岸田日出刀「槍騎兵／オリンピック競技場問題」『朝日新聞』（昭和12年3月9日）

注144) 前掲注143

る。この頃、東京市で独自に予算を確保する議決がなされ、敷地問題は、一転して第四候補地であった東京府荏原郡駒沢町の駒沢ゴルフ場跡地にメインスタジアムを建設することとなる。予算の都合上、東京市営繕課を中心に駒沢案のプロジェクトが進められた。岸田は、この東京市営繕課を中心に進められた駒沢案に、顧問という立場で参画している。しかし、これは言わば名誉職のような立場であった。1937（昭和12）年6月以降は、過去の主会場敷地問題を述懐する記事はみられるものの、五輪大会に対する新たな主張は、ほとんど見られなくなる。むしろ、このやるせない気持ちを趣味にぶつけたようで、『技術日本』といった専門的な科学雑誌にさえ、ゴルフ講座の連載を書くほどであった。

日中戦争の影響から出場をボイコットする国が続出し、東京での開催が困難な状況となる。日本政府は、1938年（昭和13年）7月にその実施の中止を決定した。

「ジャーナリズムの犠牲」（社会と建築）になったと述懐している岸田だが、委員会での成果も「残念ながら私の理想は単なる一芸術家又は一学者の主張として実現は愚か一顧をも興へられさうもない形勢であつた。」と語り、ほとんど主張が通らない状態であったと述べている。調査報告で主張した候補地も反映されず、さらに最終的な決定も神宮外苑の誘致委員会案に多少手を入れただけのものになってしまった。選手村などでは、日本らしさを感じてもらえるような施設作りを、と思っていたが、結局のところ体育館や廃案となった主会場の会場計画も、誘致委員会案と同様に、急遽、依頼に応じて仕方なく取りまとめたようなもので、不甲斐ないものとなってしまった。

#### ナチス独逸の建築統制に対する批判

新聞雑誌や各方面で開かれた視察報告会での岸田のベルリン大会視察の報告からは、東京大会の競技場設計の上で参考にすべき点が数多く示され、現地で感じてきたものが良い事ばかりだったようにもみえる。しかし一方で、違和感を感じ取っていたドイツ建築界の最新動向があった。ナチス独逸の建築統制である。大会準備に向けて、連日におよぶ各種委員会の会議出席に追われていたが、その過密スケジュールの中、岸田は「ナチス独逸の建築一色化とは」を執筆している。1937（昭和12）年1月30日に建築家アルベルト・シュペア

一（Albert Speer, 1905-1981）が建築総監に任命されたことを受けて書かれたもので、『建築雑誌』で発表された本文の最後には、「昭和12年2月8日」と日にちが付されている。東京大会の主会場敷地問題に揺れる中、会場調査員として小林政一とともに報告書をまとめた直後である。

「ナチス独逸の建築一色化とは」では、まず、建築を芸術の一分野とみていた岸田は、統制によって、建築家の個性が低く評価されていることを批判している。そして、ミュンヘンの「新国立美術館」を「ドリックまがいの味もそっけもない柱が立ち並んでいるだけ」と評価し、ナチス建築に見られる歴史を設計に応用する手法が、あまりにも陳腐なものであると失望の念を示している。ここで岸田は、このような状況を「中世独逸の新化再現が為されていない」と表現している。ここには、第三帝国が掲げる理想的建築像は、本来中世独逸の建築ではないか、という岸田の疑問も含まれているが、この「新化再現」という言葉には、建築様式を単に模倣するだけでない、岸田の建築理念が読み取れる。

岸田は、1943（昭和18）年に、相模書房から『ナチス独逸の建築』を出版している。「ナチス独逸」の文字がタイトルに含まれているが、これもナチスの建築統制を称賛するものではなく、ローゼンベルクによる『二十世紀の神話』といった本を参照しながら、新しい建築動向の背景を紹介しながらも、その建築統制を批判したものである。

## 小結

本章では、これまで明らかでなかった未発表史料『日本的趣味意匠の研究（草稿）』を中心に、「建築の日本趣味」に関連する草稿、原稿類を読み込んでいくことで、「建築の日本趣味」に対して、岸田がどのような見解を示していたのか検討してきた。

まず、「日本趣味」に関する発言は、1927（昭和2）年ごろから現れ、徐々に建ちあがりつつあった復興小学校を対象にしたものであった。ここで岸田は、学校建築の表現に関して「（何故）相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべき」「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築に模倣することに価値がない」「建築の意義と、その目的、要求に合致していること」という、それまでの歴史主義の設計手法にみられるような外形的な建築の特徴を模倣する姿勢を批判するワグナーの評伝本とも共通する主張を展開していた。そして、日本建築界で日本趣味が流行する前の、かなり早い段階から岸田なりの「日本趣味」という「日本的なるもの」の追求が始まっていたことがわかった。

さらに、昭和10年から12年にかけて啓明会助成金で行われた「日本的趣味意匠の研究」では、明治末から大正期に盛んに行われた様式論争の延長上に自らの考えを示し、「①現代建築の発展、②日本建築の再検討、③日本の風土的特異性と建築の関係」という3つの検討事項を見出し、「新建築運動への関心と理解とが殆どなされていない」「安易な折衷や表面上の形相を借りてきた過去の建築様式の模倣再現」「構法、材料の不一致」という点に強い問題意識を抱いていたことを明らかとなった。やはりここでも建築の外形的な特徴を模倣する姿勢を批判し、さらに当時の限界点として構造と材料、建築形体との必然的關係に対する確固とした見通しがなかった点をあげていた。

そして、岸田は、草稿で示した検討事項に沿うように、自らの著書である『高層建築』や『日本建築史』を引用して掲載し、啓明会の助成金を用いて写真集『過去の構成』の再版を行っている。当時の岸田の近代建築の理解をめぐる枠組みにおいて、3つの検討事項が、重要な基盤であったことを示している。

同時期に設計されたゴルフ場のクラブハウスでは、日本建築の要素を積極的に取り入れ、

「土地々々の郷土色」を意識した設計を行っている。これらをベルリン五輪の芸術競技に出品した。そして、ナチスの建築統制に対する批判文を発表し、統制によって建築家の個性が低く評価されていること、歴史的様式を設計に応用する手法があまりにも陳腐なものであると失望の念を示した。このような状況を岸田は、「新化再現が為されていない」と表現した。



## 第6章

### 大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念の性格及び特徴

はじめに - 各章の考察からみえてきたこと

#### 第1節 建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の「新化再現」

##### 1-1. 構造と材料の根本方針と建築の形体との関係（内的要因）

構造と材料の一致

日本の風土的特異性と建築の関係（ローカリティの重視）

「形式感」の向上

##### 1-2 時代精神という建築新化の外的要因

伝統と因襲の区別

社会構造と価値観の変化

- ・ 見るための建築から使うための建築へ（実用性の満足）
- ・ 建築の経済化（経済を中心として）
- ・ 美の変化（簡明な形体と無装飾）

#### 第2節 岸田の近代建築理念に基づいた「建築意匠学」確立に向けた取り組み

##### 2-1. 建築の芸術的側面の留保

##### 2-2. 建築の創造に貢献する建築史の存在意義

## はじめに - 各章の考察からみえてきたこと

本章では、前5章で考察してきた内容を簡単に整理したうえで、岸田の近代建築理念について分析を行い、その性格及び特徴を明らかにしたい。

第1章「岸田日出刀の自己形成：大学入学から営繕課勤務時の海外渡航まで」（計3節）では、岸田が東京帝国大学に入学してから卒業後務めた大学営繕課勤務時に経験した約1年間の海外渡航までの期間（1920年4月から1925年11月まで）を扱い、洋行からの帰朝後、大学教官として本格的な歩み始めるまでの様々な体験が岸田に与えた影響について考察してきた。

まず、岸田が東京帝国大学で過ごした学生生活は、講義時間や学生に対するサポート体制が、意匠や歴史関係に重きが置かれていた。また、分離派世代との直接的な接触もあった。塚本の建築計画の授業に不満を抱いた学生もおり、新しい時代の建築を如何に表現するか、若い建築家の多くが悩んでいた時期であった。当時、3年生であった分離派世代との直接的な接触の多くは製図室であった。岸田は、始業時期の変更による変則的な学年に在籍したこともあり、夏季休暇には、その不足を補うため先輩が後輩たちに自主課題を出していた。その後、我が国で最初の建築運動を引き起こす先輩たちの野心的な姿勢に、岸田も大いに刺激を受けたと思われる。

岸田は、短い大学生活の最後に、実用性を追求した監獄の平面計画に興味を抱き、煉瓦に代わるRCによる監獄建築の表現を課題に、表現主義の影響を感じる卒業設計と卒業論文を提出する。卒業計画に監獄建築というテーマは、珍しいビルディングタイプであった。その後、勤務した内田祥三率いる東京帝国大学営繕課では大学関連施設の設計にとどまらず、従来考えられていた以上に幅広い種類の作品を残していたことが明らかとなった。当該期の岸田の設計活動（16作品）を初めて提示した。「呉市公会堂及図書館」など、ほとんど初期の作品といえるものも判明した。

従来、表現主義に傾倒し、分離派建築会の影響を受けながら、類似する小グループとしてラトー建築会を結成した、と語られてきたが、「東京帝国大学医学部納骨堂」では様式を折

衷し、「東京帝国大学教官食堂」や「バラック御殿」では複雑な面を組合せて立体操作を行うなど、実際には、表現主義の特徴を持つ作品だけでなく、新たなる建築表現の領域開拓を目指し、様々な習作を重ねていたことが明らかとなった。また、この頃、「第四回分離派建築制作展覧会」に足を運び、その印象記<sup>145)</sup>で、石本喜久治のドイツ建築の模倣にもみえる姿勢や山田守の過剰な個性の表出に対して、苦言を呈するなど、分離派建築会の作品群に違和感を感じ取っていたことがわかった。

そして、その後、岸田は、図書館視察の名目で、大正末に約1年間の世界一周の旅に出かける。これまで、その期間が正確に記録されていなかったが、日記帳や公文書等の記録を元にして、海外渡航の詳細を明らかにした。大正14年の12月10日ごろから大正15年1月10日までの約11か月間であり、ホノルルへの寄港後、サンフランシスコに上陸し、シカゴとアメリカ大陸を横断し、ニューヨークに2か月間滞在した後、ヨーロッパに渡り、ロンドン、パリ、ベルリンを拠点としながら、時折欧州各地を巡る小旅行に出掛け、10月15日にパリを出発し、シベリア鉄道で帰国した世界一周の旅であったことが判明した。

この洋行の際、アメリカでは、土浦亀城の紹介により、ノイトラ、シンドラー、アントン・フェラーなどの若手建築家と交流していた。アメリカの高層建築が、実用性を主眼としていること、デモクラティックな性格を有していること、法律的な制限が建築の形を効果的に抑制し、装飾の必要性を否定している点といったモダニズムの美意識につながる点を評価しているが、ヨーロッパの過去の建築様式の折衷に陥っている点を批判し、新しい材料と構造法とからできた新しい建築には、それにふさわしい建築の表現があることを主張していた。

「様式の超越」を実感できたエストベリのストックホルム市庁舎は、「東京の議事堂もエストベリの作風であつたらどんなによいことだろう」と書き残しているように、ひとつの理想像に映ったようである。日本における新しい建築表現の形を模索していた様子が伺え、岸田が、欧州の遠隔地域での近代建築の展開に関心を寄せていたことがわかる。

岸田は、ストックホルム市庁舎のローカリズムの主張と模索に関心を寄せ、様式の折衷に

---

注145) 岸田日出刀「分離派制作展覧会を観る」(『建築世界』、1925(大正14)年1月)

終わらない姿勢を高く評価している一方で、アメリカの高層建築にみられるヨーロッパの過去の建築様式の折衷を批判している。こうした折衷主義への批判は、その後の岸田の理念に通ずる発見でもあった

また、洋行で訪問したダルムシュタットでは、分離派の影響を受けた建築作品に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識する。アメリカの若手建築家たちが、自国出身者でないことを指摘し、新建築の発信地がアメリカではなく、「フランスでありドイツであり、オーストリア或はオランダ等」であることを認識する結果となった。

第2章「洋行後にみられる建築理念の変容 - 新たなる理論形成に向けて」（計2節）では、岸田が、約1年間の海外渡航から帰朝後に執筆した評伝本『オットー・ワグナー』と講演会「建築家オットー・ワグナー十年祭」での講演録、そして、その後に提出された博士論文「欧州近代建築史論」を通して、洋行後にみられる建築理念の変容について考察してきた。

帰朝後の岸田は、急逝した長谷川輝雄の後継として日本建築史の学習を始める。岸田は、彼の遺志を継ぐように美術史家リーグルが導入し、ヴォリンガーが継承した「芸術意欲」を参照し、時代精神をもって建築をみるという、建築の変化の要因として、各時代特有の時代精神の把握を大切にするスタンスを示すようになる。

早世した長谷川は、「四天王寺建築論」をはじめとする日本の社寺建築の寸法体系に関する論文で、その業績が知られているが、卒業研究では、いち早くヨーロッパの近代建築に着目し、オットー・ワグナーに触れ、成瀬無極の『近代独逸文芸思潮』を参照するなどして、時代精神から建築を読み取る視点を提示していた。海外渡航への出発前まで表現主義に傾倒していた岸田であったが、洋行後にみられる意識の変化は、この長谷川の卒業論文からの影響があったと考えられる。

このような理解の深まりをもって、岸田は、帰朝後、約半年間の歳月をかけて評伝本『オットー・ワグナー』を執筆し、出版、軽視されがちであったバロック以降の建築を取り上げた博士論文『欧州近代建築史論』の執筆に取り組み、地誌学的な歴史叙述や考古学・文献等による実証的な追求とは異なる時代精神の変化を意識した建築史を提示するとともに、表現

主義にみられた「過去に例のないものを求める」という徒に珍奇なものを漁る意識や折衷主義に対し異を唱えるようになる。

そして、ワグナーの評伝本出版後に開催された「建築家オットー・ワグナー十年祭」は、早くからワグナーに注目していた岡田信一郎を軸に、分離派建築会の会員、伊東忠太、『オットー・ワグナー』を出版した岸田を含めて行われ、その後、京都でも開催されるなど広く注目を集めたイベントとなった。

岸田は、評伝本と講演会を通して、表面的に、かつ今日的な尺度でワグナーの作品を解釈してはならないことを示し、ワグナーの時代の建築と当時の社会的な背景を分析した上で、その生涯について評価を行っている。新しい建築の活路を見出す上でワグナーに着目している点は、他の執筆者と共通していたが、それは「古典主義の臭味を帯びている」といった、単に表面上からワグナーの作品をみただけの否定的な評価とは異なる視点を持つものであった。

評伝本の出版、講演会、博士論文の執筆を通じて、建築を生まれ変わらす要因が、時代精神であるとの岸田の考えとが反映されている。それは、急逝した長谷川から受け継いだ考えもあったが、「過去建築圏からの分離」を宣言しながらも、ドイツ建築の外形的な模倣や個人主義的な側面に没入していた分離派建築会の作品群に対する異議申し立てでもあった。様式主義を乗り越える理論構築を目指すうえで、長谷川や岸田は、ヴォリンガーなどドイツの美術理論に関心を寄せた。歴史主義からモダニズムへの結節点にワグナーがおり、活躍した人物という評価を自らの立場と重ね合わせていたものと思われる。時代精神の変化を意識した建築史を提示することで、岸田なりの「歴史主義からの離脱」という一つの試みを示したと言える。

第3章「講義原稿『意匠及装飾（形体篇）』にみる岸田日出刀の建築造形理念」（計2節）では、岸田日出刀が担当した必修科目「意匠及装飾」の講義原稿（1937年）を元に、岸田が展開した建築教育の内容を提示し、同時期に設計された建築作品ならびに墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に関する講演に敷衍して分析し、岸田の建築造形理念を考察してきた。

講義ノートや同時期の作品からは、初等幾何学への強い思い入れと確信が感じられた。「対称、釣合い、反復」といった古典的な美の形式原理をあてがい、先進の均整理論の立体への試行や建築におけるモダニズムの説明で自らが示した特質を援用することで、それらを建築へ応用しようとする姿勢が看取された。特に、当時、日本の建築界において注目されていたハムビッチのDS理論に高い関心を示していた。

モダニズムの解説では、単純性と明快性を専ら「簡明」という形の問題として捉えており、技術的手段に対する視点が希薄であった。ここで岸田は、インターナショナルが没個性化をもたらすものとみなし、土地の特殊性に起因する「地方性」を重要視する。合理主義の台頭について、岸田は、「合理的であるという概念は国際的に国境もなくインターナショナルなものである」という認識でいた。没個性化が進むのではないかと云う危惧である。そこで、岸田は、自然と伝統的な人の生活から規定される地域固有の特質「建築のローカリティ」を考慮することを重視していた。そして、因襲と伝統を区別して捉え、伝統を肯定し、「現代性のない因襲」を否定していた。

「建築家の形式感を現代的に進める」、「形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。」と言い、造形面における作者の美意識を意味する「形式感」の向上を企図していた。『建築をめざして』（1923）にあるコルビュジエの主張を援用しながら、初等幾何学の純粹にして識別しやすい形体、「平面」と「建築的秩序」の重要性を主張していた。そして、墓碑・銅像台座の設計を通じて、自らの造形理念の具現化を試み、岸田の言う「形式感」の模範を示していたと考えられる。

第4章「講義原稿『建築計画』にみる岸田担当科目の講義方針とその理論的特質」（計3節）では、講義原稿と講義要目を対象に、岸田が担当した講義「建築計画」の講義方針とその理論的特質について考察してきた。

岸田は、「計画」を“Planning”ではなく“Design”の和訳として捉え、“建築を計画（Design）する”ための学問として、自らが担当していた「建築計画」ならびに「意匠及装飾」の講義を体系立て、塚本靖から形式的に引き継いだ講義項目を改編させながら、2科目に関連性を持たせながら講義を展開していた。

「建築計画」は、実用性を研究するもので、その最終的な目標は、「建築の目的・要求の見極め、その目的・要求が満足する様な手段や方法を見出すこと」であり、「意匠及装飾」は、精神的方面の満足を研究するものであった。

概論と通論の各章では、「建築は人間生活の容器」やオットー・ワグナーの「芸術を支配するものは必要だけである」といった言葉を援用し、建築を芸術の範疇に位置づける論理を組み立て、建築が芸術の一分野であることを主張した。「建築非芸術論者の見方は余りに表面的な見方である」と言い、工学偏重の学問整備が進む中で、野田俊彦による「建築非芸術論」への反駁を意識していた。

ローカリティーの説明では、西欧モデルの模倣が日本では適切でないこと、日本の風土的特異性と建築との関係を示すために、日本建築を再検討し、建築計画の講義ながら歴史的な視点を導入していた。このような「建築計画」での住宅史の叙述は、岸田が提示した参考書や塚本の講義にもなかった側面であった。

第5章「『建築の日本趣味』に対する岸田日出刀の見解」（計4節）では、これまで明らかでなかった未発表史料『日本的趣味意匠の研究（草稿）』を中心に、「建築の日本趣味」に関連する草稿、原稿類を分析し、「建築の日本趣味」に対して、岸田がどのような見解を示していたのか検討してきた。

まず、「日本趣味」に関する発言は、1927（昭和2）年ごろから現れ、徐々に建ちあがりつつあった復興小学校を対象にしたものであった。ここで岸田は、学校建築の表現に関して「（何故）相共通した表現が生まれてきたかといふ問題を対象とすべき」「単なる表面上の郷土的特色を外形的に建築に模倣することに価値がない」「建築の意義と、その目的、要求に合致していること」という、ワグナーの評伝本とも共通する主張を展開していた。日本建築界で日本趣味が流行する前の、早い段階から岸田なりの「日本趣味」という「日本的なもの」の追求が始まっていたことがわかった。

さらに、昭和10年から12年にかけて啓明会助成金で行われた「日本的趣味意匠の研究」では、明治末から大正期に盛んに行われた様式論争の延長上に自らの考えを示し、「①現代建築の発展、②日本建築の再検討、③日本の風土的特異性と建築の関係」という3つの検討

事項を見出し、「新建築運動への関心と理解とが殆どなされていない」「安易な折衷や表面上の形相を借りてきた過去の建築様式の模倣再現」「構法、材料の不一致」という点に強い問題意識を抱いていたことを明らかとなった。岸田は、草稿で示した検討事項に沿うように、自らの著書である『高層建築』や『日本建築史』を引用して掲載し、写真集『過去の構成』の再版を行っている。当時の岸田の近代建築の理解をめぐる枠組みにおいて、3つの検討事項が、重要な基盤であったことを示している。

同時期に設計されたゴルフ場のクラブハウスでは、日本建築の要素を積極的に取り入れ、「土地々々の郷土色」を意識した設計を行っていた。これらをベルリン五輪の芸術競技に出品した。そして、ベルリン五輪の会場視察後に発表したナチスの建築統制に対する批判では、「建築家の個性や主観が極めて低く評価されている」「単に古典的傾向を基調にただけで中世独逸の新化再現が為されていない」という点に失望の念を示している。ここからは、岸田が、建築家の個性の尊重していること、歴史的伝統の「新化再現」という理念を有していたことが浮かび上がってきた。

## 大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念の性格及び特徴

### 建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の「新化再現」

このように岸田の戦前期の言説や作品を経年的に通覧してみると、「時代精神を以て建築をみる」、「表面上の形の模倣再現の否定」、「因襲の打破」、「構造と材料の根本方針と建築の形体との関係を考究する」、という彼の建築理念の枠組みが、およそ洋行後のオットー・ワグナーの評伝本執筆の時点ではほぼ構築され、その後の震災復興期の学校建築の表現、建築の日本趣味、ナチスの建築統制に関する言説をみても、批判の対象こそ変化しても彼の建築理念は大きく変化することなく、共通の理念が全体を通底していることがわかる。

今一度、ワグナーの評伝本執筆に至る背景を見返してみると、岸田は、学生時代から分離派建築会の面々と接触があり、彼らの展覧会に足を運ぶなどしていたが、高次曲線を多用す



るなど表現主義の個人主義的な側面に没入していた分離派建築会の作品群に違和感を感じ取っていた。営繕課勤務時の海外渡航に出発するまでの岸田は、実用性の追求と虚飾を排除したRCによる監獄建築の表現を題材にした卒業設計、震災後の複雑な面の構成が特徴的なバラック建築、様々な建築様式を折衷させた納骨堂の設計など、平面の重視、煉瓦に変わる新素材RCの表現など、それまでの歴史主義の設計ではみられなかった問題意識に取り組みながら、新たな建築表現の領域開拓を目指して様々な習作を重ねていた。

そして、洋行の際、訪れたダルムシュタットで見学した分離派の影響を受けた建築作品に失望し、欧州では、無装飾で直截な幾何学的なデザインに移行していることを認識すると、学会パンフレット<sup>146)</sup>を通じて、欧州建築界の最新の動向を日本建築界に伝えただけでなく、近代建築の導き手としてル・コルビュジエを掲げた。さらに急逝した長谷川輝雄の卒業論文を継承し、表面上の形の特徴で判断するのではなく、その建築が生み出された当時の時代精神を以て建築をみる、という新たな視点を強く主張するようになる。そして、『オットー・ワグナー』の評伝本、若手建築家の多くが参加した「建築家オットー・ワグナー十年祭」での講演、さらには博士論文を以て、ヴィルヘルム・ヴォリンガーらが唱えたドイツの美術理論に関心を寄せながら、新しい建築の観方を提唱したのである。

このような時代精神を以て建築をみる、という新しい建築の観方を提唱するに至った背景には、岸田が、感じていた表現主義に対する違和感の正体を解明し、より正確な理解を提示したいという念が強かったからであろう。

「表現主義は過去に例のないものを求めることをその主眼とした、そしてこのことは最も斬新な芸術の創生を我々に強く暗示するには充分足るものではあつたが、表現主義の建築は徒らに感情に走り建築のあらゆる方面の合理性を深い科学的見地から討究する代りに、表現のみを弄び過ぎたものであった。」<sup>147)</sup>

---

注146) 岸田日出刀「海外に於ける建築界の趨勢」『建築學會パンフレット』(1927年11月)

注147) 岸田日出刀「現代と建築(3)」『都新聞』(昭和5年1月11日)

洋行からの帰朝後の岸田は、表現主義が、多くの人々に新たな活路を期待させた点を評価する一方で、「過去に例のないものを求める」という徒に珍奇なものを漁る意識やあまりにも個人主義的な側面に没入し過ぎた表現主義への反省がみられる。このような帰朝後にみられる表現主義に対する岸田の評価は一貫している。しかし、「表現のみを弄び過ぎた」点が反省すべきところであり、建築家の個性や主観については尊重していた。

また、「表面上の形の模倣再現の否定」、「因襲の打破」、「構造と材料の根本方針と建築の形体との関係を考究する」、という岸田の理念には、ウィリアム・モリスの存在が指摘できる。岸田は、博士論文『欧州近代建築史論』の中で、「模造排斥」、「伝統打破」、「物の根本義を尋ねて後構造する」というウィリアム・モリスの主張を高く評価しており、このような岸田の当時の建築界や美術界の動向に対する認識も彼の理念の形成に影響していると思われる。博士論文の最後頁にモリスの版画を掲げているのも、彼に敬服の意を表しているからであろう。

ベルリン五輪大会の施設視察後のナチスの建築統制に関しての発言では、若手建築家をプロジェクトに参画させていることについて評価している一方で、建築家の個性や主観が極めて低く評価されていること、「単に古典的傾向を基調にただけで中世独逸の新化再現が為されていない」<sup>148)</sup>という点に失望の念を示していた。つまり、ここからは、岸田が個性や主観を尊重していたことや歴史的伝統の「新化再現」という理念を持っていたことがわかる。

このような岸田の近代建築理念を言葉で表すならば、「建築の意義、目的、要求に合致した歴史的伝統の『新化再現』」に集約できる。この「新化再現」との岸田の言葉は、当時、流行していた日本趣味建築にみられたような外形的な特徴の「模倣再現」とは異なる、歴史を創作論に結びつけようとする岸田の理念であった。岸田の意識は、歴史的伝統の「模倣」再現ではなく、「新化」再現にあった。単なる模倣に終始するのではなく、モダニズムの時代精神やコンクリートといった新材料、構造法と形態の必然的な関係を考慮したうえで、日

---

注148) 岸田日出刀「ナチス獨逸の建築一色化とは」『建築雑誌』（1937年3月号）

本の歴史的伝統の再現をするという建築理念を有していた。そして、「新しい建築が興る理由は二つの方面から考へられます。即ち一つは建築の外部から新しい建築を要求し、他は建築自身の内部に建築の新化を要求する要素が新に起つたといふことであります。」<sup>149)</sup>と語っているように、岸田は新しい建築を生み出す要因として、政治経済、時代精神の影響といった建築外部の外的要因と、新材料や構造法の発達といった内的要因があると捉えている。

#### 1-1. 構造と材料の根本方針と建築の形体との関係

啓明会の助成金で行われた「日本的趣味意匠の研究」では、明治末の座談会「我国将来の建築様式を如何にすべきや」における佐野利器の発言について、岸田は「佐野利器氏のみ独りセッションを賞し、力学美と無装飾美を強調し、更に現代の建築は簡単を旨とすべきことを主張しているのは敬服に値する所論である」と言及し、佐野の意見に部分的に賛同していた。そして、明治期の建築様式の探求において「新材料、構法に対する見通しが立っていなかった」ことを当時の限界点として指摘していた。岸田が、日本の建築の基本となるべき構造と材料とは何か、そして、その構造と材料の根本方針と建築の形体との関係に対し関心を抱いていたことがわかる。

このような関心は、大正末の洋行で実見したアメリカの高層建築に対する発言にもみられた。法律的な制限が建築の形を効果的に抑制し、装飾の必要性を否定している点を評価している一方で、アメリカの高層建築が、20世紀になって生まれた新しい材料と構造法とからできた新しい建築であるにもかかわらず、ヨーロッパの過去の建築様式の折衷に陥っている点を批判ところにも表れている。新しい材料と構造法とからできた新しい建築には、それにふさわしい建築の表現があるとの主張である。新しい材料と構造法によって形づけられる建築の形体の必然性を理解しようとしていた。

---

注149) 岸田日出刀「新しい建築の観方」『文芸春秋』（1932年1月号）

### 一日本の風土的特異性と建築の関係（ローカリティの重視）

そして、構造と材料の根本方針と建築の形体との関係にとって、その土地土地の気候風土の特徴が大きく影響することを指摘しており、これにより生ずる建築の特殊性を重要視している姿勢がみられる。それは、例えば、材料の差異、気候風土の差異、構造法の根本方針の差異により、「石造・降雨量の少ない日差しの強い気候・壁によって建物全体が支持される壁の建築」<sup>150)</sup>がみられる欧州と「木造・降雨量の多い高温多湿の気候・柱や梁が適当に組み合わせられ一つの架構として外力に抵抗する柱・梁の建築」<sup>151)</sup>がみられる日本があり、さらに、用いられてきた材料も異なれば、それぞれの材料の構造法の発達によって形づけられてきた屋根の形状も変化するといった具合である。このような自然と伝統的な人の生活から規定される地域固有の特質を、岸田は「建築のローカリティ」と呼んだ。

### 一構造と材料の一致

帝冠様式のような鉄筋コンクリート造の躯体に瓦屋根をのせたものについては、あくまで瓦屋根は、気候風土の影響、そして木造の構造法の発達によって形づけられてきた屋根の形態であって、そのまま鉄筋コンクリート造に用いることは「構造と材料の不一致」が生じているとした。岸田は、日本の建築の基本となるべき構造と材料とは何か、このような点に十分に見通しがたっていなかったことを、明治期の建築様式の探求の限界点として指摘している。岸田は、このような理念もあり、当時流行していた所謂日本趣味建築の現状に対して否定的であった。

### 一「形式感」の向上

佐野利器の発言に部分的に賛同していること、構造と材料の根本方針と建築の形体との関係に対し関心を寄せていたことは、一見すると「鉄やコンクリートの材料・構造の原則を守ればモダニズムでありつつ同時に、自ずと日本の伝統と一致する」という佐野らの意見と同

---

注150) 岸田日出刀「新しい建築の観方」『文芸春秋』（1932年1月号）

注151) 前掲注150

じ様にもみえる。しかし、岸田の近代建築理念には、所謂“自ずと論”<sup>152)</sup>とは異なるスタンスがみられる。

「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。決して数学を解くように或一つの解答丈けには終わらない。建築のあらゆる問題を機能的に研究して於けば遂には一つの数学公式の如き解答がえられるに至らんと考える向きもあるが、事實は然らず。建築家により必らず変る、ここに建築のむずかしさがあると共に又面白さもある。」<sup>153)</sup>

“自ずと論”を以て主張される平面計画が決まれば建築が自動的に組みあがるとする設計手法の提唱に対しては、「数学公式の如き解答がえられるに至らんと考える向きもあるが、事實は然らず。」と述べ、異論を唱えた。「数学公式の如き解答がえられ」ない側面について、個々の建築家の造形面での美意識を「形式感」と呼び、その表現の是非を建築家各人の「形式感」に委ねている。

そして、「意匠及装飾」の講義ノートでは、幾何学的な基本形態をもとにした新たな造形の美意識を「形式感」として位置づけている。「形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。できる丈け多くの実例に接し批判吟味すること。この場合よいものだけをみる要なく。悪い例でも差支えない。何故それが悪いかを吟味することに形式感は豊かになるだろう。」と述べ、学生たちに「形式感」を豊かにするための訓練を積むよう求めた。これは、それまでの様式主義の建築がその装飾性に美意識があったことに対し、機械など実用性の追求から生み出される新たな美意識であった。この岸田の「形式感」を表出したものが、写真集『現代の構成』であった。『現代の構成』の序章には、「現代人の一員である著者の形式感を問はれた場合、無言で示すそれへの解答が本書である。」とある。

---

注152) 建築史家の藤森照信は、「鉄やコンクリートの材料・構造の原則を守ればモダニズムでありつつ同時に、自ずと日本の伝統と一致する」という、主に佐野らが主張した意見を“自ずと論”と呼んでいる。

注153) 講義ノート「意匠及装飾」（金沢工業大学蔵）

## 1-2 時代精神という建築新化の外的要因

もうひとつ新しい建築を生み出す要因として、建築の外部から新しい建築を要求する時代精神という建築新化の外的要因をあげている。「正しく而も強く現代を掴まへた建築家だけに、現代建築家と云ふ非常に名誉ある名称が與へられるものと思ひます。」<sup>154)</sup>と述べているように、現代性とは何かという時代精神の把握が不可欠であると主張した。

### 一社会構造と価値観の変化

岸田は、「現代」という時代精神の特徴について、「私は先づそれは科学的の精神、次に経済的思想、此二つのものであると思ひます。これら二つの思想清新共に何れもその理想とするところは、合理的であると云ふこと、秩序があると云ふこと、統一があると云ふこと、更に能率が好いと云ふことであります。」<sup>155)</sup>と述べている。即ち、合理的な建築、秩序あり統一ある建築、経済的な且つ能率よき建築こそ現代建築とならなければならない、との主張である。洋行の際、フランス建築界の動向から感じ取った影響が強く、その実践者こそがコルビュジエであった。岸田は、「オットーワグナーと並ぶ現代建築の第一人者は、現在に於いては何人もこのコルビュジエに指を屈するであらう。」<sup>156)</sup>と述べ、彼をワグナーに並ぶ、現代建築の第一人者であると評価している。

#### ・ 見るための建築から使うための建築へ（実用性の満足）

「意匠及装飾」の講義では、「新しい建築はどこまでも使ふといふことを目標とします。」との認識を示し、見るための建築から使うための建築へと変化したと述べている。そして、平面は「建築のすべてを確定する決定的の Force」であると説明している。「すべて平面(plan)に示された規則に従つて developpe される。美しい形の多様性、幾何学法則による

---

注154) 岸田日出刀「現代と建築」(『建築雑誌』、1929年7月号)

注155) 前掲注155

注156) 岸田日出刀「現代とコルビュジエ」(『国際建築』、1929年5月号)

統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、茲に建築芸術が作られる。平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。」といったル・コルビュジエの『建築をめざして』にある言説を援用しながら、平面の重要度を主張していた。

#### ・ 建築の経済化（経済を中心として）

「現代はすべて経済を基とした時代であり、建築でも経済といふことが最も重要な要素の一つとなつております。」<sup>157)</sup>と述べ、経済的な且つ能率よき建築を達成するため、「材料の適正の使用。地方材料（Local material）の利用、市場品の適用。（market material）経済的で合理的なる構法、意匠装飾上の簡単化」を通して、「Least work で最も maximum Efficiency を求めること」と言い、利殖としての利益の追求ではないが、最小限で最大の効果を生むことが求められていると述べていた。

#### ・ 美の変化（簡明な形体と無装飾）

「経済的によい建築を造らふとすれば、勢ひ昔の型とはちがつたものが作られる筈であります。」と語り、現代の建築家には、市場品の利用、地方材料の使用、合理的な構法の採用、意匠装飾上の簡単化などの工夫をもって、最小限で最大の効果を生むことが求められていると述べている。装飾否定の立脚点となるモダニズムについて、「① International ② Democratic ③ mechanical」という三つの理念を提示し、合理性、実用性の満足を旨とする「Zweckmäßigkeit（合目的性）」が重要なテーマであると説明している。

合理主義の台頭について、岸田は、「合理的であるという概念は国際的に国境もなくインターナショナルなものである」という認識でいた。没個性化が進むのではないかと云う危惧である。このインターナショナルとローカリティの捉え方の相違によって、「合理化された文化の現実が、国際化しつつある所＝現代」と捉えていた日本インターナショナル建築会のメンバーである伊藤正文から岸田は批判されている。しかし、岸田は、鉄筋コンクリート造

---

注157) 岸田日出刀「新しい建築の観方」『文芸春秋』（1932年1月号）

の陸屋根の建物がフランスの気候風土で理に適うものであっても、日本にそのまま建てても理に適うとは限らないという発言にあるように、自然と伝統的な人の生活から規定される地域固有の特質「建築のローカリティ」を考慮することを重視していた。

### 一 伝統と因襲の区別

岸田は、「意匠及装飾」の講義ノートで「伝統 (Tradition) と因襲 (Convention) とはちがう。前者は positive、後者は negative、現代性のない因襲は勿論るべきも伝統は然らず。日本の正しい伝統は何かをしり考へてそれを現代の日本に活かすことは是非共必要。」と述べ、伝統と因襲を区別している。そして、因襲を排斥し、各国固有の特徴なり伝統といふものはどこまでも保有されるべき、と主張している。この伝統をどう解釈するかは、「予は日本の建築を如何に観るか」と言い、現代を生きる建築家各個人に委ねている。

### 東京帝国大学における「建築意匠学」確立に向けた取り組み

岸田の近代建築理念は、彼の建築教育にも現れている。戦後、星野昌一が出版した『建築意匠』（資料社、1949年）の序文において、岸田は「『建築意匠』のことはむずかしい。わたくしも大學で長く『建築意匠及装飾』の講義を担当しており、一本にまとめることができたらとつねづね希いながらも、今もつて実現できない。これというのも『建築の意匠』というものがどこかつかみどころがあく、それを学術的にまとめ上げることが至難のものだからにちがいない。」と述べている。何らかのまとまった形での建築意匠論の提唱には至らなかったが、そこに「建築意匠学」の確立に向けた取り組みがあったことがわかる。

その取り組みの特徴として、建築の芸術的側面の留保したこと、建築の創造に貢献する建築史の存在意義を提示したこと、の2点があげられる。



## 2-1. 建築の芸術的側面の留保

岸田は、建築を芸術の一分野とみなしていた。「建築計画」の講義ノートにあるように「ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。」と述べ、数学のように条件が同じであれば、同一の解が得られるものと違い、建築の場合、建築家が異なるに応じて、造られる建築にも夫々差が生じている。

そして、オットー・ワグナーが『現代建築』の中で残した「芸術を支配するものは必要だけである」との一文にある「必要 (necessitas)」を「実用」と解釈し、標語の言い換えを行った。つまり、これを換言すると「芸術を支配するものは実用だけである」という意味で捉えた。さらに、「過去の建築をみるに、建築は実用性の満足ということのために他の一般芸術 - 絵画、彫刻 - と競争する上に大きな重荷、handicap を負わされてきたかの観がある。現代に於いては正にその反対である、即ち建築はその実用性あるの故を以て他の絵画や彫刻の上に君臨することができる。必要の重要さである。ここに現代と過去とちがう姿をはっきりと認めることができる。」と述べ、実用性の満足を旨とする時代の到来により、建築が他の芸術分野より優位な立場にたてるという論理を示した。このような建築を芸術の一分野とみなす岸田の姿勢は、晩年の著作まで継続してみることができる。

岸田は、「建築非芸術論」への反駁を意識しているのだろう。1915（大正4）年、佐野利器の「家屋耐震構造論」（正式には「家屋耐震構造要梗」）と野田俊彦の「建築非芸術論」が発表される。『建築雑誌』に載る「建築非芸術論」は、野田の卒業論文の一部で、佐野利器と共に指導教官であった内田祥三の推薦により掲載されている。野田は、岸田が講義原稿で述べていたように、トルストイの言葉を引用して、「実用品としての建築」を主張し、建築の美と建築の表現性を全面的に否定する。当時の大学と学会を中心に、このような建築が芸術でなく科学だという工学技術に偏重した考え方に共感する者も多かった。根強かった芸術軽視の傾向への反発も一因となって、建築的芸術表現を突出させた分離派建築会が結成される。内田は、歴史様式を使う設計手法を全面否定する分離派の動きに、概して否定的であったと言われている。建築が芸術ではなく科学だという工学技術に偏重した意識が台頭して

いた当時の状況を振り返れば、優劣を論じまですても、優越感を与えさせ、建築を芸術という範疇に位置づけようとする意図があったと考えられる。

## 2-2. 建築の創造に貢献する建築史の存在意義の提示

岸田の建築史に対する姿勢には、歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする意志がみられる。昭和初年ごろの東京帝国大学では、工学偏重の学問整理が進む中、建築史無用論が唱えられていた。足立康、大岡実、大田博太郎、関野克、竹島卓一、谷重雄、福山敏男ら七名によって、1937（昭和12）年、建築史研究会が創立され、機関誌「建築史」が刊行（昭和14年）されるなど、大学における建築史の研究・教育の自主独立を守るため、学問的な小径を開く作業が進められていた。

建築史研究会の創設された頃の建築史研究は、明治時代に、伊東忠太によってはじめられた日本建築史の研究初期段階とは大きく異なる。法隆寺中門の柱にみられる曲線が、ギリシャにあるパルテノン神殿の柱の比例と酷似することからエンタシスであることを指摘し、ギリシャ・ローマ建築を本流とする世界建築史に、傍流として捉えられていた日本建築を結び付けようとした伊東の目的は、当時ファガソン、フレッチャーら西洋人によって示されていた、既にあった地誌学的世界建築様式史への接続にあった。

その後、史学の方法論の深化をもたらす論争が起きる。法隆寺再建非再建論争である。日本書紀にある法隆寺焼失の記載から再建論を主張した喜田貞吉（文献史学）と使用尺の時代的特徴、堂塔の礎石の検分結果、屋根裏から発見された唐草瓦の存在、建築様式の特徴等から非再建論を主張した関野貞との間に起こった法隆寺が再建されたものかどうかを巡る論争である。遺構調査に立脚する関野、文献史学の喜田のいずれも実証主義的方法による研究である。法隆寺再建非再建論争によって、論証の厳密さが進歩し、史学の方法論の深化をもたらした。

さらに、分離派建築会が結成された大正末ごろから、建築設計も反歴史主義的なモダニズムの様相を帯びていく。建物の用途にあわせて、それにふさわしい建築様式を既存のリストから選択する歴史主義とは異なり、モダニズムの到来は、歴史の拒絶を引き起こした。黎明

期の地誌学的世界建築史からモダニズムの台頭による実証主義的方法による研究の進展ならびに工学偏重の学問整理による建築史無用論の北風。建築史の存在基盤が、大きく変化していった時期でもあった。

鈴木博之が指摘するように、とくにこの時期の伊東は「歴史主義を否定する分離派建築会（モダニズム）と、建築設計から自立を目指す建築史研究会（文献実証主義）とのほさま」<sup>158)</sup>に立っており、建築史家としての存在基盤が不安定な時期であった。やや極端な表現かもしれないが、それまでの歴史主義の建築は、歴史と構造を勉強すれば設計することが出来た。それが切り離されて、デザインのソースとしての役目が失われた建築史は学問として自立するように建築の創作から離れていく、一方、伊東は創作の場に歴史があったときの可能性を維持しようとしたのではないか。実際、伊東は、法隆寺の建築論争の際は、どちらでも構わないとし、現存する法隆寺の建築的特徴が今日に伝える意義と価値に変化はないとし、論争にあまり関心を寄せていない。

岸田が、本格的に日本建築史の研究に取り組み始めたのは、大正末の洋行後、急逝した長谷川輝雄の後任として藤島亥治郎が着任するまでの約2年間、臨時的に建築史の講座を担当したときからである。急遽、伊東忠太と関野貞の指導のもと取り組んだ日本建築史と東洋建築史の学習の成果として、支那建築史を藤島亥治郎が、日本建築史を岸田が執筆する形で『日本建築史 支那建築史』（雄山閣、昭和7年）を出版している。更に雑誌や研究書等で「日本建築史の諸問題」（昭和9年）、「意匠上よりみたる法隆寺伽藍」（昭和10年）などの論考を発表している。

「日本建築史の諸問題」では、遺物の研究に比べ不足している日本建築史の文献的研究の進展が期待されること、大工道具や絵図、日本の住宅史、教会建築に関しては、まだまだ未解明な部分が多く、今後の研究が求められるとしている。そして、岸田は、「日本建築史の諸問題」、「意匠上よりみたる法隆寺伽藍」のいずれでも、伊東と同じく、再建論、非再建論のどちらにもつかない見解を示している。そして、文献的研究の進展に期待を寄せつつも、

---

注158) 鈴木博之「伊東忠太 その私的全体性」『伊東忠太を知っていますか』（王国社、2003年）

自らは法隆寺を意匠の上から観察するという試みをしている。この中で岸田は、「柱の膨らみもその由来をいろいろと探つたら古代ギリシヤ及びローマの古典建築に見る柱のエンタシスと何等かの因果干係をたぐることも或は可能であるかもしれないが、私はより単に作者のものの形体に対する非凡な敏感さに即したい気がする。」と述べている。「柱の膨らみもその由来をいろいろと探つたら古代ギリシヤ及びローマの古典建築に見る柱のエンタシスと何等かの因果干係をたぐる」とは、地誌学的世界建築史に接続させようとした伊東の試みであるが、岸田は、時代精神を以て建築をみる、との観方を意識していただけに、「作者のものの形体に対する非凡な敏感に即したい」と述べ、伊東と異なる観方を示している。

伝統的日本建築の再検討からの考察という検討事項を掲げ、建築計画の講義で歴史的視点を導入し、住宅史の叙述に取り組んでいることも建築の創造に貢献する建築史の存在意義を提示するという意識の表れであった。

図3 昭和初期の同時代的平面における岸田と伊東忠太、分離派建築会、構造派との相関関係

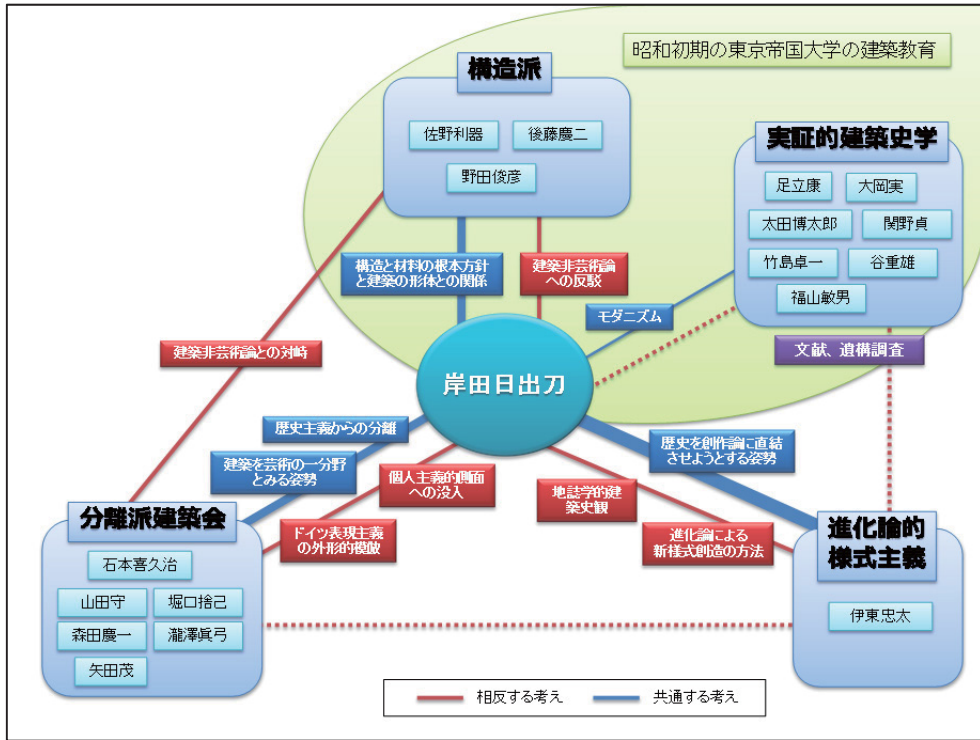
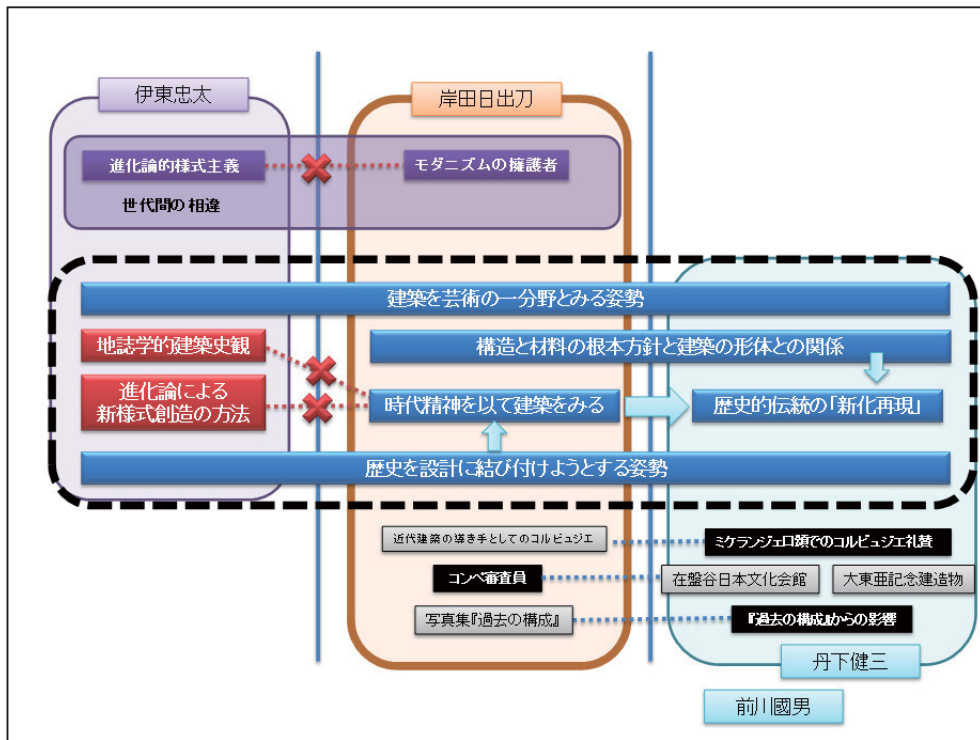


図4 伊東忠太、岸田日出刀、前川・丹下ら3世代との相関関係



## 結 論

結論では、総体としてどのようなことが明らかになったのかについてまとめておきたい。

### ・分離派建築会と同世代の岸田日出刀が果たした成果

岸田が東京帝国大学工学部建築学科に入学した1919（大正8）年の第41回生は、ちょうど分離派建築会を結成した中心メンバーら（石本喜久治、滝沢真弓、堀口捨己、森田慶一、山田守、矢田茂）が在籍した学年の2年下であった。岸田は、たびたび分離派建築会の展覧会に足を運ぶなどしており、彼らの活動に無関心であったわけではなかった。しかし、この時期の岸田と言え、序章で取り上げたように、これまでの日本近代建築史の通史では、内田祥三の素案を岸田が当時流行していたドイツ表現主義風アレンジした安田講堂の設計、帝都復興展におけるラトーの活動が紹介される程度であった。それも分離派建築会のように展覧会を開くなど継続して活動を続けた建築運動団体というわけではなく、逓信省営繕課の技手を中心とする創宇社建築会、早稲田大学のメテオールなど、分離派の影響を受けつつ相次いで結成された小会派のひとつでありながら、その内実は帝都復興展という展覧会の出展時に組まれた小グループのようなものであった。我国で近代建築運動が起こる時期に、その先駆を為した分離派建築会や、その後の建築運動の中心的な役割を担った創宇社建築会に比べ、その後の歴史家それぞれが各運動体をいかように評価しようとも、一展覧会で姿を消したラトーの通史上での扱いが少ないのは仕方のないことである。

しかし、本研究を通じて、岸田の大正・昭和戦前期における活動を調査してみると、オットー・ワグナーの評伝本の出版や博士論文の執筆をめぐる背景に、分離派建築会の存在が見え隠れする。分離派建築会をはじめ、歴史主義からモダニズムへと大きく変化していく時代と深く関わることとなった、この世代の立場は、およそ以下の3つの主張にある。それは、第1に佐野利器に代表される構造偏重という当時の支配的なイデオロギーに対する反発、第2に新しい構造と機能が発展しつつあるにもかかわらず、なお和洋復古様式の意匠に執着する建築界への反抗であり、第3にその矛盾を自己の芸術的衝動の中に融解し昇華する創造的

活動の主張であった<sup>159)</sup>。

岸田は、分離派建築会の建築を芸術の一分野とみなすことや先輩たちの熱心な活動に敬意を示しつつも、一方で、高次曲線を多用するなど表現主義の個人主義的な側面に没入していた彼らの作品群に違和感を感じ取っていた。1925（大正14）年1月に書かれた岸田の「第四回分離派建築制作展覧会」での作品に対する印象記をみると、石本喜久治の作品に対しては、「全体として受けた感じは、最近独逸の雑誌を見るやうな気がしたと云つてよいと思ふ。」<sup>160)</sup>と語り、ドイツの最新の建築の紹介なのか、石本自身の作品なのか区別がつかないと、そのスタイルの模倣とも見える姿勢に苦言を呈している。また、山田守の作品には、「同氏の作品からは何時も自分は一種のブルジョア感を覚える。「人」を脅しつけるやうな感じを與への氏の作品は果して時代の思潮とぴつたり会つたものと言へるであろうか。」<sup>161)</sup>「分離派のうちと云はず、すべての世の建築家のうちで氏の作品程色濃く個性を表はすものはない。」<sup>162)</sup>と述べ、ブルジョア感を覚え、色濃く個性を表す誇大な表現が時代錯誤の発想であると批判している。

そして、岸田は、大正末の洋行で欧州建築界の最新動向を知り、ダルムシュタットの芸術家村で分離派の影響を受けた建築作品を実見し、失望すると、帰国後、急逝した長谷川輝雄の遺志を引き継ぎ、美術史家アロイス・リーグルやヴィルヘルム・ヴォリンガーが唱えた「芸術意欲」を参照しながら、その建築が生み出された当時の時代精神を以て建築をみる、という視点を強く主張するようになる。このような新しい建築が生み出される要因として時代精神を捉える姿勢は、ワグナーの評伝本、博士論文のいずれにも貫かれている。分離派建築会が建築運動を通じて「過去建築圏より分離し、総ての建築をして真に意義あらしめる新建築圏を創造せん」と声高らかに宣言しながらも、実際には、表現主義の個人主義的な側面に没入し、ドイツの最新建築の模倣に終始していたことに対して、岸田は、オットー・ワグ

---

注159) 近江栄「日本的独自性の模索・喪失・回復」『日本近代建築史再考 虚構の崩壊』（新建築社、1974年）

注160) 岸田日出刀「分離派制作展覧会を観る」『建築世界』（1925年1月号）

注161) 前掲注160

注162) 前掲注160

ナーの評伝本と「ワグナー十年祭」を通して、時代精神の相の下で建築の発展をとらえ直すことによって、歴史主義あるいは様式折衷主義にもとづいた旧来の建築観からの脱却を図るという構想を展開した。「ワグナー十年祭」の講演で、師の伊東忠太から「心の建築」に波は始まり、段々と発達し、次第に「形の建築」になってくると下り坂になり滅びる「ゼツェツションの建築は形にはなつて居らない、心ばかりの建築と云って宜しい」<sup>163)</sup>との言葉を引き出すことができたのは、岸田にとって大きなプラスであったに違いない。

これが岸田にとっての歴史主義からの分離というひとつの試みであった。そして、同時に、表現主義的造形を導入しながら一方で個人主義的色彩を強めていた分離派建築会の運動への批判的視座も獲得した。

#### ・伊東忠太の後継としての岸田日出刀

ふたつめは、師である伊東忠太との関連である。両者の関係は、当時としては珍しいオーラルヒストリーを行っている『建築学者・伊東忠太』での聞き取り役、東京帝室博物館の設計競技では、応募規定をめぐる「保守的な姿勢を示した佐野利器、伊東忠太ら古老」と「新進気鋭の若手建築家」との間に起きたモダニズム定着に向けた闘争で、審査員のなかで唯一若手であった岸田が、若手建築家のよき理解者としてモダニズム全体の取りまとめ役を担ったこと、そして、デザインの問題を取り上げた論考では、伊東忠太と岸田の生きた時代の違いによって生じた理念の相違を曲線と直線という対置する特徴をもって論じられてきたことなど、一見すると両者には、共通点がほとんどないようにもみえ、正反対の性格を有しているようにも感じられる。しかし、両者には、同じような考え方で建築にアプローチしている側面がみられる。とりわけ、それは、建築史に対する姿勢に表れている。

彼らの建築史に対する姿勢には、歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする意志がみられる。それぞれの生きた時代と、求められていた役割が異なるだけに、伊東の法隆寺建築論による地誌学的世界建築史への接続、進化

---

注163) 『建築新潮』(昭和3年6月号)



主義による新様式創造の方法とは異なり、岸田の場合は、新しい建築が生み出される要因として時代精神をあげ、時代精神を以て建築をみる、という建築の観方を提唱した。この新様式創造の方法の相違は、日本趣味建築をめぐる言説において岡田信一郎、内田祥三、伊東忠太の三氏の作品を「建物とその内容が一致しているものには好感をもつ」と述べ、その齟齬をうめるために苦しい理由をつけながら例外的に特別扱いをしているところにも表れている。師の設計したものに批判しにくい立場でもあり、少なくとも直接的に批判してはいないものの伊東の築地本願寺などの作品に岸田は決して満足していなかったはずである。つまり、岸田は、歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする伊東の意思を別の形で継承しようとしていた。そして、歴史主義の後を継いでいく立場、伊東に対する意識、歴史を創作論に転換する岸田の意志が、歴史的伝統の「新化再現」とも言うべき彼の理念に結びついていると考えられる。岸田にとって伊東とは対立する関係ではなく、むしろ同じ方向を向いており、岸田は伊東に畏敬の念を抱いていたであろう。それは、戦後、岸田の依頼で伊東が東大で建築史の特別講義を行っていたころ、学生の関心が薄く、出席具合が悪かった中、熱心に貴重な講義に参加するよう呼びかけていたエピソードや『建築学者・伊東忠太』での岸田の聞き取りも、伊東に批判的ではなく、むしろ率直に向き合って伊東忠太をわかろうとしている様子からもわかる。

歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする伊東の意思を別の形で継承しつつ、それを新しいモダニズムの理論に直結させようとした努力が岸田のテーマとしてあった。

#### ・岸田が前川國男、丹下健三、浜口隆一ら後進に与えた影響

岸田は、この歴史を創作論に転換するための方法のひとつの事例として、写真集『過去の構成』を出版し、伝統のなかの形態を抽象的に読み取るという視点を提示した。そして本書が、丹下健三や堀口捨己らに影響を与えたことはよく知られている。丹下は「学生の頃に非常な感銘を受け、わたしは京都御所の写真から強い影響を受けたように思います」と語り、堀口は「岸田さんはレンズを通して面白いコンポジションを観る。ことに京都御所なんか非

常にうまく捉えてぼくは驚きましたね。ぼくはその頃似たような角度で茶室なんか見る癖がついていましたが、寝殿造りのああいうところのあの眼なんだなと思って非常に啓発されました」と述べている。前川國男と牧野正巳にコルビュジエの本を貸し出したエピソードとともに、戦前期の岸田が、堀口、丹下、前川、牧野らに直接的に影響を与えた。

岸田にとって、写真集『過去の構成』歴史を創作論に転換するためのひとつの試みであり、もう一方の写真集『現代の構成』は、「現代人の一員である著者の形式感を問はれた場合、無言で示すそれへの解答」であった。それは、彼が「意匠及装飾」の講義で、建築の「数学公式の如き解答がえられ」ない、個々の建築家の美意識を「形式感」と呼び、繰り返しその向上を求めていた「形式感」である。彼の建築理念にとって、『過去の構成』と『現代の構成』の2つの写真集は、造形面における作者の美意識を意味する「形式感」と「伝統をどう理解するか」という建築家の個性を尊重している側面であった。

分離派建築会の作品群に対する違和感から新しい建築が生み出される要因として時代精神をあげ、時代精神を以て建築をみる、という建築の観方を提唱し、伊東忠太の歴史を歴史主義とともに拒絶するのではなく、歴史というものを創作論に直結させようとする意志を継いだ岸田が、前川國男、丹下健三、浜口隆一ら後進に与えた影響はこれだけではなかったはずである。それは写真集『過去の構成』やコルビュジエの著書の貸与のような直接的な影響ではなく、土台を築いていたといった方が正確かもしれない。

これまでの既往の近代建築史では、分離派建築会の陰で、ラトーの活動も類似する小グループとして扱われてきた。そして、岸田は、表現主義に傾倒していた側面ばかりが目され、大正期の表現主義を象徴する建築作品の設計者として、内田祥三とともにその名があげられてきた。その後は、感動のない東京中央郵便局を衛生陶器と批判し、コルビュジエの魅力を訴えた丹下の「ミケランジェロ頌」が発表され、丹下が審査員であった岸田の庇護によって頭角を現してくるというストーリーであった。しかし、そこに至る背景には、岸田による伊東忠太の歴史というものを創作論に直結させようとする意志を受け継ぎ、ドイツの美術理論に関心を寄せるなどしながら、様式主義を乗り越えるための理論構築を目指した取り組みがあった。

岸田の理念にあった日本の歴史的伝統の「新化再現」という日本独自の近代建築の追求方法は、5つのポイントにまとめられる。

- ① それまでの様式史とは異なる時代精神の把握による歴史解釈をすること、
- ② 時代精神の相の下に伝統的日本建築を再解釈すること、
- ③ 日本の風土的特異性と建築の関係によるローカリティーを重視すること、
- ④ 初等幾何学の秩序に基づく「形式感」を発揮すること、
- ⑤ 新材料による新たな構造形式と建築形体との関係を考慮すること

このような日本独自の近代建築の追求方法をみると、形式性を重視した「新建築」や日本趣味とは違う、新たな建築原理を追求していくこととなる丹下や前川の言説も、実は、その底流で、岸田が伊東から形を変えながら継承し、保持し続けた理念につながっていたと言える。佐野利器を中心とした構造合理主義的建築観の定着、伊東忠太による進化論的様式主義からの影響、また同世代の分離派建築会による西欧近代建築の導入、という同時代の動向のなかで、岸田は歴史主義の建築からの脱却を図るために、芸術意欲あるいは時代精神の概念を建築史に導入して日本における近代建築の新化再現を試みようとした。伊東忠太にはじまる日本建築史の理解を踏まえたうえで、それを建築設計の方法論に応用し、次なる世代の丹下、前川に継承可能なかたちに定義し直した、そこが大正・昭和戦前期における岸田の近代建築理念の性格及び特徴であった。



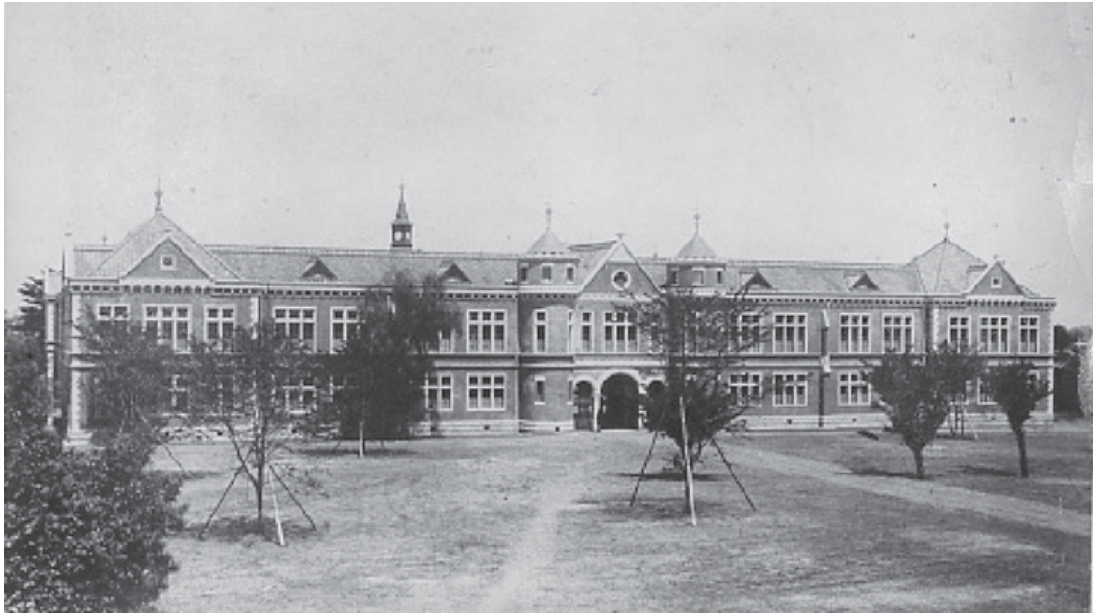


図 1-1 東京帝国大学工学部建築学科校舎（設計辰野金吾）



図 1-2 東京帝国大学工学部建築学科製図室（写真帖『東京帝国大学』、1900年）

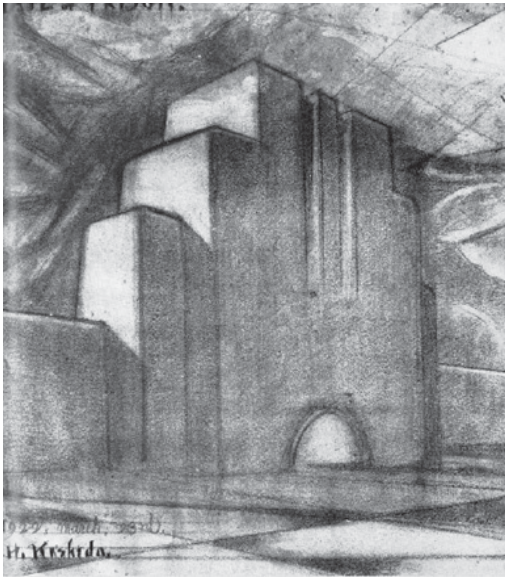


図 1-3 卒業設計「監獄の建築」透視図①

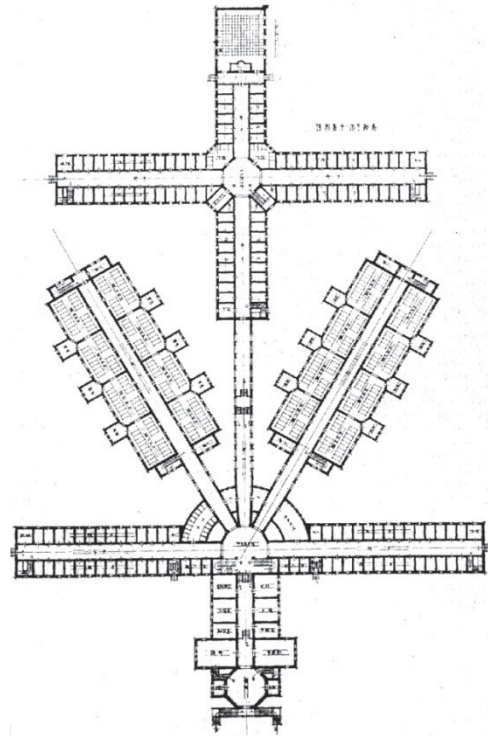


図 1-4 卒業設計「監獄之設計」平面図

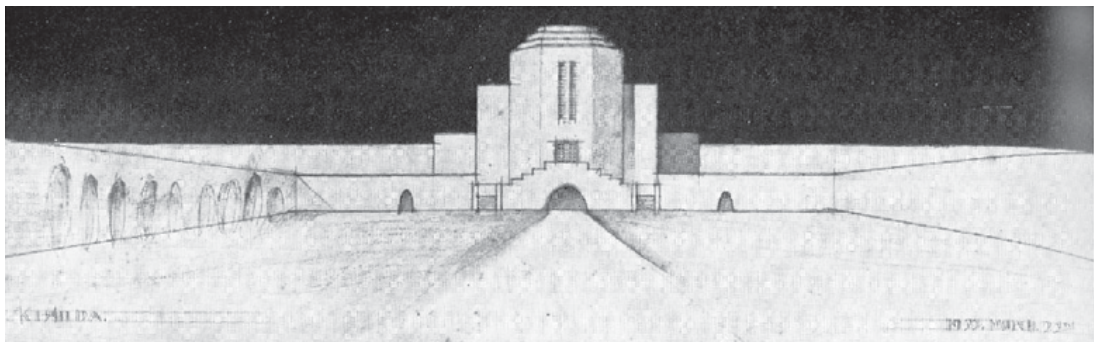


図 1-5 卒業設計「監獄の建築」透視図②

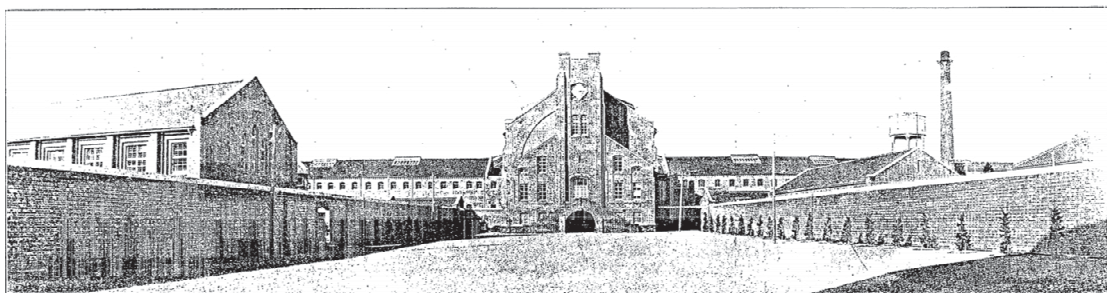


図 1-6 豊多摩監獄（設計 後藤慶二）（『建築雑誌』、1915年6月号）



図 1-7 「東京大学物理一号館」(筆者撮影)

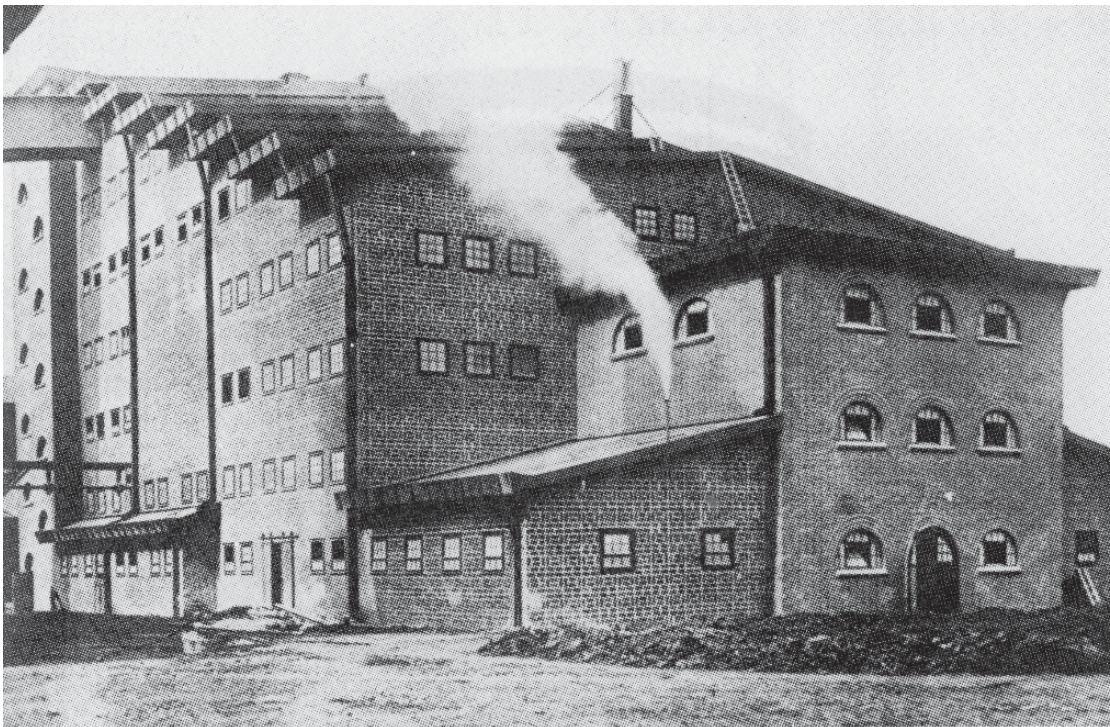


図 1-8 ハンス・ペルツイヒ「ルボン (Lubon) の化学工場」

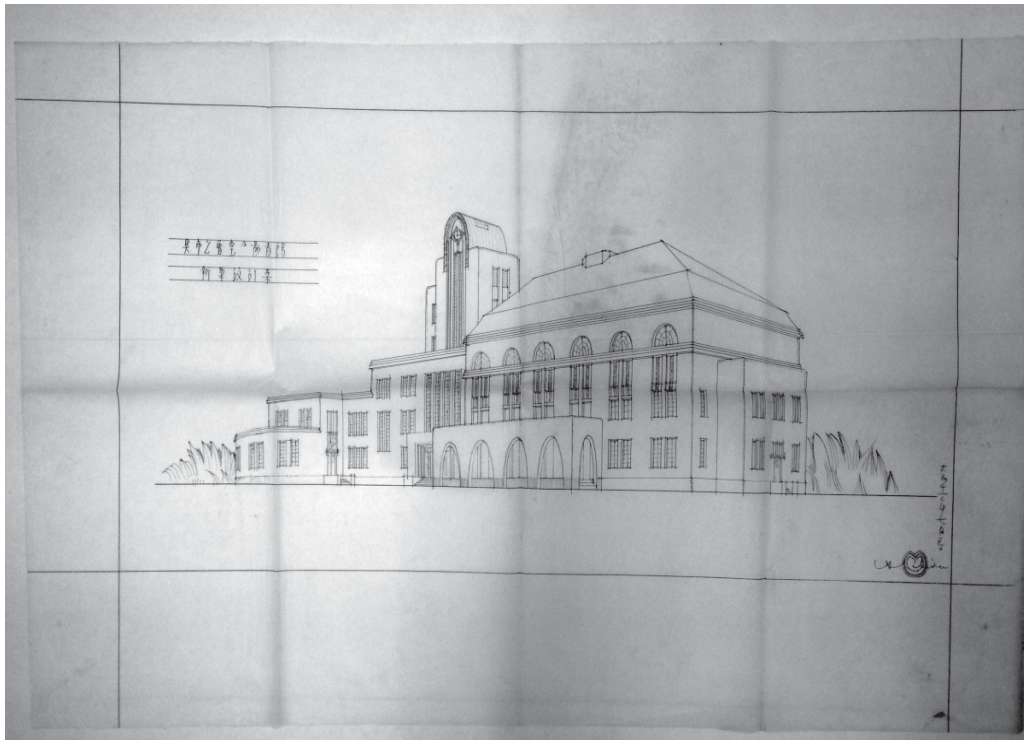


図 1-9 「呉市公会堂及び図書館」透視図①（東京都公文書館蔵）

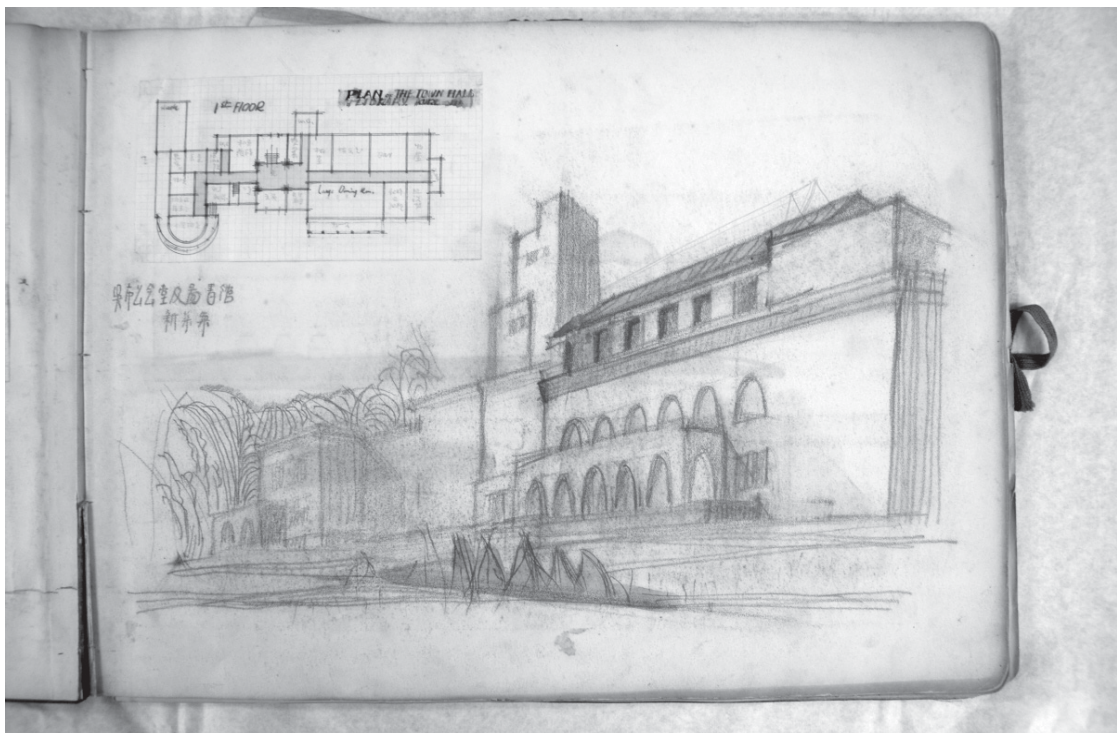


図 1-10 「呉市公会堂及び図書館」スケッチ①（金沢工業大学蔵）



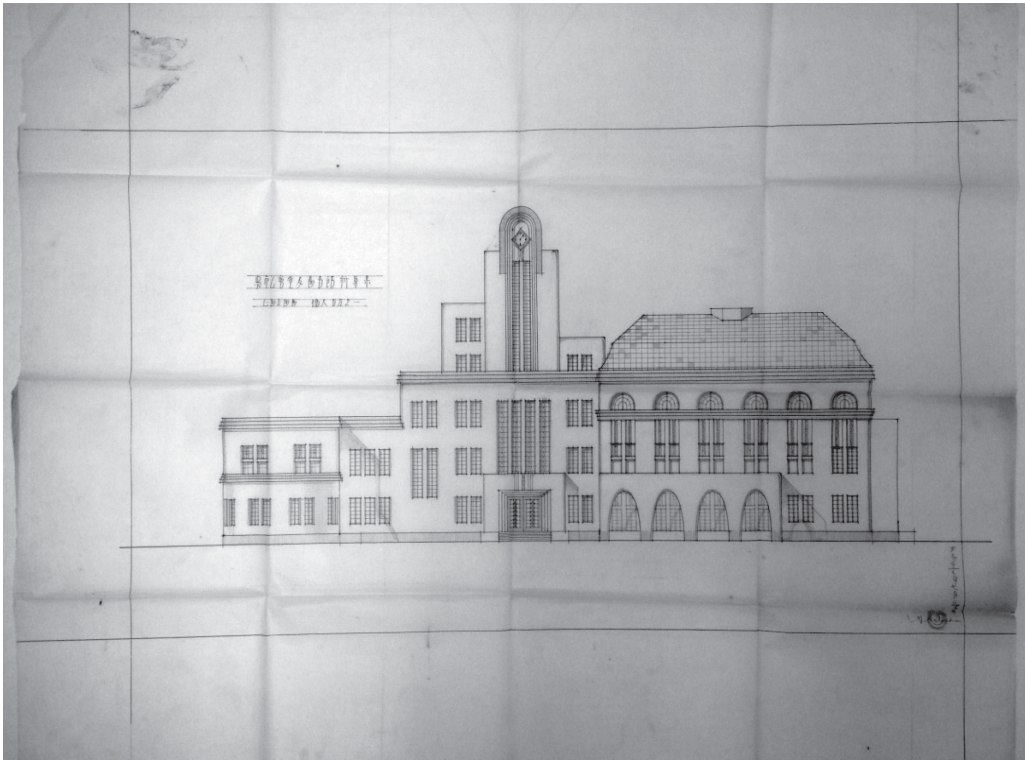


図 1-11 「呉市公会堂及び図書館」透視図②（東京都公文書館蔵）

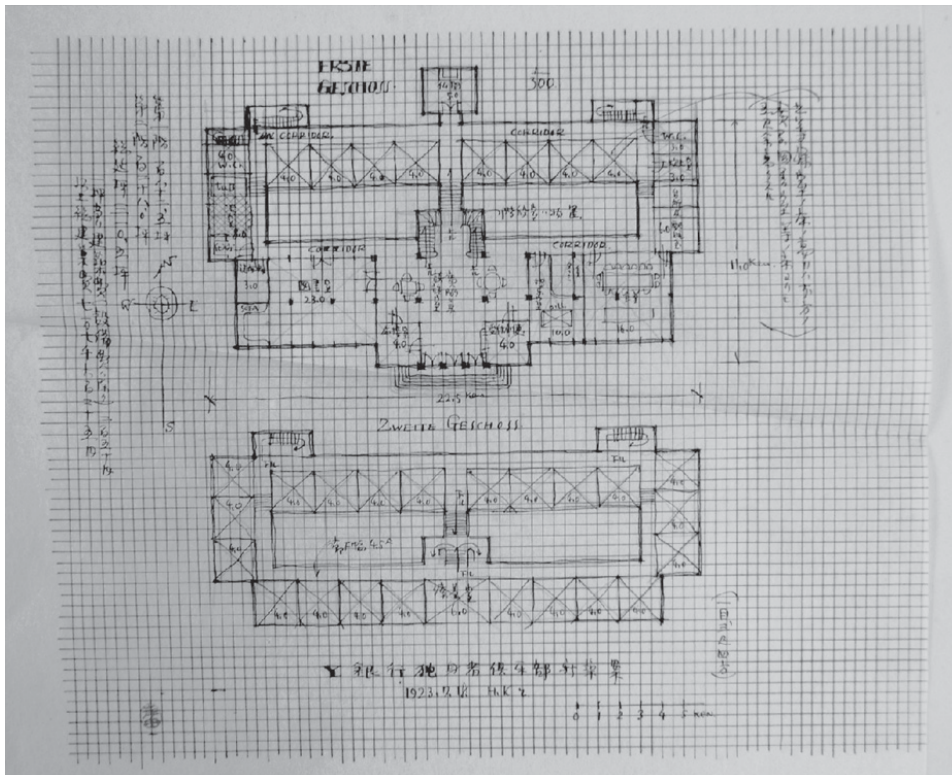


図 1-12 「Y 銀行独身者倶楽部」（金沢工業大学蔵）

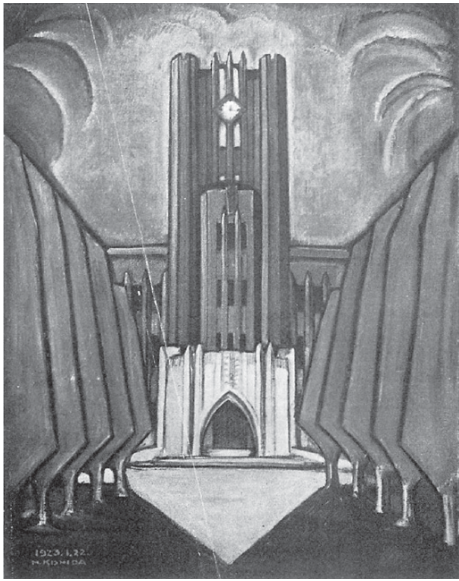


図 1-13 「東京帝国大学大講堂透視図」  
(『建築世界』、1924年1月号)



図 1-14 「安田講堂」(筆者撮影)

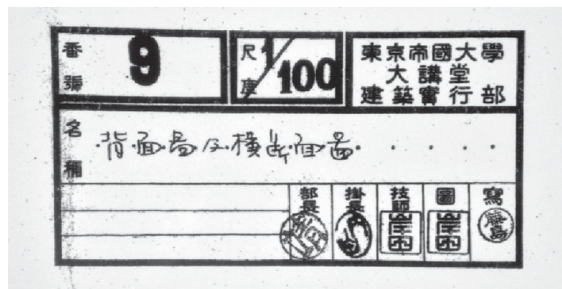


図 1-15 安田講堂図面の捺印 (東京大学施設部蔵)

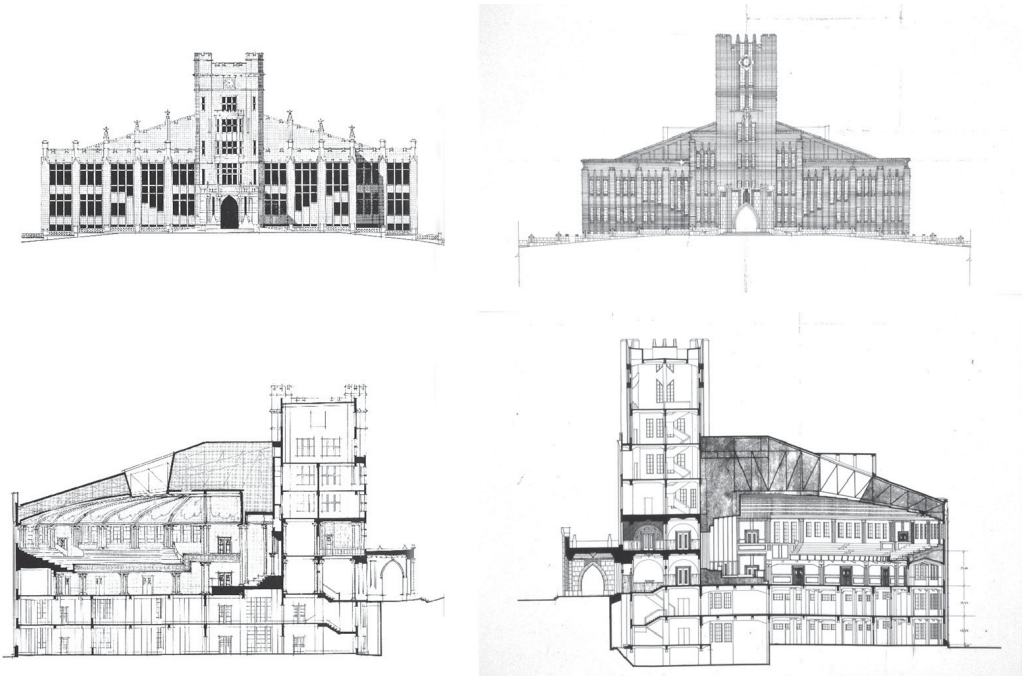


図 1-16 「安田講堂」内田祥三素案 (左) と岸田案 (右) (東京大学施設部所蔵)



図 1-17 「安田講堂」内部（筆者撮影）

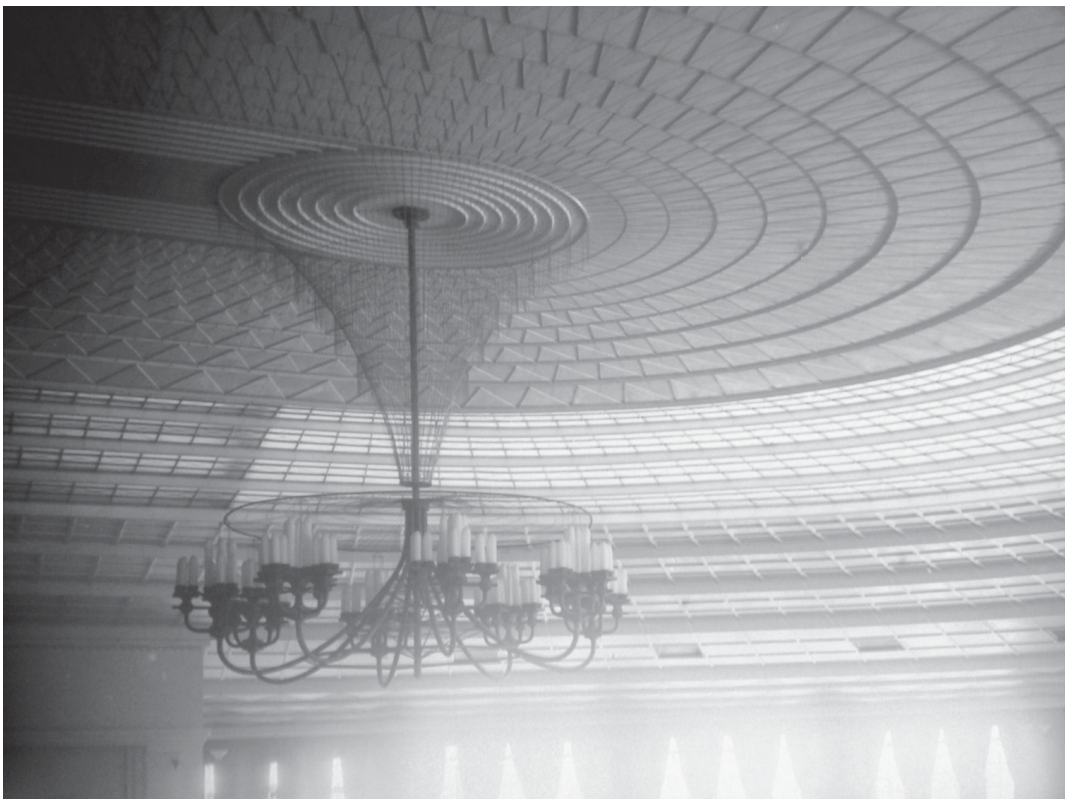


図 1-18 安田講堂のシャンデリア（東京大学総合研究博物館小石川分館所蔵）



図 1-19 安田講堂の石膏模型をつくる岸田（『岸田日出刀』）

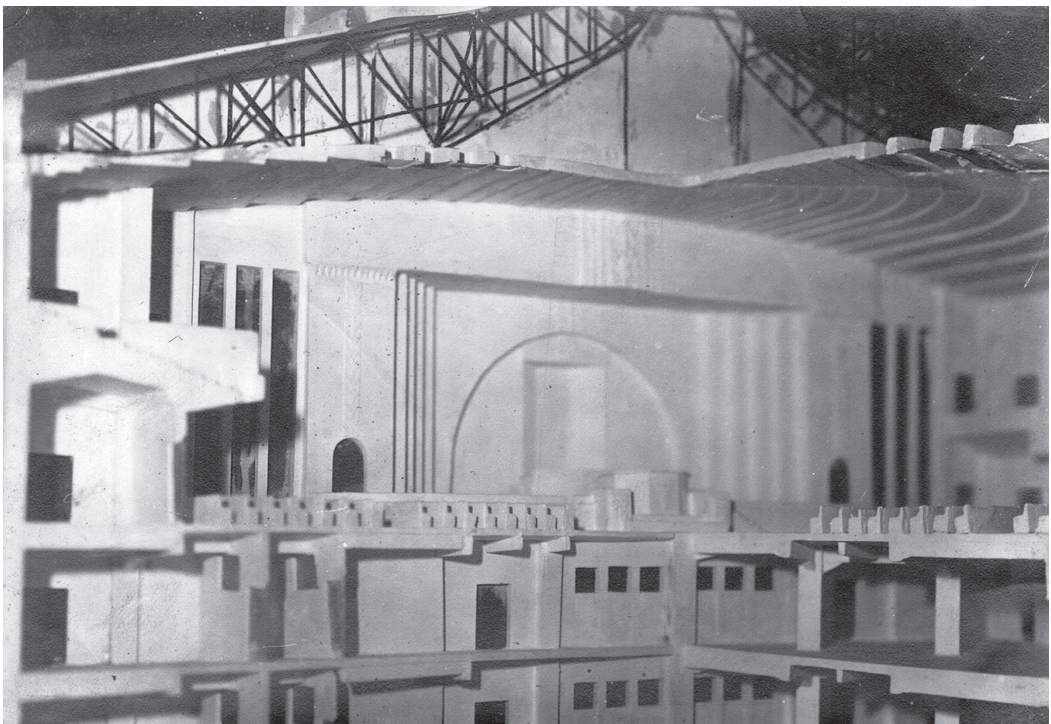


図 1-20 安田講堂石膏模型（金沢工業大学蔵）

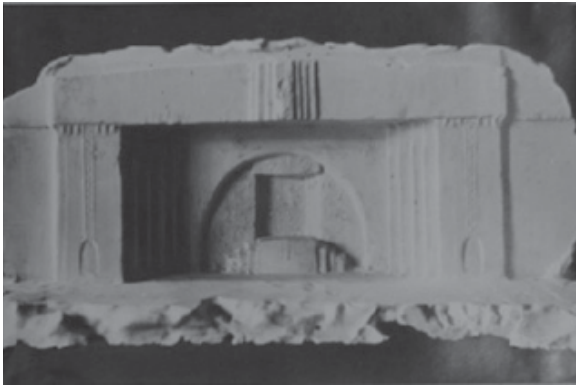


図 1-21 安田講堂演壇の石膏模型（金沢工業大学蔵）

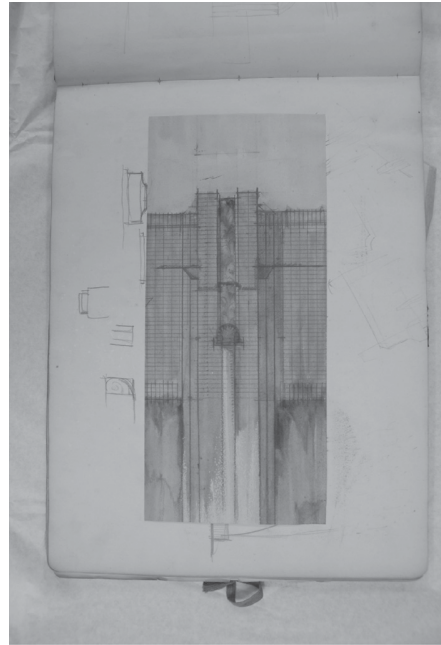


図 1-22 「安田講堂」スケッチ①  
（金沢工業大学蔵）

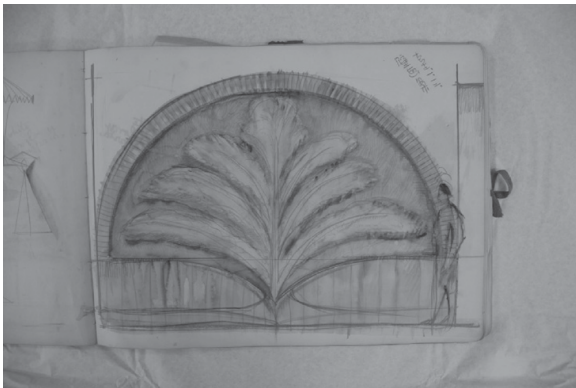


図 1-23 「安田講堂」スケッチ②（金沢工業大学蔵）

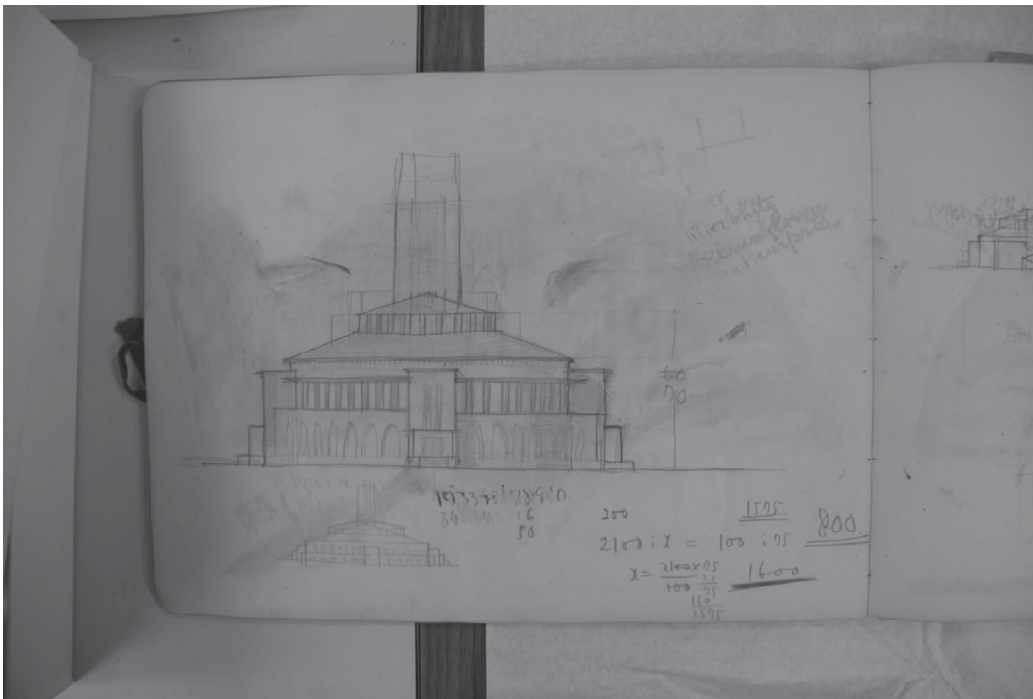


図 1-24 「安田講堂」のエスキススケッチ画①（金沢工業大学蔵）

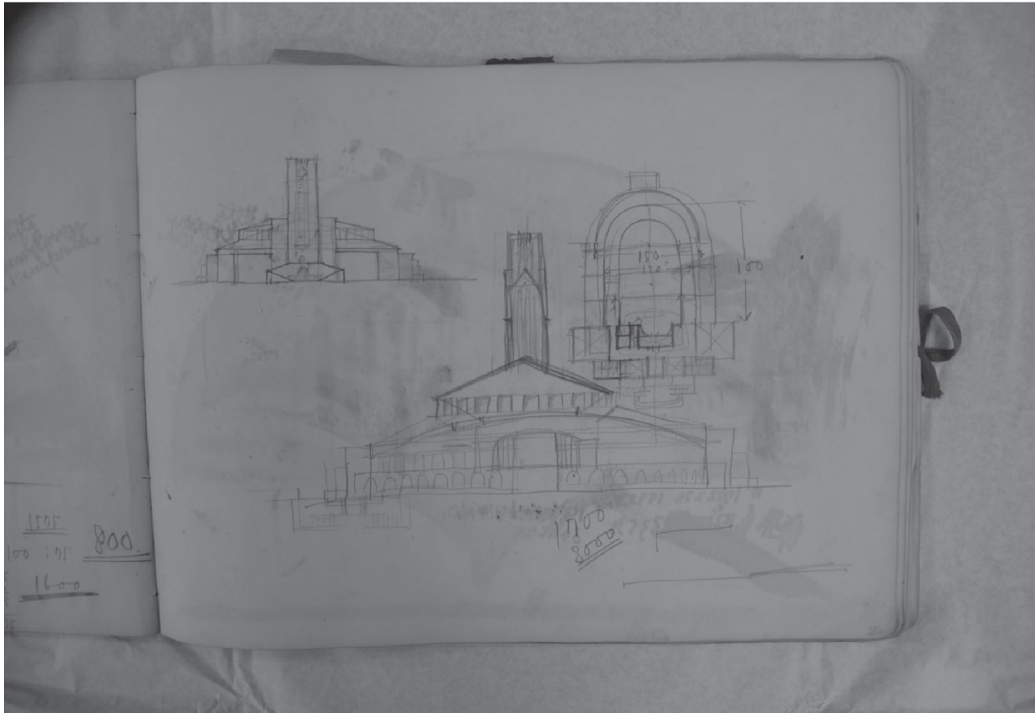


図 1-25 「安田講堂」のエスキススケッチ画②（金沢工業大学蔵）

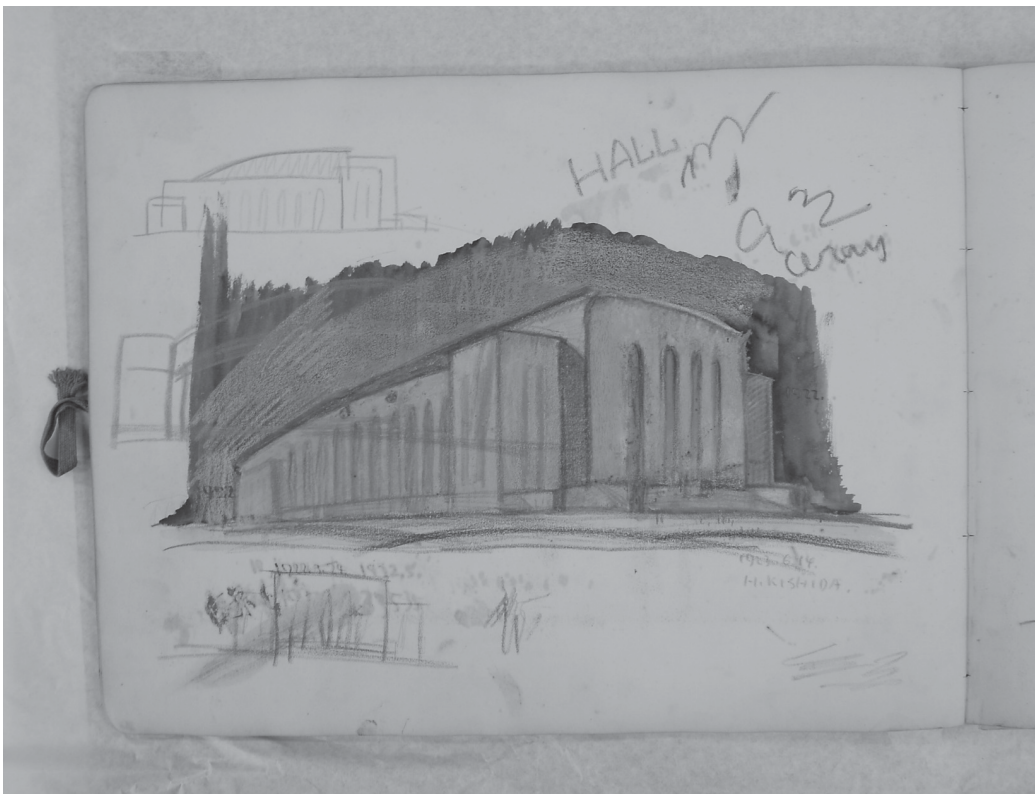


図 1-26 「早稲田大学大隈記念講堂」のエスキススケッチ画①（金沢工業大学蔵）

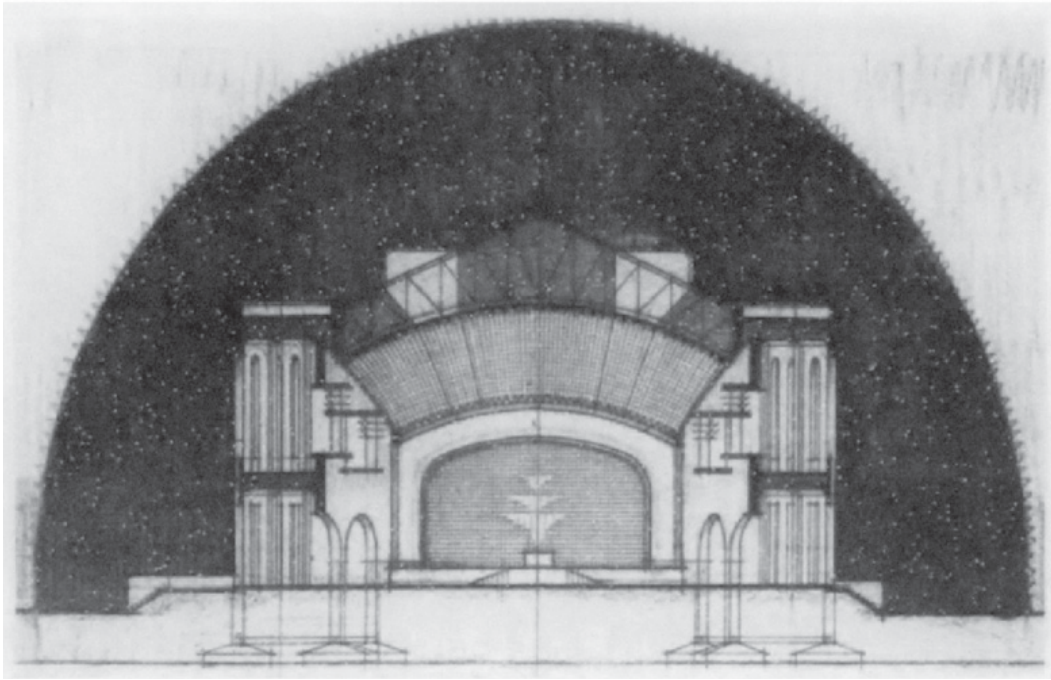


図 1-27 「早稲田大学大隈記念講堂」断面図

(『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』)

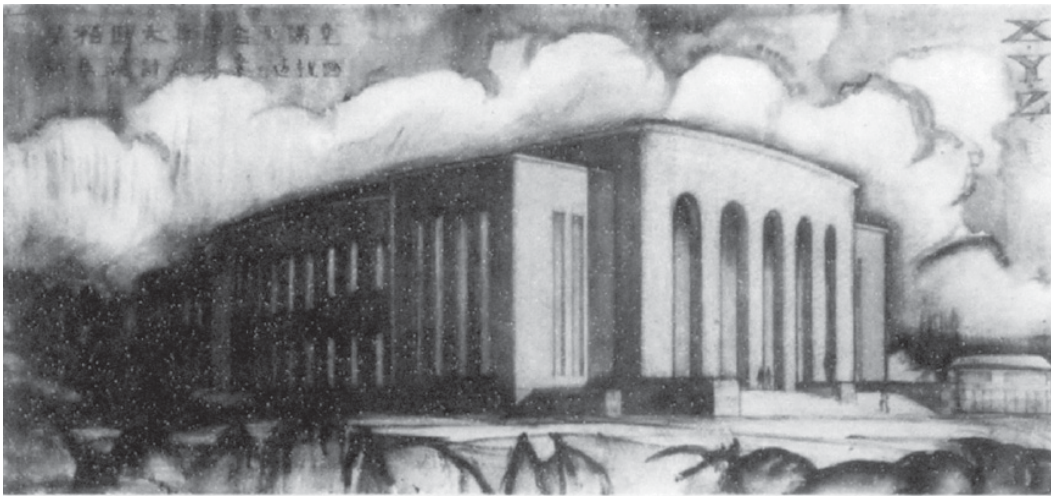


図 1-28 「早稲田大学大隈記念講堂」透視図

(『早稲田大学故大隈総長記念大講堂競技設計図集』)



図 1-29 東京帝国大学大講堂建築実行部（金沢工業大学蔵）

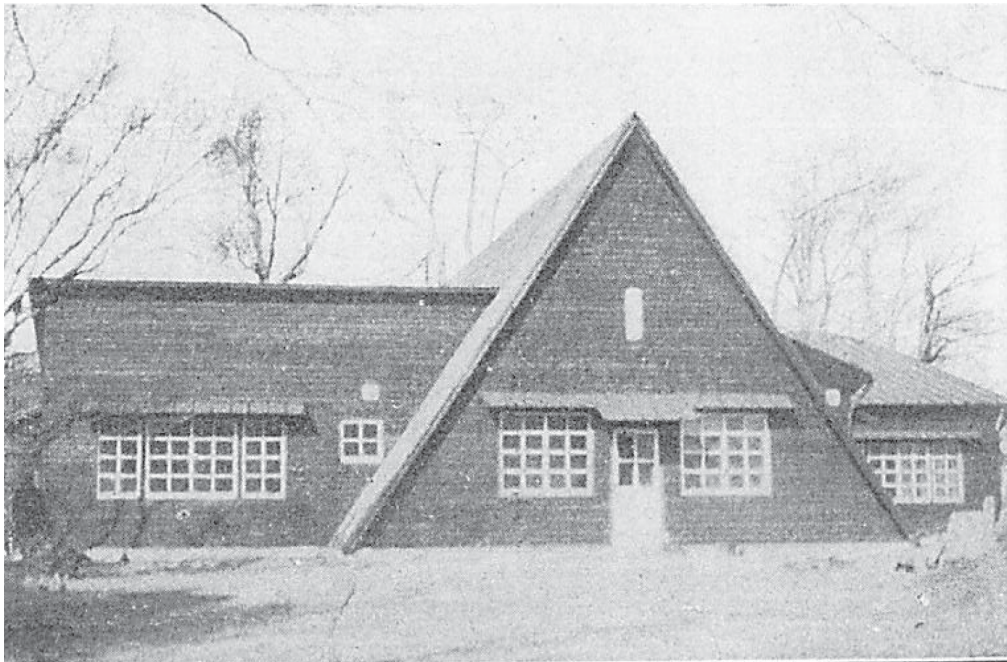


図 1-30 「大学教官食堂」（『建築世界』、1924年5月号）





図 1-31 「大学教官食堂」と思われるスケッチ画（金沢工業大学蔵）



図 1-32 「バラック御殿」（金沢工業大学蔵）



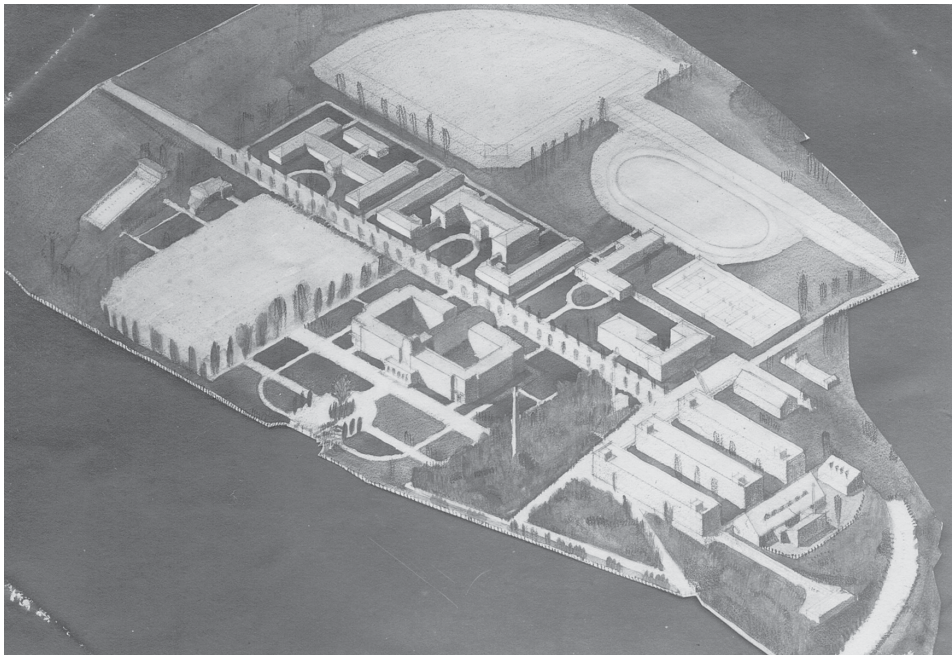


図 1-36 「東京帝国大学本郷キャンパス復興計画」(金沢工業大学蔵)

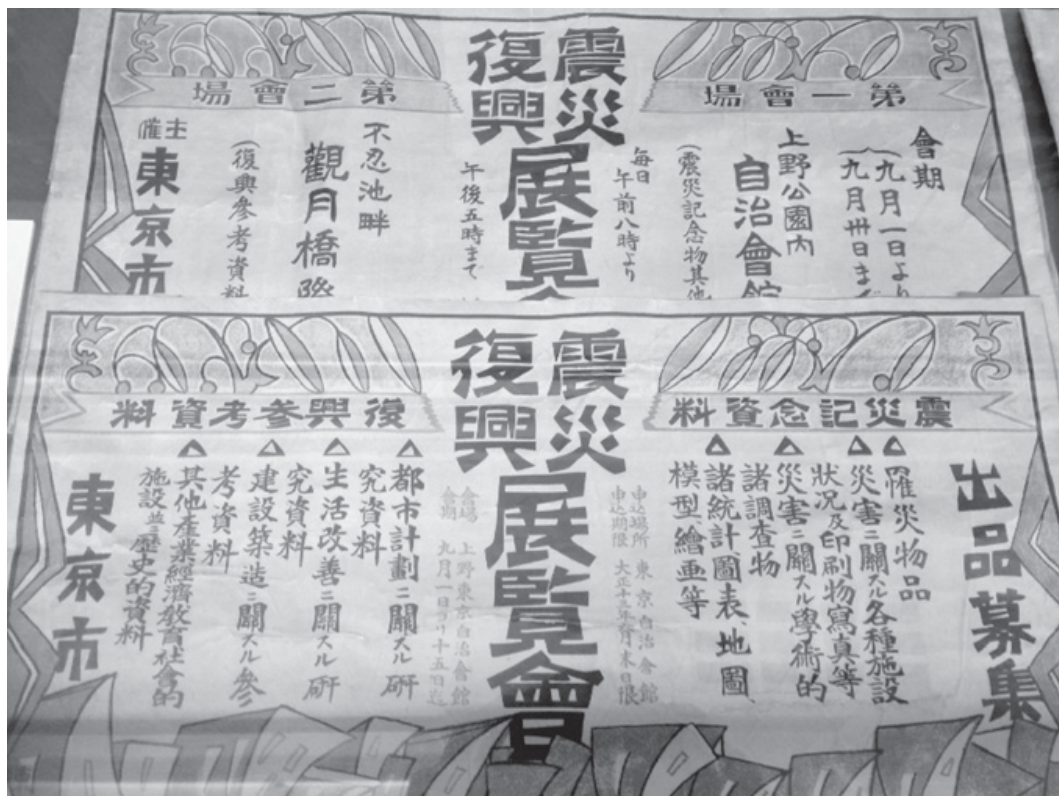


図 1-37 帝都創案復興展ポスター (東京都復興記念館蔵)

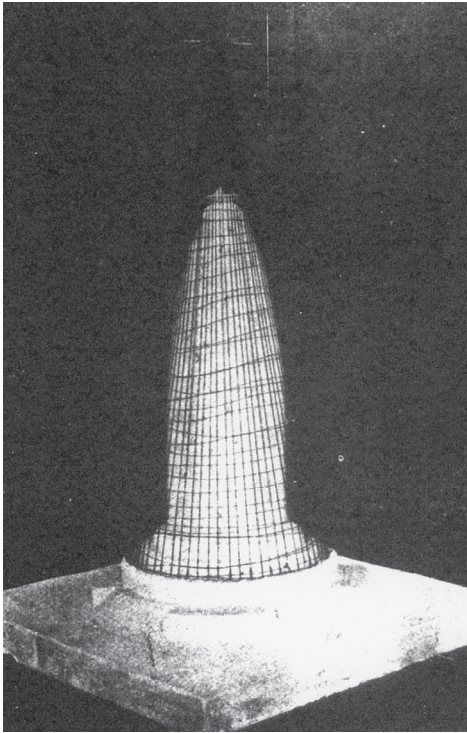


図 1-38 「犠牲者供養塔」  
 (『建築新潮』、1924年6月号)



図 1-39 「学士会会館建築設計懸賞当選図案」  
 (『建築雑誌』、1924年12月号)

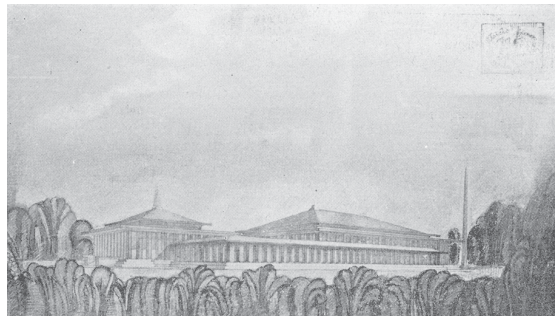


図 1-40 「震災記念堂設計競技案 (透視図)」  
 (『建築雑誌』、1925年1月号)



図 1-41 「夜間診療所」 (筆者撮影)

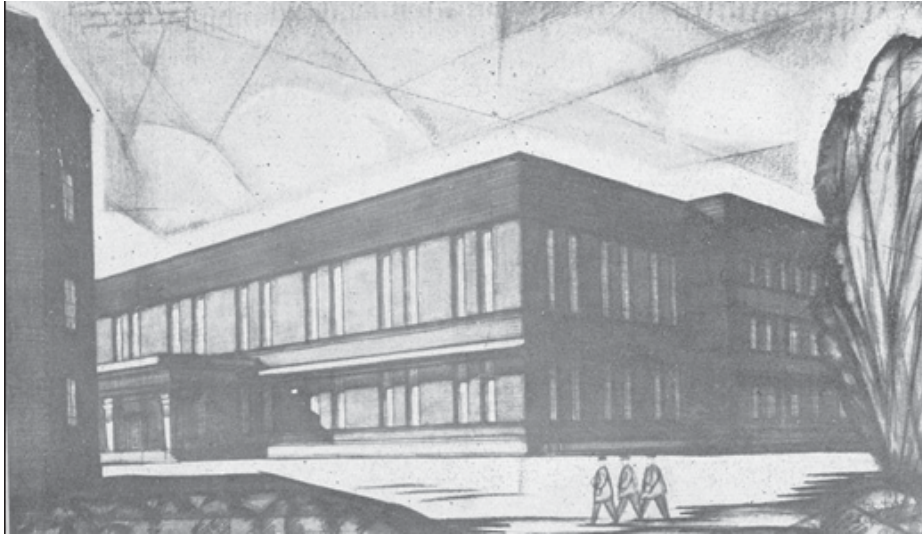


図 1-42 「東京帝国大学図書館建築参考設計草案」(『建築雑誌』、1925年1月号)



図 1-43 東京大学医学部納骨堂 (筆者撮影)



図 1-44 大正末の洋行での日誌（金沢工業大学蔵）



図 1-45 ホノルルのスケッチ（金沢工業大学蔵）



図 1-46 建築家アントン・フェラー（金沢工業大学蔵）



図 1-47 アントン・フェラーの事務所（金沢工業大学蔵）



図 1-48 ロンドンでの下宿先募集の新聞記事 (金沢工業大学蔵)

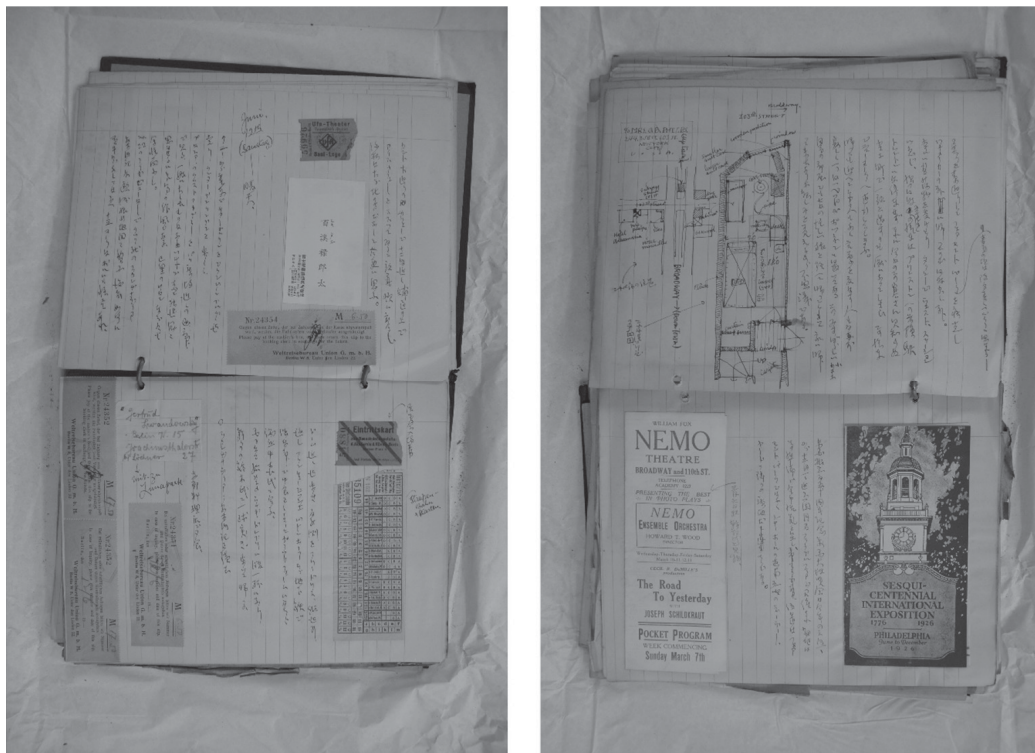


図 1-49 洋行の日誌帳 (金沢工業大学蔵)





図 1-50 長谷川輝雄 (『長谷川輝雄遺稿集』)



図 1-51 木造家屋火災実験

(昭和8年8月28日東京帝国大学構内)

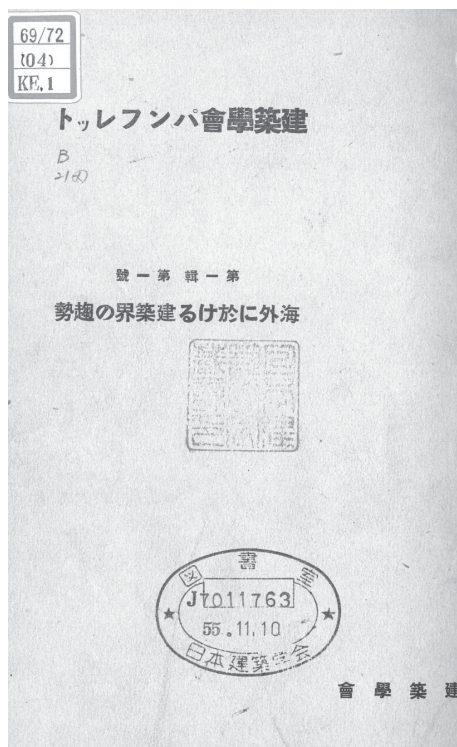


図 2-1 「海外に於ける建築界の趨勢」(日本建築学会図書館蔵)



図 2-3 石本喜久治の批判記事（『東京朝日新聞』、1928年3月16日）



図 2-4 雑誌『建築ト裝飾』の特集  
「せせつ志よん号」の表紙



図 2-5 「建築家オットー・ワグナー十年祭」ポスター（デザイン：蔵田周忠）

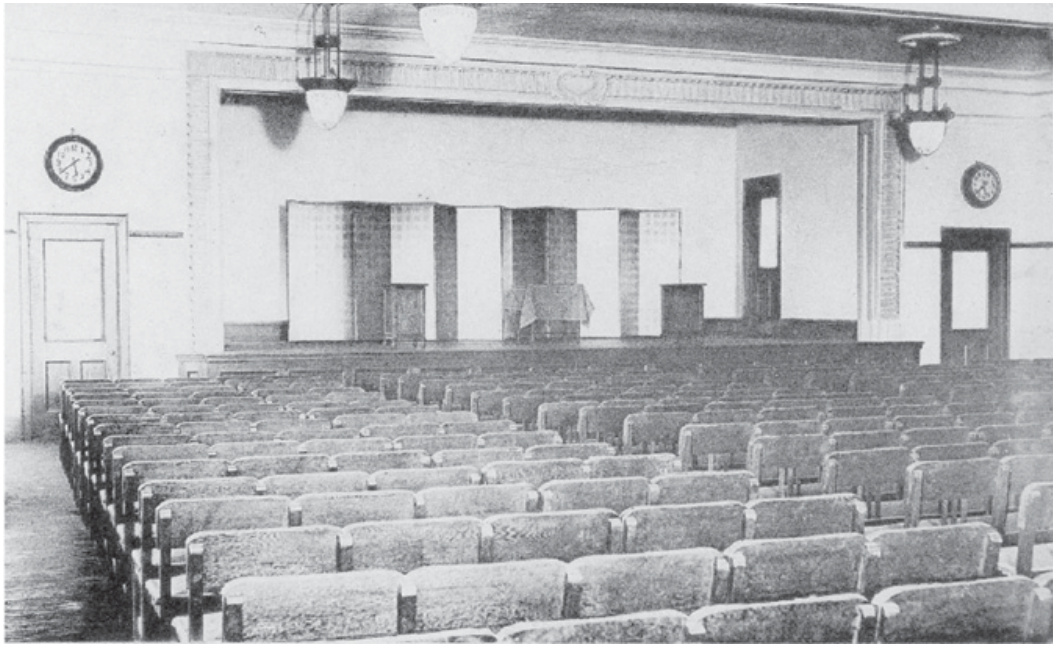


図 2-6 「国民新聞社講堂」(設計 岡田信一郎)

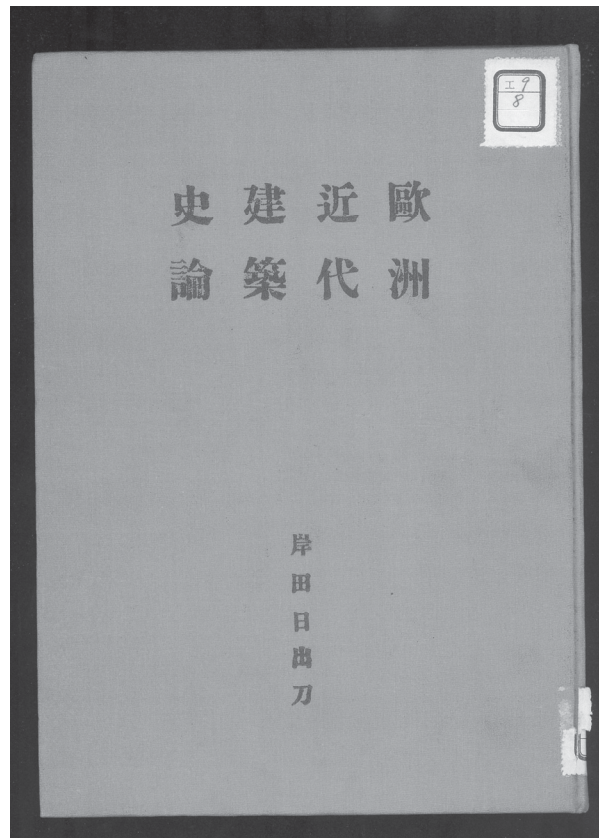


図 2-7 博士論文『欧州近代建築史論』

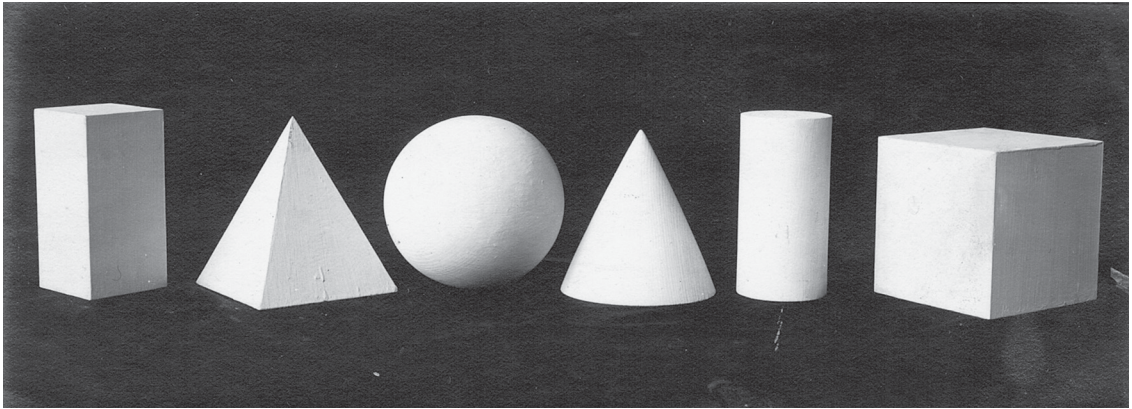


図 3-1 形体の初源的な形（『現代の構成』）



図 3-2 齊々哈爾（チチハル）の忠霊塔

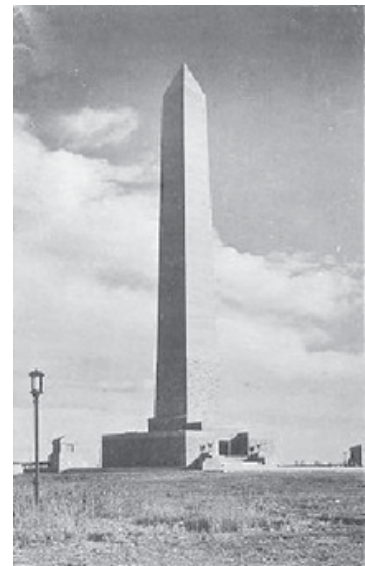


図 3-3 哈爾濱（ハルビン）の忠霊塔



図 3-4 「藤山博士胸像台座」竣工写真

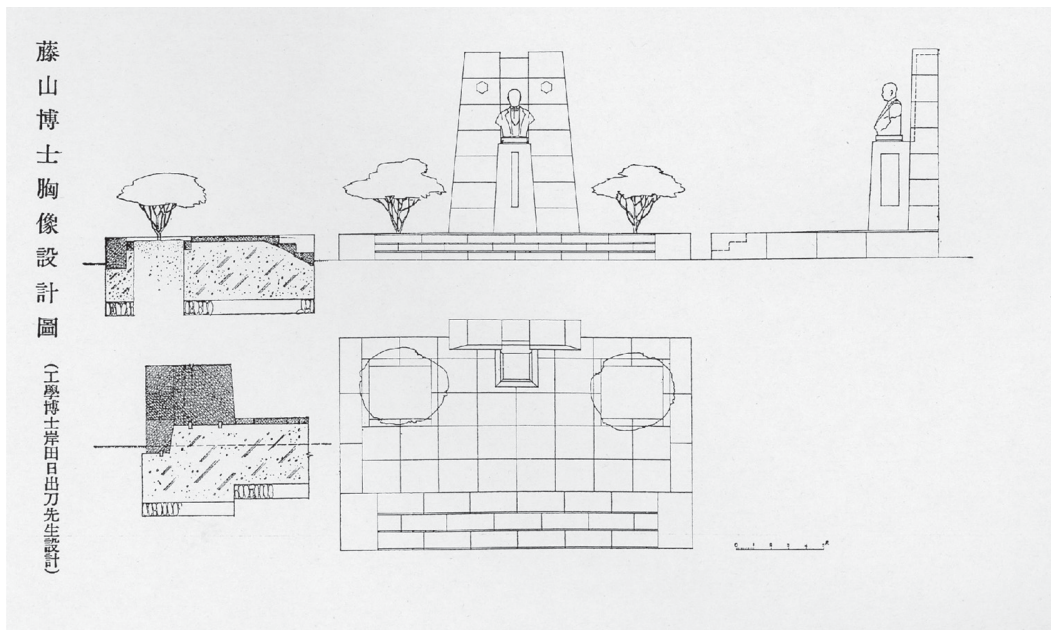


図 3-5 「藤山博士胸像台座」図面 (『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』、1937年)



図 3-6 「藤山博士胸像台座」



図 3-7 「塚本家之墓」(筆者撮影)

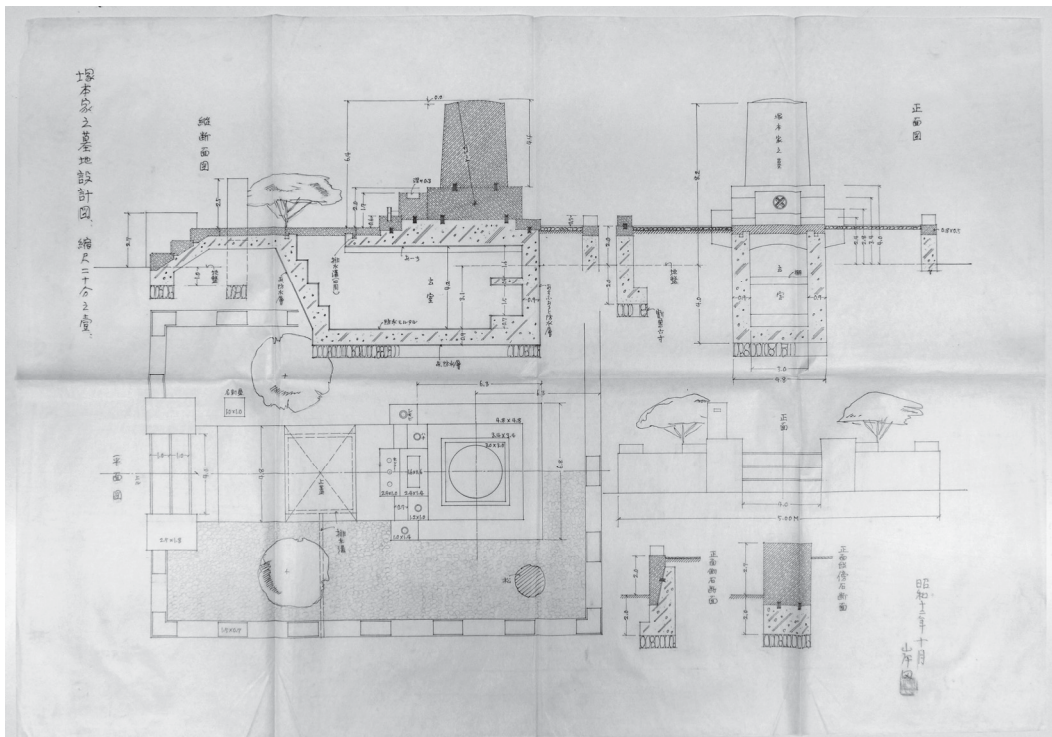


図 3-8 「塚本家之墓」図面(金沢工業大学蔵)



図 3-9 「航空」像台座（安楽俊作撮影）

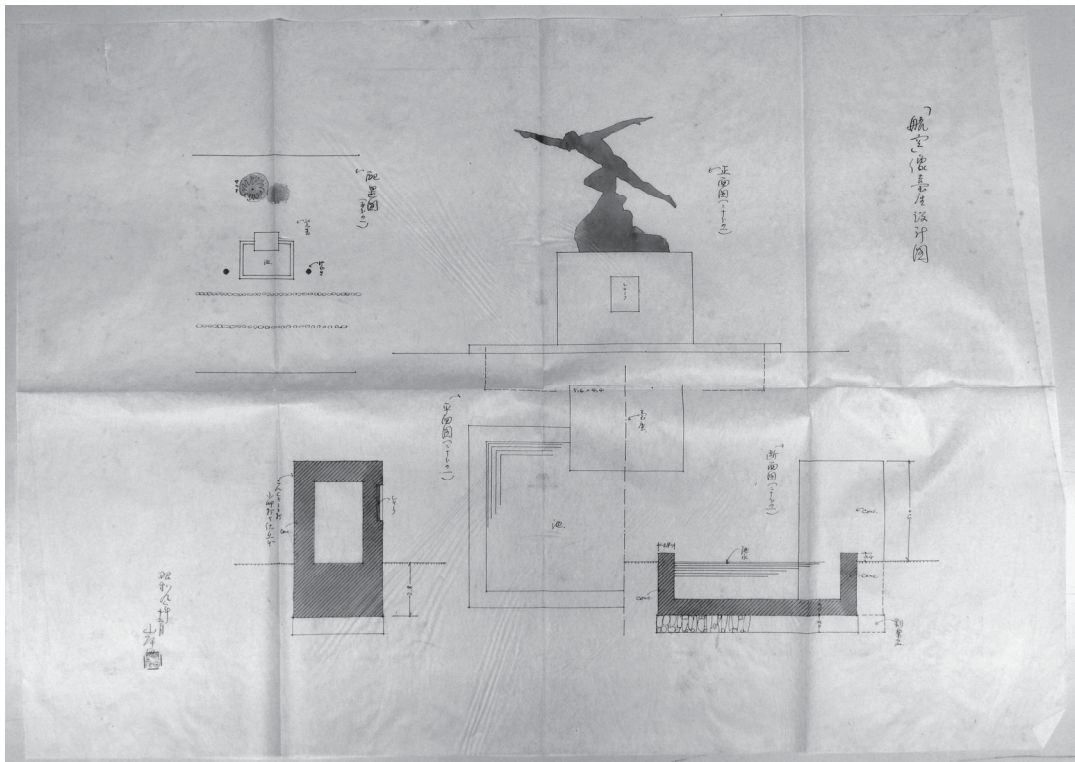


図 3-10 「航空」像台座図面（金沢工業大学蔵）

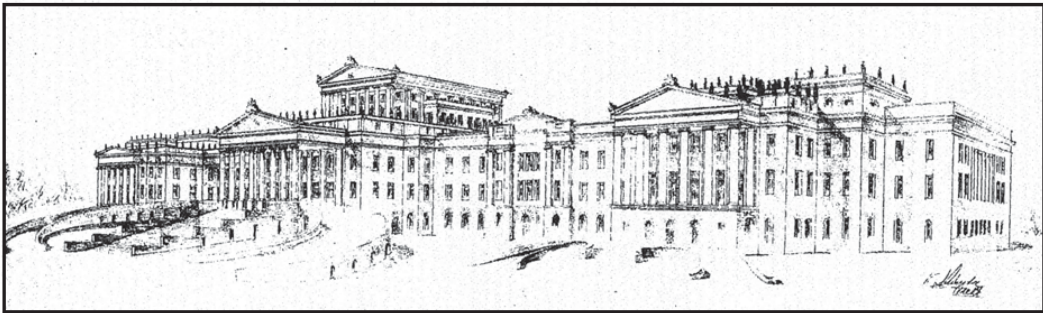
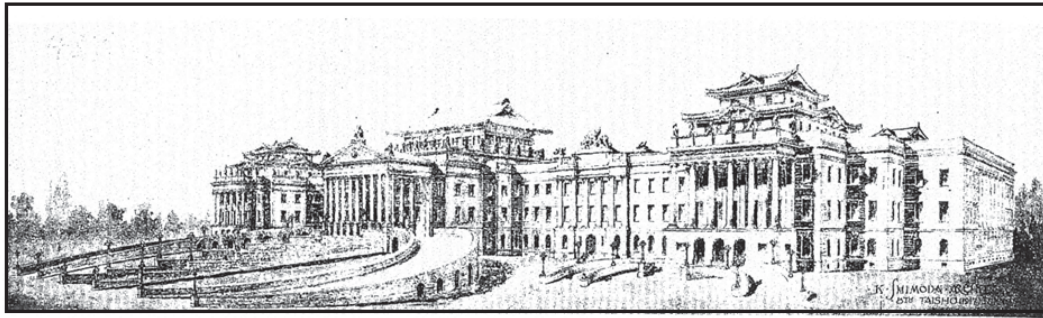


図 5-1 下田菊太郎による国会議事堂案

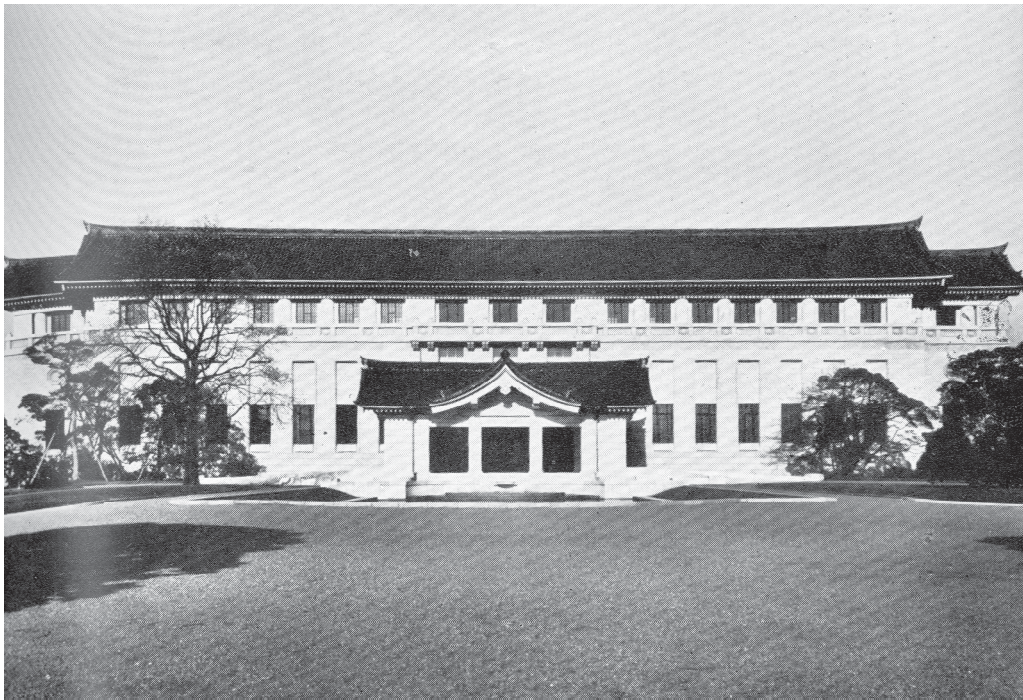


図 5-2 「東京帝室博物館」(『蕙』)





図 5-3 「赤羽学士会ゴルフ倶楽部」クラブハウス内部（金沢工業大学蔵）

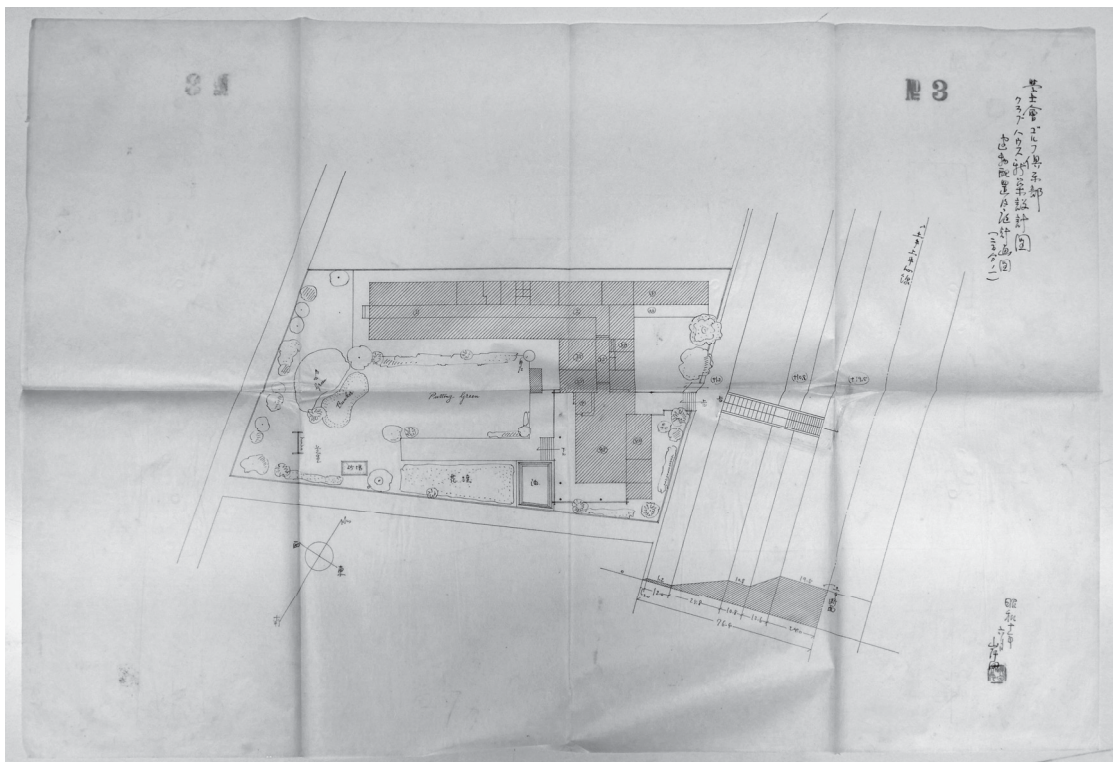


図 5-4 「学士会ゴルフ倶楽部」配置図（金沢工業大学蔵）

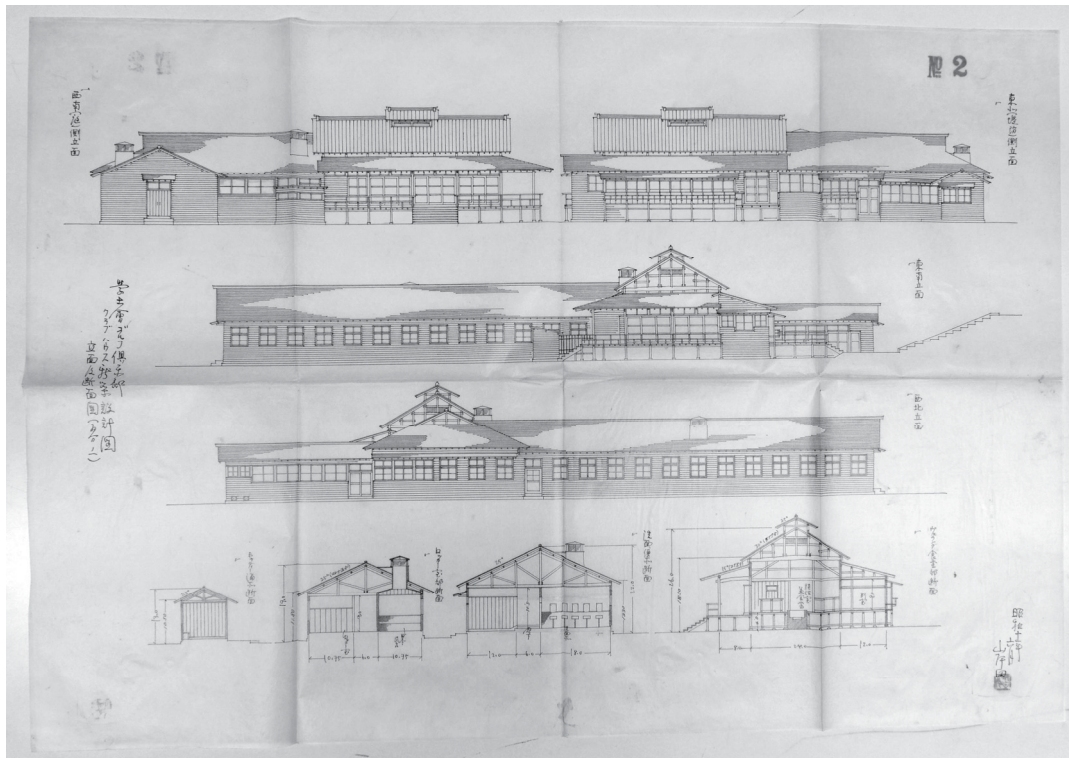


図 5-5 「学生会ゴルフ倶楽部」立面、断面図（金沢工業大学蔵）

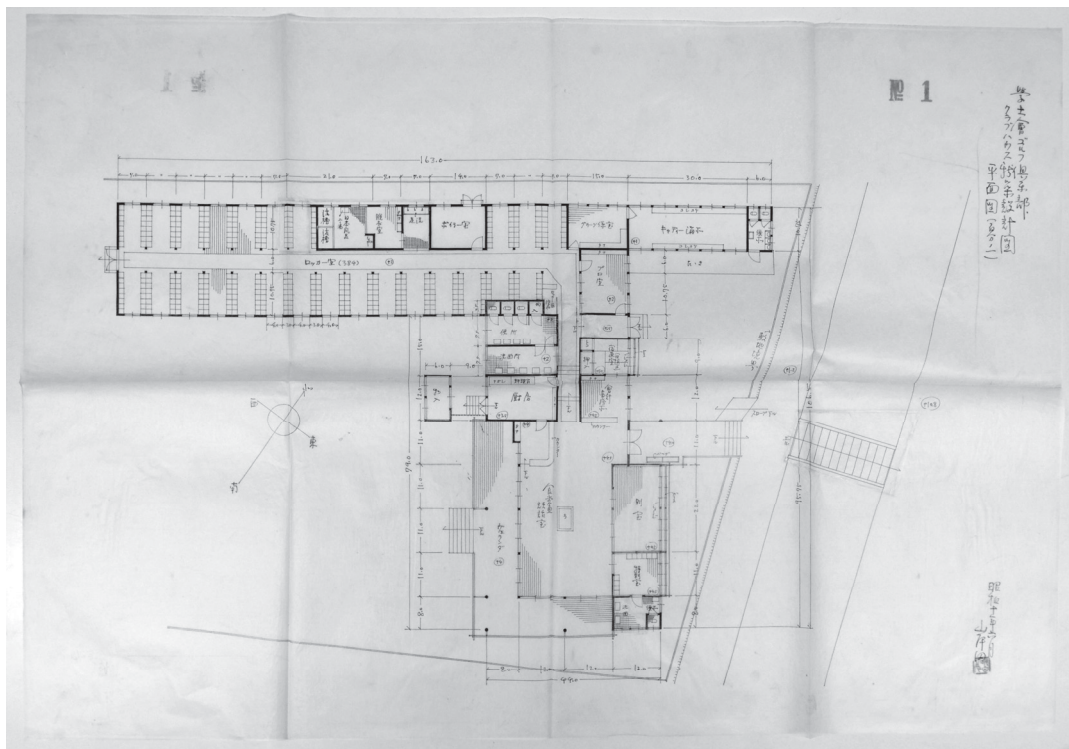


図 5-6 「学生会ゴルフ倶楽部」平面図（金沢工業大学蔵）

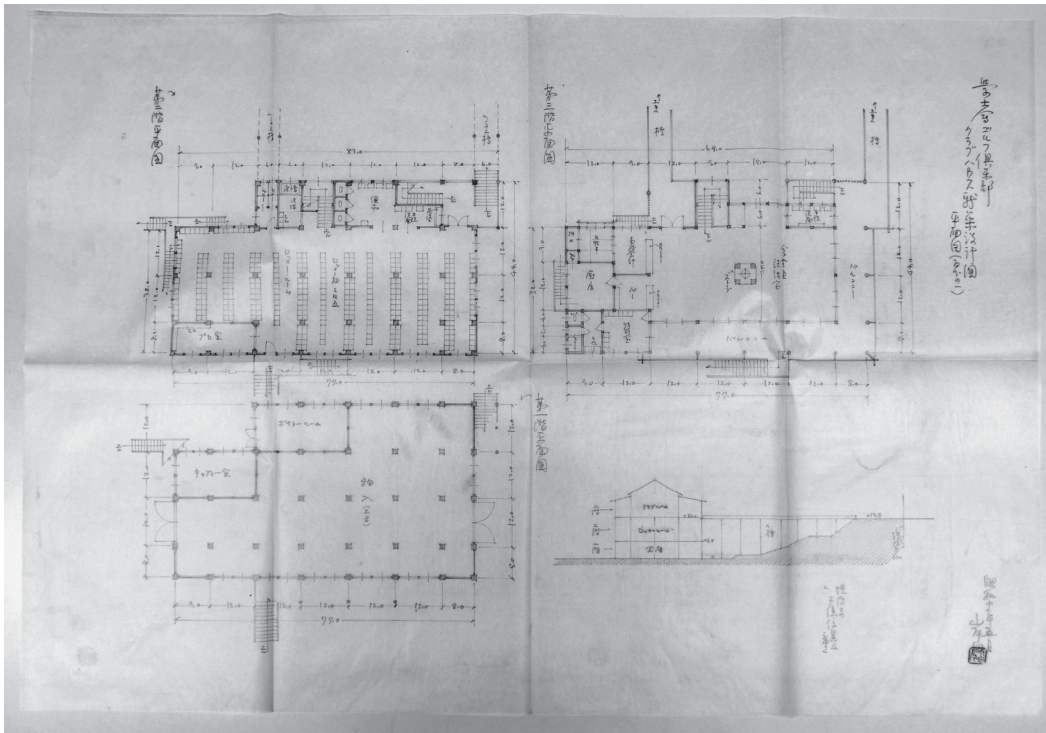


図 5-7 「学生会ゴルフ倶楽部」各階平面図（金沢工業大学蔵）



図 5-8 武蔵野カントリークラブハウス（六実）（金沢工業大学蔵）

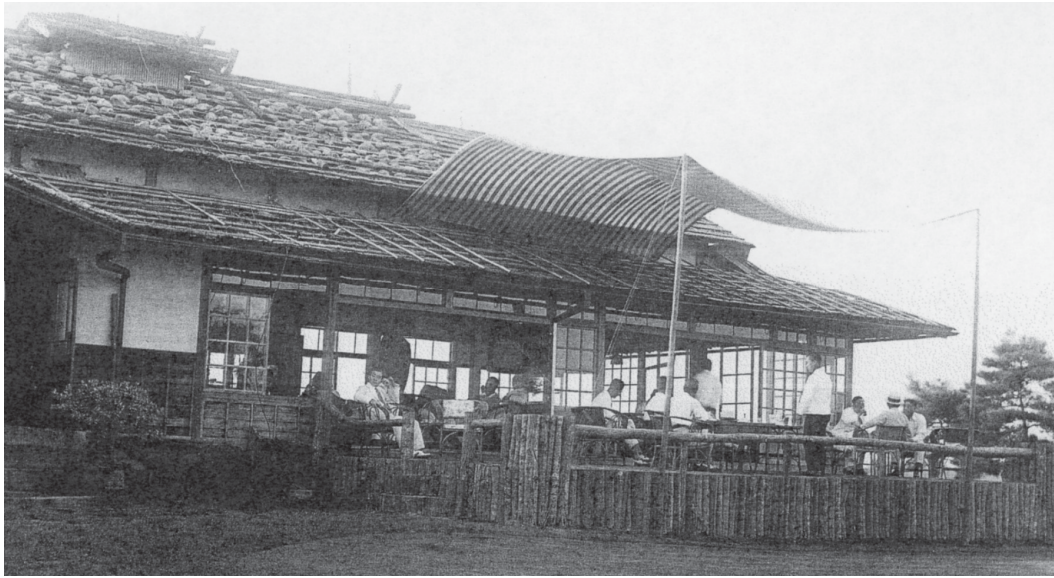


図 5-9 「霞ヶ関カンツリークラブ」(1929年) (『霞ヶ関 75 年史』)



図 5-10 「大森クラブ」(筆者撮影)



図 5-11 「大麩クラブ」ベランダ（筆者撮影）



図 5-12 「日立ゴルフ倶楽部」（金沢工業大学蔵）

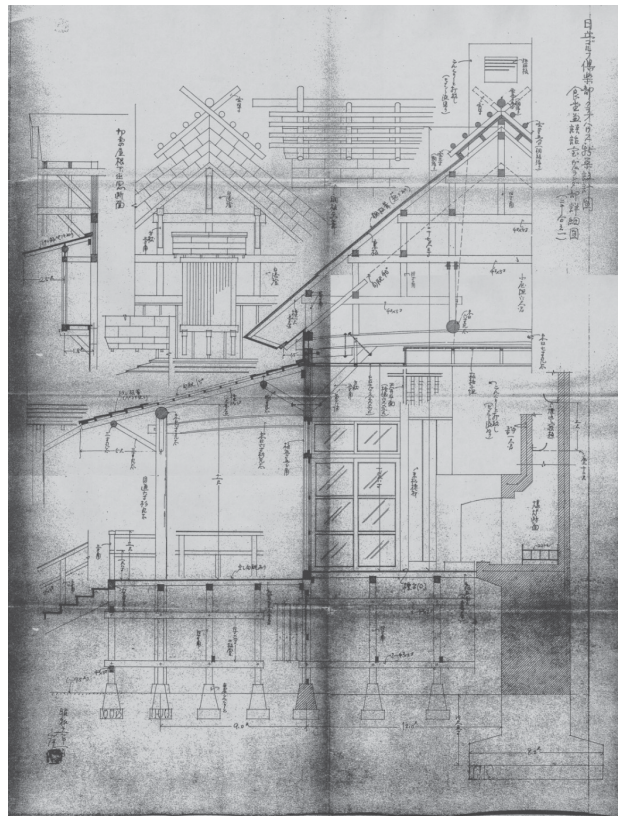


図 5-13 「日立ゴルフ倶楽部」詳細図（東京都公文書館蔵）



図 5-14 「戸田パブリックゴルフコース」(筆者撮影)



図 5-15 ベルリンオリンピック大会芸術競技大会の会場



図 5-16 オリンピックベルリン大会視察時のシベリア鉄道の切符（金沢工業大学蔵）

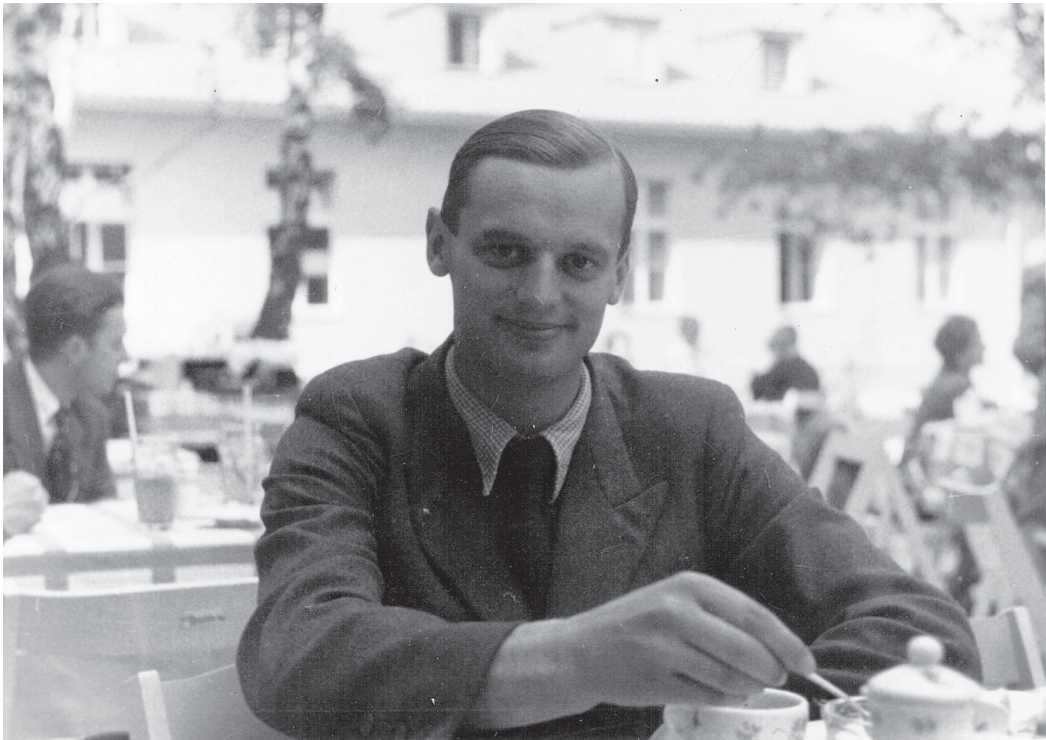


図 5-17 マックス・タウト（金沢工業大学蔵）

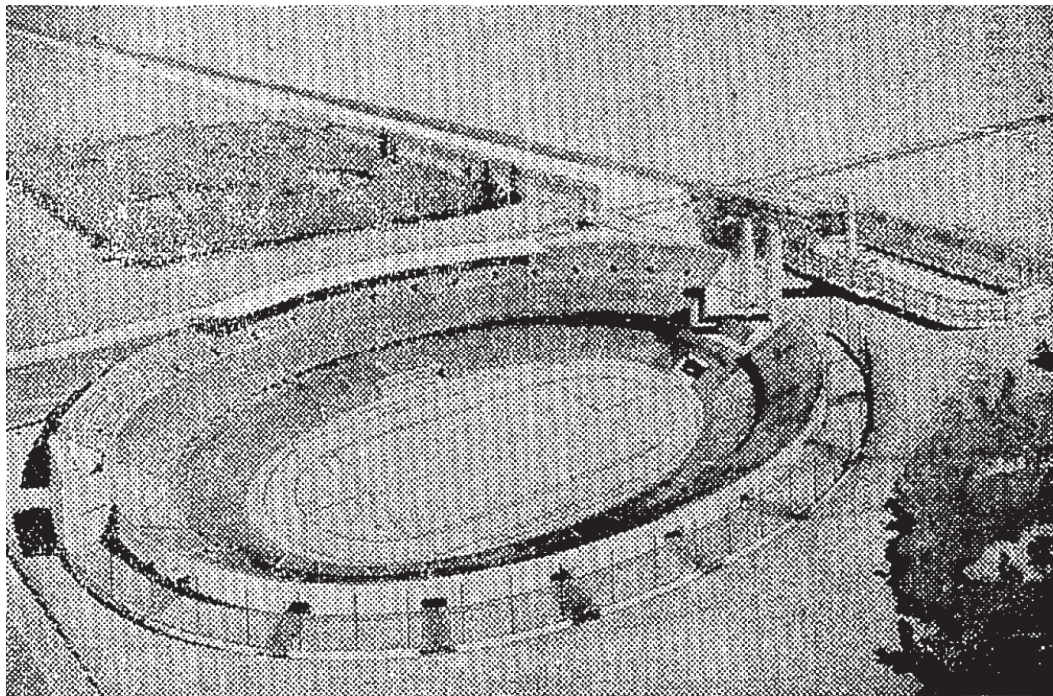


図 5-18 6月のIOC総会に合わせて作成された会場案（『朝日新聞』、1937年5月6日）



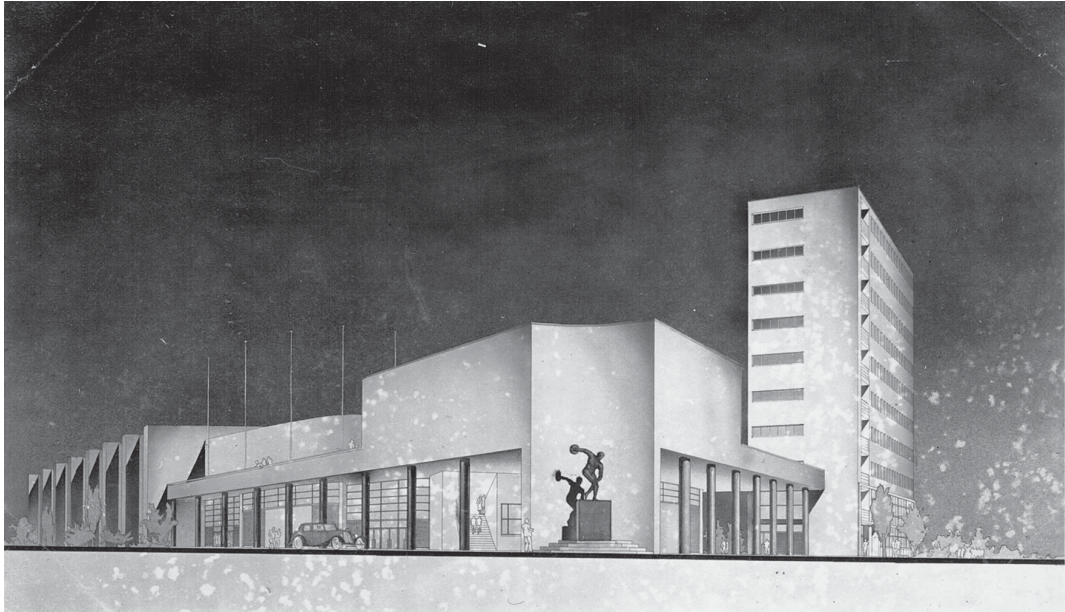


図 5-19 「岸記念体育館案」(金沢工業大学蔵)



図 e-1 金沢工業大学岸田日出刀資料



図 e-2 伊東忠太にインタビューする岸田日出刀（『建築学者 伊東忠太』、1945年）

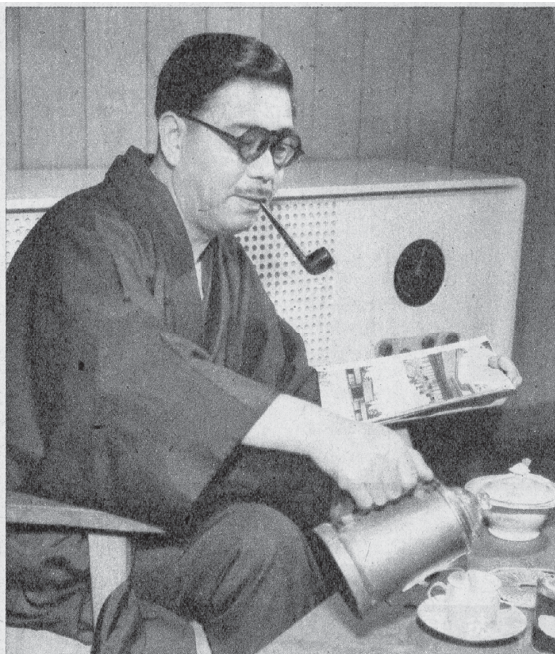


図 e-3 1951年ごろの岸田日出刀



図 e-4 1955年頃の岸田日出刀（手前）と前川（左）丹下（右）

（Rem Koolhaas and Hans Ulrich Obrist Project Japan, Taschen, 2011）

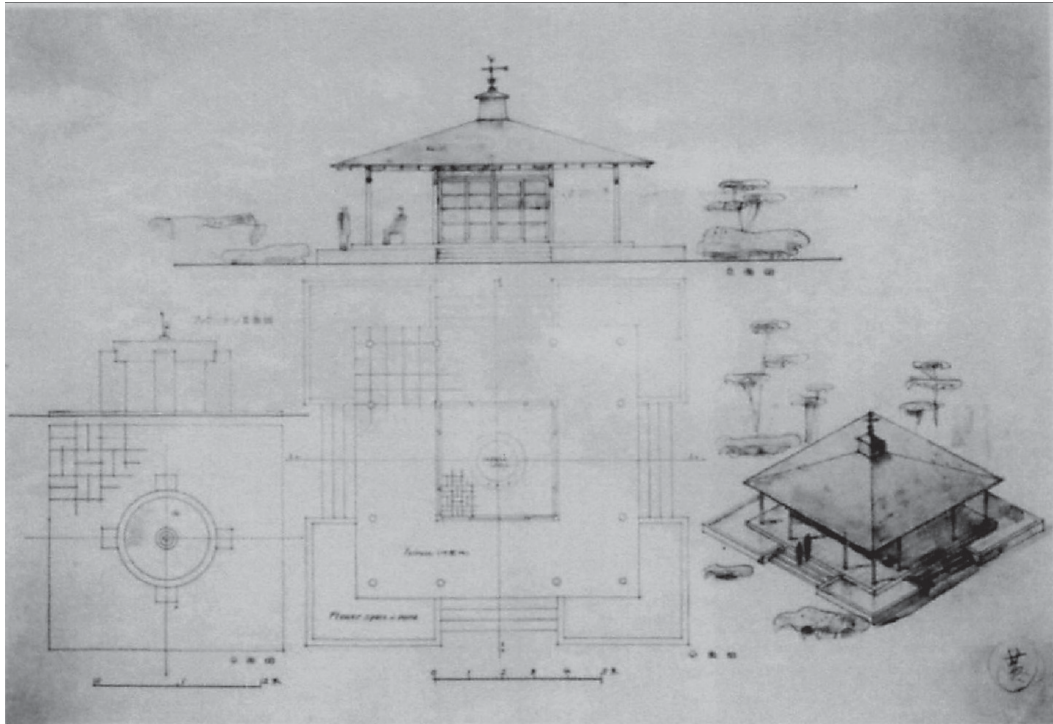


図 e-5 「和風飲泉小屋」(『飲泉小屋設計図集』)

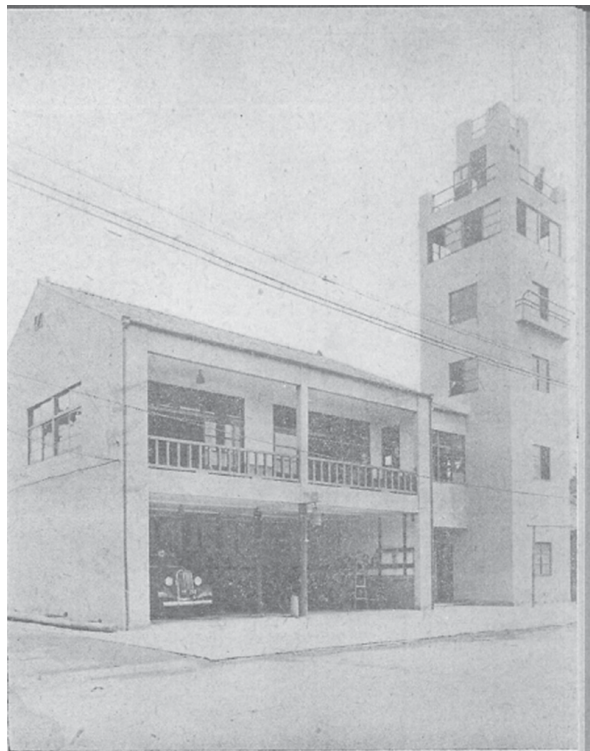


図 e-6 「市川警防団本部 (千葉県市川市)」

(『建築世界』、1944年6月号)



図 e-7 「水原邸」(金沢工業大学蔵)



図 e-8 「読売新聞社主催囲碁日本最強決定戦優勝杯」  
(『読売新聞』、1958年5月10日)



図 e-9 「普陀宗乘之廟（承德）」（筆者撮影）

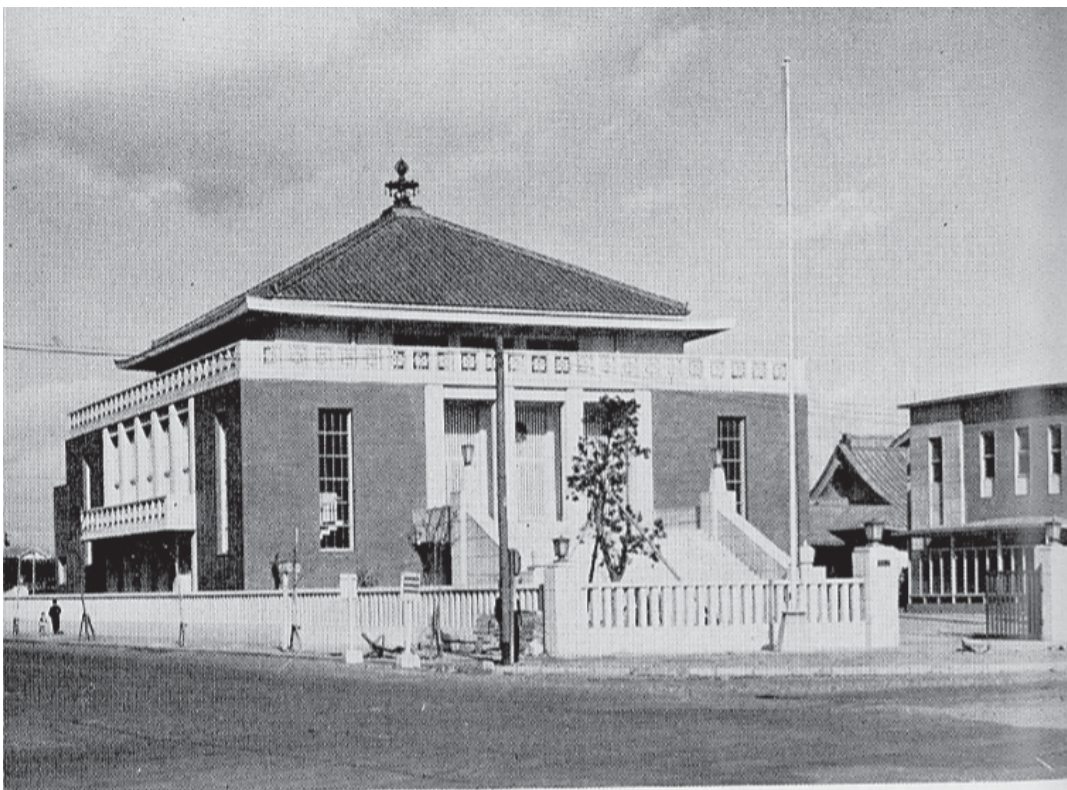


図 e-10 「清風寺」（『壁』）

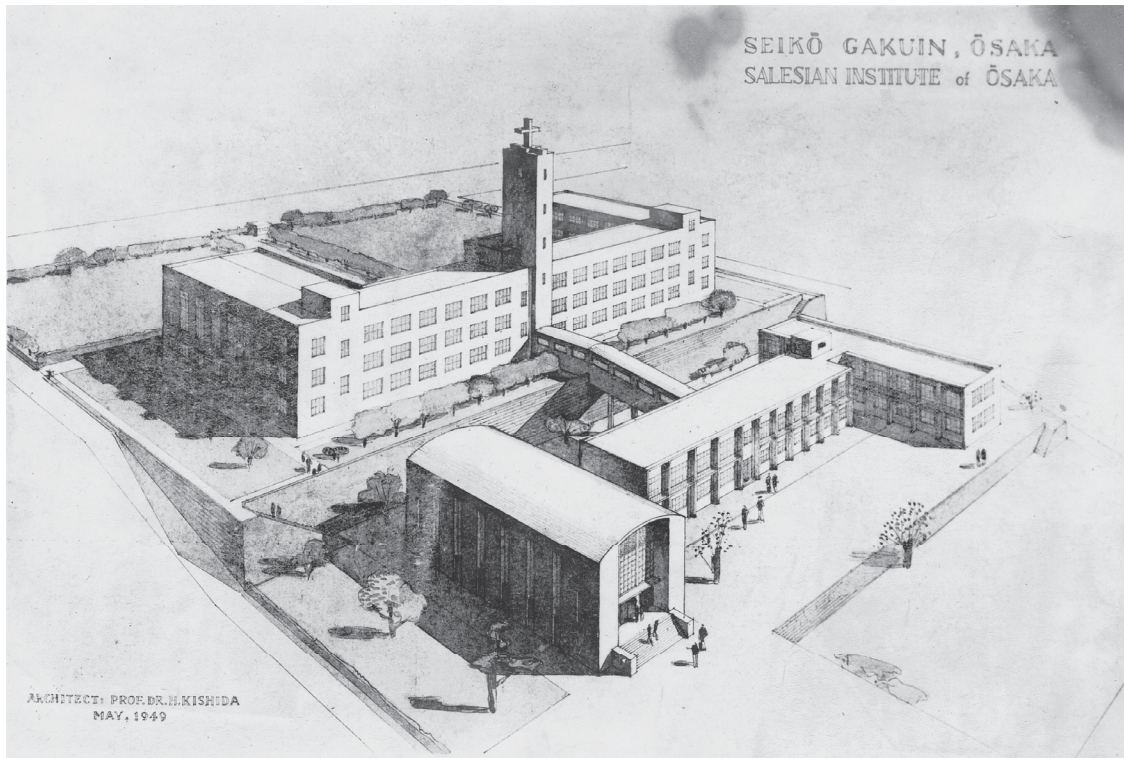


図 e-11 「聖光学院」(金沢工業大学)



図 e-12 「最上稲荷教総本山妙教寺」仁王門 (筆者撮影)

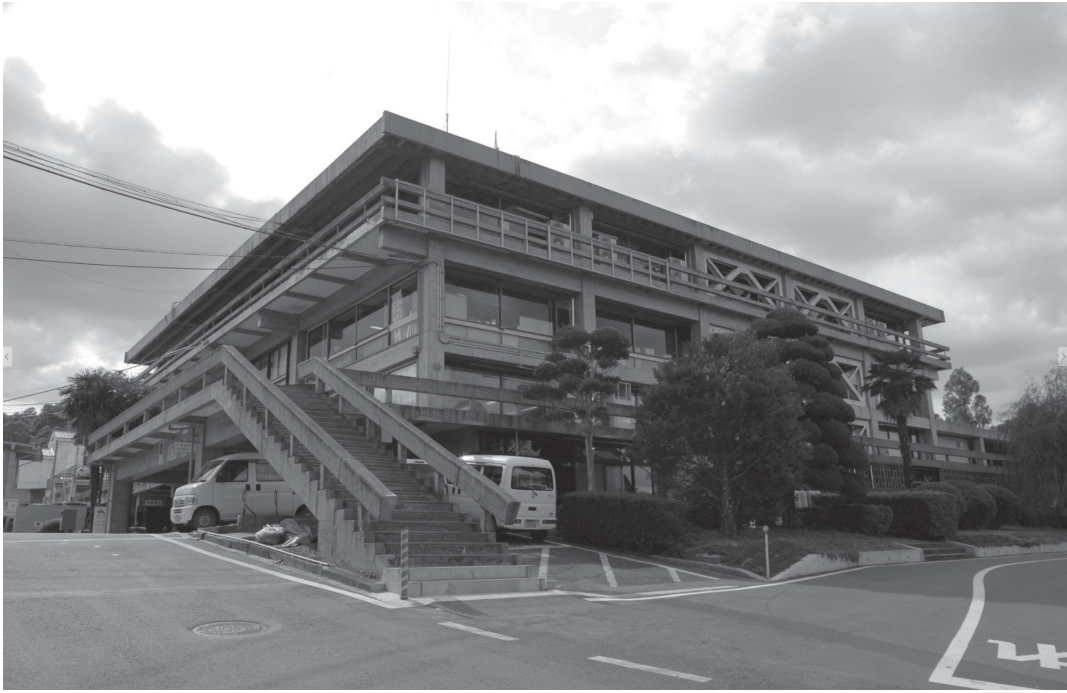


図 e-13 「倉吉市庁舎」(筆者撮影)

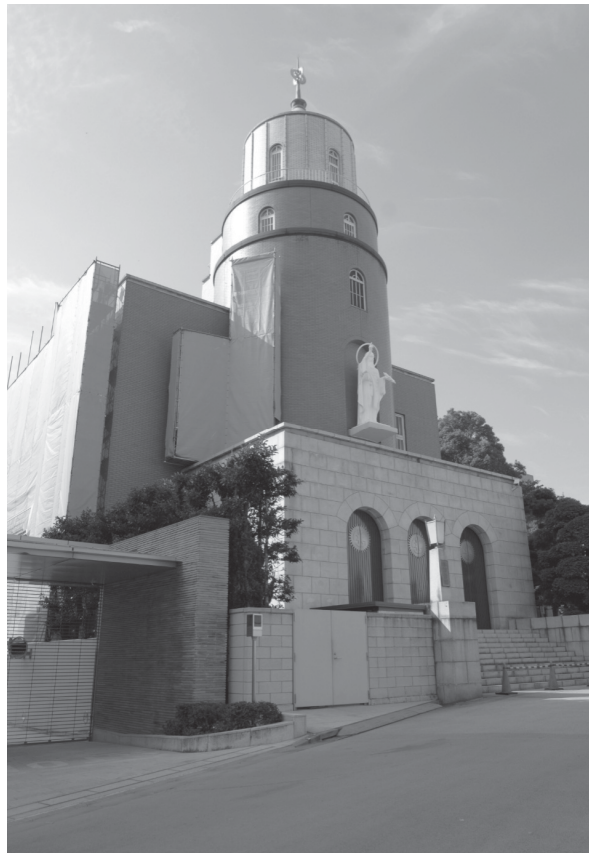


図 e-14 「生長の家本部」(筆者撮影)



図 e-15 「浄土真宗本願寺派本願寺津村別院」(筆者撮影)



図 e-16 「高知県庁舎」(筆者撮影)





図 e-17 「高知県庁舎」模型（金沢工業大学蔵）



図 e-18 「中ノ島リバーサイドビル」(筆者撮影)



図 e-19 「日光東照宮宝物館」(筆者撮影)

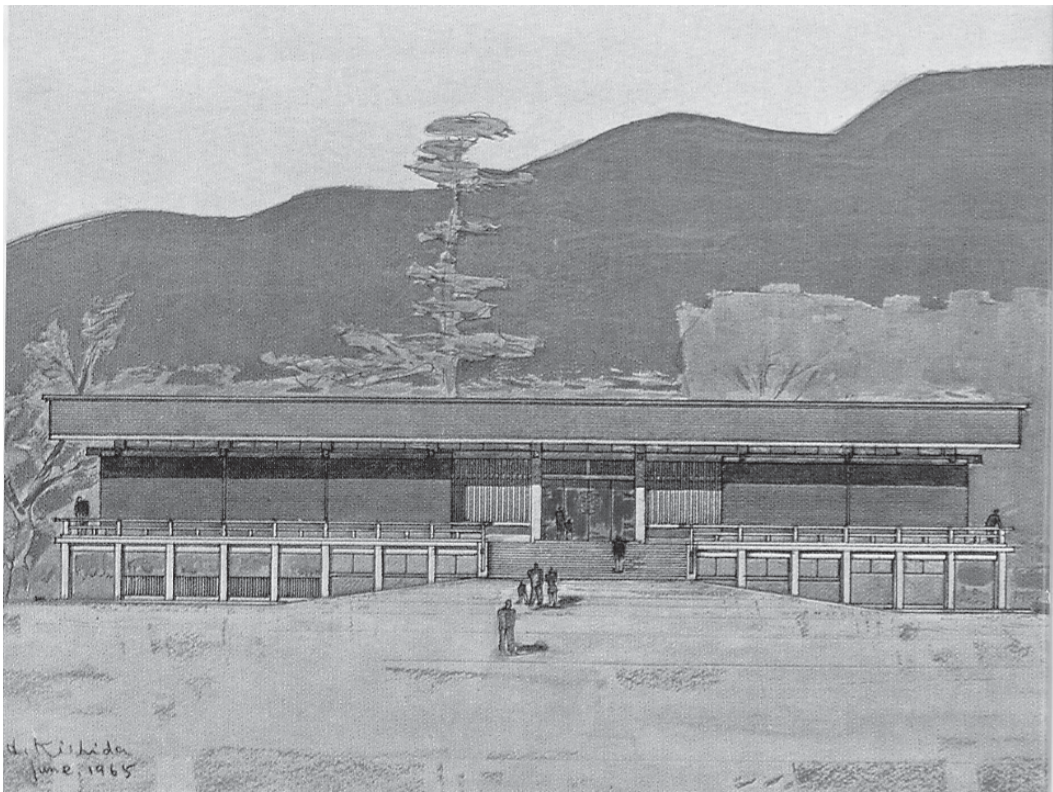


図 e-20 「日光東照宮宝物館」透視図(『岸田日出刀』)

## 資料編

金沢工業大学建築アーカイヴス研究所所蔵の岸田日出刀資料のうち、本研究に特に関係の深い未刊行史料を収録する。

### 収録資料一覧

- 1 ————— 「オットー・ワグナーに就いて」（講演速記）
- 2 ————— 『日本的趣味意匠の研究（草稿）』（昭和11年から昭和12年ごろ）
- 3 ————— 『建築計画総論』（昭和12年度）
- 4 ————— 『意匠及装飾（形体篇）』（昭和12年度）

### 凡 例

- ・ 手書き文章のうち判読不能な文字は、□として示した。
- ・ カタカナは、読解の利便性に重きを置いて、適宜ひらがなに改めた。
- ・ 資料調査および翻刻作業にあたったメンバーは次の通りである。

片岡繁人、江夏隆弘、塩見宏明、庄司兼悟、谷澤大樹、中山洋輔

## 講演録

### オットー・ワグナーに就いて（講演速記） 岸田日出刀

今年丁度ワグナーが死にまして十週年に相当致します。若しワグナーが、遠い東洋の日本の建築家が今夕斯うした催しをして彼の十年を記念してゐると云ふことを知りましたならば、ワグナーは必ずや地下に感慨無量非常に喜んでゐることと存じます。

ワグナーに就きましては、既に十分知悉して居られる方もございませうし、又中にはさう精しくは知ってお出でにならない方もあるかも知れませぬ。ワグナーは言ふまでもなく建築家であります。千八百四十一年九月十三日にオーストリーの首府ウィーンに生れ、千九百十八年丁度欧州大戦が終りに近づいた年の今月十二日に生れ、故郷のウィーンで七十七歳の高齢で死んだのであります。

ワグナーはどう云う建築家であるかと一口で申しますと、新しい建築様式を最初に始めた人、斯う簡単に申すことが出来ます。現在世界の建築界の状況を見渡して見ますと新しい建築、新しい傾向の建築と云ふものは非常に盛観を呈して居ります。例へばヨーロッパにおきましてはフランス、ドイツを始めとして、ロシア、スウェーデン、オランダ、ベルギー、スイスと非常に新しい建築が目覚ましい発展を致して居ります。更にアメリカ合衆国、乃至は我々の日本 - さう云ふ新しい建築が異常な発展を示したのは主として欧州大戦以後のことです。しかしその源を探って見ますと云ふと、先づワグナーまで遡って考へるのが至当であらうと思ひます。

欧州大戦直後盛んに行はれた表現主義は、強いて言ふならば浪漫主義的、或は感情的乃至非科学的と云ふことが出来ますが、最近のフランスの傾向は浪漫主義に対して言ふと古典主義的、或は感情的に対して理智的、更に非科学的に対して科学的と言ふことができ、何処までも合理的である。斯様に戦後の新しい建築にも相当の変化が見られますけれど、目指すところの究極の目的は総て一つであります。それは新しい時代にそれぞれ生命のある建築を作ろうと云ふ点で全然同一であります。でさう云ふ欧州大戦以後の新建築の発展も先づワグナーまで遡るのが順序であります。

その意味でワグナーは新しい建築を始めた最初の建築家である。さう云ふて差支へないと思ひます。

ワグナーの建築はどう云ふものであるか。それを正しく理解するために最も注意すべきことは、その作品の表面からワグナーを解釈してはいけません。且つ現代を標準として - 現代の新しい建築を標準としてワグナーを批評してはいけません即ちワグナーの時代を考へその時代はさう云ふものであつたか、ワグナー時代の建築、更に建築の背景をなしたところの当時の社会はどう云ふものであつたか、それを精しく見る必要があるのであります。更にワグナーの時代、即ち十九世紀の最後の卅年間、その時代を知るためには少なくとも十九世紀の建築を一通り知る必要があります。十九世紀の建築を正しく知るためには、更に遡ってルネッサンス時代即ち文芸復興期の運動まで遡る必要を認めます。何故ならば総ての近代的運動、社会の凡ゆる方面におきます運動は、順序として

総て文芸復興期、ルネッサンス時代にまで遡るのが順序であるからであります。

ルネッサンス以後の建築はどう云ふものであつたか。それは非常に広い問題であつて、ここに詳しくこれを述べる余裕はありませんが、筋道だけを申しますとルネッサンスの建築は十六世紀で一先づ終わったと考へて差支へありません。人によっては十九世紀の初め又はフランス革命十八世紀の末頃までをもルネッサンスと呼ぶこともあります。又見ようによってはそれが全然誤りであると云ふことは出来ないでせうが、本当のルネッサンスは十六世紀で終わったとさう考へて差支へないかと思ひます。十七世紀にイタリーに興りましたバロックの様式、それがドイツに直接非常な影響を与へ、更にフランスに影響し、フランスではこのイタリーバロックと元来フランスが持つて居つたフランス的なもの、それが結び付いてルイ十四世式（フランス・バロック）を形作つて居ります。それは十七世紀の全百年及び十八世紀の最初の三分の一頃欧州一般に行はれた建築乃至芸術の上で非常な勢力を振つて居ります。それは十八世紀の主として中頃でありまして、ルイ十五世の時代に相当致します。

バロック、ロココの建築はどう云ふものであつたか。それをここに詳しく述べる余裕を持ちませぬが、バロックやロココのやうな煩雑な様式にあき足らない当時の欧州の人達は、当然バロックやロココと反対の立場を執る所の傾向を求めました。それはフランスで言ふとルイ十六世時代の建築の傾向と見ることが出来ます。それはバロックやロココの煩雑を去つて、古典即ちクラシックの簡素と明快を求めたのであります。然し当時の古典主義は、十九世紀のそれとは違ひ、初期の古典主義とも言ふべきもので、決して正しい古典主義とは言へぬもので、それはドイツのツォップ式と云ふ形式に相当するものであります。

その後フランスの大革命が起つた。フランス大革命を境ひとして、ヨーロッパの建築は非常な変化を起して居ります即ちフランス革命以前にあつては、建築を支配したものは、権力か又は宗教であつた。所がフランス大革命を境ひとして、その後のヨーロッパの建築では宗教も権力も総てその權威を失墜してしまひ、それに代わつて建築の支配者となつたものは何か。時代思潮であります。権力でもなく宗教でもなく、時代思潮が建築の支配権を握つてしまひました。でどう云ふ変化が起きたか。古典主義浪漫主義更に折衷主義、さう云ふ時代思潮の中に建築が全然支配されるやうになつたのであります。

ワグナーの時代を考へる。先づ第一段の準備は十九世紀の建築でありませう。十九世紀の建築は今申しました様に先づ古典主義が興り、其反動として浪漫主義が興り、更にルネッサンシズムとか折衷主義とか色々な思潮が起きて居ります。

ワグナーの時代は、ヨーロッパの建築が非常に行詰つた八方塞りの時代であります。しかるに当時の社会はどうであつたかと云

ふと、建築とは関係なしに科学において又社会的思想において非常な進歩を致してをりました。建築だけが昔ながらの夢を追ふと云ふやうなことは許されない状態でありまして、当然当時の建築界に何等かの新しい運動が起こらなければならないと云ふ状態にありました。さう云ふ機運を第一に具体化したのも、それがワグナーであります。又当時ワグナー以外ではベルリンで活躍したアルフレッドメツセル、又オランダではベルラーゲ、この三人が新しい建築を最初に具体化した最初の建築家として普通挙げられます。事実これ等の三人の人々の作った代表的建築は殆ど時を同じうして完成されて居ります。ワグナーの代表的作品の一つであるウィーンのシュタットバーン - 丁度東京の省線のやうな高速度電車の様な - それに付属してゐる色々な建築が完成されたのが千八百九十七年。ベルラーゲのアムステルダム商業取引所の建築のできたのが同じく千八百九十七年。ベルリンのメツセルの作りましたウエルトハイムのデパートメントストアーが出来たのが千八百九十五年。さう云ふ風に殆ど時を同うしてヨーロッパの各国に新しい建築が出来ました。

ワグナー時代がどうして新しい建築と密接な関係があるか、それはワグナーとセセツション運動とが結びついて居るからであります。

総て社会上乃至芸術上の色々な新しい運動をなす場合、若しそれが個人的の力であつたならば、その勢力は左程強大でなく、随つてその効果も著しくないのを常態と致しますが、若し団体の力によってなされた運動であつたならば必ず効果が強く成功を修めるのを常とします。過去の色々な例にみてもその通りであります。ワグナーがこの新しい建築精神を発揚するためにセセツション運動の間接の主唱者となつた、そのことでワグナーは新しい建築と離れることのできない大きな名前であります。

ワグナーの関係したセセツション運動それも源を訪ねると、先づ第一段としてイギリスのウキリアム・モリスの工芸美術論迄普通遡つて考へられて居ります。モリスの工芸美術論に関連して、更にラスキン或はフランスのピオレ・ル・デュクの如き人々まで遡ることが出来ますが、先づウイリアム・モリスの工芸美術論まで遡るのが普通であります。

イギリスに最初に興つた工芸美術所上の革新的思想が海を渡つて大陸に來り、フランスではアール・ヌーヴォーとなり、ベルギーに行つてはホルタ或はブルドの如き建築家の新しい傾向の建築となつて現はれたのであります。

更に力強い一つの新しい革新運動は、オーストリアのウィーンに興つたセセツションの運動であります。セセツション運動は今までの因襲的な形式から分離することを目標として当時の新進の画家、彫刻家、更に建築家が合同して団体を作り、目的の貫徹に向つて邁進した力強い運動の一つであります。例へば画家ではクリムト、彫刻家ではメストロイツチ或はメツツナー、建築家ではオルブリツヒ、ホフマン、さう云ふ芸術家達によつてなされた非常に力強い運動であります。このセセツション運動の精神が目覚ましい発展をして、遂に今日見るやうな建築まで立ち至つたのであります。

ワグナーは七十七歳で死んで居りますが、ワグナーを研究するに当たつては、その建築的生涯として三つに大体分けることが便宜かと思ひます。

第一の時代は修業時代であつて、ベルリンの帝室建築学院で建築学を研究した時代、丁度廿才の時までです。その時代に受けた教育はワグナーの計画した又実現した建築の中に相当濃厚に現れて居ります。どう云ふ教育をベルリンで受けたかと云ふと、シンケルの精神 - 古典主義的精神の涵養であります。シンケルは十九世紀の最初に活躍した偉大なる建築家でありまして、十九世紀の初頭、彫刻家のオランダのトルバルゼン更に詩人のゲーテと共に北欧の古典主義を代表する三人の中の一人であり、又当時南方独逸のミュンヘンを活躍地とした古典主義の巨匠クレンツェと並び称された建築家であります。そのシンケルの古典主義的精神を注ぎ込まれたのが、ワグナーの受けたベルリンでの教育であります。最初に受けたこの古典主義の精神が、その後のワグナーの建築に或る場合には非常に濃厚に、又他の場合には薄いながらも相当明らかに現れて居るのであります。

第二の時代は、ベルリンの研学を終つてウィーンに歸り、千八百九十四年にウィーンのアカデミーの教授に就くまでの約卅年間であります。

ワグナーのウィーンに歸つて來た頃、当時ウィーンで代表的建築家として腕を振つて居つたのはバン・デル・ニル及びジツカー・ツブルグの二人であつた。ワグナーも此の二人に就いて研学をつづけたものでありますが、この二人の建築家はどう云ふ傾向の人であつたかと云ふと、ゴットフリード・ゼンパー - 十九世紀の中頃の有名な建築家であつて、古典主義と云ふよりも寧ろルネツサンシストと云ふ方が近いのですが、このゼムパーの建築精神を受け継いだのがワグナーの先生となつたこの二人であります。随つてワグナーも自然其の感化を受けて古典主義的或は更に適切にはルネツサンス的の傾向を多分に持つべく感化されたのであります。

第三の時代は、千八百九十四年に美術学校の教授に任命されてからその死に至るまで、ワグナーが最も活躍した時代であります。

普通ワグナーの時代の建築としてはウィーンの郵便貯金局とシュタインホーフの教会堂の建築が挙げられるが、それは何れも第三の時代即千九百五年及び千九百六年の頃に完成された建築であります。この時代にワグナーの考究の対称となつたものは、新時代の建築はどうすればよいか、又新時代の都市はどうすればよいかと云ふことであつて、普通ワグナーと云へばこの第三の時代のワグナーを指す程最も特徴のある時代であります。

ワグナーはどう云ふ訳で偉かつたか。それは見る人によつて色々異なつた観方もありませうが、私が最も偉かつたと思う点を二三抜き出して述べますと、先づ第一に「現代生活を正しく見た」と云ふことあります。これは何でもないうやうであるが、十九世紀の末にワグナー程徹底して現代生活を見た建築家は他にありません。ワグナーは建築で一番大切なものは平面であると言つたことがあります。さう云ふことも結局彼が現代生活を正視したから言い得た言葉であらうと思ひます。この現代生活を正視することが出来たワグナーに依つて初めて正しく新しい建築が興つて來たといふことは、決して偶然ではありません。ワグナーに依つて初めてなし得たところであると私は考へます。

次に「人としてのワグナーの生活」があります。どう云ふ生活であつたかと云ふと、仮りにそれは樂天的とも言へる。決して屈折しない生活であつた。芸術上乃至建築上で新しい運動を起す。或は思想方面で新しい運動を起すと云ふ場合にそれが団体的であ

れば程社会と云ふものの壓迫と迫害は想像以上に大きなものがあります。それは過去の歴史に於いても亦現在においても吾々が察知し得るところであります。ワグナーも当時の建築的因襲を打破しやうと遠大な抱負を抱いてセセッション運動を起したのでありますが、当時の社会は矢張りワグナーに対して非常な壓迫と迫害とを興へて居ります。それがどう云ふ種類の又程度の迫害であつたか、それはここに述べる余裕がないが、当時のウィーンは非常に無理解は壓迫を加へてゐる。さう云ふ無理解さと迫害、これにワグナーは笑つて対し少しも屈托せず働いて居ります。更に笑つて闘つて居りますが、これ等は非常に敬服すべき点であると思ひます。楽天主義は多くの場合に無責任になり勝ちであるが、ワグナーの場合は無責任でない楽天主義、あきらめ的でない楽天主義、積極的の楽天主義とも言ふべきものでありました。普通の人であるならば到底耐へられないやうな迫害に対して、笑つてこれに對し得たことは、非常に偉いことであると思ひます。

又ワグナーの他の生活的にいい点は、非常に天真爛漫であつたことであります。普通の人であるならば自分の地位或は年齢などを考へて大人気ないと云ふやうな心で、嘲笑的な態度で接するであらうと思はれることに対して、ワグナーは真面目に屈託なしに對してゐます。これ等の点も非常に偉い点であると思はれます。

最後にワグナーの偉かつた点としてワグナーは決して齡を取らなかつた。其点を私は非常に偉いと思ひます。勿論肉体的の年齢は取つたのでありますが、精神の上では決して齡を取らなかつた。

ワグナーが一度言ひました言葉に、建築家は四十才にならなければ本統の建築家にはなれない、斯う言つて居る。現在日本においては、多くの建築家が四十才過ぎては駄目であると言つて居る位で、非常にさし觸りがあり乱暴な言ひ方であるが、さう云ふ点も考へて見ると非常に皮肉で且面白い言葉であると思ひます。之も結局ワグナーが非常に若さを持つて居つたから言ひえた言葉でありませう。見様によつては彼は年を取ると共に若さが増して行つた、さう考へられるほどであります。そしてワグナーが作つたものを見て、その晩年に近づけば近づく程澁澁とした清新な建築を生んで居ります。この点はワグナーが人並秀れた力を持つて居つた偉い所ではありますが、又見様によつては非常に若やいだ心をもつて居つたことを立証するものとも考へられ、又逆にかかる若い精神が肉体を若くしたとも考へられるのであります。

ワグナーの作品を見る場合に一寸注意として申したいのは、決してその作品の上から外面的に見てはいけなさと云う点であります。

現代の世界の新しい建築の異常な發展振を見たままの眼でワグナーの作つたものを見ると、多くの人は失望することを私は受け合ひます。ワグナーを見るにはワグナーの本統の偉大さを理解するためには、今から卅年前の人間になり切つて見て初めて理解すべきであると思ひます。〔拍手〕

◇ ◇ ◇

## 報告書草稿

### 『日本的趣味意匠の研究（草稿）』（昭和11年から昭和12年ごろ） 岸田日出刀

日本趣味の建築

岸田 日出刀

建築に於ける日本趣味といふ問題が論議の対象となること既にかなり久しい。日本趣味といふやうなことが特に言はれるといふことそれ自身から既に、日本的でない又は日本趣味でない建築の存在が豫想される。

今日言ふところの日本趣味といふものが建築に於いてやかましく論議され、また実際の建築意匠にも勇敢に應用されるやうになつたのは、昭和五年の満洲事變以後世に非常時の聲趣味の建築が主張されるやうになつた経過は至極順當なことだと考へられぬでもない。

日本の建築が日本的の意匠でありたいといふことは、至極結構なことである。西洋流の様式をそのまま借りてくることは、どの道つまらぬことである。日本に建てられる建築に西洋の衣裳をつけて、それで日本の建築であるとするまてゐることは考への足らぬことである。建築の意匠といふものの上では、日本は古くから日本独自の傑れた技法なり傳統をもつてゐるのであるから、何も西洋流の借物をしてくる必要は更になく、日本の建築は日本風の様式意匠で終始したらよいといふ考へなり主張といふものは、筋道の通つた道理ある言分である。観念的にはまことに尤もな合理的な主張だと考へてよい。

問題は建築に於ける日本趣味とはどんなものか。更に日本趣味を今日の建築に表現するところの意匠上の技術はどうすればよいか。又更に遡つては日本趣味なるものの基調をなすところの日本精神又は「日本的なるもの」の本質への検討と理解とが先決問題ともならう。

私は茲で日本精神の検討を深く試みようとは思はない。僅かに恩師伊東忠太博士の「建築に現れたる日本精神」（昭和十年十一月三十日日本工業俱樂部に於ける啓明會第六十四回講演）中から、左の一節を引用させて頂くことに止めたい。

「日本精神と申すものは、私の直感いたしますところでは、日本開闢當初より既に發生してをつた日本國民固有の精神であつて、さうして具体的には何と言つてよいか分りませぬが、抽象的の言葉で申せば、この精神なるものは大自然そのものの如き崇高にして明朗なものであり、また純眞にして無垢なものであつて、さうしてこの精神は日本全國民の心理を統轄し支配してをるものであるといふやうに私は直感してをるわけであります。さうしてこの精神は時に随ひ物に應じていろいろな形に於いて、またいろいろな名前に於いて現れてきてゐるものだと直観いたします。例へば「忠君愛國」であるとか「義勇奉公」であるとか、又他の方面では「武士道」であるとか、「敷島の道」であるとか、何と謂ひ何と謂ふ。それらは何時でも日本精神といふものが時に應じ物に觸

れて現れた一つの現象であり、それを統一する根本精神といふものは唯一無二であつて、それが太古より今日まで一貫してきてゐるものだと直観するのであります」

建築は本來自然を背景とし人の生活を容れるものであるから、國民生活のあらゆる要素は直接間接その建築の中に現れてくる筈である。即ち古來の日本の建築の中には所謂日本精神といふやうなものがいろいろの部分に色濃く表れてゐるべきであり、過去の日本の建築を仔細に観察するときさうした事實の正しいことを明瞭に認めることができるのである。

建築に於ける日本趣味といふことが論議の対象になつたことは、さう決して新しいことでもないが、それが特に著しくなりそして現實に日本趣味の建築と銘打つたやうな建築が東京や大阪やまたその他の日本各地の公共建築に應用され出したのは、前述のやうに満洲事變を契機とする。即ち國際聯盟脱退以後日本の思想界に沛然として起つた愛國主義國家主義の思潮の浪に乗つて、今まで幾分遠慮勝ちであつた日本趣味建築の主張が、大手を振つて誇り顔に横行濶歩するやうになつたのである。かやうに今日の日本趣味の建築と非常時を高く叫ぶ今日の日本の社會相とを併せ考へると、所謂日本趣味建築といふものの輪廓は實物を見なくともその大体は大よそ想像できるであらう。

普通建築の日本趣味と言へば、古い日本の建築に表はれてゐる全体的の輪廓とか、ディテールとか、裝飾文様とかを今日の新しい構法と材料と設備と計畫とをもつ建築の輪廓とかディテールとか或は裝飾文様に應用再現することに終つてしまつてゐる。かやうな手法も明かに手つとり早く日本趣味を建築の意匠に表はす手段であるにはちがひない。しかしかやうな手法は過去の日本の建築の單に表面上の形相を今日の建築に借りてくるだけのことで、借りてくるものが西洋のものでなしに古い日本のものであるといふだけのちがひであつて、借りてくるといふことは同じである。同じ借りものでも日本のものだから、西洋のものを借りてくるほどの無責任さはないといふものの、借りてくるといふことはあまり感心したことはない。模倣は藝術を破壊するものだが、建築をもまた無價値にするものである。

今日の日本趣味の建築が安價な糊望的手法のものに過ぎぬといふことも、よく考へれば無理もないことで、さう短兵急にほんとの日本的な建築を今日の特に一般公共建築等に今直ぐ求めようとしても、それは求める方が無理だとも考へる。この間の事情を今少し解析して考へてみよう。

日本の過去の建築は木造なのである。木造建築には木造建築特有の様式意匠といふものが當然約束されるものであり、石造や煉瓦造の建築には石造煉瓦造建築特有の様式意匠といふものが結果されるものである。このことは東西古今の建築を普く比較検討することにより容易に明かにされる事實である。木造建築の意匠と

して発達してきた様式を、そのまま今日の鉄筋コンクリート造とか鉄骨造の如き新しい構法と材料とから成る建築にもつてきてよく調和する筈がない。今日の日本趣味の建築の多くに甚だしい無理があるのはこのためである。古代ギリシヤの建築が石造の時代となつても、その初期搖籃の時代にあつては、それに先んじて行はれた木造建築の手法が好んで用ひられ、その部分的取扱はギリシヤ建築が古典建築として大成された石造建築にも認められるといふ事は、今日の我々が當面してゐる日本趣味の建築を考へる場合に於いても、何等かの點で多くの教訓を與へてくれるであらう。

日本建築の美はその屋根にありとは古くから認められてきたことだが、それだからと言つてさうした古い神社や佛寺の建築に使はれた屋根の形式をそのまま今日の建築、特に大都市に建てられる公共建築の類に應用再現することによつて、ほんとのよい日本趣味の建築ができたとすましてゐられるであらうか。古い頃の日本の建築はみな木造であつたからあつた勾配屋根が必然的に考へられ、その結果として過去の日本建築特有の美しい屋根といふものが生まれたのであり、更にそれは日本の量多き降雨といふものに對する必要止むを得ない要求から生まれたものでもある。

過去の日本建築にあつてはその存在が合理的であり妥當であつた屋根形式も、今日の新しい構法と材料とから成る新しい建築では、その踏襲再現が何等存在の妥當性が認められぬものといふことが判る。かやうに理づめの論法で検討して行くと、今日行はれてゐるやうな日本趣味の建築といふものの存在の根據なり影が甚だ薄くなつて行く。建築の實用性とか合理性といふやうな立場から建築を觀て、今日の所謂日本趣味の建築に眼を移すと、それがかかなり非實用的であり且つまた非合理的なものであることが注意される。このやうな純理論から觀ると今日行はれてゐるやうな日本趣味建築といふものの存在價值が全くないことになる。しかし社會との關聯に於いて稍々好意的態度を以て今日行はれてゐるやうな日本趣味建築を見直せば、その存在理由が全くないといふ譯ではない。

理論と實際とは多くの場合に互に矛盾し勝ちであるし、理論だけではよく説明し得ない部分を多分にもつ社會のことであり、更に今日の日本の社會相にかうした日本趣味の建築を要する要素が尠くないといふ過渡的の情勢を併せ考へると、その存在の意義も幾分は認められてよいであらう。かやうにしてその存在意義を幾分なりと認める以上、その發展を希ふのが筋道ではあるが、更に深く考察すればさうした社會的の要望が果して正しいものであるかどうかといふことを考へると、無條件に今日行はれてゐるやうな日本趣味の建築意匠の發展を望むといふことはできさうもない。

日本趣味の建築、日本精神を盛つた建築であること、それはまことに結構なことである。だがそれは飽くまで正しい日本趣味の建築であり、正しい日本精神を盛つた建築であり、更にそれは現代性のある日本趣味の建築でなければならぬ。まちがつた日本趣味、現代性のない日本趣味が今日の所謂日本趣味建築の意匠の中に横溢してゐなければ幸である。

#### 我國將來の建築様式

日本趣味の建築がいろいろと工夫され論議されるといふのも、詮じつめれば日本の建築に仕つかりとした一つの様式をもち來そうといふ念願からに他ならない。西洋建築への追隨模倣から離れ

て、日本独自の建築様式を創作し發展せしめようとの遠大な抱負から、今日見るやうな日本趣味の建築が種々論議の對象となつたり、またその具体化が實行される情勢にあつたりする。

日本趣味の建築意匠といふものは滿洲事變以後特に著しく表面に現れてきたと前に述べたが、しかし日本の建築界に於いて西洋建築そのままの模倣再現をあきたらずとして、日本獨特の建築様式を求めて將來我が國の建築様式をば如何にすべきかといふことが熱心に眞學に論議考究されたことは過去に於いて一再ならずある。私は過去の記録文獻の中からまづさうした事績を茲にできるだけ詳細に拾ひ上げてみよう。

かかる記録のうち第一に擧げらるべきは、明治四十三年五月三十日建築學會通常討論會席上に於いて、當時の本邦建築界を代表するやうな立場の建築家諸氏によつて「我國將來の建築様式を如何にすべきや」に就き論議された時のものである。當時日本は明治維新以後滔々として流入してきた歐米諸文物の感化影響を受けて既に四十餘年を経過し、建築界に於いても漸く西洋建築そのままの模倣再現では日本の建築として萬全のものではなく、日本には日本の建築がなければならぬといふ自覺が強く感ぜられる機運に向ひつつあつたことは、本討論會の開催によつてもその間の事情がよく察知されると思ふ。

本討論會に於いてどのやうな論議がなされたか、その内容の要點を少しく紹介してみよう。(建築雜誌第二十四輯第二百八十二號誌より摘録) 過去に於けるさうした経緯を識るといふことは、將來の日本の建築様式を如何にすべきかといふこと又は私が茲に當面の問題として拾ひ上げた日本趣味意匠の建築様式といふ限られた事項に對して考察を進める上に、直接間接に効果多いことと考へる。

#### 三橋四郎氏所論の要旨

「我國建築界の現状は、西洋式日本式及びその何れともつかぬ建築物が雜然として市街を埋め、實に混沌たる状態を呈してゐる。更に最近にはヌーヴオー式或はセセッション式の如き新様式の流行も移入され出したが、これらの新様式中には日本趣味が案外隨處に散見してをり、建築に於ける日本趣味のよさが強く感ぜられる。それで西洋では日本の建築の趣味がよほど面白いやうに思はれて流行の氣味になつてゐると思ふ。實に日本の趣味といふものは一種拾つべからざる所の趣味がある。それならば將來の日本の建築様式はどういふ風にしたらよいだらうか。純日本式でもなく、純西洋式でもなく、日本の長所と西洋の長所とを採つた謂はゆる和洋の折衷式が宜からうと思ふのである。これは大變むづかしいことであり、更にどの程度に西洋式を容れるかも難かしい。」かく述べて氏は當時既に造られてあつた和洋折衷様式をもつ勸業銀行・唯一館(ユニテリアン教會)・参考館・白木屋・黒江屋・津村順天堂等の寫眞を掲げ、これらの諸建築中に含まれてゐる日本及び西洋の要素の割合を指示してゐる。

#### 關野貞氏所論の要旨

「將來と漠然と言つてもその意味するところ不明だから、茲では明治時代を代表すべきスタイルのできる時を指すと假定する。また建築の種類も多いからこれを住宅建築・公共建築・宗教建築の三部類に分け、茲では専ら公共建築を對象とする。更に同じ公共建築でもそれを構築する材料の如何によつて種々の差を生ずるから、將來の公共建築はすべて永久的のものでなければならぬといふ主旨から從來の木造建築の形式は不適當であり、結局煉瓦造



石造で統一さるべきだと考へる。將來の建築様式を豫想するためには、まづ建築の様式は如何にして發生するかといふことへの理解が必要である。様式を規定する要件は、第一に地勢、第二に氣候、第三に建築材料、第四に習慣、第五に從來の様式、第六に外國様式との干係、第七に時代思潮である。第一と第二の要件は從來と殆んど變化はない。第三の材料は從來の木造が煉瓦造又は石造に變化する。第四の習慣では從來の坐式生活から腰掛式生活への轉向が注意される。第五の從來の木造建築の手法はそのまま直ぐ今日の煉瓦や石で造られる公共建築に再現することはできない。第六の外國との干係では、外國との接觸が非常に増して來てゐるから日本建築様式そのままでは時勢に副はぬ。

如上の考察の結果、將來の日本の建築は在來の日本建築そのままの様式ではいけない。何か一つ變つたものでなければならぬ。だが日本人がすっかり西洋人になつたのではないから西洋趣味の様式をそつくり持つてきたのでは日本のほんとの建築とは言へない。然らば如何に變るべきか。將來我建築界の中心となるものは公共的建築でその材料は石又は煉瓦、その慣習は洋式でその現れるところの精神は現代の國民的精神でなければならぬ。これら三つのものを都合よく満足に調和することができれば、それが始めて我國の立派な國民的建築様式となることができる。

而してかゝる理想の國民的建築様式の達成は如何にすべきか。放任してをいてはいけない。建築家が意識的に努力してかやうな建築上の國民様式達成の具現の日の一日も速かであるやうにしなければならぬ。それにはいろいろの手段方法が考へられる、第一は從來の日本様式を本位とするもので更にこれには二つの場合が考へられる。一は從來の日本の建築様式に徹底するのと、他は日本式を本位とするがそれに西洋式を適宜加味折衷するものである。これら二つの傾向のものを検討するに、日本式を押し通しても或程度まで所期の理想は達することはできようが、木造本位の日本建築を煉瓦石造建築に進化させると、或程度まで從來の西洋建築にみるが如き形式手法をとるにいたるであらう。これは煉瓦造や石造建築の構造上の特質上當然なことでもある。即ちこれら西洋建築では壁本位の構造であるから、柱本位の日本建築流の諸形式手法が技術的に不合理となるのは蓋し止むを得ないことである。更に考ふべきことは、現代日本の建築家の多くは専ら西洋建築の知識造詣に深いのを常とするから、日本建築様式を西洋流の構造様式に置き代へようといふ場合にも、西洋建築の諸手法は如何にしてもその影を斷つといふことは望めないであらう。

次に日本建築を本位としてそれに西洋流を適宜加味折衷するといふことは、日本趣味を豊かにもつ一種の新しい煉瓦乃至石造の建築様式を生む一つのよい手段になるであらう。

第二は西洋建築を本位とする傾向のものであるが、これには三つの分類が考へられる。

(イ) 西洋建築は構造に於いてもまた様式に於いても充分發達したものであるから、それをそのまま移入すればよろしいといふ説。これは根本から誤つてゐて論議の餘地すらない。

(ロ) 西洋建築を本位にしてこれを日本化して行くといふ説。これには一理ある。今日日本の公共的建築物は、構造はもとよりその平面の構成等も大体西洋風に近いものであるから、西洋建築の様式を本位としてこれを次第に日本人の趣味に合致するやうに變化させて行き、遂には彼と其の性質を大いに異にする新様式を創造しようといふので、過去の日本の建築が飛鳥時代から奈良時代

に經驗した歴史を顧みて、その達成が期待できぬといふ性質のものではない。大陸の様式を大規模に輸入はしたけれど、またそれらを立派に日本化した同化力の旺盛なことは蓋し驚嘆に値するものがある。しかしこの方法では新様式に達するまでにあまりに長い時間を必要とするであらう。

(ハ) 西洋建築様式を本位にしてそれに日本式を折衷して行かうといふ説。この方法は便利で手つとり早く相當の効果もあり、兎に角新様式建設のための一つの手段であると思はれる。

第三の考へは、全く別に新規に新様式を開創するといふ説。即ち日本でもなく西洋でもない今までのものとは全く別の新しい様式を創り出そうといふ考へで、甚だ興味ある方法である。これにも二つの方法がある。

(イ) 從來の様式は全く度外に置いて全く新しい新様式を開拓しようといふもの。今日行はれる「アール・ヌーヴオー」式の如きはその一種か。しかしこれとても古い既成の様式の土臺の上に築かれなければ、その達成は覺つかなしと思はれる。

(ロ) 既成様式を基礎としてその上に更に新しい方面を開拓するといふ説。「從來人類の造り出したすべての様式特に我國民の建設した様式を基礎として現代の我國民の趣味を充分にあらはした新様式を開拓することにしたい」。日本建築は木造建築としては古今を通じて世界第一の進歩をしてをり、一貫した日本的性格を發揮してをるものであるから、これまでの日本建築にあらはれた趣味精神をどこまでも土臺にして、更にその上に洋の東西様式の如何を問はず取るべきは悉くとり入れ十分にそれを消化して一種清新の國民的様式を創造することにしたい。かやうな主張は「日本式を本位として西洋式を加味する」といふ説に近くなるが、必ずしも日本式西洋式といふことに捉はれることなく、「日本建築に現れた精神趣味」に立脚するものである。そしてその達成は五十年かかるか又は百年を要するかは豫想はできないが、さうした方針と理想とを以て進むべきだと信ずる。」

長野宇平治氏所論の要旨

「日本で日本人が造る建築であるから日本の國粹を發揮させるといふことは至極尤もなことで、これは日本人並に日本の建築家の多數の意向であらう。しかし國粹といふことの程度はなかなかむづかしい。過去の歴史に判然と認められる英吉利のゴシックとか、西班牙のゴシックとか又は更にサラセニックとかグレシアンの如き顯著の様式を期待することは困難であらう。過去の古い時代の建築様式が旗幟鮮明であつたのは、國と國との間の交通が不便だつたといふことに歸すべきで、十九世紀から今世紀にかけ交通が極度に發達したため、建築に於けるナショナルリテイーは次第に失はれる傾向になつた。このことは明治維新以後の日本の建築に就いても明瞭に看取できる現象である。しかし翻つて考へれば、形の上のナショナルリテイーは日本の建築から假に失はれたにしても、日本人の精神氣風といふものはさう簡単に失はれるものではない。即ち形の上に於いてのみ現はれてゐるナショナルリテイーは失はれても精神上に於ける日本の國粹はやはり建築に於いて愈々發揮することができるであらう。

二十世紀のヨーロッパの建築は、次第に各國個有の特徴を失ひつつ一様のものに近づく傾向にある。さうした場合日本だけがこの世界的趨勢に逆つて、日本の城壁を孤立して守つて行くといふことはどうしても不可能であらう。このことは日本の建築を本位とするといふ論者からみれば、残念極まることであらうが、時代

の力はこれを如何ともすることができぬであらう。然らば日本の國粹を如何にして顯揚すべきかといふ課題になるが、表面的に日本の特徴を日本の建築に表はすといふことはむづかしくなつて、日本人の氣風なり精神といふものを含蓄してゐる點に於いてのみ、即ち無形の所に於いてのみ日本の國粹を表はすこととなつてと思ふ。日本人は過去に於いて大陸移入のものを立派に日本化しただけの傑れた才能を示してゐるのであるから、もし今日の日本が歐洲の建築に倣つても、單にこれを模倣することだけに満足して自分自身の國粹を失ふといふ心配は毛頭ないのみならず、益々日本人の微妙な頭腦を以てこれを立派に日本のものとするに成功するであらうと自分は信じて疑はない。

折衷主義の如きで無理に折り合ふといふやうなことは姑息な手段である。今日の日本は試験時代を既に經過して、眞に歐洲の建築を應用してゐる時代だと私は考へ、今日折衷式又は日本の新様式等のことを論ずるは、時代にをくれてゐるものと思ふ。」

#### 伊東忠太氏所論の要旨

「建築の様式即ちスタイルといふものは、國民の趣味の反映であるといふ一言を以てこれを蔽ふことができると思ふ。國民の趣味と没交渉のスタイルは決して永續するものではない。何か斬新奇抜の様式が案出されても、若しそれが一般國民の趣味と相背馳したものであつたら、よしや一時は花を咲かせても、趣味の陶沙のために忽ちにして亡んでしまふであらう。茲に將來の建築様式と稱するものは、將來に於いて儼然として一時代をなすものでなければならぬ。決して火花の如く燦然として起り、燦然として輝き、忽然として消えるやうなものであつてはならない。

諸種の事情を考察して日本の建築にも早晩何らか新しいスタイルが大成するにちがひないと思ふ。しかし私は今日に於いてその新スタイルを具体的にこれこれと豫言することはできない。唯必ず將來國民の趣味を代表するに足る清新のスタイルが大成されねばならぬと信ずるものである。この新スタイルに關しては、和洋折衷主義・歐式直寫主義・新式創造主義などが擧げられてゐるが、私は進化主義を主張したい。即ち日本古來の様式を基礎とし、之を進化せしめて結局日本の國民趣味を發揮した石造の公共建築に達したいといふのであつて、終局の目標は日本國民の趣味を代表すべき儼とした一様式を大成するにあつて、進化主義といふのはその經路である。

和洋折衷主義でも大成して國民の趣味と調和するものになれば結構であり、新様式創造主義が成功すれば更に何よりである。だがこれはなかなかむづかしい注文である。歐式直寫主義は日本國民の趣味を没却する意味に於いて不合理なものと思ふ。」

#### 佐野利器氏所論の要旨

「現時日本の建築は見渡すところ西洋式の全くの直寫である。日本の趣味とは全く没交渉である。これでよいのか。よろしくない。どうしたらよいのか。建築美の本義は重量と支持との明確な力學的表現に他ならぬ。希臘建築が美とされるのは、柱を立て桁を載せ屋根を架するといふ組立構造の理法を最も明快に示してゐるからであり、ゴシック様式の美は積立構造の本義を明確に表示してゐる點にあり、何れも力學美に成功してゐるからである。ところが現時行はれてゐるルネッサンス様式がひのものは、健康なる力學美を缺くものが極めて多く、且つそれらの亞流が現今の日本に建てられる建築の大部分であるといふことをまづ指摘すべきである。

すべての美的要求は、複雑なものでも單純なものでも同じく満足を得ることはできるが、複雑なものは兎角下品になり勝ちである。之に反し單純(シンプリシテイー)は品位を保持するに都合がよい。日本人の趣味が單純性にあることは、古來の日本美術をみてもよく判る。故に日本の建築といふものは、最も單純なる方法を以て重量と支持との明確な力學的表現をなす形式のものでなければならぬ。更にその表現を助長するために、國民の趣味に親しみのあるオーナメントを以てすればよい。大陸から移入された建築様式を若干日本化した程度の所謂日本建築を正しく日本趣味と考へることには疑問があるが、日本人は古くからそれに慣れてゐるから、日本建築變質様式も一つの簡便の方法ではあらうが、決して最善の方法とは言へぬであらう。

私の理想は、重量と支持との力學的表現を最も正直に簡明に表現するところの全く新しい様式を新たに創り出すにある。むづかしいからと言つて拱手すべきではない。現に見るセセツシヨンの如きは新しく創り出された様式だとも言へる。セセツシヨンを直ちに日本趣味に合致するものと言ふは早計に失しようが、セセツシヨンの意氣は蓋し學ぶべきであり、その精神を模して進んだならば日本の國民の様式の達成もさして困難なことではあるまい。」

#### 中村達太郎氏所論の要旨

「論者の一部には、新様式は出すに及ばず、また出せぬといふ者もあるが、それはなげなげし、ぜひと何か新しいものを日本の建築家が考へ出すやうにしたい。その方法内容をはずきりと豫斷することはできぬが、兎に角何とかして日本趣味を適當にとり入れた様式を開創したい。しかし言ふことは易く實行は至つてむづかしいものであるから、机上の空論に終る杞憂がないでもない。それだからと言つて拱手傍觀してゐては何にもならない。はじめは鶴的であつてもよいから、極く小さな課題から具体的に考へるやうにしたらどうか。」

#### 松井清足氏所論の要旨

「歐米に於いては、二十世紀的即ち世界的様式が造られつつあり、英吉利も獨逸も伊太利もスタイルに於いては段々近づきつつあると思ふ。近い將來に於いて世界的スタイルができるものと考へる。かうした時に日本の建築だからと言つて蛙股や肘木を煉瓦や石の間に挟んだ家をつくるといふことは、形式の上からも構造の上からも、無意味千萬のことである。

奈良時代の建築を日本趣味豊かなものとして人は賞めるが、當時から考へれば何も日本趣味の建築をつくらうとしてあつたものを作つたのではない。三韓とか支那の唐風を直寫したものだつたのである。これと同じで今日の日本としては西洋風のをこしらへて決して悪いといふことはない。むしろさうしたことが適切な方法だと思ふ。かかる場合に日本趣味がなくなるとか、日本人の氣風が脱け去るといふやうな心配はない。形はたとへ變つても、例へば日本の軍隊のやうに立派に日本精神をもたせることはできると信ずる。現代最も發達した世界的様式を採り、これに無形の建築上の大和魂を入れれば、そこに完全な日本の建築としての様式が完成されるものと考へる。」

松井氏の所論は大體長野氏の所論と同趣旨のものである。

#### 大江新太郎氏の所論の要旨

「維新以來今日に至るまでの日本の藝術界の状態はどうか。單に外國と古へとを學ぶことに専ら務めてゐたに過ぎぬ。現在はいか

やうな模倣を一應修了した時代と考へるが、學修時代と修了時代とは、その生産物に自ら異なるものがないならぬ筈である。近い將來に藝術界に發展變化が相踵いで來るものがあるとすれば、現在は正にその發足點でなければならぬ。明治時代は今日に至るまでの過渡時代と言ふべきものである。

結論は、(イ) 新様式の開拓に決して數十百年の長きを要しない。百年河清を持つ愚と無責任をすべきではない。(ロ) 新様式の開拓は努力によって可能である。(ハ) 新様式の開拓に努力するは、吾人の義務であり責任である。そしてその目標は、日本古來の建築様式を主體として、海外古今も建築様式を學んだ腕を以て、デザインの創出に努力するにある。」

岡田信一郎氏所論の要旨

「今後の建築が簡單直截を貴んで無用なオーナメントを附けず、實用といふ點に重きを置いて、それを美術的に處理しようといふ風になつて行く傾向があるといふことは断言して差支へあるまい。しかしかやうな方向をたどる日本の將來の建築が西洋の建築と全く同一であつてもよいといふ論には賛し兼ねる。形は變つても軍隊のやうに昔ながらの日本精神は出せると言ふが、軍隊のことは單に實用のことで趣味の問題は介入しない。實用上の問題では利の方を採れば解決は容易であるが、建築又は他の一般藝術にあつては、單に利害のみで取捨の撰擇を決することが不可能の場合が多いから、その解決はさう簡單には行かぬ。解決の根柢に趣味があり時代思潮がある。

今日日本國民の風俗習慣思潮等はよほど西洋風になつてゐるから、今後現はれる建築が西洋建築にかなり近いものであることは當然なことではあるが、しかしそれだからと言つて日本の建築が西洋建築そのままであつてよいといふ理屈は成り立たない。日本の建築であるがためには日本國民の性情をよく反映するといふことが必要である。國民の思潮を基礎とし、國民の趣味を基として思ふところを直截簡明に表現することにより始めてそこに日本將來の建築様式といふものができると考へる。

今日日本の建築家は日本及び西洋の建築に就いて多少は知識はあるが、殘念ながらまだ完全に通曉してゐるとは言へない。古來外國に於いて建築が如何なる變遷を経てきたか、古來各國各時代の民情や思潮が建築にどういふ影響感化を及ぼしてゐるか、或は更に日本に於ける我々の祖先の性情趣味といふものが日本建築にどういふ風に現れてゐるかといふやうなことを尚一層深く攻究することが必要であると思ふ。もう少し具体的に言へば、日本及び諸外國に於ける建築の歴史的研究を更に充實發展させなければならぬ。それは我國將來の建築様式を解決する上に一つのよい手段ともなるであらう。」

古宇田實氏所論の要旨

「外國直寫式のものとは不可。日本趣味と精神とを根本として東洋各地より按配した形式の上に、西洋のよいところや學理のあるところを利用して新しく日本の建築様式を工夫するを至當と考へる。」

建築學會は更に同年七月八日東京赤坂三會堂に於いて臨時通常會を開き、「我國將來建築の様式を如何にすべきや」を課題として前回繼續の討論會を催し、當時の本邦建築界を代表する辰野金吾・横河民輔・新家孝正・曾禰達藏・酒井祐之助五氏の講演があつたが、その所論の要旨は次のやうである。(建築雜誌第二八三號より轉載)

曾禰達藏氏

「建築様式はその使用材料・風俗・氣候及外國の刺激等に依つて各國民各自の特色を發揮するものなり。然るに文明の進歩科學の發達は日に月に之等國民の特異點を打破しつつあるは明かなる事實なり。各國民にして此特異點を有せざるに至れば、各國民特異の建築様式も亦従つて其面目を保つに由なからん。世界の形成既に斯の如し、吾人は須く一の様式に固執せず廣く世界的傾向に鑑みて將來の様式を期待せざるべからず」(様式平均説)

新家孝正氏

「廣く世界の建築様式を實地踏査せる結果として、英米獨國等の現今の建築様式は吾人の嗜好を満足せしむること能はざるを知れり。唯土耳古・西班牙・印度等に其形骸を止むるサラセン式は、深く我が美的琴線に觸れたるを感じり。吾人は此形式を基とし、自由に其意匠を凝らし、一面需要者の希望を体して我が建築様式意匠圖案の礎となさん」(東洋様式特にサラセン式應用説)

横河民輔氏

「建築様式の如きは其將來を豫想し得べきものにあらず。若し假りに豫想し得るものとすれば、其は世界的のものたるべく、其新様式にして立案せらるる暁には、其實地に採用せんとするに先立つて充分なる考慮を費さざるべからず」(世界的様式期待説)

酒井祐之助五氏

「建築計畫を立つるに當りアーキテクチュラル・コンポジションに注意せば、其建築形態上一新機軸を出すの期もあるべく、且つ何等かの形式を以て時々建築意匠圖案及模型等を展覽するの法を講じ、専門家側のみならず一般需要者側よりも種々の批評を歓迎し、以て建築家及一般公衆との意思の疎通を計り、所謂國民的趣味を建築様式の上に具体的に發揮し得るの方法を採れば、將來日本建築様式自ら其間に生ぜん」(公衆意見參考説)

辰野金吾氏

「建築様式は自然的の發現を待つぐく、之を人為的に制作し得るものにあらず。而して將來我國の様式は西洋式に我國古有様式を調和加味せるものなるべし。我國建築家の任務としては、常に新日本様式の設置に努力して、勉めて各自獨創の建築物を考察して他の建築家作物の模寫を避けざるべからず。吾人は今日より三十一年前に於いて大學卒業論文として將來住宅建築の形式を論じたることあり。参考として其結論を此所に紹介せん。即峨嵋式の構造的原則を基とし、古典式の輪廓東洋式の裝飾を添加したるもの之れ即將來に於ける我國住宅建築の様式ならんと。吾人は今日に於いても尚此結論と同様なる意見を維持せり」(和洋式調和説)

建築學會がかく前後二回に涉つて「日本將來の建築様式」に関する討論會を催し、當時の日本建築界を代表する建築諸家を招いて自由にその意見を開陳せしめ、且つ互に討議せしめたといふことは、該問題が如何に重要と考へられてゐたかといふことがよく判り、更にこれら文獻的記録によつて當時の建築家が日本の建築様式といふものに對しどんな見解を抱いてゐたかといふこともよく判つて興味深いものがある。

明治四十三年(一九一〇年)と言へば、今から二十九年前であり、歐洲に於いてはウイーン・セセツシヨン團の結成後十餘年を経過し、新建築運動は愈々充實發展の機運に向はんとするの頃であつた。當時アール・ヌーヴオーの新様式は、建築に於ける現代の要求に合致せぬ要素を多分に含むの故を以て既に衰滅に歸し、現代生活を正視することによりその發生をみた新様式即ちセセツ

シヨン（過去建築からの分離）が、建築に於ける現代の要求をよく満足するものとして、その将来の発展が大きく期待され豫約された時代である。

これらの新様式はすでに当時日本にも紹介せられ、建築家の間にも種々論議が繰返されてきたが、実際に建設される数多くの建築は、何れも欧州に於ける過去の建築様式の直寫又は折衷變様のものばかりであり、就中ルネッサンスに據るものはその最大多数であつた。かかる西洋建築の直寫模倣に終始するをあきらまずとして何等かの新機軸を日本の建築に生み出そうといふ希望は、少なくとも當時の若い建築家層のうちかなり強くあつたことと思はれる。さうした機運が次第に高まつて、遂にこのやうな討論會の開催にまで進展したことと思はれ、更にその後にも日本に於ける建築の新様式又は日本趣味の問題に就き機會ある毎に、建築諸家の意見が交換され、論文の發表をみるに至つた。

これら数多くの論議の内容に就いて批判をなす前に、當時の建築諸家がこの問題に關し如何なる見解を持てたかを、更に克明に調査することが必要であらう。

建築雑誌第二八三號（明治四十三年）に松井貴太郎氏の「日本趣味を論じて將來の日本の建築に及ぶ」の一文が發表されてゐる。その所論の要旨を左に摘録する。

「將來の日本の建築否現在の日本の建築も純西洋模倣建築ではいけない。日本としての或特色を表はさなければならぬ。その特色は何か。日本趣味である。趣味は時代によって變化するが、その底には日本の風土習慣から生まれた一定の日本趣味といふものが一貫してゐなければならぬ。我國二千年の藝術史を見るに、最もよく日本趣味の現はれたのは、藤原時代と東山室町時代と、降つては徳川の元禄以降である。建築に於いて最もよくこの日本趣味を表はしてゐるものは、法隆寺でもなく大佛殿でもなく、又日光廟でもない。宇治の鳳凰堂と東山々荘金閣が推さるべきである。

日光廟の裝飾過多は日本の趣味ではない。又在來の日本建築手法例へば斗組や葺股を用ひ、軒先を突出せしめ屋根を反らし、破風や懸魚を用ひたからとてそれですぐ日本趣味の建築だとは言へない。支那や朝鮮の木造櫓式の建築で軒先組物や反りのある屋根を用ひたものを見て、これを日本趣味だと言ひ得るであらうか。在來の日本建築手法を用ひなければ日本趣味を建築に表はすことはできぬといふことはない。西洋建築の手法を以てしても、日本趣味を表はすことは充分可能である。

今日の建築で細部に於いて巧に日本在來の手法を用ひて賞讃を博してゐるものも尠くないが、玄關のゲートルが唐破風に變り、柱のキヤピタルが斗組に變つても、またバルコニーに朱塗の勾欄が附いたからとて、それが直に日本趣味を發揮したものとは限らない。趣味は一形式一手法に囚はれるやうなケチなものではない。

然らば如何にして趣味が現はれるか。全体の調子とか心持ち或は意氣などの上に於いて現はれるものである。或特殊の調子（トーン）があつて、それが建物全体に行渡つていて、全体の輪廓や釣合から細部にまで及び、そこに一種の日本的調子は表はしたもので、それが日本趣味なのである。大塚博士は從來の日本建築は概して優美・繊巧・輕快・瀟洒などいふ方に傾いてゐると言はれるが、蓋しかくの如きものを眞の日本趣味と言ふべきであらう。

宇治の鳳凰堂と東山々荘金閣の建築は優美・繊巧・輕快・瀟洒の日本趣味基調をよく満足してをる代表的なものである。前者は藤原趣味を代表し後者は東山趣味を表はし、共に日本趣味豊かな

ものであるが、次いで桃山時代の雄大華麗の趣味を経て遂に江戸時代元禄趣味の精華を見るに至り、藝術界各分野に巨匠の輩出があつた。今日の日本は日露戦々勝の後をうけ世界的雄飛が期待される。恰も現在の日本は桃山の後を受けた元禄の頃に相應する。豪華にして放膽、華麗にして優美、清楚にして瀟洒、更に洒脱にして神韻に富む日本趣味の發揮を以て望まねばならぬ。日本趣味の細部手法を離れて西洋建築を取扱つても、そこに立派の日本趣味といふものは現出されるであらう。

欧州に於ける建築界の現状は如何。過去數世紀に涉つたルネッサンス様式も今やその命脈盡きんとし、世は新様式の誕生を望んで止まない。而してかかる新様式は必ずや日本趣味に觸れたものであらうと思ふ。フランスに起つたアール・ヌーヴオーの如きは明かに光琳の趣味に影響されたものである。クラツシック様式はその瀟洒清楚の點で日本趣味に近いが、ロマネスク、ゴシック等の様式は日本趣味に遠い。またエジプト・ペルシヤ・サラセン・インド・支那等の建築には東洋趣味はあるかも知れぬが、純正の日本趣味には縁遠いものである。ヌーヴオー式は壯美を重んずる建築には不適當であるが、近時ドイツに於いて旺んであるセセッションは直線を主として瀟洒清楚を重じ、簡單明快を目標とするもので、日本趣味によく合致するものと思ふ。

日本趣味を會得して我々日本の建築家は優秀なるセセッションを大成しなければならぬ。それには日本趣味の研究がまづ必要である。かくして日本趣味の本質を理解するとき、木造櫓式や組物葺股等の一手法に戀々たるの要は更でない。吾人の祖先が、唐の建築を取つて天平藤原を大成し、禪宗建築より東山を作り出した如く、新日本建築を大成するは、正に吾人の義務でなければならぬ。」

明治四十三年七月八日に開催された建築學會第二回討論會席上の於ける辰野會長以下數氏の所論要旨は既に前述したが、當日の討論内容を更に詳しく當時の文獻によつて記述してみよう。

前回第一回討論會席上に於ける各氏所論は、その立論引例等に多少の相違はあるが、これを綜合大別すれば二つに分類できる。

第一論。現時の建築様式は我國の趣味によく適合したるものに非ず。將來東西の様式が調和し、我趣味嗜好に適したるものができなければならぬ。如斯調和して出現したものが我國の建築様式である。（三橋・伊東・佐野・大江・岡田・古宇田氏）

第二論。將來の建築様式を論ずる必要なし。現今建築にみる様式が即ち我様式であり、之が進歩發達を研究せば足りる。（長野・岡本・松井・酒井氏）

第二回の討論會は前回の主論者數氏が更に自説を補正擴充して發表し、更に長老格の辰野・曾彌・新家・横河諸氏の意見開陳があつた。

曾彌達蔵所論の要旨。

「建築様式の發生の要素としては次の諸項がある。（一）地勢、（二）氣候、（三）産出材料、（四）國民の性情・風俗・習慣・宗教・趣味、（五）外國の影響。これらのうち地勢と氣候にはまづ差はない。産出材料は日本のものそれ自身はあまり變化はなからうが、交通運輸機關の發達に伴ひ、諸外國の材料も容易に使用することができるやうになつた。またセメントや鐵の如きものは世界共通材であるから、材料に依つて建築の様式は殆んど支配されなくなつてきた。凡そ天下の事物は皆其平を得むとすといふ語が

るが、水は必ず低きに流れてシベルに達して止りそこに停滞する。相異つた温度の物が互に相接觸すれば高き温度のものは低き温度のものに熱を與へて一定の温度に至り始めて止む。異りたる國民相接觸すれば永き間には自然にその長短を互に取捨するありてその建築様式にも變化が起る。一方が世界の嗜好に適するものならば、他はそれの感化を蒙るものである。斯の如く天下の事物はすべて皆同じものにならうといふ傾きがある。建築様式も世界共通ならんとし、その大勢に逆ふことはできないが、各國には各々天賦の特徴がある。地勢とか氣候は國によつて異り、また歴史といふものがある。建築がたとへ世界共通式になつても、各國固有の特徴なり傳統といふものはどこまでも保有さるべきであらう。であるから建築家としては、日本趣味の横溢を主張する者はその所信に邁進し、西洋直寫を至當と考へる者はまたその所信を忠實に實行し、互に相研磨してよく日本の國民性に合致するものを求むべきである。」

#### 横河民輔氏所論の要旨

「日本の建築は煉瓦造を採用すべきや或はまた鐵筋コンクリートとすべきや等の科學的又は實用的の問題とこと變り、日本の建築を如何にすべきやの如きを討議するは異様に感ぜられる。元來或國の建築に固有のスタイルがなければならぬといふ理窟を私は認めない。洋服を着てみても我々は純然たる日本人である。だが當面の問題として本課題が與へられてゐる以上それへの回答を要求されれば、大いに世界的にすべしと主張したい。我國の建築がすべて世界的建築になつても、日本の國家は安全に存在する。世界的新しい武器を用ひた日本の軍隊は日露戦争に大勝利を得てゐるではないか」

#### 辰野金吾氏所論の要旨

「(一) 建築様式は自然的になるものにして人為的に製造しうるものにあらず。(二) 我國將來の建築様式は、様式と我固有式とを調和して更に起るものなり。(三) 建築様式の表現は自然的のものとして之を放任すれば吾人の責任を盡したりといふべからず。宜しく各自信する様式の計畫案をなるべく多く公表して様式成立を促すに努力せざるべからず。

將來我邦の建築様式は如何なるものかの問題を解決しようとするならば、歴史により過去を研究し、之を現在に對照して以て將來に論及する外ない。ゴシック様式を見るにその成立には一世紀を要し、その發達は極めて自然的にして毫も人為的の痕跡をとどめない。アーリー・イングリッシュ式、デコレーテッド式、パーベンディキュラー式みな悉く自然的成立であり、更に廣くルネッサンス式然り。我邦維新後洋式建築輸入以來の變遷は恰もルネッサンス様式が英佛獨其他に輸入したる當時の有様若くはその後の過渡時代に彷彿したものがあつた。今後一變再變三變して後始めて我邦建築様式は自然的に成立するものと信ずる。

我邦固有式が全然洋式と調和するかどうかといふことは大きな疑問ではあるが、美術的裝飾の或部分は洋式のそれと稍々よく調和する可能性も認められるから、我邦將來の建築様式は洋式を體として之に我國固有の美術的裝飾の或部分を被覆として發展するものと信ずる。

將來の日本の建築様式を新たに作り出すといふことはなかなかむづかしいことであるから、建築家は機會ある毎に論文を發表するなり、各自のよいと信ずる計畫案を公表するなり、またこれらを併せ發表提案するなりして常に努力を吝まぬやうにしなければ

ばいけない」

前後二回の討論會に依つて、本問題が如何に論ぜられたかの大要を識るを得た。これら諸家の所論を綜合批判するに先だち、本討論會の論議に對する當時の建築家の批評や感想をまづ以て茲に紹介する必要があるであらう。建築雜誌第二八四號(明治四十三年八月)に井出薫氏の「討論會所感」といふ論説が掲載してある。その要旨を茲に摘録してみよう。

「本討論會の盛大なる催しにも拘らず何等の反響なきは物足らぬ。所感を述べるは論者への禮と考へ茲に小見を披歷する。建築の様式を豫定したり或はそれに就いての方針を定めるといふことは元來不可能であらう。様式といふものは後姿のみ認め得るもので、その前に廻つたとて影も形も眺められないものであることを歴史は我々に教へてゐる。今日日本に行はれてゐる西洋建築の暴然状を見れば、早晚我國にも從來のものと同つた建築が生ずるであらうといふことはよく想像できるが、西洋建築が日本に移入されてから今日まで何年經過してゐるか、この點をまづとくと考へる必要があるであらう。現在は謂はば初代目に當り、日本の建築に新様式が興るのは蓋し二代三代の後であらう。

諸説皆賛同すべくして一も信を措き難し、唯参考として價值があるに過ぎぬ。高論卓説もその具体的方法の指示なく當惑する。抑々建築といふものは實物が主であり腕のものであつて、口先だけで建つものではない。だから名論のものでも口先通りによいものができ上るとは限らない。何れかの説に賛同してそれに決定することは危険で無謀である。種々の望みを出すよりも自分の思ふ所を大膽に自由に實行する外はない。そしてその間に國民性を表はし得るならばできるだけ表はすやうに努めるに越したことはない。かくするうちに自然に日本の建築様式ができ上らう。様式はできるものであつて、出かすものではない。

日本の建築様式問題が討論會の形式を以て種々論議されたのは、明治四十三年建築學會に依つてなされたのが始めてであり、その内容の大要は茲に略悉く紹介した通りである。しかしながら、明治初年以降の如く流入し來つた西洋建築の流行を具さに考察検討して、その非なる所以を指摘して、新しい日本独自の建築様式を求めるといふ機運は、既にそれ以前から醸されてゐた。即ち明治四十二年には、關之貞博士の「日本建築將來の様式に就いて」、大塚保治博士の「日本建築の將來」、伊東忠太博士の「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」及び「再び日本建築の將來のスタイルに就いて」等の文獻がみられる。これらの文獻に示された諸家の所論は、翌四十三年に行はれた建築學會主催の討論會席上の論議として繰返されてゐるから、茲に摘録紹介するの煩を避けることとする。

明治末年頃に於ける我建築意匠界の状況がどんなものであつたかを如實に示すものとしてよき参考資料となるものに、大阪市公會堂建築指名競技設計圖案がある。この指名競技に岡安・田辺淳吉・塚本靖・野口孫市・古宇田實・鈴木禎次・中條精一郎・大江新太郎・葛西萬司・武田五一・宗兵蔵・長野宇平治・矢橋賢吉・森山松之助・の諸氏で、當時の本邦建築界を代表してゐた諸家である。本指名競技が催されたのは大正元年で、翌大正二年一月發刊された「大阪市公會堂新築設計指名懸賞競技應募圖案」に収録された諸家は、當時の建築意匠の動向をよく示すものとして興味深いものがある。一等岡田信一郎氏案及び二等長野宇平治氏案共に純然たるルネッサンス様式であり三等矢橋賢吉氏案はルネッサ

ンスを基調として若干新味を加味したものである。ルネッサンス様式が当時如何に流行を極めてきたかの事情が茲に縮圖化されてみるとさへ思へる位であつた。

茲に極めて興味あるものとして、伊東忠太・大江新太郎・古宇田實三氏の設計諸圖案がある。伊東忠太氏の案には印度風といふやうなものの表出が企てられてあり、大江新太郎氏の案は要所に日本建築の細部手法が加味され、古氏田實氏の案には更に大膽に日本的手法が應用してある。

これらの諸圖案をみると、当時論議された日本趣味建築又は建築の日本的様式とはどんなものかといふ課題に対する解答が具体的に圖示されてあるやうに思はれて興盡きぬものがある。(挿入圖参照)

#### 「建築の日本趣味」論に対する批判

明治末年から大正年間初期の頃に行はれた建築に於ける日本趣味に關する當時の諸家の論は、前項長きに渉り紹介した通りである。それは今日から約三十餘年前のことであるが、世界のまた日本に於けるこの三十年間は最も激しい變化がその建築に見られた時代である。歐米に於いては新時代を象徴する所謂新建築又は現代建築が漸くその緒に就かんとした頃であり、更に我國に於いては西洋の過去洋式を模倣再現することの愚が漸く識者によつて認められ出したが、猶未だ建築の新様式への理論づけも具体案も何等見るべき發展を示さなかつた時代である。

かやうな建築の發展段階にあつた當時の日本で、日本趣味といふものが討議されても、到底正鵠の結論には到底できなかつたであらうといふことは容易に想像できることである。試みに前項に於いて紹介した諸家の諸論を見ても、二三傾聴に値する所論もないではないか、その多くは徒に既成概念による様式といふものの枝葉末節にのみ拘泥した論議であるのは遺憾のことである。しかしこれは考えやうによればむしろ當然のことだと言へるので、當時の日本の建築界の發展段階としては、かやうな所論以上に適切な論議は望む方が誤りでもあつたらう。先輩諸家の所論を茲に批判するのは、或は非礼とも思ふが、建築に於ける日本的意匠を論じようとする今の私の立場からすれば、順序として一慶これら諸先輩の所論を検討すること

は是非とも必要な考へ、敢て茲に少しく愚見を開陳したいと思ふ。

諸家の所論を読んでまづ第一に感ずることは、当時歐洲に於いて新興の一路を邁進しつつあつた新建築運動への関心と理解とが殆んどなされておなないといふことである。建築と言へば西洋建築と日本建築(又は東洋の諸建築)と限定され、西洋建築の様式と言へば古典建築以後ルネッサンス様式に至る所謂過去様式が論議の対象となつてゐる。当時歐洲各國に於いて新建築が如何に力強い發展をなしつつあつたかの事情に対しては、殆んど風馬牛の観がないでもない。一部の所論中にはアール・ヌーヴォーが言はれ、またセセッションが述べられてゐるが、これら新しき傾向の建築の理論的根柢に対するはつきりとした理解と認識とが得られてゐたかは疑問である。佐野利器氏のみ独りセセッションを賞し、力学美と無裝飾美を強調し、更に現代の建築は簡單を旨とすべきことを主張してゐるのは敬服に値する所論であるが、日本建築の細部を慶用するといふ点で稍々論理の不徹底さがある。

明治四十二年(一九一〇)の頃の歐洲に於ける建築界の事情はどうであつたらうか。ウイーン・セセッション団の結成後すでに

十四年を経過し、鉄とコンクリートと硝子の新時代は既にその巨歩を大きく印してをつた。当時の第一人者ヨセフ・オルブリツヒはその輝かしい業績を残して一九〇八年(明治四十年)に死去したが、過去様式は新興建築に潔よくその座席を譲つてゐた頃である。かやうな歐洲建築界の事情と比較して当時の日本の建築界は、あまりにも桃源の夢をむさぼり過ぎてゐた観がある。論者の或者は、日本は最早や西洋の建築を吸収し尽してしまつたと豪語してゐたが、何んぞ知らんその頃の日本建築界の情況は正に歐洲に於ける十九世紀中葉の跡をたどるの程度を多くは出てゐなかつた。ルネッサンスに中毒気味で、日本ルネッサンス式とも謂ふべき安易な意匠に甘んずるといふ状態ですらあつた。

極言すれば、西洋の過去様式と日本の過去様式の中を彷徨して将来の日本の建築を求めようとしたやうなのが、当時の所謂日本趣味建築への探求方法であつた。過去の中を模索しても現代への要求は遂に満たさるべくもないこと言ふまでもない。歐洲建築界の動きに疎かつたといふことが、諸家の所論に共通してみられる欠点であつたと言へるが、しかしこれと日本の建築とを結びつけて考へるといふやうなことは到底希求し得なかつたことであつたらう。

次には「将来」の日本の建築の基本となるべき構造材料に対する確固とした見通しはつきりと正しくつてゐなかつたといふことである。西洋建築は石造又は煉瓦造として發展してきた。明治初年以降の日本の西洋建築はみないづれも石造又は煉瓦造に凝つてをり、当時既にアメリカ流の鉄骨構造も相当広く行はれてゐたやうだが、鉄筋コンクリートの新構法は未だ実施の程度にまでは發展してゐなかつたから、将来の日本の建築の構法も依然石造又は煉瓦造の舊法に據るものと考へられたのは、将来の建築様式を予想する上に大きな過誤をもたらす要素をなしてゐる。論者も指摘してゐるやうに、西洋建築は石又は煉瓦を主材料とする壁本位の構法から成り、日本の建築は古来木造で柱本位の構造からできてをるが、構造形式上全く異なるこれら二つの手法から成る建築様式を、互に折衷してこれをよく調和させるといふことは至難のことであり、鶴的形式を生むに過ぎないであらう。構造形式が石や煉瓦でなくて鉄筋コンクリート又は鉄骨といふやうな別の形式を予想したら、又別の論議もなされたであらう。

次には日本的なものへの理解が正しくないといふことである。即ち今日の建築へ日本趣味を表はさうとして、過去の日本の建築を考へるといふことは当然であるが、過去の日本の数多い建築のうち、どのやうな建築が、また建築のどのやうな手法が正しく日本的な意味をもつものかといふ解りなり撰擇の点で正鵠を失してゐるもの少くないことが指適できる。或論者は法隆寺や大佛殿や日光廟は日本趣味の範とはなれぬものであり、平等院の鳳凰堂と東山山莊の金閣とが過去建築のうち最も日本的なものであると言つたが、この論者も今一步といふところでの外してゐる。岡田信一郎氏は、漠然とはしてゐるが、過去の日本の建築を深く研究して如何なるものが日本建築の特徴かといふことを再検討すべきだと言つてゐるのは、蓋し卓抜の見解である。この卓抜擢拔の見解も具体的説明がないので點睛を欠く憾みがあるが、言外に斗狭の建築を直ちに日本の特質と考へることの誤りを示唆してゐる点は、具眼の論として敬服するものがある。

更に根本的の錯誤としては、西洋建築と日本建築とを水火相容れぬ対象物と考へたことである。このことは一言以て「建築の認

識」不足と難じ去ることができるのだが、当時の本邦建築界に見られた程度の発展段階では、蓋し止むを得ぬ誤謬であつたと言へる。日本の将来の建築様式を考へる場合に西洋建築様式とか日本建築様式等を論議の基準として考へるといふことは、第一の発足点を誤ったものである。西洋の建築とか日本の建築とかにみられる過去の様式を考へる場合にあつても、外形的に形作られた建築の形式そのものを主要の拠点とするといふことは決して当を得たものではない。

根本的に必要であり重要であることは、世界各地の過去の建築にあればに差異異然とした様式が起きたのは何故かといふことの開明なり認識である。即ち過去の建築様式発生理由なり経緯を明らかにして、或土地の或時代の建築様式は此の如くしてできたものであるといふことへの理解が必要であり大切なのであつて、できてしまつた個々の建築様式を詮議するのは、尠くも現在又は将来の建築様式を論じようといふ場合にはあまり意味のないことである。また日本の過去の建築様式を回顧する場合にあつても、徒らに感傷的な懐古趣味に溺れることなく、飽くまで現在の日本の建築といふものと固く結びつけて、厳格な批判的の立場から過去の日本の建築を再検討するとうふ態度でなければならぬ。

明治末年の建築家としては、過去様式の重壓の下で所謂洋風建築の模倣再現に日も猶ほ足りないといふ状態で、眼を広く世界建築界の新しい動向に向けるといふことは、望むべくして不可能のことであつたらう。その後三十余年、当時の討論者中現在猶健在の諸家も少くない。今日から当時の自己の所論を回想し、更に現在と当時の本邦建築界とを較べてその変化が如何に甚しいかに、隔世の感更に強いものがあらうと思ふ。

明治末年から大正年間にかけて、日本の建築界にもかなり大きな変化が起つてきた。鉄筋コンクリート造又は鉄骨造といふ新しい構造形式が登場してきたことである。またそれに応じて歐米に於ける新建築運動も、日本の主として若い建築家層の間に熱心に研究され、また支持を受け出してきた。即ちこのころを転機として日本の建築はその構造材料の上に於いて、また表現意匠の上に於いて、新しい時代に適應する一つの大きな変化と発展に向ふ情勢を示すに至つた。

大正初期の頃にあつて建築の日本趣味問題は如何なる展開を示すに至つたか。明治の末年に當つては、単に抽象的論議に過ぎなかつた日本趣味といふものが、具体的に実際の建築に応用され試みられるようになり、かかる日本趣味建築に対しその是非が改めて討議検討されるやうになつたことは、建築の日本趣味問題の具体的発展の一つの現はれとして注目すべきことであつた。

当時の文献に依れば数多くの建築家により賑やかな論戦が互に交換されたことを識るが、それらのうちの代表的なものとして、建築雑誌第三七二号（大正六年）上に発表された野田俊彦氏の「所謂日本趣味を難ず」といふ一論文の要旨を茲に摘録することにする。

「現在の新しい構造法から成る多くの建築に、在来の日本建築の手法を施そうとする傾向が次第に優勢になりつつある。この傾向の最も初めに起つたものは日本建築の細部（ディテール）を西洋建築のそれに代入しようとするものに過ぎなかつた。一寸見るとルネッサンスであるが、よく見ると柱の頭部に斗組が附いてあたり臺股があつたりするやうなものであつた。近頃のものは更にそれが発展して在来の日本建築そのままの形を新しい鉄筋コンク

リート造の如き構法で作り上げるといふ風になり、檜皮葺の屋根を銅張りで模したり、二重橋を鉄筋コンクリートで鑄造（キヤスト）するといつた調子のものである。即ち日本建築の手法を細部に施すに止まらず、更にその全体の形を新しい材料と構法によつて西洋建築にとり入れようとするやうになつた。かかる傾向に対して、「日本建築の細部や外観を西洋建築に取り入れてみたところがそれはつまらぬことである。我々は我々の建築史の上からばかりではなく更に広く我が國民性を研究してこれが表現を建築の上に試みなければならぬ」といふやうな主張が他方に於いてなされるやうになつた。

建築の外観を細部の集合体の如くに考へる輩は、日本人の建てる建築であるからには、日本建築の細部を使ふべしと主張する。しかしよく考へれば装飾材料としての細部が日本のものであらうがまた外國のものであらうが、それはあまり大して重要な問題ではない。装飾材料としての細部を少しく詳細に考へてみるに、構造的細部と装飾的細部との二つに區別できる。壁画に表はされた柱形や臺股の類は全社に属し、破風の彫刻や壁の絵の如きは後者に属する。そして普通前者はその構造上の意味をもつ故を以て後者よりも価値大なりと考へられてゐるが、建築物を装飾することの必要があるといふのならば、むしろ第二の方法の方が第一の方法よりも自然であると考へなければならぬ。

構造的細部は全然無意味のものとしてこれを排斥すべきであり、その材料を日本建築の細部に採ることの可不可は問題にはならない。装飾的細部を日本趣味とすることの正否を考へるに、これまた無意味なものである。今日の「日本趣味」主義はその適用を細部だけに限らうとはせず、更に前述したやうに建築全体の輪郭にまで古来の日本建築の持つ形式を再現することにまで拡充しようとしてゐる。細部だけの日本趣味なら、それは愚にもつかぬことでその横行も大した問題ではないが、建築全体の外観に於いてこれを主張し鼓吹するといふことは、建築上の虚偽が伴つてくるから、事は重大性を増してくる。日本建築の手法を西洋建築に取り入れようすることは、できるならば在来の日本建築を今後ともに保存したいといふ考へからであるが、在来の日本建築はその材料の故に耐火性と耐久性とを欠くから、耐火性あり耐久性ある新しい材料を以て在来の日本建築の形だけをそのままに再現しようといふのが、その主意である。即ち材料と構造法とが新しく變つたのにも拘らず、その形だけは昔のままにしてをかうするのである。すべての構造物の形はその材料と構造との最も自然な適用によつてのみその美が発揮されるものであることは茲に贅言を要しない。材料と構造との虚偽の適用は建築における最大禁物であることを承知の上で、猶且つこれを試みようとするのは、矛盾も亦甚しい。

在来の古い日本建築そのままの形を模倣するのではなしに、新しい材料と構造とに依つて古い日本建築を適當に改良して行つたらどうかといふに、在来の日本建築の材料と構造法とが不適當であつてこれを更に適當なものに換へたいと考へる場合、在来の日本の建築の形式と無理に何等かの関係をもたせるといふことは、さう大して価値のあることではない。かやうに詮じつめてくると、建築の日本趣味といふものは、一種の幼稚な國粹保存主義から出發したものであることに気付く。この間の事情を察するには、キリスト教が始めて渡來した時これを邪教なりとして排斥した当時の当局者は佛教も亦外國から來たものであることを忘れてゐたの

だといふ事実を想起すれば足りよう。若しキリスト教がこれに代り得るほどに立派な宗教であつたならば、神道と雖もこれに亡ぼされて支障のないことに気が付かなかつたものである。この低級な國料保存主義が取りも直さず「日本趣味」主義なのである。

我々は建築を彫刻や絵画よりも、むしろ汽鐘や機関車に類するものと考へる。しかしそれだからとて直ちに、建築にはその実用的目的を満足せしめる外に何物も必要ではないと言ふのではない。唯低級な日本建築を無理に西洋建築にとり入れようとするなどは無用の遊戯であると主張するまでである。日本の建築に日本の國民性を表現するといふ意図は正しい。しかしその國民性はどこまでも現代の日本の國民性でなければならない。前時代の國民の特性の現はれの内、現代の数々の國民性の表現を求めようとしても、それは木に縁つて魚を求めるよりも難かしいことである。

國民性の本体をはつきりと掴むといふことはなかなかの難事である。事物に突き当つて始めて様々の形となつて表はれるものである。建築で一例をとれば、良質の木材に豊富であつた國土に生まれた我々の祖先は遠い古昔から、木材の取扱ひに実に巧みであつたことは、建築史を繙くものひとしく認めて驚嘆するところである。木材の巧みな取扱ひから受ける我々の感じは、軽快とか器用とかいふ種類のものである。これは我が國民性の建築に於ける一つの立派な現れであると言へる。しかし今日の鉄筋コンクリートによつて造られる建物の興へる感じは軽快とか器用とかうふ漢字よりは、むしろ「だぶだぶした」ものであろう。しかしこれも我國民性に反するものでは決してなく、その一つの現はれであること言ふまでもない。

建築に於いては我々は強ひて國民性の表現を企てる必要はない。建築の目的を最も完全に満足せしめんがために最も適当な平面と材料と構造とを選む以外に必要はない。非常に複雑な条件から定まるこれらの選み方が、手つとり早くまとめ上げ兼ねる國民性の表現となるのである。

我々の態度が真面目である時に、自然に國民性が表現されてしまふのだ。また我々の理想の建築は我々の真面目なる態度によつてのみ作られるものと信ずる。」

野田俊彦氏の日本趣味建築に対する批判は峻烈明快なものがある。建築は彫刻や絵画よりはむしろ汽鐘や機関車に近いと喝破したあたり、建築非藝術論の主張者として面目躍如たるものがあると共に、その建築観に新時代の呼吸を強く感ずることができる。大正六年と言へば、日本の新建築運動も愈々具体的にその活発性を増して来た頃であり、当時の新進氣鋭の建築家達が日本古建築の糟粕をなめるにひとしい形骸だけの所謂日本趣味建築をいかに白眼視したかは、この野田氏の所論一つによつても明瞭に看取できることである。

野田氏の所論はその大要の点に於いて正鵠を失つてはゐないが、鉄筋コンクリート造の建築をだぶついたものと断じたり、正しい意味の日本趣味を建築に表現することなく感ぜられたりする部分のあるのは賛し兼ねるが、建築の全体の形態輪廓上に於いて、またその細分（ディテール）に於いて在来の日本古建築の形式手法を、そのまま今日の新しい材料と構法とを以て模倣再現することの誤りを強く指摘してゐる点等は極めて同感である。

#### 現代建築の發展

今日の日本の建築がその意匠といふ上でどんな状態にあるか、

又それが将来どんな風に変つて行くものか、更に茲に当面の研究課題として選んだ建築の日本趣味問題とどんな風に関係づけらるべきかといふやうなことを考える上に、是非ともとり上げて考察しなければならぬことの一つに「現代建築」といふものがある。明治末年頃から大正初期の頃にかけての日本趣味建築に関する論議に確固とした據点のない憾みが多分にあつたのは、それらの論議の殆んどすべてが、この「現代の建築」といふ重要逸すべからざる事項に触れてゐないからである。建築の意匠と言へば西洋の過去様式と日本又は東洋の既成様式だけがとり上げられ、これら二つのものを如何に按配し組合せて所謂日本趣味の建築をつくり出さうとしても、それは無理でありまた今日の日本としては意味のないことである。仮りにかくして所謂日本趣味の建築ができたにしても、それは古い日本趣味の建築で現代の日本としては時代錯誤の甚しい鶴的建築ができ上るに過ぎない。かくの如きは決して正しい日本の建築とは言へず、形だけは古い日本の建築の形骸を保有することには成功しようが、それは正しい意味の日本趣味建築とははるかに遠いものである。

建築に於ける日本趣味意匠を考へる場合、まづ次の諸項目を具さに検討することが必要である。

- (一) 現代建築の發展
- (二) 日本建築の再検討
- (三) 日本の風土的特異性と建築の關係

これら諸項の考察を遂げた後に於いて現代日本の建築に日本の特異性を賦興することを慎重に考慮する時、そこに自ら正しい日本趣味建築への解答が得られるものと信ずる。

#### 歐洲に於ける現代建築の發展

建築に於ける新様式の發展は、代替今世紀になつてからのことである。勿論十九世紀の後半以降建築新化の萌芽は、あらゆる機会に少しづつ見られはしたが、それが具体的に發展の機運に向つたのは、二十世紀の革を開いてから後のことである。かやうに新しい建築の歴史は大約ここ四十年のことであるが、この四十年間に於ける建築の変遷發達の跡を正しく回想してこれを識るといふことは、単に現代の建築を正しく視るために必要のことであるばかりではなく、更に今日の日本の建築を考へて将来の日本の建築が進むべき大きな目標を定める上に、また当面の建築に於ける日本趣味意匠の課題への解答を求める上からも、欠くことのできぬ過程であると信ずる。

#### (一) 十九世紀の建築

ルネッサンス末期以降の歐洲近代建築の変遷發達の跡を十分よく理解するためには、遙かに遡つて文藝復興・宗教改革・更に啓蒙期の三つの大きな思想運動を一通り考察する必要がある。なぜならば、建築に於いては勿論のこと他の一般美術方面でも、この三つの運動は近代歐洲に於けるすべての近代的運動の源をなすものと考へられるからである。しかし茲ではその余裕がないから、現代建築の直接的準備の時代であつたと考へてよいところの十九世紀の歐洲建築界の状態からまづ一通り概観することとする。

十九世紀の建築は、今日の歐洲に於ける新しい建築を考へる上に特に重要であつて、今世紀に入つてからの新建築發展の準備がなされたのはこの十九世紀である。十九世紀の建築は極めて複雑な變化の過程を示してゐるが、一言で盡せば新しい建築といふ黎



明が輝く前の暗中模索の時代であつたと言へよう。広い意味でのルネッサンス建築と二十世紀の現代建築とをつなぐ過渡期的建築であつた。

十九世紀の建築は、十九世紀の主なる思潮と大体相平行して発展した。勿論建築上の主義傾向と他の思想や文藝上のそれとは、たとへそれが同じ主義のものまたは傾向のものであつても、必ずしもその歩調と年代とを同じうしてみない場合もあらうけれど、その根幹的の主流だけは同一の軌上をたどつてゐることがよく認められる。十九世紀初頭以後の歐洲建築界の動きとのその移り変りは、まづ古典主義の建築が起り、次いでその反動としての浪漫主義の建築が代り、更にその中葉以降は折衷主義の建築が行はれた。ここに少しく注意を要するのは、これら三つの傾向の建築が年代的には必ずしも相交換して消長したのではないことである。ただその主義的な傾向だけは、古典主義から浪漫主義となり、更に折衷主義の建築となつたと考えてよい。浪漫主義又は折衷主義の建築は二十世紀の今日にあつても、猶隨所にみられるのである。しかし偶々古典主義の建築が今日の建築の一部に行はれてゐるからと言って、古典主義が今日の建築の一傾向であるなどは到底考へられないであらう。これと同様に十九世紀にあつても、古典主義の建築が旺んであつた頃に、他方では浪漫主義の建築が既に広く行はれたといふやうな例も決して少なくなつた。しかしその主流的傾向を順序よく判り易くたどらうといふ場合には、古典主義の次に浪漫主義、浪漫主義の次に折衷主義の建築が起り、そしてその最後の行詰まりの苦悩と呻吟の中から、新建築への血路が拓けたと考へてよい。

## (二) 古典主義とその建築

十八世紀の後半以降十九世紀の中葉にかけて、歐洲建築界全般に涉つての主なる傾向は、古典主義及び浪漫主義の建築であつた。これは一般社会思潮としての古典主義及び浪漫主義の鮮烈な運動を背景として発展したものであることはいふまでもない。

古典主義の発生を促してその発展を助けた動因は、一言で盡せばロココへの反動である。ロココ時代（十八世紀）のあまりに技巧的で且つ洗練され過ぎた繊弱な生活に対する反感は、素朴な古典の愛好となつて表はれ、ここに古典主義が起つた。そして古典主義の先駆者としては獨逸のウインケルマンやヴォルフが挙げられ、更にレッツィング・ゲーテ・シラー等の巨匠もすべて所点主義の中で育てられたとされる。

古典主義は人生自然の純理欲求を基準とし、その態度は宇宙的であり、高遠の理想を求めて自己から全然離れた或模範を指定してこれを崇拜し憧憬し、そしてそれを追求した。古典主義の特徴と美点は実にここにあつたが、同時にまたそれが欠点でもあつた。何故ならば古典への徹底は、民族の感情や國民の歴史に対して比較的無関心の態度をとらしめるに至り、時にはむしろかかるものを軽視する傾向をさへ示すに至つたからである。茲に浪漫主義の起る原因があり可能性があつた。

十八世紀の後半以降その末葉にかけて、獨逸は政治上國家として懇願すべき状態にあり、仏蘭西もまたその暴虐な政治によつて極端に行詰まりの状態に直面してゐた。そしてかやうな悲惨の國家的情勢の打破は、古典への復歸によるのが最も簡明の手段であり方法であると考えられた。即ち或想定された古典といふ理想の實現を希ふことは、とりも直さず当時の行詰まつた悲しむべき國

家的状況を救ふことであり、またそれは旧政治を打破して彼らの希ふ新しい展開を實現する所以であるとも考へられた。

かやうな情勢の上にフランス大革命は勃発し、旧政治はその根柢から覆されると共に、その大局の捨取はナポレオンによって完成された。ナポレオンの新政治が果してよく当時の人心を満足したか否かは暫く措き、ナポレオンの理想は実に古典羅馬のあらゆる再現模倣にあつた。ナポレオンはフランスを以て古代羅馬唯一の後継者であると考え、その理想の人物は古代羅馬の皇帝であり、理想の文化は古代羅馬の文化そのものに他ならなかつた。彼が古代羅馬の官職・衣冠・建築・美術・工藝を愛好したことは実に極端で、自己の作り上げたフランスの國家とその帝室とをば古代羅馬再現の理想が形態化された形式手法がアムピール式で、アムピール式はとりも直さずフランスにおける古典主義の様式である。

アムピール式（帝國式）は前半ルキ十六世以後漸く旺んとなつてきた古典模倣と継続とその発展である。本来ならばフランス古典主義の建築又は裝飾と言ふべきであるが、ナポレオン帝政時代に最も旺んであつた関係から、これをアムピール式といふのである。アムピール式は、彫刻にあつてはカノヴァ、絵画にあつてはダヴィッドによつて代表され、建築にあつてはベルシエとフオンターレの二人によつて代表される。

アムピール式建築の特徴は、その武人的の厳正さと直截簡明の点にあると言へよう。裝飾や家具の意匠等に於いてもその線は直線を主とした硬直のもの多く、その精神は豪壮と優雅の趣きは殆んどみられない。ナポレオンにより任命組織された美術諮問の委員会の一報告文に、「建築で重要なことは豪壮といふことと明快といふことである。クリューシーの建築はブロンデル一派の在来の軽快柔らかい趣味を捨ててをり、古代羅馬の建築の精細なる実測から割り出されて計画されてをり、この方面にみる新機軸の故に賞讃すべきものである」といふやうな一節がある。すべて古典の様式に近いものほどその藝術的の価値が高いと考へられた。アムピール式は、洗礼とか優美といふ点で従来のロココ流のものには劣るが、その厳正にして威容のある点では遙かに従来のものの上にあつた。

アムピール式建築の実例は鬱しくあるが、それらのものうち最も著名なものとしては、巴里ルーヴル宮とテユイルリー公園との中間広場に立つカールセル凱旋門（建築家はベルシエとフオンターレ）、シャルグラン作の巴里エトアール大凱旋門、ヴァニオン作のマドレーヌ寺院、ゴンドアンとルベール合作のヴァンドーム記念柱、ブロンニエール作の巴里取引所の建築等が挙げられる。更にアムピール式に属する建築家としては、ブーレー、アントアヌ、ラガルデ等が著名である。

古典主義が最も旺んであつたのは、十九世紀の始め三分の一の時期で、この時代にはイギリス・フランス・ドイツの諸國何れに於いても古典主義建築が異状の発展をしたが、就中ドイツの古典主義建築は最も力強い根柢の上に立つたものとして特に注目すべきものがあつた。

ドイツに於ける古典主義の建築は、ベルリンに於けるシンケルとミュンヘンに於けるクレンツエの二人の大建築家の主張や作品によつて代表される。しかしシンケル以前に古典主義的傾向を示した建築家はドイツに尠くなかつた。例へばランガンズ、ギリヤ父子、ゲンツ、エルドマンズドルフ等の諸家があり、就中ランガンズ作ベルリンのブランデンブルグ門は、ローマの凱旋門とアテ

ネのアクロポリスの古建築がもつ列柱の美とを巧みに結合調和せしめ、且つ加ふるに北方ドイツ的の豪壯な氣分の表出に成功したものとて、建築史上特筆さるべきものであった。

シンケルは當時ドイツのゲーテとデンマークの彫刻家トルヴァルツェンと共に、北歐を代表する古典主義の三巨匠とされ、ウォルトマンはシンケルを評して、「彼の時代に彼ほど純粹にそして完全に自然のあらゆる壯麗と深碧の空と涯しない海原をもつギリシヤの美を建築によつて魅惑的に表出したものはない」と言ひ、シンケルを以てギリシヤ建築の眞精神の最も深く正しい認識者であると激賞した。シンケルは單に古典を直寫したり模倣したり、また器用にこれを當時の北ドイツの建築に慶用して満足したといふのではなく、近代の生活と建築の構造と材料との關係を正視し、そのよき解決に努力した成功したものであつた。このことはやがて發展の機運に向つた新しい建築理論の根本をなしたとも考えられる。

シンケルは古典主義者であつたと同時に、また浪漫主義者でもあつた。古典主義者としてのシンケルの代表者の作品は、ベルリン劇場の建築とベルリン旧博物館とが最もよい實例である。

北ドイツの古典主義建築に對し南ドイツの古典主義建築を代表する大家はミュンヘンのクレンツェであつた。クレンツェを信任して自由に彼の才幹を發揮させたのは、當時のバイエルン王ルードウィヒ一世である。クレンツェの聲名は或はシンケルのそれに及ばぬものがあつたかもしれぬが、古典建築の眞精神に對する正しい理解とその表現といふ點では、敢てシンケルに毫も劣るものでなかつたことは、クレンツェの數多くの作品によつて容易に認めることができよう。その代表的な作品としては、レーゲンスブルグのワルハラ殿、ミュンヘルのルーメンスハルレ、プロピレ、グリプトテーク、ピナコテーク等が挙げられる。クレンツェ以外の建築家としては當時ミュンヘンにゲルトナー、オールミユラー、チープラント等が記され、これらの他にカールスルーエのワインプレナー、ヒープシユ、フィツシヤ等があり、更に中歐の古典主義建築家としては、ウイーンのノビレ、プタベストのボラクとチツテルパツハ等が著名である。

イギリスの古典主義建築も十九世紀初頭以後特に旺んであつたが、ルネッサンス以降のイギリス建築は、概観すれば他のドイツやフランスと些かその事情を異にし、常に古典の正系からあまり離れるといふことはなかつた。イタリーやドイツでバロックが榮えてゐた頃でも、イギリスではかやうな傾向にあまり多くは支配されてはゐなかつた。大陸に於けるバロックやロココの時代でも、イギリスでは比較的折節制のあるバラディオ流の古典が行われてゐた。この故にイギリス古典主義の最初の建築家としては、イニゴ・ジョンスまで遡つて考えられるのが順序である。このジョンスにより旺んとなつたイギリスのバラディオ流古典主義とバロックとを結合した最大の建築家として、クリストファー・レンの名が大きく記される。レンの作品は夥しい數に上るが、その代表作は世界の新教寺院のうちで最大の規模を誇るロンドンの聖ポール寺院の建築である。レンの後繼者としては、ホークスマアー、ヴァンプラウン、アダム兄弟やアーチャーがあり、十八世紀を通じてこのバラディオの古典がイギリス建築界の主流をなした。そしてそこにギツプス、キヤムベル、ダンス、ペーン、ケント、ウツド、チエムパースの如き建築家が記され、十八世紀と十九世紀をつなぐ建築家としてホーランド、イヤット、ガンドンの如きが著

名である。十九世紀に入つてはテルフオード、ソーン、インウツド、ウイリアム、ナツシユ、アブラハム、ウイルクィンス、バスアー、バートン、エルムズ、コツカレル、タイト、スマーク等の建築家が擧げられ、その建築實例としては、ソーン作のイングラント銀行、ウイルクィンス作のロンドン國立美術館、バスアー作のケムブリッジのフィツツウイリアム博物館、タイト作のロンドン取引所、スマーク作のロンドン大英博物館、エルムズ作のリヴァプール聖ジョージホール等の建築等がその代表的なものである。

### (三) 浪漫主義とその建築

浪漫主義は古典主義と反對の立場にたつたものであつた。旧政治を根本から覆すことに成功したフランス大革命の収拾はナポレオン一世によつて實現されたが、この新しい政治は決して當時の人心をよく満足するものとはならなかつた。それは旧政治にもまさる専制的なものでありまた獨斷的なものであつたからで、そこに何等かの反動の起こることが當然予像された。

思想上のナポレオンは完全な帝國主義者であり極端とも思はれる位の古典主義の遵奉者であつたことは既に前に述べた通りである。ナポレオンの理想と彼の帝國主義とを背景としたナポレオン帝國がその隆盛を誇つてゐた頃、それに反對の立場をとる傾向が思想方向で既にかなり濃厚に醗酵しつづつたことは、注目に値することであつた。即ち浪漫主義の擡頭である。

思想上の浪漫主義は、政治上の自由主義及び國家主義と平行すべきものであつた。換言すれば浪漫主義は、十八世紀の主導的思想であつた啓蒙運動就中古典主義の反動として起つたものである。古典主義は遠いギリシヤやローマの古典をその直接の目標として、現代の民族又は國家を第二次的に見るに反し、浪漫主義は自己の屬する民族や國家を強く反省して、現代の特殊相をその根本に於いて捉へようとするものであつた。

古典主義の理想が古典ローマであり、更に古典ギリシアであつたのに反し、浪漫主義の理想は正に中世の時代にあつた。蓋し浪漫主義にあつては、現代の國家國民乃至民族の發生源は中世にあると考えたからである。十八世紀の百科辭典學者や啓蒙學者が思想上で教會を否定したように、フランス大革命とナポレオンは實行上で教會を除外したのであるが、それに反抗して起こつた浪漫主義では、自己の民族の祖先が育てられ哺まれたローマ・カトリック教を想ひ、少なくとも中古の宗教を背景とした文化を尊重し、中世封建制度の下に行はれた風俗習慣や中古的な文物を追想して、これらを彼等の生活する時代になりそうかさうとした。従つて中世を特徴づける生活や風俗や一般文化を懐古し考究し、さらに一歩進んでそれらの再現をさへ企てるに至り、教會や封建制度の遺跡遺物が愛好され保護され、建築では中世の寺院や一般の建築が復興され、また新たにこれらを模範とする傾向を示すに至つた。

浪漫主義の建築は十九世紀の初頭以後その中頃までドイツ、フランス及びイギリスその他の歐洲各國で大いに發展した。ドイツに就いて見るに、ベルリンを中心とする北ドイツではまづシンケルが注目される。シンケルは普通古典主義に屬する建築家の第一人者であることは前にも記した通りであるが、彼はまた同時に浪漫主義のけんちくかでもあつたことは興味ある事實であつた。これは彼はフランスやイタリーで中世の數多くの傑出した建築に直接接してから後のことであるが、ゴシック建築のもつ構造上の合

理性と表現上の繪畫的效果といふものに強く心を打たれた結果であるとされる。

總じてシンケル及びクレンツェ以後のドイツの建築界では、古典的傾向のものの中世的傾向のものと略相半ばする状態であつた。浪漫主義建築家として著名なものを記せば、ミュンヘンのゲルトナーとチープラント、ベルリンのオルト、オツツエン、シウエヒテン、メンケン、ウオルフエンシユタイン、フォルマー、ドフライン、ミュンヘンのヴォイト、ビュルクライン、ハウベリツサーその他がある。當時オーストリアに於いても浪漫主義の建築はかなり旺んであつたが、就中ウイーンのヴォテューヴ教會堂の作者フェルステルやウイーン市廳舎の作者シユミットの如きは特に注目に値する傑出した建築家であつた。

フランスやイギリスにあつても、古典主義建築の次に経験されたものは浪漫主義乃至折衷主義の建築である。この場合様式的にかなり混亂したことが注意される。即ち或建築家が、ある場合にはゴシックに依り、他の場合にはルネッサンス據り、更に同じ建築物中にあつてゴシックとルネッサンスの全く相反すと考えられる二つの様式が何の不思議もなく混用され、時には調和的でさへあるといふやうな特異な奇現象すら見られた。古典主義時代には猶未だその堅い様式感は全然消失してしまふといふことはなかつたが、この時代になると各人好むところの過去様式を任意選擇按配する傾向を示すに至り、過去様式から現代建築の過渡的現象として、歴史的に見る時極めて興味深いものがあつた。

フランスにあつては、ゴー、バリユー、パリタール、デュク、ケーズマン、アルドローフ等何れも浪漫主義の建築家であつた。これらの諸家のうちデュクは特に著名であるが、彼は新しく建築の設計意匠に従事したことよりはむしろ中世の古建築の復旧及び文筆方面で傑出してをつた。

イギリスの浪漫主義建築家としては、ギルバート、スコット、ピュージン、ウエツプ、バリー、ストリートの如き諸家が挙げられ、殊にバリーの英國國會議事堂は極めて大規模のもので、當時のイギリス建築界に於ける中世復興の熾烈な精神をよく代表する記念的大建造物としてその価値大なるものであつた。

イギリスの浪漫主義を言ふ場合除外できないのは、ジョン、ラスキンである。十九世紀前半のイギリスの古典主義建築は、ピュージンとバリーに依つて代表されるやうに、どこまでもイギリス的なものであつて、大陸の感化影響はほとんどなかつたのだが、十九世紀半頃から大陸殊にフランスとイタリアの中世建築の研究熱が次第に高まると共に、實際方向にも大陸

の感化が漸く強く表れてきた。かやうな傾向と機運を促進する上に興つて力があつたのは、文藝乃至建築批評家としてのラスキンであつた。彼の名著「ヴェニス石」と「建築の七燈」は、共に中世建築殊にイタリア・ゴシックに建築に対するラスキンの熾烈な憧憬からうまれたものである。中世建築のもつ形態上の美しさがラスキンの心を強く捉へたことは言ふまでもないが、更に他の大きな原因が、社會的の見地からきたものであることは注目に値する事實であつた。「藝術は何よりも個人的人格の承認の上に築かれなければならない。古代の建築では、それに従事した下級労働者はみな奴隸の位置に置かれ、彼等の人格といふものは全く認められず、あたかも機械の如く酷使された。しかしながら中世の建築では決してそのやうなことはなかつた。個人の人格はその建築に従事した者の大小に拘らず、平等に正しく認められ尊重されてを

つた」

ラスキンはかやうに考へて熱情的の愛を中世の建築に捧げ、翻つて當時のイギリス建築界の状態を批判し、その奴隸的服従の行きから脱して自由の發現を求むべしと強く主張した。そしてかやうな奴隸的状态の原因は、大量生産の旗幟の下に組織された分業制度の結果であるとし、各人の人格がその勞働に於いて正しく認められ、各人が喜びを以て勞働に従事したところに、中世建築の尊い生命があり、血があり心があると考へた。このラスキンの思想がモリスによつて受け継がれ、造形藝術特に工藝及び建築方面に於ける革新運動となつて表はれ、遂に新しい建築の發祥が歐州各地に見られるに至つたことを考へる時、ラスキンの位置は十九世紀の建築史上特に重要なものであることがよく認められよう。

#### (四) 折衷主義とその建築

古典主義と浪漫主義との建築の消長と相並んで、十九世紀の建築史上注目される傾向に折衷主義がある折衷主義は主義として極めて妥協的である。古典主義が明瞭に古典をその理想とし、浪漫主義が中古の世界を理想とするに對して、この折衷主義はこの點幟甚だ不鮮明である。その目標は古典でもなく、中世でもなく、更にルネッサンスでもなかつた。またこの逆に折衷主義の目標は古典でもあり中世でもあり、さらにまたルネッサンスでもあつたといふことができる。茲に折衷主義建築の特徴があつた。

折衷主義の下では過去の何物も信ぜられなかつた。而も新しい方向轉換を敢然として行ふだけの意志も勇氣もなかつた。暗中模索的に左顧右 することにより、過去の何物をも信じ得ぬ代わりに、また過去のすべてを部分的に現代に活かさうとしたものであつた。折衷主義の建築にあつては、最早や正確なオーダーやキヤピタルはみられない。古典や中世の建築を精密に模写することはできた。しかし彼等の環境はそれを許さなかつた。彼等をとしかこむ社會とその生活はあまりに古代や中世の時代とは距たり過ぎてゐた。科學の異常な發展は彼等をして古典や中世の過去の塔の中に閉ぢ込められてゐることを許さない状態であつた。時代に適應する建築が要求される必然的の理由が稍々正しく認識され出した。

この意味に於いて折衷主義の建築は、現代建築の正に揺籃の時代を示すものであつたと言へる。その建築にはどこかに新時代的なものがうごいてゐたことは確かであるが、しかしまだそれは痛切の要求となつて外部に表はれるだけに強烈なものではなかつた。

ドイツで折衷主義が建築を支配したのは、凡そ一八二五年から一八九五年頃に渉る時代であつた。蓋しこの期間にドイツは國內的に充實し、また國外にきにも大いに發展し、それに伴つて起つた國內諸都市の異常な發展は、當然の歸結として建築界の隆昌活躍を促し、古典主義・浪漫主義・折衷主義と目まぐるしい展開を次々に示した。

ドイツ折衷主義建築諸家のうち、その名最も著しかつたのはゼンパーである。ゼンパーは中部ドイツのドレスデン出身で、シンケルと同派の古典主義系に屬し、イタリア・ルネッサンスを忠實に意義深くドイツに發展させた代表者であり、彼の代表作はドレスデンの宮廷劇場の建築で、堅實な彼の作風をよく示してゐる。

古典主義以後ドイツの建築界に於いて著名の建築家とその作品とを配記すれば、ベルリンではクローブラウフとシユテイラー

の二人が特に著はれ、殊にシユテイーラーの新博物館と国立美術館との二建築はその代表的なものである。

ラツシユドルフ作のベルリン・ドーム（ベルリン中央寺院）、ワロト作のベルリン國會議事堂、ヒツチツヒ作の國立銀行（ベルリン）、ピユルクライン作のマキシミアノイム（ミュンヘン）等の建築も種々の意味に於いて注目すべき建築であらう。また當時のウイーンでは、ヴァン・デル・ニル、ジツカーツブルグ合作のウイーン國立オペラ劇場、ハンゼン作のウイーン國會議事堂等の建築が代表的の建築である。

フランスに於いては、折衷主義といふよりはむしろルネッサンシズムといふ方がより適切な建築の發展を見た。元來フランスは中世建築の發祥地であつたといふ事實にも拘らず、見るべきゴシック復興運動も起こらなかつたといふことは、一見不可思議のやうにも思へるが、フランス文化の本質はゴシック的といふよりはむしろルネッサンス的であるといふ事實を考へると、十九世紀後半のフランス建築界では浪漫主義の建築があまり發展しなかつたといふことの理由がよく理解できるであらう。このフランスのルネッサンシズム傾向の代表的の實例としては、一八七四年シャール・ガルニエの設計に成つた巴里のグラン・オペラ劇場の大建築が特記されてよい。

#### （五）建築の新化

ルネッサンス期以後十九世紀末までの歐州建築界の状況は、前に述べたやうに混沌さ錯雜の觀を呈し何等の秩序をそこに示さぬものであつたが、概觀すれば過去様式の直写がさうでなければその模倣變改に過ぎなかつた。

時代は不斷に進む。この時代の進展に遅れぬためには、建築もまた何等かの方向轉換をしなければならなくなつた。

建築が新しく發展するのは、新化するだけの必然性があつて始めて新化するのであり、建築家の單なる物好きから生まれるものでないことはいふまでもない。建築の新化を促す動因じゃ種々なる方面に見られるが、比較的理解し易い觀方で考へてみよう。

二つの要素が建築の新化を促した。一つは外的要因で、他は内的要素である。外的要素とは、建築の外部にあつて建築の新化を強く求めるものであり、大ざつぱに言へば時代である。即ちとりも直さず現代といふ新しい時代である。時代が變れば建築も變るのが當然であつて、現代には現代特有の建築が必然的に生まれなければならない筈である。元來建築は我々人間生活を容れる器であるのだから、その内容である人間生活の諸相が變わるに應じて、その容器である建築が變るのに何も不自然はない。むしろ變らない方が不自然なのである。ヨーロッパに就いて見るに、生活がこんにちと全然ちがつてゐた古代ギリシヤやローマに發展した建築の外観だけを今日によく再現することはできても、それは好古趣味を幾分満足させる位で、ほんとによい今日の建築となることは到底できないであらう。時代と共に變つて一時も定型に滞留しないのが、建築本然の相であるといふことを識ることは、新しい現代の建築を理解することの第一歩である。

次に建築に対する人の考へ、即ち建築觀といふやうなものが今と昔と大いに變つてきたことも注意すべきことであらう。昔は建築は専ら視覺にうつつへる造形藝術と考へた。即ち繪畫や彫刻と同一標準に基いて建築を理解し評價しようとした。今日にあつても建築は藝術と考へられ、視覺的に重要な造形藝術であることに

はちがひないが、その考へ方の本質には非常な差異がある。今日の建築の第一歩は、オットー・ワグナーの言つた「藝術を支配するものは必要のみ」といふ言葉の上に堅く踏みしめられてゐる。些か極端な言ひ表はし方ではあるが、昔の建築は外觀即ちみるためにつくられ、今日の建築は實用即ちつかふことのためにつくられるとも言へないことはないであらう。外觀の裝飾上にも美しさを第一の條件と考へた昔の建築は、他の繪畫や彫刻のやうな純粹藝術と同じ美的要素を以て競争せんとし、これらにをくれまいと喘ぎもがいたかの觀があつたが、これに反し今日の建築は繪畫や彫刻とは何等の血族關係をば求めてゐない。この點に古い建築と新しい建築との大きな差異が認められる。

「建築は藝術の中心である。完全な建築は眼の感覺に訴へるすべての藝術を包含するもので、建築は一つの大きな綜合藝術である。であるから協同を基本とする社會にあつては、建築以上に重要な藝術は他にありえない」これは歐洲に於ける建築新運動の口火を切るに興つて力あつたイギリスのウイリアム・モリスの所論の一節である。建築は造形藝術ではあるが、他の繪畫や彫刻とは全く別のものであるといふことに對する正しい認識がえられたことが、現代の建築大きな發展をなすための一つの強い動因をなしたことは注目すべき事實である。

更に美的感情が昔と今と甚だしく變化したことも、建築の新化を考へる上に見のがせない事項である。建築が一つの造形藝術である以上、その時代の美的感情と結びつくことは當然である。「裝飾なき裝飾」「無裝飾の美」を標語として新しい建築は今日の状態にまで發展してきた。建築の様式上にもみる變化は、服飾の流行ほどに移り變りの甚だしいものではないが、その時代々々の美的標準の如何によつて建築の表現がかなり左右されるものであることもよく考慮の中に入れることが必要である。

次に建築の新化を促す内的要素ともいふべきものに就いて考へてみよう。ここにいふ内的要素とは、建築の内部に起つた變化の意で、これによつて外形的に建築が進化されること甚だしいものがある。十九世紀後半以降建築にはその種々なる方面で大きな變化を生ずるに至つたが、就中著しい變化としては、建築の材料及び構造上に起こつた新發見と新形式である。建築の材料は直接構造と結びつくものであるが、鐵とセメントと硝子の建築に於ける大きな飛躍は、建築新化の具象化を促すに當つての根本的の動力をなしたものである。

建築に於ける新しい材料と共に、新たに建築構造方面に起つた新形式は、鐵筋コンクリート構造と鐵骨構造との二つである。

鐵骨構造法が建築に應用され出したのも、畢竟製鐵法の進歩發達によるものであることはいふまでもない。製鐵法は十四世紀頃から漸次發達の機運に向ひ、十九世紀の半ば頃にベツセマー製鋼法やマルチン製鋼法等が現はれ、經濟的に鐵の大量生産が容易になされるやうになつた。

鐵材を以て建築物の主要部分を構築することに成功した初期の作品で尤も著名なのは、一八五一年英京ロンドンに於いて開催された萬國博覽會の際に、建築家バツクストンによつて設計された水晶宮（クリスタル・パレス）の建築である。しかしながらこれより以前の頃に既に鐵骨構法によつた建築の實例は他に全然ないわけではない。就中フランス建築家ラブルーストによつて設計された巴里の聖ジュヴイエーヴ圖書館と國立圖書館との閱覽室は、鐵骨構法による建築の最初の實例としてかなり大規模でもあり

且つ成功したものと見て歴史的に見て意義深いものがあつた。更にドイツやオーストリア等にあつても、これと略々同じ頃に鐵骨構法による建築が次第に行はれ出した。

かやうに鐵骨構法を最初に建築に應用し始めたのは歐洲諸國に於いてであつたが、それを現在みるやうな程度にまで發達普及させたのは、むしろアメリカ合衆國であつた。アメリカも於いて鐵骨構法が如何に發達普及したかのよい實證を示すものが、今日アメリカが世界に誇つてゐるスカイスレーパー（高層建築、摩天樓建築）である。

鐵骨構造と共に建築技術上に於いて一大變化をもたらした、ひいては建築の表現上にまで甚だしい變化をもちきたすに至つたものは、鐵筋コンクリート構法である。鐵の細い棒（鐵筋）とコンクリートとを適當に巧みに組み合わせたものが鐵筋コンクリートであるが、コンクリートの主要な材料はセメントで他に砂と砂利とを混じ、これを水で練り合はせたものであることは普く人の識る通りである。セメントの製法は既に古く古代ローマ時代から知られてゐたが、東ローマ帝國の滅亡と共に中世の暗黒時代を通じてその製法が中絶してゐた。漸く十八世紀の中頃から人工的にセメントを造ることが種々考案されるやうになり、遂に十九世紀の始めにアズブデンにより人工セメントの製法が石灰石と粘土とを混じこれを焼いて粉末とすることにより發見され、經濟的に大量生産されるやうになつた。この人工セメントをポルトランド・セメントと謂ふ。

建築部の構造部で、この鐵筋コンクリートを用ひて有利でないところは一つとしてない。更に建築物だけに限らず、土木関係の諸工作物にも殆んど無制限に應用されよう。例へば擁壁・水槽・橋梁・上下水道管・遂道・堤防・道路等の如き、或は更に造船方面で巨大な船舶をこの鐵筋コンクリートで造るといふやうな特殊の例もある。

鐵筋コンクリート構法の理論は、構造上から見たコンクリートと鐵材との諸特質を互によく發揮させるにある。即ちコンクリートは壓力に對しては強いが張力や剪力に對しては極めて弱く、また鐵材は張力・壓力・剪力に對しては共に極めて強いが、鐵筋コンクリート造に使用する鐵棒は細長いものであるから壓力に對しては全く抵抗力をもたぬものと考へなければならぬ。かく互に相反した性質をこれらの二つの材料は持つが、各々の持つ獨自の性質を巧みに利用按配して所期の強度を持たせるところに鐵筋コンクリート構法の特徴がある。構造部にあつて外力がこれに加はる場合、張力や剪力の起る場所には十分それに耐へ得るだけの鐵筋を合理的に配置し、壓力の起る箇所は主としてコンクリートを以てこれに對抗させるといふのが、鐵筋コンクリート構法の根本理論である。

鐵筋コンクリート造の歴史はさまで古いものではない。歐米に於いても七十年位であり、日本に於いては僅々茲三十年位のものであらう。コンクリートの中に鐵の筋金を挿入して、これを補強するといふ一般的考案に對して最初の特許を得たのは、巴里の植木職ヨセフ・モニエであるとされ、時に一八七六年であつた。更にモニエ以前にフランス人ランボーは一八五三年に一種の鐵筋コンクリート造のポートを造つたことがあり、また英人ウイリキンソンは一八五四年に鐵筋コンクリートで造つた床の特許を得たとも謂はれる。それ以後鐵筋コンクリート構法の研究と應用とは益々旺んとなり、學理方面ではハイアット、ワイス及びバウシン

ガー、ケーネン等の諸家によつて新しい研究理論が次々に發表され、理論の闡明と共にその應用方面の技術も益々旺んとなり、遂に今日の盛況を見るに至つた。

鐵筋コンクリート造の特徴は種々あるが、特に著しい點を列記すれば、(イ) 石造や煉瓦造に比較して壁が著しく薄くてよいこと、(ロ) 耐火性第なること、(ハ) 耐震性大なること、(ニ) 永久性あること、(ホ) 建築費が比較的低廉であること等である。

鐵骨造も鐵筋コンクリート造も共に柱本位の構法であつて、従來の石造や煉瓦造が何れも壁本位の構法であるのと全然その趣きを異にする。この點でこれら二つの新しい構法は、古くから日本で行はれてゐる柱本位の木骨構法とその根本の理論に於いて相通するものがある。

日本の建築は絶対に耐震性をもつことが第一の要件である。このためには鐵骨造・鐵筋コンクリート造及び木造の三形式がその基本のものとして許される。大正十二年の關東大地震以後一般に行はれ出した鐵骨鐵筋コンクリート造の如きは日本獨特の構法と考へてよく、日本の建築が極度の耐震性を求める結果新たに生じた構法であるともいへる。

#### (六) 新建築（其一）

新しい建築は歐洲に於いてはまづ具体的にはベルギー及びフランスのアール・ヌーヴオーとなつて表はれた。このヌーヴオー式はベルギーの建築家ヴァン・ド・ヴェルドが一八九四年のブリュッセル工藝博覽會に出品した家具の新様式に名づけられた名稱から始まつたものとされる。ヌーヴオー式は邦譯すれば「新様式」となるが、この新様式の主張は過去の歴史的形を全然是なれて、表現手法の根幹的なものを自然界に求めようとしたもので、建築裝飾方面での自然主義的傾向のものともいへる。かやうな新しい傾向は、この頃漸く旺んとなつてきた自然科學の裝飾藝術方面に對する感化影響の現はれの一つでもあらう。自然界にみる動植物の形態を建築の各部に忠實に直寫表現しようとし、東洋趣味の如き異國的要素も幾分加味され、奔放にして自由の曲線を思ふがままに驅使し、一見ロココの近代化を思はせるものがあり、従來のいつれかといへば硬い幾何學的の取扱や手法に比し一種自由にして清新の趣きを表出するものであつた。

建築に於けるヌーヴオー式の代表的作家としては、フランスではギマールが擧げられ、鐵材を以て忠實に植物の形態を模し、これを巴里に於ける諸建築物のデテール等に應用し、地下鐵道（メトロ）停車場出入口等に於けるものは、今日の巴里の街の上に一種異様の景觀を添えてゐる。またベルギーでは、前記ヴェルドやオルタ或はアンカー等の諸家がヌーヴオー様式の流行に努力したのもとして著名である。

ヌーヴオー式の生命は蓋し極めて短かく、それは現代の工藝及び建築の一頁に單なる線香花火風のにぎやかさを添へたに過ぎない觀があつた。ヌーヴオー式に見る曲線的表現のあまりの自由さが、結局パロクやロココの放逸と煩雜とに墮したものととなり、また自然物そのままの模倣にはをのづから限度があり、人工によつて自然を模するといふことそれ自らが大きな不自然さを伴ふものである。曲線的な煩雜性は、秩序・統一・合理・經濟の如き概念を基本とする近代の經濟組織又は科學思想と相容れないものであるからである。

歐洲現代の新建築發展史上特筆大書さるべきものに、ウイーン

のセセツシオン運動がある。實に現代建築の確固とした基礎はこのウイーン・セセツシオンによつて築き上げられたといふも過言ではない。セセツシオンの語は分離を意味し、過去様式から分離して新しい建築の誕生と發育とを希ふたもの、それがウイーンのセセツシオン運動であり、更に相次いで各地に起つたセセツシオン運動でもあつた。

一八九七年四月三日に十九人の青年美術家が團結してアカデミックな守舊派に反抗して起ち、その理想と抱負とを勇敢に宣言した。この革新運動は建築・繪畫・彫刻・工藝の全般に渉る総合的なもので、建築ではオルブリツヒやヨセフ・ホフマン、繪畫ではクリムト、彫刻ではメツツナーやメストロヴィッツ、工藝乃至裝飾方面ではマーゴルト等の諸家がその代表的な顔振れであつた。

ウイーンのセセツシオン運動を考へるとき、忘るべからざる名はオットー・ワグナーである。彼は現代建築の始祖として新建築史上不朽の名をとどめてゐる。彼は直接セセツシオン運動に参加したといふのではなかつたが、彼の精神なり理想といふものは、その門下生であつた前記オルブリツヒやホフマンやマーゴルト等により正しく力強く承け繼がれ、また實行に移された。ワグナーは一八四一年に生まれ一九一八年に死んだが、齡を重ねると共に彼の建築が益々澁刺とした清新さに溢れたものになつたといふことは、普通人の場合とは逆で、讚嘆に値するものがある。「建築家は齡四十を重ねなければ一人前にはなれぬ」との彼の言葉は、蓋し彼自身の体験から求め得られた金言だと思ふ。

ワグナーの建築観はその著「現代建築」に明かであるが、その根本をなす精神は、前にも記した「藝術を支配するものは唯必要のみ」(アルテイス・ソラ・ドミナ・ネセシタス)の數語に盡きよう。また彼は建築家の據るべきモットーとして次の四項を擧げた。

(イ) 目的の精確な把握とそれの完全な満足、(ロ) 施工及材料の適當なる撰擇、(ハ) 簡明にして經濟的な構造、(ニ) 前三項の充足により生ずる極めて自然の形体表現。かやうな建築に於ける新精神は、實用と美との一致を求めることであり、明快・卒直・單純の建築が指標とされる。ワグナーは建築家としての傑出性に比し社會的にはむしろ冷遇された傾きがあり、彼の數多くの計畫も單に紙上の案たるに止まつて、具体的に實現されたものは比較的になかつた。その代表作としては僅かにウイーン郊外シユタインホーフ教會堂の建築、ウイーン郵便貯金局の建築等があるに過ぎない。これらの建築には何れも一部ルネツサンスがかつたところがあり、今日の新しい建築に見慣れた眼から見れば妥協的だと思はれぬ點もないではないが、その明快單純の手法は當時として驚異に値することで、將來の發展を豫定するに足る名建築であつたと言へよう。

ウイーンセセツシオン系の建築家としては、前記諸家の外にマイレーデル、オーマン、コテラ、パウアープレツニック、ストルナート等が著名である。この期に属する作品としては、オルブリツヒのものではウイーンのセセツシオン館とダルムシユタット(獨)の成婚記念塔及展覽會場等、ヨセフ・ホフマンのものではブリユツセル(白)のストクレト邸等の建築が擧げられる。

ヌーヴオーが短命であつたに反し、ウイーンのセセツシオン系統の建築がよく今日の建築にまで着實に發展をなし得たのは、それが單に表面の即ち外観だけのものでなしに、よく建築の本質を認識し、材料と構造方面に對する十分なる顧慮の下に、建築の實用性の満足な解決が企てられたがために他ならない。

新しい建築の精神はまづイギリスに起り、アツシユビーやマツキントツシユの建築となり、ベルギー及びフランスのアル・ヌーヴオーとなつて實現し、更にウイーンのセセツシオン運動により力強い基礎が植えつけられたが、この新しい芽を今日の大にまで發育生長させる上に最も功績があつたのは、實にドイツであつた。量的にみてドイツの新建築は他の何れの國々よりも大きな發展をした。これには多くの理由があるが、ドイツ國內各地には首都ベルリンに對抗しうる程度に充實した大都市が多數あるといふことも大きな理由の一つであらう。フランスの文化は巴里一市により、オーストリアの文化はウイーン一市により代表されるのはドイツの事情は大いに異なる。建築は外形的に都市と相關的である以上、大都市が國內に適當に分散してゐるドイツのやうな國に新建築が最も大規模に發展したといふことは決して偶然ではなかつた。

ドイツに於ける新しい建築の初期の作品は、これを構造派・自然派・歴史派等に分類するを普通とするが、建築的作品はかやうに正確には分類できないであらう。ドイツに新建築が行はら出した事情を考へるに、十九世紀末から今世紀にかけて、國內全般に建築上の新様式への要求が漸く旺となつてきてゐた折柄、ベルギー及びフランスのアル・ヌーヴオーやオーストリアのセセツシオン運動等による國外からの刺激により、急激に新建築が具体的に全國を通じて行はれ出すやうになつた。就中特記されるのは、ダルムシユタット市の藝術家村の創設であつて、ハツセンの大公ルードウイツヒ公は、その首都ダルムシユタット市をして全獨逸に於ける新興藝術の中心地たらしめようとの企てを樹て、近代的傾向をもつ青年藝術家達を招聘優待したが、その中には建築家として國外からはウイーンのオルブリツヒが招かれ、國內からはフーバー、ペーレンス、クリスチアンゼン、ハビツヒ等が招かれ、一九〇一年に催された藝術家村(キユンストラー・コロニー)第一回博覽會の際に、彼等に依つて計畫實施された住宅其他の建築群は、新時代の要求によく適合し將來の大きな發展を豫約するものとして、異常のセンセーションを、當時のドイツ建築界といはず、廣く一般社會に興へ、建築に於ける新時代が既に始まつたことを強く中外に指示することになつた。

これらの時代に於けるドイツの代表的建築家とその作とを列記してみよう。まづベルリンでは初期の大家としてアルフレット・メツセルが擧げられ、その代表作ウエルタイム百貨店の建築(一八九五年)は、その外部等に幾分ゴシック様式がかつたところはあるが、建築の新時代を示すに足る傑作であり、この建築の故に彼メツセルはオーストリアに於けるオットー・ワグナーに對比されざへした。ペーター・ペーレンスとその作に成る豪快澁刺としたA・E・G會社のタービン官は更に著名であり、劇場建築に非凡の腕を揮つたオスカー・カウフマンや他にブルーノ・パウ、ワルター・ドロピユース等數多くの建築家がある。ミュンヘン市では、強勁にして清新なウルムのガルニソン教會堂建築の作者テオドル・フィツシャー、劇場建築方面で活動したマックス・リットマンその他オット・エツクマン、リーマーシユミート、ザイドル(ドイツ博物館の設計者)等が記され、ドレスデン、フランクフルト・アム・マイン、ストットガルト、カールスルーエマゲデブルグ、ワイマール、デユツセルドルフ、ダルムシユタット等の諸都市に新興建築の機運溢れ、若くして有能な建築家が實に多士濟々であつた。

次にオランダはどうだったか。今世紀初頭のオランダ建築は、ドイツよりもむしろイギリスの影響感化の方をより多く蒙った。その新しい精神は一八九〇年頃から次第に発展の萌芽を示し出し、その後歐洲大戦頃までのオランダの新建築を代表するものは、ペルラーゲとパーゼルとの二人であつた。ペルラーゲはオランダ新建築の草分けとも考へられる人で、オーストリアのワグナーやドイツのメツセルに比せられ、歐洲新建築家陣中の三巨人とさへ謂はれる。その作アムステルダム商業取引所の建築は、その構法と材料との取扱に於いて新機軸を示すものとして、新建築の一つのマイルストンの観がある。

## (二) 歐洲大戦後

歐洲大戦（一九一四年—一九一八年）を堺としてヨーロッパの建築は一回轉をした。即ち他の繪畫・彫刻・工藝・文學・音樂等に於けるとひとしくたとへて時的なりとはいへ表現主義の建築が異常な發展をした。ヘルマン・パールの言葉に従へば、「表現派の求めるものは過去に例のないこと」であつた。表現派は實に藝術の主觀から出發するものであつたから、この點は印象派の藝術とは正に反對である。ために「表現派は外界の勢力に驅使されてきた自我を解放し、主張せんとする運動」とも謂はれ、更に端的には「印象主義は耳の世界で表現主義は口の世界」であつた。表現主義の標語は、現代性と主觀性、現實主義の徹底と主觀の徹底であり、かく表現派は厳密に現代的であると同時に全くドイツ的であつたことは注目に値する。この意味でラテン文化に對する根本的の對立と反抗とが見られた。

建築は他の繪畫や彫刻等の純粹藝術と異り多分に實用性をもつものであるから、表現主義の建築には同じ主義の繪畫例へばカンディンスキー等の繪、又は同じ主義の彫刻例へばアーキベンコの彫刻のやうに徹底した主觀の表出は見られなかつたが、それ以前及びその後の如何なる時代の建築よりも、建築家個人の大胆にして自由なる個性又は主觀の表出は企てられた。

表現派の用ひた手段には、立体派的の變歪がまづ注意される。なぜならば立体的なもの表現にあつては、その變歪によつて對象の形体的特徴を高調することが最も効果多いものであるからである。建築では正四邊形よりは更に歪んだ形、より極端な三角形の如きが喜ばれ、建築物内外のあらゆる部分の取扱がつとめて尖鋭なものとなつた。靜的な表現よりは動的の表限現が好まれ、爆弾が炸裂したやうな形状で外象の表現が行はれ、かやうな傾向はその色彩にあつても行はれた。

表現主義建築の年代はこれを正確に區分することはむづかしいが、大体歐洲大戦半ば頃から大戦終了後数年あまりの期間と見るのが妥當であらう。そしてこの表現主義なるものは前にも述べたやうに、主として敗戦國のドイツとオーストリアに限られ、イギリスやフランス等には殆んど注意するに足るだけの感化をば興へなかつた。今日の建築から表現主義のそれを見ると、あまりに變態的なものであつた嫌ひがある。大戦といふ極度に強い刺激と敗戦後の混亂の錯綜した諸情勢の中から醸し出された昂奮の一時的發作であつたやうな氣もする。

表現主義の建築が今日まで引続き發展しなかつた理由を考へてみるに、「過去に例のない」ものを求めるといふことは、徒らに珍奇なものを漁るといふことになり、勢ひ獵奇的な傾向を主とすることになり、今日の合理性を高く評價しようといふ

立場と相反することになる。また表現派はあまりに幻想味を求め過ぎた。勢ひ浪漫的にならざるを得なかつた。それはとりも直さず感情的になることで、非現代性を暴露して結局浪漫主義建築と同じ失敗の途をたどる運命に立たねばならない。更にその表現の常套手段であつた變歪は、建築の本質に對する認識不足の結果、建築に於ける材料と構法との正しい適當な取扱から次第に遊離してしまふ危険が多分にある。總じて表現派の建築はあまりに昂奮に過ぎた傾きがあり、そこには冷靜な理智の反省が不足してゐた。

表現派の建築家とその作品を概観してみよう。

ハンス・ベルツツヒ、ワルター・グロピユース、フリッツ・ヘーガー、ブルーノ・タウト、エリツヒ・メンデルゾーン等がドイツに於ける表現主義の代表的な建築家である。その建築の實例としては、ベルリン大劇場（ベルツツヒ作）、とベルリン近郊ポツダムのアインシュタイン塔（メンデルゾーン作）の二つを擧げるのが最も適切であらう。この時期には、ドイツやオーストリアの新傾向の建築家は全部表現主義に屬してゐたので、作家とその作品の羅列は徒らに煩雜を招くから、わずかに前記數氏の名を擧げるとどめた。

表現主義は尠くとも建築にあつては、一九二五・六年の頃に、次に來るべき傾向の建築と交替したと考へてよいだらう。表現主義流の建築は、その新建築發展の初期に於いて、専らドイツ及びオーストリアの新建築を模範とした日本の建築界にも一時大きな影響を及ぼした。それは大正七・八年から大正の末年頃までに見られた現象で、さやうな傾向の建築實例は、東京や大阪の都市建築中にも指摘できる。

今日の新しい建築は、一部のにより國際建築様式と呼ばれるもので、ドイツ、フランス、オランダ等すべて同一系統に屬し、表現主義建築にみられたやうな、謂はば一種グロテスクの趣味のものとは全くちがひ、スマートな合理主義を逐ふ建築である。この新傾向を代表するものとして、フランスのコレビュジエやリユルサ、ドイツのグロピユースやタウト、オランダのドウドクやオウトの諸家と建築とがある。これらの諸家は今日の新しい建築を言ふ場合、あらゆる機會に話題に上つた謂はば花形建築家であつた。（因みにグロピユースは現在米國ボストンのハーヴァード大學に建築を講じ、タウトは昭和十三年末土耳其イスタンブール市で死去した）。特にコレビュジエに於いてこの感を深くし、一九三〇年頃から世界の建築界の注視を一身に集めた觀があつた。

歐洲大戦後のフランス建築界をみるに、隣邦ドイツに於いて旺んであつた表現主義の影響を蒙ることもなく、フランス独自の輕快な手法の構造的傾向が漸く盛んになりつつあつた。かかる傾向に尠なからぬ貢獻をなした建築家として、ペレー兄弟とフルイツネ等が特筆される。彼等はいづれもエツフェル塔の設計者エツフェルの流れを汲む構造派ともいはるべきもので、ペレーにより設計されたランシーとモンマニユイーの教會堂建築（一九二二）は、教會堂建築の形体的新化に一新紀元を劃する外、その構築材料である鐵筋コンクリートの表現法にもまた新機軸を示したものとして特殊の意義をもつてゐる。コンクリートをそのまま建築物の内外に露はした膽の手法は、その形体の精新さと共に、異常の裝飾的效果を表はしてをる。ペレーの構造的な精神を最も強く且つ大膽にそして勇敢に實現したものに、フルイツネのオルリーの飛行船大格納舎（一九二四）がある。

フランスの建築界が世界の注意を惹き出したのは、コルビュジエとその一派の建築家が輩出してからである。コルビュジエは元來はスイス人の畫家であるが、今日は畫家としてよりは新興建築の第一線に立つ伊達者の觀があり、世界建築界に於ける特異の存在として独自の活動を續けてゐる。彼の作品は主として住居建築であるが、「家は住むための機械である」とは、あまりにも有名な彼の警語である。コルビュジエを得てフランスの現代建築が遽かに急激の進歩を示すに至つたことは、蓋し否みえない事實であらう。コルビュジエ系統の建築家としては、他にマレー・ステヴェン、アンドレ・リュルサ、ジヨ・ブルジョア等がある。彼等の作品に示された手法の特徴は、軽快なこと・明快なこと・單純なこと・自然であること・瀟灑であること等で、重く鈍重のところは微塵もない。鐵骨コンクリート造又は鐵骨造等にみる新構法の根本理論によく合致し、更に平面や設備の計畫を有機的に考へた現實に即する合理主義の建築である。またその形体や色彩から受ける感じはいかにも純粹清冽でもある。純粹派（ピュリズム）と呼んでもいい位にすつきりと垢抜けがしてゐる。それはフランス人らしい好みや趣味でもあるが考へやうによればまた日本的であるとさへ思ふ。將來の日本の建築様式を考へる場合に重要なヒントがこの邊りに伏在してゐることを指摘してきたい。

表現主義以後のドイツの新建築を考へるときまづ注目されるのは、バウハウスとグロピウスである。バウハウスはグロピウス主宰の下に建築された建築及び工藝の學校であり研究所であり更にまた製作所でもあつた。一九一九年から一九二三年まではワイマールにあり、一九二四年からはデツサに移り、ナチス政権下のドイツとなるまで大きな發展をしつづけた。グロピウスは一九二八年公認をハンネス・メイアーに譲つてバウハウス所長の職を辭したが、今日のドイツ新建築の發展に貢献した點で、グロピウスの功績は極めて大なるものがある。バウハウスの創設にあたり、グロピウスは各國から有能の藝術家を集めて、研究に實際に建築及工藝の新しい發展に努めた。招聘された藝術家には、ロシアのカンディンスキー、スウェーデンのバウル・クレ、ハンガリーのモホリー・ナギー、アメリカのファイニンガー、ドイツのゲオルグ・ムツへとアルドルフ・マイアー等の名がみられた。グロピウスの建築としてはマイアーとの共同設計であるデツサウのバウハウス校舎は、最も代表的なものである。また「國際建築」なる語は、一九二五年に公刊されたグロピウスの著者「インターナショナル・アルシテクトール」から由來したものと一般に考へられてゐる。

當時のドイツ建築界を代表する有数の建築家としては、ペーター・ペーレンス、エリツヒ・メンデルゾーン、マックス・ベルグ、ハンス・ベルツツヒ、オットー・バルトニング、ブルーノ・タウト、マックス・タウト、ミース・ヴァン・デル・ローエ、エルンスト・マイ等がある。

オランダの新建築も注目に値するものがある。ベルラーゲ以後アムステルダム及びロッテルダムを中心としてオランダの若い建築家は、自由に新建築の夢を實現したが、それらのうちクラークとクラマーの二つの名は特に大きな輝きを放つた。彼等の作品には集合住宅（アパートメントハウス）が多く、その自由自在の形態表現は彼ら獨特の別天地を形作つておつたが、その後今日のオランダを代表するものはこれらいつれかいはば幾分表現主義に属する傾向のものではなくて、オウトやドウドクの如き建築家

の諸作によつて示される國際建築系のものである。

### （三）アメリカの建築

アメリカの建築は量の建築である。しかし建築に於ける現代性といふ點では、アメリカはヨーロッパに一瞬を輪することは否みがたい。極く少數の例外を除いては、アメリカの建築は過去様式の種々の種類と程度との折衷的組み合わせであるとしてよい。勿論ライトの建築やノイトラの建築のやうに、独自の現代性と生命をもつやうな例も他にないわけではないが、概してアメリカの建築は徹底した現代性に乏しい憾みがある。

ライトの作品としては、東京日比谷の帝國ホテルの建築等がその代表的なものであるが、ライトの眞價はアメリカ自國よりも、むしろヨーロッパや日本に於いて正しく評價されてをるやうな事情である。これらの事實からみてもアメリカに於ける新建築發展の現状が大よそ推察できることと思ふ。ライト及びその一派の建築傾向を普通シカゴ派と言ふが、ステイール、バーン、マック・アーサー、ノイトラ等多数の建築家が擧げられる。これらシカゴ派の先驅者として、建築家サリヴァン（一八五六一—一九二四）とアドラー（一八四四—一九〇〇）の二人は忘るべからざる存在である。様式的に不活潑なアメリカ建築界に新建築精神を注入して發展の基礎を興へた點で、この二人の功績は特筆すべきものであつた。

今日のアメリカの建築で最も特徴があり注目すべきものは何かと言へば、それはスカイスクレーパー（高層建築）と工場やサイロ（穀物貯蔵塔）等の純機能的な工業的建築物である。フランスのコルビュジエは口悪くも、「アメリカの建築家は緑なものを作らないが、技術者の作つたものは大きな示唆を我々に興へる」と言つた。

文字通り點を摩し雲を掴む大スカイスクレーパーの林立する偉觀は、單にアメリカの大都市だけがもつ誇りではなくて、實に現代人が過去に誇りうる最大の建築だとも思ふ。スカイスクレーパーはアメリカの大都市の殆んどすべてにみられる壯觀であるが、その代表的なものはニューヨーク市マンハッタン商業中心地域とシカゴのループ（中心地區）であらう。かやうな高層建築の林立は、膨大なアメリカの商工業の發展を背景として實現したものであり、地價の大と能率の向上との解決策として、更にアメリカ人の世界一好きといふ優越感の満足のために次々に要求され、偶々建設構造法即ち鐵骨構法の發達とエレヴェーターの進歩は、かかる超高層建築の出現を技術的に易々たらしめるに至つた。

高層建築とエレヴェーターとの關係は極めて密接である。鐵骨構法が如何に發達してもエレヴェーターの進歩がこれに伴はなければ今日の摩天樓の建築は到底實現しなかつたであらう。胴直應用のプランジアー型水壓昇降機は、十八世紀の末に漸くヨーロッパで發明され、アメリカでは十九世紀中頃から漸次發達し、一八八四年ウイリアム・ベグスターにより直流式電氣エレヴェーターが始めて製作され、更にオチス等の改善工夫を経て遂に今日の毎分速度數百呎にも達する快速エレヴェーターにまで進歩し、大高層建築の上下交通に満足な解決を興へた。

今日最高のスカイスクレーパーは、ニューヨーク市のエムパイア・ステート・ビルディングで、高さ地上最頂部まで千二百五十呎、断面八十五を算し、人類始まつて以來の最高建造物である。従來巴リのエツフェル塔により保持された地上三百メートル（約千呎）の記録が、クライスラー・ビルディング（ニューヨーク市）



とこの建物の完成によつて三十年振りで破られたわけである。

大高層建築はこれらのものの外、その高さ地上百數十メートル以上に達するものはニューヨーク市だけでも十指を屈するにあまる多数に上る。これらのスカイスクレーパーは、アメリカの生んだ最も現代的な建築であるから、その様式も新時代に相應する新しい手法取扱からきてゐるだらうと考へられるが、事實は必ずしもさうではない。材料や構造またはその設備等は最も進歩的であることはよく認められるが、その形体憲匠といふ點では少數の例外を除いてはその内容と必ずしもよく一致してゐないやうなものも尠くない。

今日のアメリカの高層建築に行はれてゐる様式には、大よそ三通りの種類がある。中世の様式を模倣するもの即ち主としてゴシックを範とするもの、古典又はルネッサンスの様式を模倣するもの即ち古代ギリシヤやローマ又は文藝復興期の建築様式を範とするもの、及び過去様式によらないで所謂新様式の手法に據るものの三つである。高層建築初期の作品として傑作の譽高いウールフ

ース・ビルディングやシカゴのトリビュン社の高層建築等は何れもゴシック風であるが、垂直性やゴシック様式が摩天的なスカイスクレーパーによく合ふことは當然のことで、ルネッサンス風取扱はれたニューヨーク市廳舎の建築の如きは、全体の輪廓と部分的意匠との間にピッタリとした調和を缺く憾みがある。

最高の摩天樓エムパイア・ステート・ビルディングの意匠は新しい様式で過去様式らしい手法の部分は殆んどない。別して傑れた意匠といふのではないが、兎に角その量が桁はづれて大きいので、その量感の偉大さは言語に絶するものあらう。

この點で最もアメリカ的な建築であるともいへる。以上長きに涉つて歐米の現代建築を概述した。かうしたことは、私の當面の研究課題である「日本趣味意匠の研究」と何等の関係もないことのやうに思へるかもしれぬが、將來の日本の建築が進むべき方向を正しく視るためには、海外建築界の主流的動向を誤りなく識るといふことが何よりも必要であるといふことを強く認めたからである。

## 講義ノート

### 『建築計画総論』（昭和12年度） 岸田日出刀

#### 建築計画概論

##### 建築トハ何カトイウコト

建築が何カトイウコトハ説明し最も又程 simple のモノト考えられるが、深く詮索し出すと仲々にむずかしいもの。「宛も芸術とは何か」にひとしい。建築の本質？芸術の本質は何かに付いては古くから多くの人が論じたが何れも「観」の程度を出でず、確然として定義の如きはなし。この問題がはつきり解決できぬ理由の一つは「美」体質が他でないから。美の本体が明らかにされれば芸術の本質も又建築の本質も比較的容易に解明されよう。

古来建築に就いての定義や解釈は種々あるが、最も容易と考へられるは「建築は人間生活の容器」との定義。一応この定義を正しいと肯定すれば、人間生活というものが明らかにされれば建築も自ら明らかになる筈

人間生活には二つの方面がある。物質的方面、精神的方面の二つ。完全な生活というものはこれら二つの

もののよき満足により始めて求められる。一方だけの満足ではそれは不完全な生活である。建築を人間生活のこれら二つの方面をより満足する様に計画されなければならぬ。日本の建築界で一時（大正の中頃）建築は芸術か否かの論、即建築芸術論、非芸術論の如きが盛んに議論されたことがあるが、人間生活に物質的精神の二方面があり、建築も人間生活のそれらの二要素をよく満足しなければならぬということを考えれば、左様の極端の論は生れぬ筈、兎角人は論争の如きを好むもの故、そんな議論にも花が咲いたりする。

更にこの宿題に就き建築が芸術なるか否かを決定しようとする上からは、芸術なるものの本体が明らかにされねばならず、芸術の本体をはつきりさせるためには美というものの本質をまずよく識る必要があろう。脚元がふらふらしては議論にならぬ。当時建築非芸術論者は、芸術の定義としてトルストイの芸術論を楯にとり、「芸術とは人

間感情の移入をなすもの」との立場から、建築には人間感情の移入はできぬとの論を立てた。これは余りに表面的な見方で楯の両面を見ないもの。

建築が芸術家か否かは左程重要なものとも思はぬが、一体どちらだろうと思う者もあろう。私をして言はしむれば、建築は立派な芸術である。唯他の絵画や彫刻等とちがう芸術である迄。似たものとしては工藝がある。勿論 Scale は全く違うが、本質は同じ

category に属する。ある目的要求をもつ建築を計画する場合それを担当する建築家の異なるに応じて造られる建築にも夫々差が起る。決して数学を解くように或一つの解答丈には終わらない。建築のあらゆる問題を機能的に研究して於けば遂には一つの数学公式の如き解答がえられるに至らんと考える向きもあるが、事實は然らず。建築家により必ず変わる、ここに建築のむずかしさがあると共に又面白さもある。建築は建築家を全的に表現する、ここに建築は

英語の Design という語の通訳はない。計画と普通いうが、全体をよく言い表はしてはいない。建築計画 - architectural design

計画の内容としては、平面計画、設備計画、形体意匠計画等に分れるが、本講義では専ら前の二者を対象とし、第三者は「意匠及装飾」の講義に譲ることとする。

建築の計画に対し普通次の如くに分けて考え、建築計画を分けて二つとし、一つを Artistic Design、他を mechanical design、前者は建築の求める人間の精神的方面の満足、後者は人間生活の物質的方面の満足を対象とする。mechanical design は、専ら engineering 的の立場から、建築の合理性、能率、利便、快適性等の問題を研究解決せんとするもの。即ち建築の実用性を研究するもの。artistic design は主として形体及色彩方面を

芸術□□□□が成立する。

勿論建築のある部分、例えば構造学方面、設備的方面には純科学的な数学的な点もあるが、平面計画、意匠装飾上の計画□□にありては、これは全く個々の建築家により□□につくられ表現されるもので、この意味に於いて建築は一つの立派な芸術であることを認める。

建築計画の建築基礎学科としての位置：－

建築には種々の方面がある、研究方面も実際方面も然り、□然建築家の最後の仕事は実はその最後のものは建築を造るということ。建築という一つの総合体を完成するという点に建築家の最後の目標がある。

建築の研究分野としては、歴史的方面、美的方面（意匠装飾）、数理的方面（構造）、材料的方面、都市計画的方面、社会学的方面 - 建築計画は専ら建築の計画（design）方面を研究するもの。

研究の対象とするもの。

これら二つの方面は必ず存在するものなるも、これら二つもののが個々に独立して存在するには非ずして、強いて□ければ分けて考えられもするという程度のものにして、これら二者は決して離されるべからざる密接な関係にあり。machanical design をなし、然る□に別□考へから□□artistic design をなすというは誤りにして、二者は同時に□□□に宛も骨肉の関係の如くに考えられなければならないもの。

形をととのへるために建築の実用性を少しでも犠牲にするは誤りであると共に、実用性の満足だけを考へれば形とか□色彩は何でもかまわぬという極端な功利的見解も全く誤りである。反面のみを見て全体を正しく把握することを忘れてはならぬ。

## 建築計画通論

個の建築、E X、住宅、学校、病院 etc. 等の各種建築物の各論に入るに先ち、あらゆる建築の種類に応用されるような一般の法則を述べる。

### I. 自然（環境）と建築との間の密接なる関係：

過去より現在にいたる、世界各地の建築が夫々異なる形式、内容をもつということは、自然の影響感化ということ、即ち、あらゆる気象上の条件、一気温、気温、経度（太陽光線の方向、角度、強さ）風雪雨雲、地震 etc. が直接間接土地々々の人の生活に影響を及ぼし、建築の形式、内容を規定するにいたる。

一例として□、熱帯と寒帯の住居の建物を非すれば、前者にありては家の床は□くする（避暑的）、□者にありては床は逆にできるだけ低□□れる（防寒的）更に同じ温帯に属するところでも、日本の如く雨量多きところ、

と、Spain、Greece の如く雨少なきところとでは、屋根の形丈けにもそれ相応の差異を生ずる。即雨多きところにては雨仕舞の点から相当急な勾配の屋根が必要となり、少なきところでは勾配少なくともよく、時には陸屋根ともなりて差支えなし。屋根があるかないか、又その勾配の度合いの如何により建物を見た時の感じは大変ちがうもの。屋根勾配ゆるき程、穏やかな感じを人に与えるもの。

かつ自然の条件が端的に建築の形式に反映するのは過去の建築に於いて特に著しいもの。科学の発達した今日にありては、或種□迄自然の条件に対して建築の形式が備へられる例□なからず。例へば日本は希有の地震国であるから、その建築は古来概ね低きをよしとしたが、今日は進んだ耐震構造法の発達により、相当高く建物も地震に対し何等の脅威を感じないでつくられる。又雨量如何に多いところでも屋根の構造材料の工夫により陸屋根

が使はれて且つ少しも支障を来さない。

かかる特殊二三の例はあるが而も建築はそれが建てうるべき土

地々々の自然的条件に飽迄支配され、かかる条件により順応するのが建築の正しい道である。E X、今日の進んだ技術からすれば、窓のない建築も充分実現の可能性がある。即ち照明は人口光線により、温度、湿度、気流の調和は機械的な方法による（artificial light と air conditioning）然しこの如きは単にできると云う丈けのことで経済上其他多くの点で非常な無理を伴うもの。人工的機械的方法により自然のままに窓のある場合よりも仕事の能率もよく又快適な場合もあるが、合理性という中には当然経済ということも含まれることをすれば、表面上の合理性も実質上幾多の不合理性を伴うことを見出すことができる。

日本の夏は温度が甚だしい、この事実は日本の建

築を他国の建築と異なる形式内容を当然と□しめる。（住宅の項に詳しく述べる）日本は又雨量が多いという事実がいろいろの点で日本の建築に影響を与える。

### II. 中に容る人間の生活をよく考えること

最近の例で言へば、住宅でもその中に住まう人により、生活法も、趣味も、好みもちがう、性別により職業によりても、かかる中での生活の差に応じ建築も当然異なるものとなる。又 america の hotel や office building と日本のそれとは、外へ目的は同じでも生活や仕事の形式が異なるから、夫れに応じて建築も異なる筈。外国流の建築をそのまま日本で真似てよいことはなし。これらはすべて中に住まひ又仕事をする人がちがうからである。現代 France なり England なりの住居建築は仲々よいということは事実だが、それをそのまま日本に移して成功するかというに決して然らず。自然がちがひ人がちがうから。

よく現代の建築は international であると言はれる。この言葉は余程よく考へて吟味すべきである。それを正しい観方であるが、例へば今日の建築はどこの国のものも正しい現代性をそなへていなければならないという点で事実 international の性質を共通してもつが、自然と人の差により世界各国に国相応の差というものは当然生まれる。即建築に於ける Locality は□□せんとするもできず。建築は其中に住まう人のためのもので、概念的な流行語などに災かれて自然と人に合わぬような建築をつくるのは建築家の大きな罪悪となる。建築のための建築に終つてはならぬ。恰も L'art pour l'art ということが誤りであると同じように。

古代 Greece の建築から今日に至る迄欧州の建築があつたというのは、□じ読めば、欧州の人の生活がそれらの時代の推移と共に変化してきたからに外ならぬ。現代には現代の建築があることを正

しく理解すると共に、日本には日本の自然と人の生活によく合致する建築がなければならぬことを正しく認識しなければならぬ。

### III. 建築の目的要求を正しく視ること

我に建築家に与えられる課題は建築種別に□しく多い。それら各種の建築のもつ目的要求をより見定めて、それを満足する様な方法手段を建築技術的に見出そうというのが建築計画の目標である。故に各種建築物の目的要求を正しく視ることが重要となる。

美術館と言うも各種各国のものがあり、個々の実際に当りて正しく解決法を見出す様にする。目的と要求とが正しく解ればそれを満足する方法も判る筈。すべてのものを合理化そうとする第一歩として目的と要求の正視ということが第一に考へられなければならぬ。

過去の建築をみるに、建築は実用性の満足

ということのために他の一般芸術 - 絵画、彫刻 - と競争する上に大きな重荷、handicap を負わされてきたかの観がある。現代に於いては正にその反対である、即ち建築はその実用性あるの故を以て他の絵画や彫刻の上に君臨することができる。必要の重要さである。ここに現代と過去とちがう姿をはっきりと認めることができる。

現代建築の始祖とされる Otto Wagner が前世紀の末に喝破した言葉に“Artis sola domina necessitas” - 芸術を支配する者は必要だけである。この necessitas (必要：実用) を正しく視ることがまづ第一に重要である。

吾人は現代に生きる建築家としての自負と自覚とを以てこの necessitas の満足をよく□□しなければならぬ。

### IV. 経済的思考：－

現代の建築に於いてはこの経済的思考ということは特に大切である。過去の或時代に於けるが如く建築家が富□な patron を背景として金殿玉楼をのみ造り得た時代ならいざ知らず、現代の architect はこの Economical の頭が是非共必要である。Economical の頭がなければいけぬというのも、利殖の法とか何かを考へるといことではなく、如何にすれば一つの建築を Economical に有利の方法で□□できるかということを考え□の意。即ち平面計画、使用材料、－

要点、材料の適正の使用、地方材料 (Local material) の利用、市場品 (market material) の通用 経済的で合理的なる□法、意匠裝飾上の簡單化

別の言葉によれば、Least work で最も maximum Efficiency を求めること。

### V. 現代日本の建築家としての自覚：

前にも述べた通り、建築は自然と人とかから成るもの故、日本には日本の建築がなければならず、自分は日本の建築家であるという自覚を以てすべての事に当たる心が肝要である。america のもの、england のもの、France のもの等を参考としてみるのはよい

が、 それに□へられる様な注意をし、France で合理的な建築をそのまま日本に於いても決して France に於けると同じように合理的に行くとは考えられず、自然と人との差異ということをよく認識すること。

長い遠慮なくとくて差支えなきも、自分の建てるのは日本の建築であるとの根本の覚悟を忘れる様にする。

### VI. 建築計画講義の方針：－

各建築種別による Special Design という、各種建築に□ひ、まずその沿革の概要を述べ、然る後語建築に特殊の計画的要求を述べる。

講義の内容は現代を標準すること勿論なるも、過去に於ける発達状況を識ることは是非共必要。現代いくも過去からのつながりに外ならず、過去をしることは間接に現在を識ることの助けになる。

### VII. 参考書：

(邦書) 高等建築学  
建築工学ポケットブック  
(洋書) 各種建築種別にもよるが、雑誌を主とする方よ□し

(England) Architect and Building News  
(America) Architectural Record  
Architectural Forum  
(France) Architectural D'aujourd'hui  
(Germany) Der Baumeister  
Baukunst und Stadtebau (Wasmuths)  
Innendekoration

住居建築計画  
第一、住宅建築

住宅建築

建築の始まりが住居のためのものであつた□□ように、今日に於いても最も重要なるは住宅であると言へよう。人間生活を容れる直接的なものとして住居のもつ重要性は極めて大きい。

一国民の居住習慣、一生活の全般を最もよく表出するのは住居建築である。原始時代に於いてまず穴を掘り、天幕を張りめぐらし、或いは樹上に住まひ□□文化進むと共に次第に建築らしい住居建築の発達をみるに至る。

過去に於いて住居建築は如何に変化し来つたか。

西洋に於ける住宅建築の変遷

1・12」

- (8) Lararium
- (9) Culina (厨房)
- (10) Xystus
- (2) Insula

※ 以下、目次のみ記載

- (1) 埃及の住宅建築  
建築史にて既に明らかなる如く西洋に於ける文化の起源は Egypt に始まる。B.C.4000 年頃すでに相当に  
-----(2)  
-----(3)  
家の配置は：-  
-----(4)  
-----(5)
- (2) 西方アジアの住宅建築  
(イ) 正廳 (大広間、謁見室、etc.)  
-----  
(ロ) 故宮 (王の私的生活用に当てられし部分。貴族の集会住居用もこの部分に配さる)  
(ハ) Courtyard (本来は中庭なるも従者用の部分となる。)
- (3) 古代 Greece、Roman 時代の住宅：-  
(1) 宮殿  
-----  
(2) Villa (別荘)
- (3) Private Houses  
(1) Prebellenic Period (3,000-700b.c.)  
(2) Hellenic Period (700-323b.c.)  
(3) Hellenistic Period (323-146b.c.)  
・ポムペイの歴史  
(1) Prothyrum  
(2) Atrium  
(A) Tuscan Atrium  
(B) Tetrastyle Atrium  
(C) Corinthian Atrium  
(D) Atrium displuviatum  
-----  
(E) Atrium testudinatum  
・Atrium の周囲にある諸室  
(1) Cubicula (小さな寝室)  
(2) Alae (翼部)  
(3) Tablinum  
(4) Fauces  
・私的生活部に (あ?) の諸室  
(1) Peristylum  
(2) Cubiculum  
-----  
(3) Triclinium (食事室)  
(4) Oecus  
(5) Pinacotheca (画廊)  
(6) Bibliotheca (書室)  
(7) Exedrae

4. 古代に於ける北欧の住家：-

(4) 欧州中世の住居建築：-

この機会に文芸復興運動を概観する。

遠因：

(1) 煩瑣学派 (Scholasticism) の研究により好學思想が台頭せること

(2) 大学の創設により、思想上文芸復興的の機運を熟成する

(3) サラセン帝国の感化

近因：

(1) 東ローマ帝国の滅亡

(2) 紙の印刷法の発明

(3) 世界の発見

(5) 文芸復興時代の住居

(6) 十九世紀の住宅建築

Ruskin に就いて：-

其芸術観、建築観：-

W.Morris：-

建築観：-

建築の新化：-

外部的動因：-

社会の変化・人間生活の変化

美の変化・建築に対する人の考えの変化

内部的動因：-

材料構造の変化、経済化

平面のもつ重要性の再認識：-

Corbusier の言葉を紹介：-

日本住宅史講

一、先史時代

(1) 洞窟式

(2) 平地、竪穴、高床

坪井正五郎

二、原史時代

高床式住家：-

当代高床式住家の通例は出雲大社：-

他の諸例：-

(1) 埴輪家 (群馬県出土)

(2) 今日の農民住家の平面配置 (奈良)

石原憲治「日本の農民建築」

(3) 皇太神宮正殿

三、飛鳥奈良時代

飛鳥京諸宮：

- 奈良時代邸宅建築の遺物と研究：-
- (1) 伝法堂（法隆寺東院）  
大陸的手法
  - (2) 在信樂藤原豊成殿板殿  
伝法堂が大陸様式を多分に含む様式なるに対し、本板殿は上代からの形式即皇太神宮正殿にみる如き平面をなし、これを更に発展せしめしもの。
- 四、平安時代
- 弘仁時代：
  - 宮殿建築：
  - 紫宸殿及清心殿
  - 紫宸殿は前述の藤原豊成の板殿平面を更に発展
  - 寝殿造：-（家屋雑考図）
  - 神殿：
- 五、中世（鎌倉、室町時代）
- 当代の寝殿造：-
  - その経路は：-
  - 武家造：-
  - 完成されたる武家造：-（室町時代のもの）
  - 書院造：-
  - 書院造の特徴：-
    - (イ) 玄関、床、棚、書院をもつこと
    - (ロ) 書院は公武の邸宅で客と対談するところとなり、座敷を広く書院と称するに至る
  - 書院造の建築的特徴：-
    - (1) 書院をもつこと：-
    - (2) 床の間：-
  - 棚：-
  - 玄関：-
  - 建具：-
- 六、桃山、江戸時代
- 日本における文芸復興（Renaissance in Japan）の観あり。
  - 城堡：-  
最近の良い実例して安土城：-
  - 聚楽第：-
  - 桃山城：-
  - 当代書院造二三の実例：-  
醍醐寺三寶院：-  
江戸時代住宅考：-  
武家邸宅：-
- 大名、旗本の邸第：-
  - 一般民衆の住宅：-
  - 制令：-
  - 儉約に対するもの：-
  - 格式に対するもの：-
  - 江戸武家屋敷：-
  - 町屋：-
  - 江戸家作形式が地方に感化を与へる：-
    - (イ) 諸大名、武家の家は江戸のものにならう  
(但し地方の一般民家には感化なし)
    - (ロ) 各地宿駅本陣
  - 茶室建築：-
  - 茶道沿革大要：-
    - 唯美主義の宗教
    - (I) 小書院時代
    - (II) 過渡時代（武野紹鷗）
    - (III) 利休時代
    - (IV) 利休以後の時代
  - 満州の住居建築：-  
大別すれば：-
    - (1) 支那系民家（切妻屋根型、純支那系、かまぼこ屋根型、即平房）
    - (2) 満州系民家
    - (3) 蒙古包系民家
    - (4) 円錐形系民家
  - 支那系民家  
plan block の実例：-
    - (2) かまぼこ屋根形民家（平房）
    - (3) 円形の倉庫
    - (4) 城郭式の民家
  - 二、満州族系民
  - 三、蒙古包 pao 系民家
  - 四、円錐形系民家
  - 満州国の習俗

## 講義ノート

### 『意匠及装飾（形体篇）』（昭和12年度） 岸田日出刀

意匠及装飾（形体篇）

昭和十二年度

総論

意匠： Designing、Entwurf  
 装飾： Decoration、Dekoration  
 Ornament（模様）  
 Pattern（文様）

装飾と言え、好々に表面装飾の意に解される。然し今日の建築はその外部も内部も意匠すべきではあるが、本来の意味の装飾をなすべきものではない、仮りに装飾するにしてもその意味は本来の装飾とは性質も内容も異にしたものでなければならぬ。

新しい建築が過去の建築とちがう点は種々あるが、就中最も大きな差異は、新しい建築には過去の建築にみまな平面的（絵画的）な又立体的（彫刻的）な装飾がないという点、求めないという点にある。即ち Schmucklosigkeit という点にあるといえよう。

新しい建築は何故建築の意味の装飾を否定するか。

大きく言えば今日の建築は modernism に立脚するからである。modernism とは如何なるものか。modernism の意味するところは何か。

- (1) Internationality
- (2) Democratic (autocratic の反対)
- (3) Mechanical

これら三つの特徴は芸術に限らず他のすべての文化全般について言ひうるところなるが、ここでは範囲を狭くして建築だけに局限して考え、上の三つの特質について考える。

(1) International という点。

今日ではすべての事物が International されつつあるが、建築もこの大きな潮流に逆つ訳にいかぬ。但し今日の建築はすべて現代生活を基としてつくられるという点に於いて確かに International ではあるが、（固々）国家の自然と伝統的な人の生活から規定される建築 Locality は飽迄存立しなければならず、事實は存在する、

建築でこの International という言葉が盛んに流行し出したのは 1925 年の頃独逸の Walter Gropius（今は英国に在る）が international Architektur とは語をつくり、現代の建築の目標はこの International Architektur でなければならぬと強く主張したことに始まる。仏と独の建築の場合にはそうしたことも大して齟齬を来さぬが、これが独と日本の建築となると事はそう簡単ではない。□に義□に考えられた地方性（Locality）が決定的の要素に変わってくる。

構造や材料の如きは差し当り International のものと考えられもすが、かかるものの数理的な理論はなるほど International ではあるが、

東洋（日本）と西洋という風にならぬ□が変わるとかかるものもその地理上の特殊条件にならぬ□著しく変化し左右されるもの。

形や色についても□。現代人は現代人として早除的に共□せる標準的の好□を形と色に対して

もつ、例えば複雑なものよりも simple なものを好むというが如き。これも欧□と日本とでは大變ちがう。仏と独と独と日とは比較にならぬ。Gropius の言うところ欧□を標準にするが妥当の見解ならしも、日本□その範疇に入れて考えるのは妥当ならず、□□□ Gropius は東洋のことなどは考えなかつたもの。日本の建築家が□□□と□□□と上げた□のものの観あり。

各□民性のちがう様にその形式感（Forma□□□）はちがく、独と仏の□に□を□り、□□か西洋と東洋の差に□てしや。西洋と全く異なる東洋、更に□□には日本の伝統（Tradition）をも充分□□考えなければいけぬ。

伝統（Tradition）と因襲（Convention）とはちがう。前者は positive、後者は negative、現代性のない因襲は勿論□るべきも伝統は型らず。日本の□しい伝統は何かをしり□へてそれを

現代の日本に活かすことは是非共必要。批判なしに西洋をとり入れる前に、よく批判考究して□□□にとるべきものはとる様にする。

(2) Democratic

ほかの社会的運動のすべての方向について言えるところ、近代的社会の特質である此傾向が直接間接建築を支配する。建築をつくるのは直接技術的には建築家ではあるが、建築家を支配する根本の力は社会であり、建築家も社会の一員として社会の進まんとする大勢に順応するは□型の勢い、この□で建築家は社会意識にめざめねばならぬと言われ、かかる大勢に□□するまな建築をつくる中、単にそれが意匠上の場合でも、時代錯誤の建築家と言われる。

建築の Democracy というとは、過去における建築の変化の状をみる□みる□容易に認められる事実。中□は宗教建築が中心の指導的建築をなし、ルネサンス

時代宮廷文化□しなる□□□宮殿建築□□□France 革命以降十九世紀を□□現代に至り、中心建築の位置□□□□□、一般社会公共の建築であるという事実□□□□□容易に□□□□うで□□□。かかる建築種別の上から Democratic の傾向が大きく認められると□□、建築の意匠という□□された方面□□□□、かかる傾向の表出が強く認められる。

(2) mechanical なること：

mechanical 全般について□□□建築では更に具体的の説明が要る。

(A) 単純性、明快性（Ein--chtheit, Klarheit）

錯雑と□□□の反対。建物全体の outline は勿論、各部の取扱、□

□、面、線の取扱その他すべて simple - clear なることを要求する。

(B) 合目的性 (Zweck----)

別の言葉で言えば合理性、実用性の満足。□合目的性を単に建築の使用上の目的のみならず広く形体色彩計画上の□□□□□合目的性、

経済的に□□も効果多い意匠をつくろという点で材料に対する広くして□しい知識はそのの□□□□□識ること肝要。或形や麵に対して、Aなる材料はより合うが他のBなる材料は□らずという場合もあるからこの点特に注意を要することあり。

Design する場合そこに使用する材料に何を当てるかということを終始念頭に置くこと必要。

□、Aなる材料があれば、目地が当然生ずるのにそれを考えずにやると出来上がったものは想像した効果とはまるでちがうものとなることあり。市場品の利用法、地方でき材料の使用、etc

(E) 機械美 (技術美) に対し□しい理解をもつこと

このことは建築家の形式感を現代的に進める上に大いに役立つ。(Schonheit der Machinen--- der Technik)、中世をクリスト教

文化の時代、近世を宮廷文化時代とするならば現代は正に機械文化時代と言ってよし。機械はそれが動きよくその目的を達成するから美しいとされるが、しかし今日の機械は今日の形式感より見るは、形体上についても立派な一つの領域を占めてをる。自然美、絵画美、彫刻美、建築美に対立して機械美なるものがその形体上で言える。

飛行機、飛行船、汽車、汽船、自動車の如き交通□□は勿論□他一般の機械も、すぐれた形体美をもつ、そして□と共に改善される、□□も形も。

機械美の分析：－

- (1) 合目的性を満足する
- (2) 経済的法則により□立を□れてる
- (3) internationality
- (4) 必要以外に余剰的なものなし  
(Ornamentのある機会を見よ)
- (5) 機械は□□は□□simple

これらのこと□そのまま建築にもよく当てはまる、上の如き法則に□□Engineer は Machine を Design し実現するが、これと□□□な考えで建築家が建築を計画し実施することが肝要。machine は動き、建築は動かず、機械美といい建築美と言うその美は□□なるも、目的を異にするもの□□、外形上の形体□□を機械から求めるは誤。軍艦や汽船の形を外形的に模倣しようとした時代もあるが誤り。機械美は如何にして生々しいかという理論こそ学ぶべきではあるが結果された形を真似るは誤。鉄 pipe の勾欄が船のそれと似てるが、それは Koran というものの性質から帰結する当然の一致であって船の Koran を形の土から模倣したものには非ず。

形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。できる□け多くの事例に接し批判吟味すること。この場合よいものだけをみる要なく。悪い例でも差支えない。何故それが悪いかを吟味することに形式感豊□になるだろう。□人は形と色の中に生活している。あらゆる物の形に□□をもちそれを吟味して考える□□にしたい。何事も訓練第一。意匠も拱手し□たては駄目。形の面白さ、多摩墓地、市街に路。

形態論：

### 1. 曲線

線を幾何学的に定義すれば、空□中に位置と長さをもち、幅も厚さもなし。実生活に□ついては、描かれた線、物体の輪郭、面と面との交錯により生ずる稜□を線として認識し得。故に線は物の識別するに最も根本的の要素。物の形を論ずるに当たりまず線から始める理。線の種類

1. 数学的の線
2. 非数学的の線

数学的の線とは或座標に対して□線の変化が数学式により表せるもの。一定の形式の下に統一された線。

過去の建築家をみるに数学的な線が其殆んどすべての場合であるが、自由曲線と稱するものも自由に駆使されている。

#### (1) 直線 (y=mx+b)

曲率零、曲率半径∞、単純なるもの、最も単純であるが従て最も明快なるもの。古来あらゆる造形物の基本的素材となる。変化性がないから時に単調に陥るきらいもある。古代の造形物にして最も勇敢にこの直線の構成をもつものは埃及のピラミッド。

形の基本として角錐体そのまま。簡単ではあるがその印象は極めて強□、ピラミッドが若し曲線を交えてきたならあればほどに力強い表現効果はもたぬであろう。

現代建築に於ける線の基本はこの直線である。すべてのものを Simplify□□とする傾向かを見て当然のことでもある。物の形は直線からはなれば離れる程ぼんやりしてくるもの。現代の機械的生産の行程の上からも直線形となるのが至当。

#### (2) 圓 (x<sup>2</sup>+y<sup>2</sup>=r<sup>2</sup>)

曲率、曲率半径共に一定不変の曲線、曲線中最も簡単なるもの。二次曲線、明快なる統一性により端麗な美しさが表現されるが、曲率の一定と言うことは、他面変化性の□□をも意味する。直線の場合とひとしく倦怠感を与えるきらいあり。

直線と共に最も古い時代からすべての造形に 응용せらる。建築の平面に各部の取扱に圓以外の二次曲線としては

- (A) 楕円  $x^2/a^2 + y^2/b^2 = 1$  (ellipse)
- (B) 双曲線  $x^2/a^2 - y^2/b^2 = 1$  (hyperbola)
- (C) 放物線  $y^2 = 4ax$  (parabola)

これらの曲線も古くより建築その他の造形の意匠に用いられておる。

#### (3) 螺旋、Spiral

極座標に於いて、ベクトル (Radius Vector) が極の関圍を旋回する時そこに渦巻形が生ずる。種類も沢山あるが最も普通に用いられるのは

- a. 等差螺旋 (Archimedean spiral )
- b. 等比螺旋 (logarithmic spiral)
- c. 双曲線螺旋 (Hyperbolic Spiral)

(a) 一ベクトルの増加が時間の経過に正比例するもの、動植物の形態にもみられ又好んで古来文様に応用さる。部分的には円に近似する。



(b) —Vector の対数が時間の経過に正比例する。対数曲線—Vector の増加が時間の増加に対し等比級数的に増加するもの。この曲線は自然現象のうちに極めて重要な意味をもち、そのま□渦紋として、又数量的変化の下に多く応用される。

古典建築中 Ionic Capital の□□古くより使用さる。

(c) —極座標に於ける二つの変数をそのまま軸座標に置き換えると正双曲線となる。漸近線をもつ極めて強勁の性質をもつ。あまり多くは使用されぬが部分的には用いられる。

#### (4) 垂縄線 (Catenary)

重みのある網又は鎖の類を少し垂るみをもたせて張り□時に生ずる対数曲線。□□□かな美しい曲線。日本では古くより垂縄 (たれなわ) と銷して文字通りに縄の垂るみを建築物の軒の反りに用い□場合もある。現在ではこの曲線の性質を少し変えて橋梁の

Arch の曲線形に応用したりする。(東京聖橋、大坂、大江橋梁)

以上述べた四つの曲線はみなその中に整然とした統制があり、この故に美し。その曲率変化のばげしいもの程一般に倦きない美しさをもつと言われる。

即曲線は原則として高次のもの程美しいとされる。□しそれは概念的なことで、事実は低次のものでも充分階調を示す、要□曲線の変化如何が重大な要素をなす。

曲線の微妙さ、洗練さ。

実例、古典建築の Greek と Roman とを比較。

(図) ローマのものはその□形は専ら円の応用に或る。Greek のものは自由に曲線を駆使する。(理由) Greek で工匠はみな各人のもつ洗練された美意識により、流暢な且つ変化にむ曲線を自由自在に描きだしたに反し、ローマ時代には建築の量が多くなり工人の大量生産が必要となり何人も同じようにつくれる幾何学的曲線に統一したものと思はる。恰々日本の徳川時代に於ける木割法の如きもの。統一はできたが変化や独創は影をひそめしにひとし。

希臘のものには、曲線に原価があり連続性ある曲線に□□□故高度の日的洗練がみられもの。

羅馬のものは一定の円□□□□故全体として変化に乏しく、曲率の異なる圓をつなぐと其変化が不連続性とな□□統一性を失い、全体として弱い感じのものとなる。□□円の故に非ず。便宜的にすべての場合に円を使用したためである。

曲線を用いしもの、例えば日本の文様、墓股、肘木等に見る曲線に於いても形体上の優劣が時代により認められるのは□しこれと相似した理由から。

曲線連続性：

曲線と曲線をつなぐ場合に、接点でそれら二つの曲線の曲率があまり異なる□□、全体として不連続性となり不快の感を与える事実あり。注意を要する。これを救う方法：接点で折れ目をつけるか帯 (Fillet) を挟む。

(実例) 図、古典建築の moulding

日本建築の墓股、擬宝珠

直線と曲線をつなぐ時にも注意。

日本建築の軒の反り、橋梁路面の反り。

## 2. 比例 (proportion)

或量が他の量に対して一定比率をもつ時、吾人はそれを見て快感をおぼえる場合がある。□る時之□の量は互いに比例的であるとか或い均整を保つとかい。

(proportion, valance)

この内最も単純の形で表はれるものは、相異なる二つの量の間に共通の単位、即 (Commensurable) なる関係があり、それが比較的単純な比率をなすときに最も比例的なりとする観方。古い希臘時代に音楽上の調和律が音の振動数の単純なる比で表わせることが識られてをった。彼等は同様の調和律を造形上に求めようとした。

造形上比例について□□□最古のものは Marcus Vitruvius Pollio の「建築十書」(De Architectura) である。Augustus 帝に献げし書。

本書の第三、四書は神殿の比例について記す。

(要旨) 神殿の意匠は Symmetria により確率せらる。建築家は之に注意を要する。此 Symmetria は Greek の言う Analogia と言う比例から求めらる。Symmetria とは建築各部の寸法が、その全体と部分との関係に於いて一定の基本尺度に適合することである。

Symmetria の理論なくして神殿の如何なる意匠も考えられず。而して此比例の根本は人体の比例から割出して考えらるべしとする。

身長を基本 1 とし、顔面の長さ 1/10、掌の長さ□1/10、足□1/6、胸の幅、腕の長さ各 1/4、etc

神殿の各部もかる数的照応をもつべしと主張す。

(図) 身体のもつ幾何学的図形。

MODULUS による神殿の比例測定：

(DEC.15)

柱基部の直径を modulus として各部の比例を説明する。此の modulus の決定は人体の比例より求めたという (Vitruvius)

Ionia 仁が Applo の神殿をつくる場合：

荷重に対する安定観と美観の上から柱の proportion を如何にすべきかに悩む、人体で足は丈の 1/6 なるを発見して柱身下部を 1 とし、柱頭上までも含んで 6 とする。Doric 柱は男子身体の比例に則る。Diana の神殿では 1/6 の太すぎる故更に Delicali する為めに 1/8 にした。之い女人の丈と足との比例に則ったものと言う。

Vitruvius のかく Greek order というものを直線的□術的な比例概念で律し去る。然るに文芸復興期に及び古典建築の研究が旺んになり、詳細なる実測が次々に□表さるのに及んで Vitruvius の言う所すべて正しくはないことが確かめられる。動的均整論の主唱者 Hamlich は、これは Vitruvius は比例とは何かということをよく識らなかつたためと言う。Vitruviusno 接した時代は勿論、彼が書中に記す工匠も B.C.300 以前の者で希臘芸術没落時代の者故止むをえないとされる。

比例論の最古の文献として価値をもつ程度で希臘建築の正しい解析としては価値なきものとされる。

近代に於ける古典建築の解析は十六世紀の中頃 Giacomo Batochio Vignola, 1507-1573 により始まる。— 柱の半径を基本尺とする 5 orders (tuscan, Doric, Ionic, Corinthian, Composite) を制定して承く古典建築の模範的比例とされる。

十九世紀に入り、古典主義の発展と共に古典建築の研究再び旺となり、1851、Penrose: "The Principles of Athenian Architecture"が発表される。

其第二版には W.Watkiss Lloyd の研究が附してる。

(Parthenon 神殿にきするもの)

(要旨) パルテノン神殿に用いられし比例は 1:6

而してその差 5 で遠い。

1:6 2:2 3:8 4:9 5:10 ……

数が大きくなれば比の割合は次第に小さくなり

4:5 5:6 6:7 の如き簡単な整数比となる。

之□以外、比例は用いられずとする。

美の神秘 parthenon 神殿もこの研究

により剩すところなく解剖し□られし観あり。

然るにハムビッチの動的均整論はさらに

よりパルテノン神殿の比例美を説明する。

Lloyd の比例観念は整数的□術的一時的或いは直線的形式なるもの。単純、幼稚なるも簡明であり、日常此の比例美に吾人はより接する。日本住宅の平面計画上に見る畳単位はこの類に□する。

他の均整概念の二三：

(1) Fibonacci Series (or Summation Series)

十三世紀初頭、伊太利の数学者 Leonardo Pisano (also known as Fibonacci) (1175- ?) 一対の□ (突?) から一年間幾何対えられるか。但し各一対は次の月から毎月新一対を生殖するもの。死亡はなし。

1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34, 55, 89, 144, 233, 377,

(数表)

(2) Golden Section (or Dicine Cut)

黄金分割又は神截

紀元前 300 年頃ユークリッドの命題：

“一つの線を二つの部分に分け、其全線分と小さき部分とにより生ずる矩形を、其大なる部分により生ずる正方形とひとし□□□めよ”

$A(A+B)=B^2$

$A:B=B:(A+B)$

なる如く A、B を求めればよし。A+B は与えられしもの一元に次の代数式となる。A を x、B を 1 とすれば

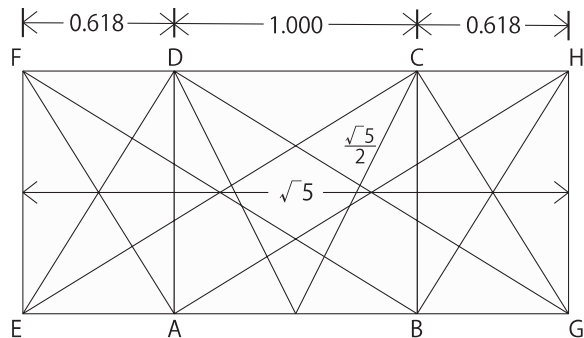
$x=\pm\sqrt{5}-1/2 \neq \pm 0.618$

この特殊の比例は文芸復興以後特に Golden Section と呼ばれ、多くの数学者の異常なる興味の対象となる。黄金比の各項に代入すれば

$0.618 \times 1.618 = 1$

$0.618 : 1 = 1 : 1.618$

<図>



上図は四つの黄金截矩形 (pront により説明)

$1 + 0.618 \times 2 = \sqrt{5}$  ( $\sqrt{5}/2 = 1.118$ )

独逸の天文学者 Johannes Kepler (1511-1630)はこの黄金比に興味をもち、Fivonacci Series との関係をも考察する。即 Fib. Series の相連続する二項をとり其比をみると大体 1.618 に近似の値をもつ。項が□になる程 1.618 に接近する。故に十七世紀に Albert Girand は黄金比が無理数になるのを近似整数比で表わす方法として Fivonacci Series を少し変更して 0, 1, 1, 2, 3, 5, 8, 13 ……

これの応用範囲は広いが、更に□を返した表□□□□人体及古典時代の希臘建築に表はれてきたと考えられる Substitute Series を用いなければならぬ。 ∴

11, 191, 309, 500, 809, 1309, 2118, 3429 ……

相連続する二項の比は 1.618 となる、一つおいて次の項との比、例えば 500 と 1309 との比は 2.618 となる。2.618 は 1.618 の二乗で、又 1.618 に 1 を加えたもの。二つおいてとなりの項との比、118 と 500 との比は 4.236 □い 1.618 の三乗である、又 2.618 に 1.618 を加えたものになる。更に 1.618 の二倍に 1 を加えたものでもある。(以下同様)

面白い此の比率の性質は $\sqrt{5}$ の矩形と関連して次に述べる動的均整論中最も重要な役目をもつものなるが、十九世紀の頃、此の比例を多くの自然形体の中に発見した人達は全くこれに魅了せられ、之を最上の比例となし、総ての形や比例問題を之に当てはめて考えようとした。

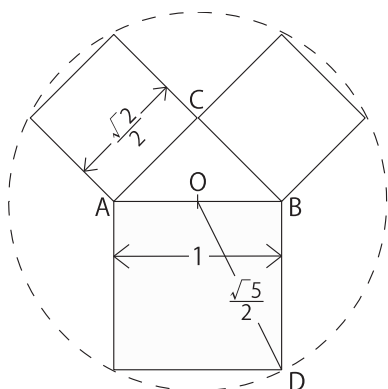
美学者 (Robert Edward Hartman, 1842-1906) も其熱心な研究者。此比率を基礎として美学の一体系を形成しようとした。

< (図) 自然界における黄金比二三

これらの人口は然し比例の真の意味をしらず、単に近似値を□術的に適用しようとした所に致命的の誤りがある。見事な比例を見出しながら其適用に於いて Vitruvius 以来の均整観念から抜けきらなかった。

更に 1917、独逸人 Zeder Bauer は更に一步進んだ均整論を黄金比を根拠として発表する。"Die Harmonie in Wetall, in Natur Kunst"

<図>



ABC: 二等辺直角△  
(調和三角形)

$$AB:BC:OD = 1 : \sqrt{2}/2 : \sqrt{5}/2$$

この3つを基礎として次の如き unit をつくる

$$a = 1$$

$$b = \sqrt{2}/2 = 0.7071$$

$$R = \sqrt{5}/2 = 1.118$$

$$r = (b - a/2) = \sqrt{2}-1/2 = 0.207$$

$$\alpha = (\square - a/2) = \sqrt{5}-1/2 = 0.618$$

$$b + r = 0.914$$

これ等の比例値をあらゆる自然の形態の古来の芸術的傑作に適用して其構成の分析を試る。然し其比率の用い方に於いて従前の均齋観念から全く抜け切らず。従って均齋論の自然科学必然性を全然缺く感あり。その努力は認められるも。

黄金截に準拠するすべてのこれらの均齋観念もその比率の真の意味を把握せず。唯□術的に或いは一時的なる応用□□□□した点に缺點ありと思はる。動的均齋論がハムビッチにより唱えるのに及んでこれ等のすべてはその中に包括せらるるに至る。

### 3. 静的均齋論

1920. エール大学美術工芸学科教授 Jay Hamvidge は "Dynamic Symmetry: The Greek Vase" を著す。従来考えられてきた均齋に対する観念に□期的の決算と発展を与えることに成功する。

要旨紹介: 著者の序言に言う "近頃の意匠には統一なし。自然の中には一貫した原則がある□自然と芸術に関し其根底をなすものを探求する。その結果、均齋或いは比例より二つの種類あり。

積極敵の性質を他は消極的の性質をもつものなることを確かめ□たり。前者を動的均齋 (Dynamic Symmetry) 後者を静的均齋 (Static Symmetry) と銘することにする。

静的均齋は芸術家により意識的に又無意識的に多く用いらる。動的均齋に非るものはみな静的均齋に属するものなるを認め得。

静的均齋は自然界に於いて或種の結晶形

----- (31)

放散虫類、硅草、花と種子、又意識的に多くの時代の芸術作品に

用された。

動的均齋は貝殻、植物の□□等に於て特に著し。芸術作品では Egypt と Greece のもの丈にその応用がみられる。

自然形態及埃及と希臘芸術作品の研究により面積的比例の原則を発見しえたと思ふ。

(以下、Hamvidge の均整論に就いて)

"Dynamic Symmetry と Static Symmetry"

Dynamic なる語は Greek では in Power と訳されてをるが、Greek Geometry では In Square なる意を表す。故に Dynamic Symmetry = Symmetry in Square と同義語となる。故に動的均齋は二次的均齋とも訳される。二次式均齋の意味は、従前の均齋観念では 1:2:3:4:5 の如き整数比を数宜的なりとしてをる即ち一次式的であるに対し、動的均齋に於いては : -

$$1 : \sqrt{2} : \sqrt{3} : \sqrt{4} : \sqrt{5} \dots (32)$$

の如く其俣では不尽根数となるが各項を二乗することにより、初めて整数比となるべき数を比例的とみるので、二次の数宜 (Commensurable in Square) に立脚する均齋理論なり。故に Dynamic 及び Static なる文字には力学の如き意味更になし。動的静的と訳すのも便宜上のことである。

然るに Hamvidge の所謂静的均齋の中にも  $\sqrt{2}$ 、 $\sqrt{3}$  が重要な要素をなす故 Dynamic を単に二次的と訳すときは静的を区別すること不可能となる。故に比較的消極性をもつ Static を静的とし、□□で積極的に develope するものを動的とする。

Vitruvius 以降の基本単位を用いる均齋から静的均齋に必然的に生まれるが、従前のものはすべて□術的なくしに對し Hamvidge のものは静的のものをすべて幾何学的である。

□術的均齋 (一時的)

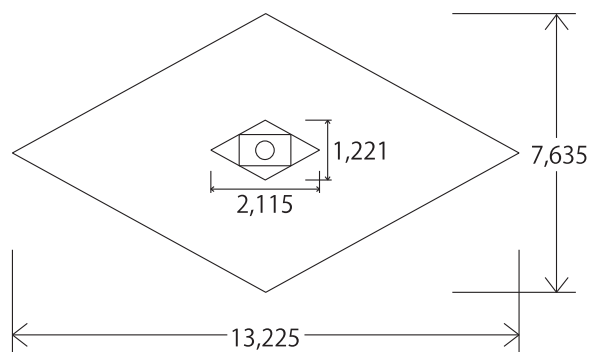
幾何学的均齋・静的均齋 (二次的)

・動的均齋 (対数的)

$$----- (33)$$

Vitruvius は既に古く  $\sqrt{2}$  に就いて記せり。彼の□□□からぬ Nero 帝の頃、Athenee Dionysus 劇場を Rome 風に改築するに當り、Orchestra の床を全部石敷とし、其中央に下図の如き模様が嵌め込まる。

<図>



Hamvidge はこの模様が中世期を□□□□に使用された正三角形の

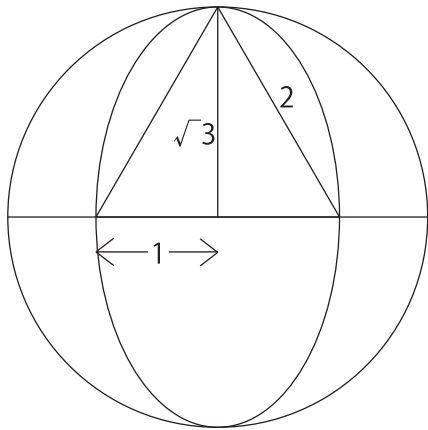
起源をなすものとする。Vitruvius の人体比例図中にも $\sqrt{2}$ 、 $\sqrt{3}$  の比例概念が略示されておる。此の如くこの種の比例観念は古来各種の様式中の意匠□本能として応用されたものなるを識る。

Early Christian 時代に Christ Symbol として墓石の表に魚の形が彫り込まれたことがよくある。□□になり、二つの美しい円弧が其中心を過ぎる様に作図して形成される紡錘形を以て魚の形に置き換えられる様になる。1512=Albrecht Durer (1471-1528)は此の図形が中世を通じ芸術上の意匠計画で基本的重要性をもつことを強く主張し

----- (34)

別図の如きものを発表した。

<図>



"VESICA PISCIS (魚の浮袋)"

この形を用いて建築物の平面及立面を解析して意匠上の基礎的根拠をえしとする。例多し。

之に類する他の二三の均斎：-

Cesare Cesarino :- (Durer 頃の人)

Vesica piscis を応用して

(1) Trigonon :- Vesica 中に含まれる十字形により長短二辺の長さを決定□とするもの。

(2) pariquadrato :- Vesica 中に含まれる面積を近似的に整数比に分割し (ex. 8 : 14) 之により平面計画上の柱や控壁□の位置を決定せしとするもの。(?)

J.Brune :- 何れも正三角形、 $\sqrt{3}$  を基本と

Chantell :- 又は Geometrical form

----- (35)

Roriczer, 1486 :-  $\sqrt{2}$  の調和を基本とする (図)

中世を通じ建築物の全体及部分(窓の形)に就て其形体意匠の基本として正方形又は正三角形を用いたことは疑なき事実である。(窓の格子文様にも)

古典芸術が現実的、肉体的なものとして人体美を□□に□揚し、それのもつ比例を芸術に導入するに對し、中世芸術にあてい思索の産物である幾何学的形体を徹底して其形体意匠に應用せる点は極めて興味ある事実とすべし。

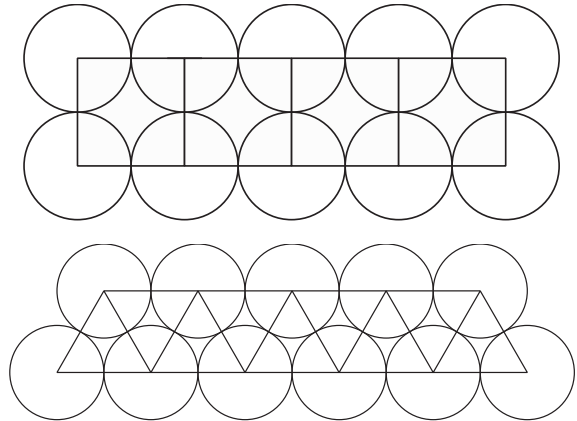
$\sqrt{2}$ 、 $\sqrt{3}$  に関する Hamvidge の論 :-

静的均斎は自然及芸術に於て主して放射状 (Radiating Form) に配列される。→焦点をもつ。或中心がありそれを囲んで配列される。而して其形の単位をなすものは正三角形と正方形、正多角形 (及び其一部分或い合理的分割により形成される)。

----- (36)

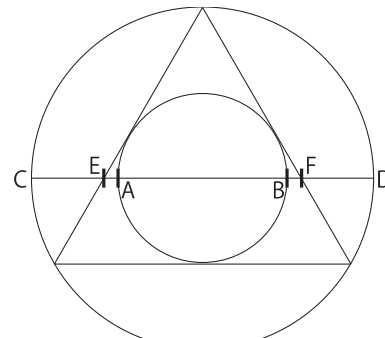
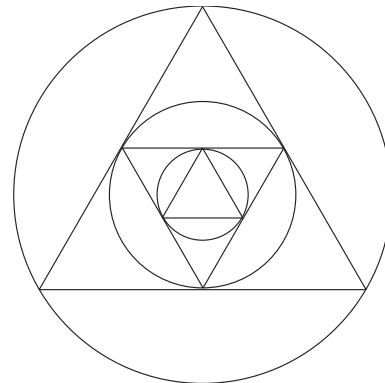
就中重要なるは正三角形と正方形、-これは自然界に於いては細胞の配列により造り出さる。

<図>



其中心を結ぶと (A) 正方形、(B) 三角形となる。

<図>



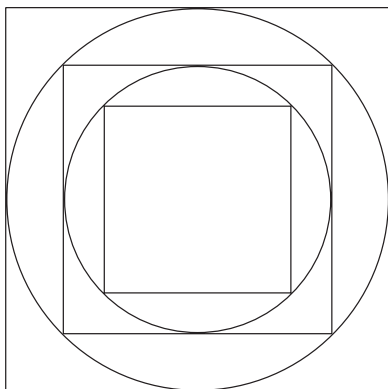
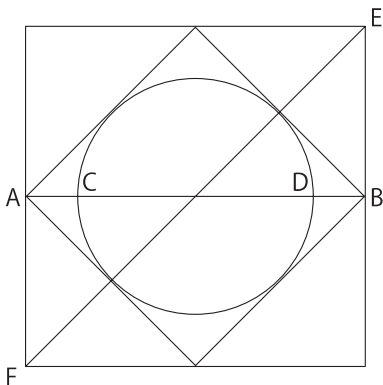
正三角：外接円に内接円と半径の比は 2:1

AB : CD = 1 : 2  
 $\sqrt{3}$

EF : CD = 1 :

三角形（正）を順次に develope すれば外接円の直径は順次に 2 倍となる。

<図>



------(37)

正方形の場合：—

内接円と外接円との半径の比は  $1 : \sqrt{2}$  となる。CD  $\doteq$  AB =  $1 : \sqrt{2}$   
 2 三つ develope すれば  $1 : \sqrt{2} : 2$  正三角形の場合には  $1 : \sqrt{3} : 2$   
 □の場合も其基礎的の比率は 2 なり。

かかる比例は芸術作品に多く応用されてをるが、倍比の性質に就いて従来あまり理解されてなかつた。

Hamvidge は現代の建築家に警告する：—

近頃の建築家は、何等か均斉形式を採用するに非れば意匠は成立せずということ認識しないのは誤り、Gothic 芸術の理解はこれなくしては□めぬ。Gothic 芸術特有の幾何学文様を工程の安易さに帰するは誤りである。それらは常に基礎的平面計画の理論的發展であり、更にこれらは構造、意匠□まで其統制を延ばし、かくして部分と全体との□の関係に統一性が生まれる。

------(38)

形式美術は Schematic Design によらざる限り成立しないということ今日建築家は一般に認めていないままだ。最も忠実なる写生すらも、それが免責的に計画されていないならば写真より少しましな位

で、完全な迫力は求められない。今日の獣類の写生が Egypt or Greek のものより迫力が足らぬのは、この Schematic Design の無視より来る。芸術の根底に□実に非ず、形式を□むことにあることを強く認識しなければならぬ。自然の皮相を□実だけしてきたのでは、それは技術の奴隷に過ぎぬ。古代人は自然の動植物を表はす場合、表面上の偶然性は問題にしない。ある一つの大きな力に支配されている自然を直視した。表面はどうでもよく、その底をなす自然の力と統一性を重要と考えた。自然のもつ眞の形成を見出すことを最も重要とする。自然のもつ意味を体得しその構成の意味を□した時こそ、芸術家は自然に対抗し、又自然の到達しえない境地に迄踏み込む。

------(39)

ことが可能である。(EX. 音楽、建築の如き自由芸術)

Greek 芸術家は自然の眞の姿を捉え得た点に於いて、其制作態度は正に満点であった。近來のものはあまりにその芸術が個人的になり過ぎてをる。

(以上は Hamvidge の所論)

### 動的均斉論

其論□と動的均斉論の概念：—

Hamvidge の所論を要約すれば、(イ) 動的の均斉形式が静的のそれと共に此大自然の示す姿の中にあること、(ロ) Egypt, Greek の傑した芸術作品の中には動的均斉の意匠から成るものないこと。(ハ) 而して彼等がかかる動的均斉を理解するに至った経路の必然性を認めうること。(ニ) 静的なるものに対し全く別個の性質をもつこと。

彼は言う、近代建築は単純化され□□と□る。

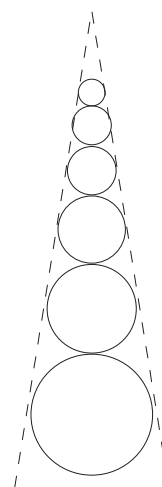
------(40)

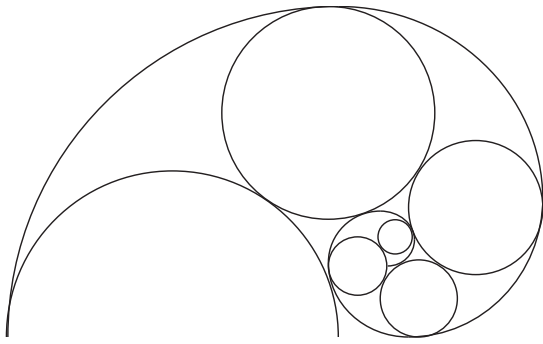
故に其形は一層 delicate な比例により制約されるに非れば求めんとする効果は得られないであろう。

自然界に於ける動的均斉

或一定時間内に分裂増殖する細胞の一□を考えてみるのに、一定の比率を以て新細胞を加工□□□□ことは確□。

<図>





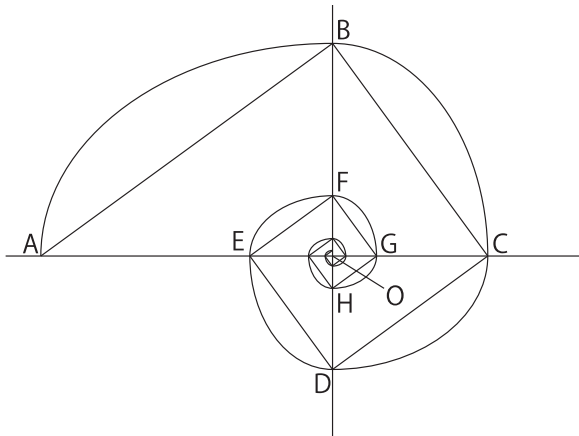
(A) 円錐体形 (B) 渦状体形

(B) の渦状体形—植物、貝殻の生長形成にみる。この曲線の性質は等比 Spiral、又は対数 Spiral と言われるもの。等角距離に引かれた任意の三つの Vector に於て、中間のもの二乗はその前□のもの相乗積にひとし。即第一の vector と第二の vector の比は、第二の vector

----- (41)

と第三の vector との比にひとし。この曲線はそれ自らでも充分美しいが、更にそれは直角螺旋を生ずる点に於て重要な意味をもつ。

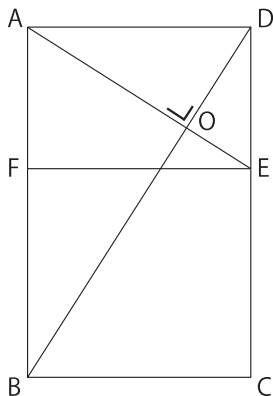
<図>



AO : BO = BO : CO

△ABO ≅ △BOC

∠ABC = ∠C ∠BCD = ∠CDE = ∠



左の矩形に於て AE ⊥ BD とする。

□ ABCD は任意の矩形とする。

然る□ BADE は O を極とする直角螺旋の一部分となる

∴ AB<sup>2</sup> = AB × DE

AB : AD = AD : DE

即 □ ABCD と □ ADEF とは相似形なる□□ならず、逆数矩形となる。—動的均斉概念の基本をなす。

----- (42)

動的均斉を根本に□で対数螺旋に支配される。この渦巻は決して其□の形では表はれ□常に其□底に内在する。

藤原咲平博士の論：—

渦巻きは変なもの。宇宙界に数多くあるに不□□ず、あまり研究されず、従てあまり利用もされぬ。50 年前-----により Energie の不滅が発見さる。その□Helmholtz は電気磁気の理論により渦巻を説明する。自然界には渦巻が□限りなくある。小さいより大きい銀河宇宙に星雲、太陽の黒点、地球面では貿易風が水平の軸をもつ渦巻。地面□□渦の形（北海道、九州）、太平洋地震帯

植物 — 松かさ、シュロノ葉

動物 — 羊の角、卍は世界中にひろがる文様

(apollo, symbol と□□greece)

渦巻きは生長と同側物の生長との間には類似性あり、

----- (43)

□□それは計画上合理的な生長でもある。人間の胎児も渦巻と相似曲線を示す。若い渦巻偏つてゐるが時の経過と共に円満なるものとなる。渦巻のなくなる時そこに平□が来る。更に動固なし。絶対の平□は絶対の平静で渦巻を研究すると平□の法則に反する現象が□はれてそ□□□□る。それは生的成長 (animal growth) の現象である。同方向の渦巻は接合して更に強くなり、逆方向の渦巻は parabola を接して離反する。而して無理に押し込もうとすれば、こはれる場合と強い方が残る場合がある。

渦巻運動は積極的流動の現象にして生の象徴。宇宙を支配する大なる力、現象を生み出す渦巻を共基的素因とする動的均斉の概念は□し、自然の形式をその形式とする最も自然な合理

----- (44)

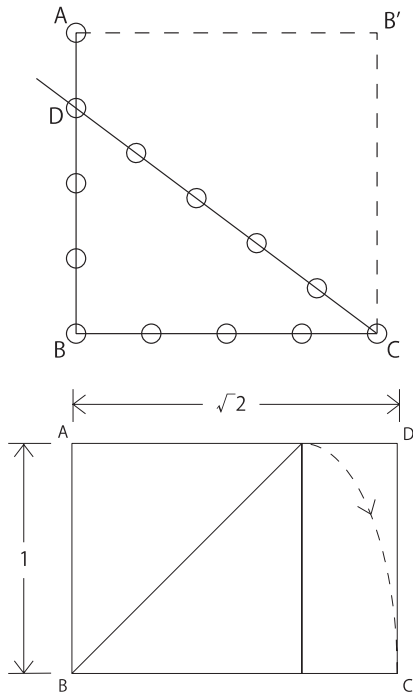
動的なるものと言ふことができる。

動的均斉の起源：—

古代埃及に於ける測量：—Nile 河の氾濫、土地境界の消滅、地□の事□□□け租税の公平を期するために境界法定を早くする必要から b.c.4000 頃既に土地測量術発達する。二人一人と結び目のある縄で測る。三辺の比が 3 : 4 : 5 なる三角形は直角三角形なることをエジプト人は識っていた。

方法：—

<図>



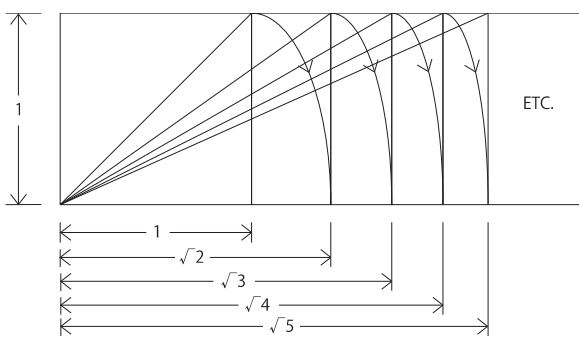
正方形はかくして古代人より容易につく。正方形を基礎として長方形を造る場合、最も合理的の方法、即正方形と何の関係をもつ矩形をつくる場合には□□対角線を長辺とする矩形。

(45)

即両辺の比が  $1 : \sqrt{2}$  なる如き形となる。

日本建築尺度目盛にみる裏の目：—正方形の対角線上に於ける尺度の射影、即ち単位に  $\sqrt{2}$  をかけたもの。日本の半紙  $1 : \sqrt{2}$  の矩形、二つ切、四つ切…何れも原型と相似矩形をなす。

<図>



$1 : \sqrt{2}$  の矩形の対角線  $\sqrt{3}$

$1 : \sqrt{3}$  の矩形の対角線  $\sqrt{4}$

これらは何れも原正方形の延長で、測量術では最も簡単且つ合理的に必然的に作られるもの。彼等は此方を神殿其他の建築物の平面に応用

(46)

したことは容易に想像しえよう。更に立面計画、細部構成、絵画的意

匠にもかる形を随処に応用したものと思わる。即ちかうした彼等は正方形から出発して全体と部分とに規画的統一を定本したものと考えてよし。

動的均斉の発展と消滅：—

b.c.700 頃 Greek 人は此米幾何学矩形□□□を伝習し、更に数学的にすぐれた才能をもった彼等はそれを驚くほどに発展せしめた。Greek art の最盛期、即 b.c.600 の頃彼等は□に或面積の中には一つの矩形を考え、それを矩形の結合展開によつてのみ面積を理解してきたとさえ思える。

Hambidge : The Greek Vase. 1920

The Parthenon ther Greek Temples, their Dynamic Symmetry

□者に於て Hamvidge は parthenon の平面、立面

(47)

細部、彫刻に至る迄、あらゆる部分が動的均斉の理論に適合することを立証□り。実測の寸法とよく一致する。当時現実にこの動的均斉の法が実在したと考えてよかろう。

b.c. 4 cent.頃、ユークリッドにより Geometry の数学的定本がなされ、他方プラトンにより哲学体系が樹立せられた頃から、それ迄□に哲学と科学との連結の上に□かれた芸術は提携者の哲学科学の成長定本と共に離ればなれになる。建築も科学的思索的な態度を忘れ、動的均斉も何時とは□に忘れ去□□にいたる。美術が単に手先だけの技巧に墜し去る。

形に対しても或據るべき基準は必要。それが動的均斉か他のものかは暫くをくも、Hamvidge の言う動的均斉の理もその一つ。

(48)

動的均斉論 (2)

矩形の分析：—

希臘人は特異の数理観念をもつ、其□では不墨根数なる平方根の値を有理数の部に入れて考えるほど、動的面積的な考え方をした。彼等は或面積を理解せんとする場合、□にその面積中に含まれる基礎矩形を考へ□の其均斉を工夫した。矩形を基盤に割り又は対角線で分割する様な静的の方法ではなく、面積のみによる特殊の均斉法を用いた。

Hamvidge によれば Greek Rectangle は 6。

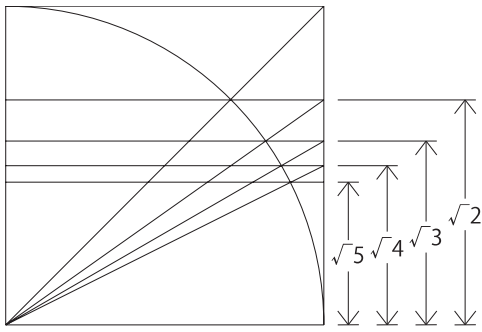
各称  
短辺：長辺

- |                  |                |
|------------------|----------------|
| 1. 正方形           | $1 : 1$        |
| 2. $\sqrt{2}$ 矩形 | $1 : \sqrt{2}$ |
| 3. $\sqrt{3}$ 矩形 | $1 : \sqrt{3}$ |
| 4. $\sqrt{4}$ 矩形 | $1 : \sqrt{4}$ |
| 5. $\sqrt{5}$ 矩形 | $1 : \sqrt{5}$ |
| 6. 旋廻方形矩形        | $1 : 1.618$    |

(49)

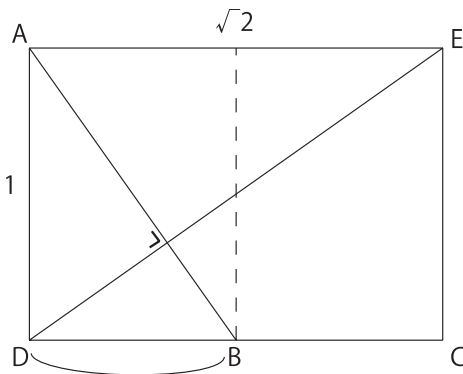
上の六種矩形は共に正方形を基として作図し得、正方形の外方に求むる方法は前述せり。(但し旋廻方形矩形は別) 正方形内に求むる法、

<図>



之等の矩形の特性は如何、前述せる如く一つの矩形は対角線に下した重線の足が直角螺旋の極及原矩形に対する逆数矩形を決定するものなるが故に

<図>



$$DB = 1 / \sqrt{2} = \sqrt{2} / 2$$

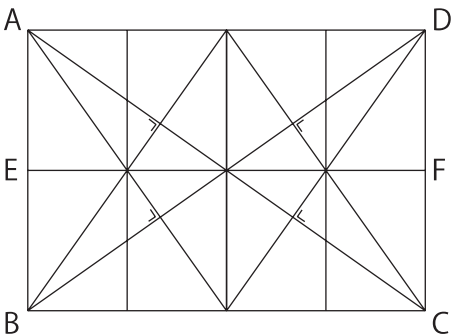
$$(\because DB : AD = AD : AE)$$

$$DB = AD^2 / AE = 1 / \sqrt{2}$$

-----(50)

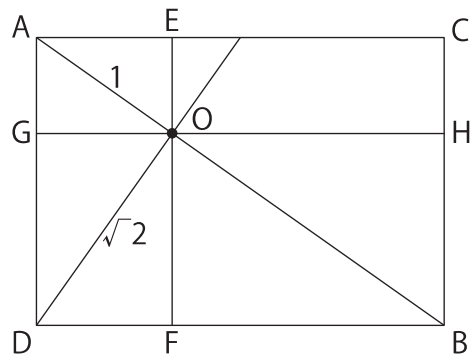
上の式により、逆数矩形の短辺は原矩形長辺の半分となる。故に  $DB = 1/2CD$  となり、垂線の址、B は原矩形を二等分する点を与へる。

<図>



二つの対角線に先に垂線を下す。長辺との交点より短辺に平行線を引けば原矩形は四分される。EF を引けば、八等分一面積がえられる。

<図>



極 O より EF、GH を引く

$$DO^2 = AO \times BO$$

$$AO : DO = 1 : \sqrt{2} = DO : OB$$

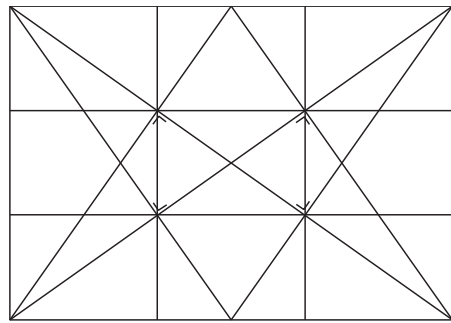
$$BO = DO^2 / AO = (\sqrt{2})^2 / 1 = 2$$

$$\therefore BO = 2AO$$

故に E、F、G、H は各辺を三等分することになる。故に次図がえられる。

-----(51)

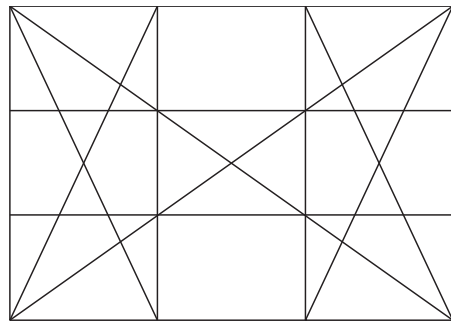
<図>



面積の9等分

$\sqrt{3}$  矩形：—

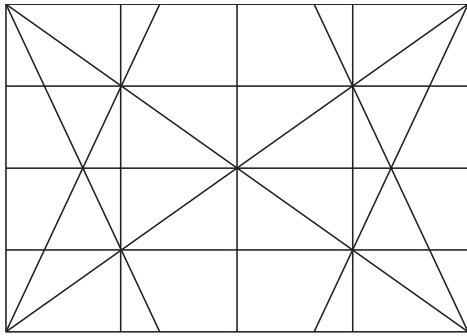
<図>



$1/\sqrt{3} = \sqrt{3}/3$  故に辺の1/3になる。



<図>



16□似矩形に等分

如上の作図を $\sqrt{4}$ 、 $\sqrt{5}$  矩形に適用すれば、各矩形は逆数矩形の決定により順に原矩形長辺の二乗個 ( $1/\sqrt{n} = \sqrt{n}/n = 1/n$  長辺  $\therefore 1/n$  長辺  $\times 1/n$  短辺 =  $1/n^2$  矩形)

----- (52)

の相似小矩形に分割される。

( $\sqrt{n}$  矩形では逆数矩形の決定により各辺が  $n$  等分されるから  $n^2$  個の相似矩形が生ずる)

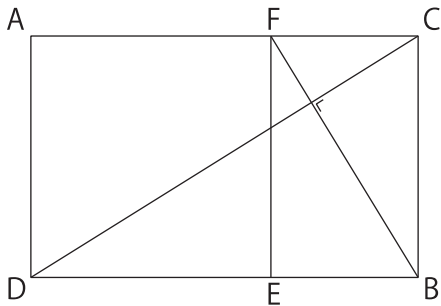
極の決定によつては原矩形対角線を長辺比 ( $\sqrt{n}$ ) の二乗+1 の数に分割する故 ( $N+1$ ) 2 個の相似小矩形に分割する。これは如何なる基数 ( $\sqrt{n}$ ) をもつ矩形に於いても当てはまるものではあるが古代希臘に於いては $\sqrt{5}$  以上の矩形は用いられなかった。

旋回方形矩形 (Whirling Square Rectangle) は黄金律矩形である。

前述各 $\sqrt{n}$  矩形に於て極を決定して逆数矩形を決定せんとし、若し原矩形から逆数矩形を引き去りし残りの矩形が正方形となりたりとすれば (次頁の図参照)

----- (53)

<図>



$AB : DC = DC : CE \quad AD = DC + CE$

即□直角 Spiral の連続する任意の三つの Vector に於て、最大の Vector の値は前に者の和にひとし。

( $AD = DC + CD$ )

( $DC + CD$ ) :  $DC = DC : CE$

( $DC + CE$ )  $CE = DC^2$  (黄金截)

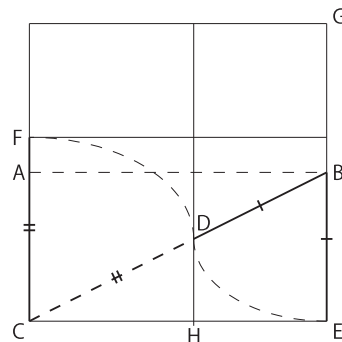
之を連続的に□□□時、極を中心として漸次小さくなる正方形が infinitely に旋回することになる。

動的均齊に於いては順に正方形が基本形となるから重要な正方形と又動的均齊を根底的に制約する対数 Spiral との結合せる此矩形を特に静的な

----- (54)

黄金截矩形の名を避けて、旋回方形矩形と□平ぶ理由も実に茲に□る。此矩形はそれ自□として重要なのみならず、前述せる如き $\sqrt{5}$  矩形と密接な関係があるように、作図法が Develop せる Dynamic Symmetry 理論としての必然的展開を□肯せしむべき重要な意味がある。正方形外に求むる□は前述せり、正方形内に求むる□：-

<図>



AB により二つの $\sqrt{4}$  矩形とする。BC から単位 BE を引き D 点を決定する。CD は旋回方形矩形の短辺 CF を決定する。

$CB = \sqrt{5} \quad CD = \sqrt{5} - 1$

$CE = \sqrt{5} - 1 / 2 = 1.618$

D 点を通□垂線を引けば 矩形 GH は $\sqrt{5}$  矩形をなす。

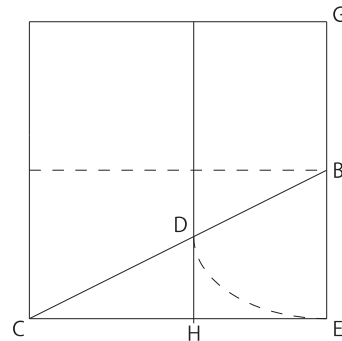
----- (55)

(証明)

$BD : EH = \sqrt{5} : 2$

( $\because BD : EH = BC : EC = \sqrt{5} : 2$ )

故に  $EG : EH = 2BD : EH = 2\sqrt{5} : 2 = \sqrt{5} : 1$

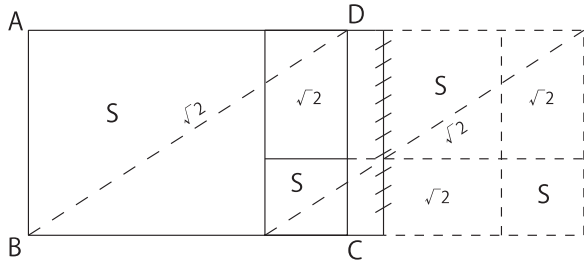


以上により Greek art に用いられし矩形の特性及基本形なる正方形

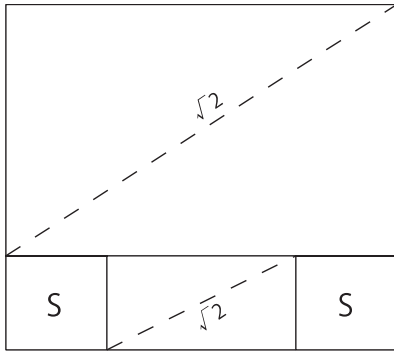
との関係が□かにされた。次に之等の矩形相互間の関係を説明することにする。

(A)  $\sqrt{2}$  矩形：－

<図>



<図>



$\sqrt{2}$  口の長辺上に正方形をとる

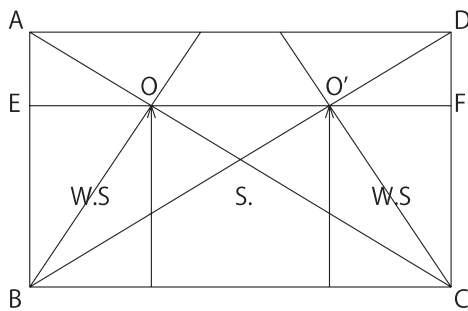
これらは或面積を夫が内在的に含む他の面積により理解せんとする最も simple + case なり。

----- (56)

Greek Symmetry を制約せる正方形、 $\sqrt{5}$  矩形は旋回方形矩形の相互関係に就いて記す。

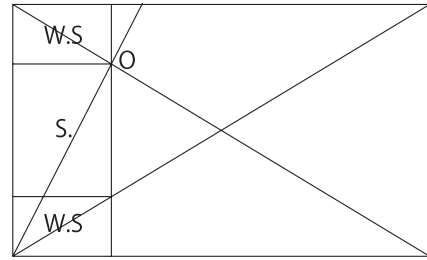
(I)

<図>



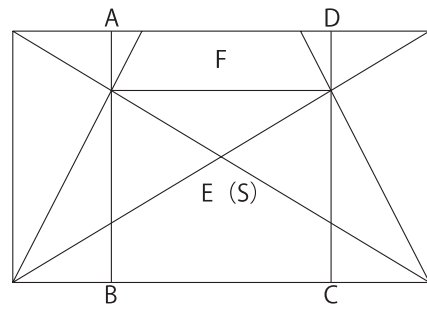
(II)

<図>



(III)

<図>

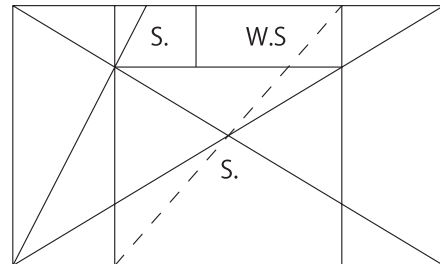


----- (57)

故に F は (S+W, S) になる。

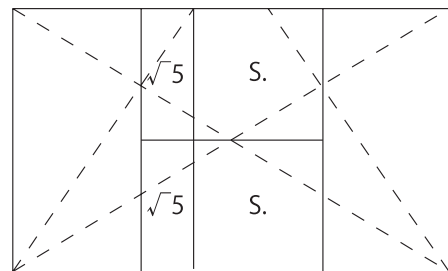
(IV)

<図>



(V)

<図>



$\sqrt{1.382}$  口をに等分すると各矩形は正方形と  $\sqrt{5}$  口となる。

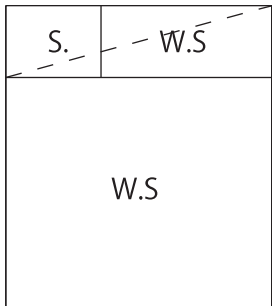
(証明)

$$1.382 / 2 = 0.691 \quad 1/0.691 = 1.4472$$

$$1.4472 - 1 = 0.4472 \quad 1/0.4472 = \sqrt{5}$$

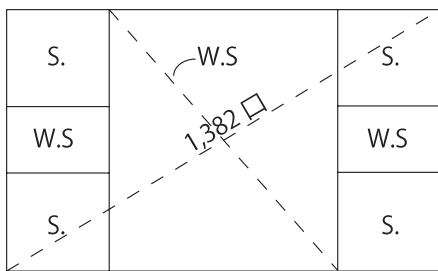
Greek vase あ h 1.382 矩形より出発せるもの多し。

(VI)  
<図>



(証明)  $1 - 0.618 = 0.382$

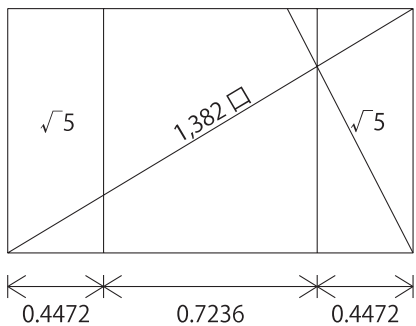
(VII)  
<図>



(証明)  $1.382 - 0.618 / 2 = 0.382$

----- (58)

(VIII)  
<図>



故に旋回方形矩形は二つの $\sqrt{5}$ の逆数矩形及 1.382 の逆数矩形を加えしものなる。之等の□の逆の矩形及其分称展開は Greek and Edgyptian Art に最も多く発見さる。

彼等はかく面積を他の面積にて理解し、之等が与へる面積的区画を規準としてすべての意匠計画をすすめた。

動的均斉に於いては面積は他の面積により置き換えられる。而して

其全体を統一する基本の形式はこれら面積的比例を内在的に制約する Logarithmic Spiral そのものである。而してこの対数螺

----- (59)

旋は此大宇宙のすべての積極的活動現象を支配する最も大なる力である。

以上は Hambidge の Dynamic Symmetry の紹介なるも、彼は動的均斉の歴史的研究の範囲を出でず、希臘式面積的解析である。

それは一つの面積的問題 (次の論□も成立する)

“平面計画が DS によりつくられる時、個々の立面も自ら DS 理論によりつくられる。かくして生ずる立体にも或種の DS が成立する。”

“建築の美は決して平面の美ではないが、個々の面の取扱の解析も建築美考察の重要な素をなすと考へるならば、古代芸術に應用された面的均斉理論の研究も決して価値なしとしない。”

----- (60)

建築的形体

形の基本：-

<図>



建築は三 dimension のもの、立体、空間、更に時間の要素が入れば四 dimension になる。建築家は□す形といくものに支配される、何故ならば吾人は光線の下で形を見ることが出来る様に作られてあるからである。

形の基本は上記の六種、何れもその輪郭は整然とした Simple で Primitive なるもの。すべて primitive + form が美しく見えるのはその輪郭が瞭然としてをるからである。逆にその輪郭がぼやり (もーろー) としてをるものは各人は美しいと思わない。

概して Engineer の作る機械的な工作物

----- (61)

に美しい形体をなすものが多いとは、Geometrical Form が単的に表出してあるからで、一般に米幾何学の形体なるものは吾人の眼を通す造形物として満足感を与える。即ち数学的により吾人の眼を満足させるとも言えよう。

現代の建築から過去の Louis XIV、XV、XVI 頃の建築をみたり、更に遡って Gothic の建築などをみると、夫い愛すべきものではあるが然し現代的な美しさはもっていない。恰も婦人の頭髪を飾る吻毛の如き観がある。

建築を表現する要素は表面と立体であり、□□立体と表面とは建築では平面 (plan) により決定される。故に建築的形態の創造者は平面 (plan) ということになる。

----- (62)

立体：-

建築とは光線の下に集められたる立体の専門的な正確なる技術である。形というものは明暗により現はれ且つ示される。それをその形体の基本は光線の下容易に姿を表はす、球、円球、円錐、立方体、角柱、角錐である。これらの形体に示される視覚上の像は極めて純粹に

して識別し易く且つあいまいに非ず。ここに形体上の美しさが結果される。このことに就いて古今東西□□してをると言えよう。

埃及、希臘、羅馬の建築を見るにそれは球、錐体、立方体、円柱より成る。

Ex. Pyramid Temple of Luxor Colosseum Vulla Hadriana Pantheon Pantheon

----- (63)

次いで中世 Gothic の建築は如何と□□に夫□その根本に於いて球、円錐、円柱、形等に立脚しをらず。唯 Nave には一種 Simple な形の表出がみられるが、それでも第二次的な米幾何学的形体たるに止まる。茲に現代の眼を以て中世寺院建築をみると、第一次的の建築形体美なるものはみられぬことになる。

中世建築にみる形体は此如く現代性なきものなるが、絵画的効果という点では□別の観方もある。即中世建築は非常に難しい問題を手品師の如く□鮮力に解決してをるといふ点に独自の興味がある。唯基本形から出発していないから恰も Drama の如き面白さたるに止まるか、更に荷重に対する人の straggle 又は感傷的なる ordnung の感覚が示されるに止まる。

----- (64)

表面：－

立体は表面により包まれる。一つの表面は立体の準線と構成線によつて分割される。立体性と表面性は稍其の特質を異にするが、順序としてまず表面を活かすことが第一に考えられなければならぬ。茲に壁面の取扱の重要性が大きく主張される。而して此壁面の取扱ひを規定するものとして建築的軸部の構造法、壁面処理の材料が大きな要素となる。

壁面の取扱の場合にあつても“すべてのものを simple form にをきかへる”と言う造形美学の現代的課題はどこまでも正しい。街路の壁面でも、個々の建築物の壁面でも然り。

----- (65)

如上の見地よりみる時、過去の著名の建築中次に記す者は建築たる資格があると言える。

Pyramid, Tower of Babylon, Parthenon

Colosseum, Pantheon, Pont du Garel

St. Sophia, Tower of Pisa,

Renaissance Dome (michelangelo or Brunelleschi) Invalid, etc.

□□Grand palais, Versailles, Louvre 等の Renaissance 末頃の建築は単にそれが□□に飾られてあるという点で珍重されるに止まり、本質的な建築的美的要素の第一のものを欠くものなり。

これらの建築に於いては、貧弱な型にはまつた平面のきまり文句の唐草模様、柱型 (pilaster) □□し棟飾等非本質的部分の装飾にのみ心をとらしてをるだけである。

----- (66)

平面：－

建築を観るバイ意を考える：－

観者の眼は街路や家屋によつて形作られた一つの環境の中を移動し、その□源の周囲に屹立する建築またはその部分に□き当つてそこに或種の感動を惹き起す。

この場合その立体が明確なるものであり、不適當の装飾もなく、立

体相互の中に秩序と明快なるリズムが表出されてをる時、それらは互いに関係のない空間の堆積物ではなく、更に立体と空間との関係が正しい比例をなすならば、吾人の眼に脳髓に均整 (valance) の感じを与え、それにより精神は秩序の満足を感得する。茲に建築芸術がある。

----- (67)

これは建築を其外方から観る場合なるも、建築内部にありとは如何。眼は空間に於て壁面、天井 (Flat 時に Vault) の表面をみる。そして壁も柱も天井も Dome も Vault もしなすべて明確なる理論の上に立ちて置か□べき所にをかれ、形作らるべき形体に形作られる。即ちすべて平面 (plan) に示された規則に従つて develop される。美しい形の多様性、幾何学法則による統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、

茲に建築芸術が作られる。

平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。平面がなければ建築の意図も表現もない□、更にリズムも立体も連絡もない□である

----- (68)

平面は建築のすべてを確定する決定的 Force であつて、正しいよい平面を作るためには大きな想像力と厳正の訓練とを必要とする。建築家としての特殊の才能と訓練とが要る。

茲に建築家として誇があると共に困難さもある。

古来の各建築とされるもの：－S. Sophia Parthenon、法隆寺

その平面、配置は全体の構成の裡に正しく働いており、幾何学的な法則とそれの交互の結合とがあらゆる部分に正しく展開してをる。

正しいよい平面とは：－

正しくよい平面の中には Rythum がなければならぬ。リズムとは単一又は複雑なる比例から、又

----- (69)

□明なる Contrast により生ずる Balance である。“リズム…方程式”－Corbusier

即 Symmetry、Repetition、Contrast、Tonetics□の活用により、この方程式は□□□□－。

過去の建築をみても、埃及、□□の□□□には Symmetry & Repelition が巧みに解かし、Acropolis では Contrast の妙が発揮され、更に S. Sophia では Tonetics が鮮力に強調されてをる。

----- (70)

## 参考文献

### 一次資料

- 「岸田日出刀資料」（金沢工業大学建築アーカイヴス研究所蔵） 【巻末資料Ⅱ】  
「内田祥三文庫」（東京都公文書館所蔵）  
「オリンピックベルリン大会視察時資料」（日本大学理工学部建築史・建築論研究室蔵）

### 雑誌・新聞記事

- 【巻末資料Ⅰ】「岸田日出刀 新聞・雑誌記事リスト」参照

### 著作

- 岸田日出刀（1928）『オットー・ワグナー 建築家としての生涯及び思想』岩波書店  
———（1929）『海外に於ける建築界の趨勢』日本建築学会  
———（1929）『過去の構成』構成社書房  
———（1929）『現代の構成』相模書房  
———（1930）『高層建築』三省堂  
———（1930）『建築の様式』誠文堂  
岸田日出刀、藤島亥治郎（1932）『日本建築史 支那建築史』雄山閣  
岸田日出刀（1936）『Japanese architecture』Japan Travel Bureau  
岸田日出刀、高山英華（1936）『外国に於ける住宅敷地割類例集』同潤会  
岸田日出刀、荒野ジョルジェット（1937）『今日の一日本住宅』洪洋社  
岸田日出刀（1937）『藁』相模書房  
———（1937）『第十一回オリムピック大会と競技場』丸善  
———（1938）『過去の構成』相模書房  
———（1938）『堊』相模書房

- 岸田日出刀、土浦亀城（1940）『熱河遺跡』相模書房
- 岸田日出刀（1941）『日本建築の特性』内閣印刷局
- （1942）『扉』相模書房
- （1943）『ナチス独逸の建築』相模書房
- （1944）『日本の城』加藤版画研究所
- （1945）『すまいの伝統』生活社
- （1945）『建築学者伊東忠太』乾元社
- （1946）『焦土に立ちて』乾元社
- （1946）『不燃家屋の多量生産方式』乾元社
- （1948）『建築五講』相模書房
- （1948）『窓』相模書房
- （1954）『京都御所』相模書房
- （1958）『縁』相模書房
- （1965）『日本の建築』日本交通公社

## 二次資料

### (1) 書籍：

- 満洲事情案内所編（1935）『満州国の習俗』
- 大日本体育芸術協会（1936）『第十一回オリンピック伯林大会芸術競技調査報告』
- 日比野勝治（1937）『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』
- 菱刈隆（1942）『忠霊塔物語』童話春秋社
- 村松 貞次郎（1965）『日本建築家山脈』鹿島研究所出版会
- ル・コルビュジェ、吉阪隆正訳（1967）『建築をめざして』鹿島出版会
- 日本建築学会（1972）『近代建築学発達史』丸善
- 藤井正一郎、山口廣編（1973）『日本建築宣言文集』彰国社

- 大原康男（1984）『忠魂碑の研究』暁書房
- 丹下健三（1985）『一本の鉛筆から』日本経済新聞社
- 近江栄（1986）『建築設計競技—コンペティションの系譜と展望』鹿島出版会
- 井上充夫（1991）『建築美論の歩み』鹿島出版会
- 小林盛太（1991）『建築美を科学する』彰国社
- 藤森照信（1993）『日本の近代建築〈下大正・昭和篇〉』岩波書店
- 中谷礼仁（1993）『国学・明治・建築家』一季出版
- 井上章一（1995）『戦時下日本の建築家—アート・キッチュ・ジャパネスク』朝日新聞社
- 香山壽夫（1996）『建築意匠講義』東京大学出版会
- 松畑強（1998）『建築とリアル』鹿島出版会
- 布野修司（1998）『布野修司建築論集〈1〉廃墟とバラック—建築のアジア』彰国社
- （1998）『布野修司建築論集〈2〉都市と劇場—都市計画という幻想』彰国社
- （1998）『布野修司建築論集〈3〉国家・様式・テクノロジー—建築の昭和』彰国社
- 高階秀爾ほか（1999）『ル・コルビュジエと日本』鹿島出版会
- 吉武泰水（1999）『建築計画学の創成』株式会社建築家会館
- 佐々木宏（2000）『巨匠への憧憬—ル・コルビュジエに魅せられた日本の建築家たち』相模書房
- 桐敷真次郎（2001）『近代建築史』共立出版
- 五十嵐太郎（2003）『戦争と建築』晶文社
- 本多昭一、松井昭光（2003）『近代日本建築運動史』ドメス出版
- 磯崎新（2003）『建築における「日本的なもの」』新潮社
- 吉田研介ほか（2004）『建築設計競技選集』プロトギャラクシー
- 平尾 和洋ほか（2006）『テキスト建築意匠』学芸出版社
- 岡本和彦、伊藤俊介、長澤泰（2007）『建築地理学 新しい建築計画の試み』東京大学出版会
- 平松剛（2008）『磯崎新の「都庁」—戦後日本最大のコンペ』文藝春秋坂
- 上康博、高岡裕之（2009）『幻の東京オリンピックとその時代—戦時期のスポーツ・都市・身体』
- 片木篤（2010）『オリンピック・シティ 東京 1940・1964』河出ブックス

- 五十嵐太郎（2011）『現代日本建築家列伝---社会といかに関わってきたか』河出書房新社
- 「吉武泰水山脈の人々」編集委員会編（2011）『吉武泰水山脈の人々 建築計画の研究・実践の歩み』鹿島出版会
- 森美術館（2011）『メタボリズムの未来都市展—戦後日本・今甦る復興の夢とビジョン』
- 豊川斎赫（2012）『群像としての丹下研究室—戦後日本建築・都市史のメインストリーム—』オーム社
- レムコールハースほか（2012）『プロジェクト・ジャパンメタボリズムは語る』平凡社
- オットー・ヴァーグナー、樋口清 佐久間博訳（2012）『近代建築』中央公論美術出版
- 山本佐恵（2012）『戦時下の万博と「日本」の表象』森話社
- 豊川斎赫（2013）『丹下健三と KENZO TANGE』オーム社
- 磯崎新、鈴木博之（2013）『二〇世紀の現代建築を検証する磯崎新鈴木博之』ADA エディタトールキョー
- 榎文彦、神谷宏治（2013）『丹下健三を語る:初期から 1970 年代までの軌跡』鹿島出版会
- 丹下健三生誕 100 周年プロジェクト実行委員会（2013）『丹下健三伝統と創造—瀬戸内から世界へ』美術出版社
- 豊川斎赫（2013）『丹下健三と KENZOTANGE』オーム社
- 磯崎新、横手義洋（2013）『散種されたモダニズム——「日本」という問題構制』岩波書店
- 橋本一夫（2014）『幻の東京オリンピック 1940 年大会 招致から返上まで』講談社学術文庫
- 石田潤一郎ほか（2014）『関西のモダニズム建築:1920 年代~60 年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』淡交社
- 磯崎新、日埜直彦（2014）『磯崎新 Interviews』LIXIL 出版

(2) 雑誌論文:

- 藤尾直史（2004）「東京大学の震災復興と岸田日出刀 学術標本一般・建築・物的基盤の生産に関する基礎研究（2）」『日本建築学会四国支部研究報告集』（日本建築学会四国支部）第4号



### (3) 編著書のなかの論文

藤岡洋保（1995）「「科学」から「方法」へ」、『建築ジャーナル』所収

藤森照信（2005）「佐野利器論」、『材料・生産の近代』東京大学出版会、所収

藤岡洋保（2005）「日本の建築家が鉄筋コンクリート造に見た可能性—形と技術のインターラクシ  
ョン」、鈴木博之、石山修武、伊藤毅編（2005）『材料・生産の近代：シリーズ都市・建築・歴史  
9』東京大学出版会、所収

西村将洋（2006）「岸田日出刀（1899—1966）—オリンピックの建築家代表」『言語都市 ベルリン』  
藤原書店、所収

梅宮弘光（2008）「岸田日出刀のカメラアイ—1930 年における「構成」の位相」、東京都庭園美術  
館（2008）『建築の記憶-写真と建築の近現代』所収

西村将洋（2011）「日本建築とモダニズム以後—岸田日出刀とブルーノ・タウト」『Japan To - day』  
研究—戦時期『文藝春秋』の海外発信』作品社、所収

### (4) 翻訳本

Franz Schulze, (1985) MIES VAN DER ROHE : A Critical Biography, The University of  
Chicago Press. (澤村明（2006）『評伝ミース・ファン・デル・ローエ』鹿島出版会)

## 関連業績

### 第1章 第2節

勝原基貴，大川三雄：金沢工業大学および東京都公文書館所蔵の図面資料にみる岸田日出刀の設計活動；日本建築学会技術報告集，第20巻，第45号，pp.779-784，2014年6月

### 第1章 第3節

勝原基貴，大川三雄：大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について；日本建築学会大会，北海道，2013.08

勝原基貴，大川三雄：大正末の海外渡航での岸田日出刀の行程について；日本大学理工学部学術講演会，東京，2012

### 第2章 第1節

勝原基貴，大川三雄：岸田日出刀著『オットー・ワグナー』の出版経緯とその意義について；日本大学理工学部学術講演会，東京，2013

## 第3章

勝原基貴，大川三雄：講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」(昭和12年)にみる岸田日出刀の建築造形理念 - 昭和初期の墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する言説に敷衍して；日本建築学会計画系論文集，第78巻，第694号，pp.2597-2604，2013年12月

### 第3章 第1節

勝原基貴：岸田日出刀の建築教育に現れたるル・コルビュジエ；ル・コルビュジエ×日本 - 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に，国立近現代建築資料館，2015.07

#### 第4章

勝原基貴，大川三雄：昭和戦前期における岸田日出刀の「建築計画」の講義方針とその理論的特質 - 講義原稿「建築計画総論」(昭和12年)と東京帝国大学工学部講義要目の分析を中心として；日本建築学会計画系論文集，第79巻，第702号，pp.1819-1825，2014年8月

勝原基貴：岸田日出刀の建築意匠学確立に向けた取り組み - 昭和戦前期における研究・教育活動の諸相と展開；京都大学田路研究室 第6回 分離派百年研究会，東京大学本郷キャンパス工学部1号館3階建築学専攻会議室，2014.11.1

#### 第5章 第1節

勝原基貴，大川三雄：日本趣味の建築と熱河古蹟に対する岸田日出刀の見解について；日本建築学会大会，名古屋，2012

#### 第5章 第2節

勝原基貴：岸田日出刀の『日本的趣味意匠の研究(草稿)』について；日本建築学会大会，関東，2015.08

#### 第5章 第3節

勝原基貴，赤根広樹，大川三雄：戦前における岸田日出刀設計のゴルフ場クラブハウスの意匠的特徴について；日本大学理工学部学術講演会，東京，2013

## 謝 辞

2011年の12月、白金台八芳園のほど近くにある某寺に足を運んだ。京都萬福寺を彷彿とさせる境内で、新来の宗教を厳禁していた江戸時代に唯一例外として渡来した黄檗宗の江戸進出の拠点となった寺院であるそうだ。この寺院本堂の裏側の墓地に、岸田日出刀は眠っている。手を合わせ、後輩数人とともに博士論文執筆のため研究を始めるご挨拶をした。気のせいかもしれないが、お参りをしてから研究が急に進展した。その翌週には、金沢工業大学が所蔵する岸田日出刀資料についての連絡を受け、2012年1月、年明け早々、朝一番の飛行機で金沢に飛んだ。野々市にある金沢工業大学建築アーカイヴス研究所を尋ねると、そこには寄贈時のまま、まったくの手つかずの状態の岸田関連資料の山があった。金沢工業大学には、常時、多くの建築資料が寄贈されており、まだ岸田関連の資料はリストがない状態であった。まずは1点ずつ確認しながら進めていく必要があり、とても数日ですべてに目を通せるような量ではなかったが、その後、金沢工業大学建築アーカイヴス研究所の佐藤康二氏から全容を把握するため許可を得て、何度も金沢を訪問することで、半年後に最初のインベントリーを完成することができた。

同時に、仙台、大阪、岡山、鳥取、茨城など、全国津々浦々において岸田関連の資料調査と建築作品の現状調査を進めた。時間的な制約からすべてを確認することはできなかったものの、没後散逸してしまった岸田関連の資料ならびに作品の現状をほぼ網羅的に把握することができた。とりわけ金沢と仙台での調査には、大学院生の安楽俊作君に手伝ってもらい、膨大な点数のインベントリーの入力作業に尽力してもらった。岡山と鳥取の調査では、大学院生の川崎圭介君に遠方まで同行してもらい、様々な作業の補佐をしてもらった。また、都内近郊では、江戸東京たてもの園の早川典子氏に江戸東京博物館所蔵の岸田関連資料の閲覧で様々なご教示を得たほか、立原道造記念会・立原道造の会事務局の詫摩祥江氏には、貴重な史料に関してのご教示を与えていただいた。このほか、多くの資料館、寺院、図書館、公文書館等で、便宜にご教示を得た。

こうして蓄積した岸田関連資料の情報は、検索可能なデータベースを作成することで、資料の全体像が明らかになっただけでなく、アーカイヴの活用による歴史研究という本研究がとった研究方法の基礎となった。データベースの作成によって、資料整理のより効率的なノウハウが徐々

に確立できた一方で、メタ情報等の記録が困難な事例もあった。まだ我が国では建築資料の整理手順が定まっていない事情もあり、ほとんど手探りの作業でもあった。建築資料の保存・保護に関する技術面の向上だけでなく、このようなアーカイヴ化する際のスキームを広く共有できるようにしていくことも今後の課題である。

そして、論文の執筆と並行して、京都大学田路研究室主催の「分離派百年研究会」（2014年11月1日）にお招きいただき、研究発表の機会を頂いた。会場は、岸田日出刀が長年拠点とした東京大学本郷キャンパスにある工学部1号館であり、大変恐れ多い空間であったが、分離派建築会の面々の2学年下にいた岸田と分離派との関わり、そして東大で展開した岸田の建築教育について発表するという、またとない貴重な機会を頂いた。京都大学大学院の田路貴浩先生、東京大学大学院の加藤耕一先生、福井工業大学の市川秀和先生、東京造形大学の長谷川章先生、明治大学の松崎照明先生をはじめ、参会された先生方からは、それぞれの専門領域の知見に基づく質疑応答を数多く頂き、論文の構成を練るうえで大きな刺激となった。加えて、東京と京都で半年ごとに行われる研究会の場では、同世代の研究者との交流もあった。田路研究室の法澤龍宝氏、木村智氏、同じく研究対象として岸田日出刀に取り組んでいる国際基督教大学アジア文化研究所の岸佑氏、法政大学の種田元晴氏をはじめ、同世代の仲間との交流は大きな刺激となった。

また、国立近現代資料館で開かれた展覧会「ル・コルビュジエ×日本 国立西洋美術館を建てた3人の弟子を中心に」（2015年7月21日から11月8日）では、日本建築学会計画系論文集にて取り上げた岸田日出刀の講義ノートが展示されることとなり、解説文を執筆する機会を得た。展覧会を企画された東京理科大学の山名善之先生をはじめ、海老名熱実氏、資料館の方々の熱意によって、素晴らしい展覧会が実現した。この際の展示に対する反響も大きく、論文を完成させる上でも、大きな励みとなった。

日本建築学会の大会やシンポジウムの場では、田中厚子先生、神戸大学大学院の梅宮弘光先生、名古屋大学大学院の西澤泰彦先生をはじめ、研究発表の質疑応答を通して、貴重なご教示を得た。知る手立てのなかった不明な箇所が結びついた時の喜びは大きなものでした。

なにより本論文の作成には、日本大学理工学部建築学科建築史・建築論研究室の皆様にも、大変

お世話になりました。卒業論文から面倒をみてくださった日本大学特任教授の大川三雄先生には、ご心配をおかけしながらも、研究の端緒より現在に至るまで、広い視野で近代建築史について学ぶ機会を与えていただき、多くのご指導を頂きました。田所辰之助先生には、ご多忙中にも関わらず多大なお時間を頂き、拙い私の研究に対し、常に熱意あるご指導を頂きました。本研究の遂行は、先生のご指導なくして成し得ることは不可能であり、深く感謝しております。重枝豊先生には、修士論文のご指導を頂き、建築を読み込むこと、論文をとりまとめることの難しさと奥深さを教えてくださいました。矢代眞己先生には、論文審査を快くお引き受け頂き、研究の進展に対し、常に貴重なご指示やご助言を賜りました。論文審査をお引き受け頂いた主査の田所辰之助先生、大川三雄先生、重枝豊先生、矢代眞己先生をはじめ、学科内審査会や公聴会の場において、ご審査いただきましたすべての先生方に、改めて厚く御礼申し上げます。故片桐正夫先生には、博士論文の完成を直接ご報告することが叶いませんでしたが、まだ研究をやり始めたころ教えてくださいました、小林文次先生が「岸田先生の建築史は建築史ではない」と話していたエピソードについて、なぜ岸田が異端な存在であったのか、その理由を解明することが出来たと思っています。

また、ゼミナールや合宿など、発表の機会を通して、多くの先生方、先輩方からご助言を頂きました。研究室OBの染谷正弘先生には、何度も研究発表の場にお運びくださり、貴重なご教示を得ました。カンボジアの遺跡修復で活躍されている三輪悟先生、大山亜紀子先生、浜島一成先生からは、何回となく励ましのお言葉を頂き、チェン・ラター先生、小島陽子先生は、博士論文を執筆されたもっとも身近な存在でもあり、博士後期課程に進学する上で大きな目標でありました。ここで、ゼミナールや研究活動の時間を共有した方々のすべての名をあげることはできませんが、特に、資料整理や翻刻作業にあたって多大な尽力してくれた安楽俊作君、川崎圭介君、片岡繁人君、江夏隆弘君、塩見宏明君、庄司兼悟君、谷澤大樹君、中山洋輔君の各氏に感謝します。本当にありがとうございました。

長時間にわたる研究発表のご指導を幾度となくお引き受け頂き、改めて多くの皆様方に支えていただける恵まれた環境にあった有難さを実感しております。本論文で、十分に伝えきれなかった点については、今後の研究課題とさせていただきます。こうして、このような博士論文を提出することが出来ました。貴重なお時間を割いてくださったすべての皆様に心よりお礼申し上げます。

No.	年度	月日	題名	出版
1	1923(大正12)	9	「美しき東京へ」	建築世界17(9)
2	1924(大正13)	8	「醜きもの、美しきもの」	中央建築2(9)
3	1924(大正13)	10	「建築雑感」	中央建築2(11)
4	1925(大正14)	1	「分離派制作展覧会を観る」	建築世界19(1)
5	1927(昭和2)	4	「ラグナー・エストベルグ ストックホルム市廳舎建築に就いて」	建築雑誌41(494)
6	1927(昭和2)	6	「感想」	木業会『東京帝国大学工学部建築学科卒業計画図集明治大正時代』
7	1927(昭和2)	7	「学校建築と表現」	建築世界21(7)
8	1927(昭和2)	8	「朝日新聞社の建築に就て」	建築世界21(8)
9	1927(昭和2)	8	「近代建築思潮の概観」	工政(93)
10	1927(昭和2)	9	1「学界余談ノ便所断片(上)」	朝日新聞(朝刊)
11	1927(昭和2)	9	2「学界余談ノ便所断片(下)」	朝日新聞(朝刊)
12	1927(昭和2)	11	「海外に於ける建築界の趨勢」(第三版[1929(S4)])	建築學會パンフレット1(1)
13	1927(昭和2)	12	2「日本建築史要」	朝日新聞(朝刊)
14	1928(昭和3)	4	27「読書ページノ3工学博士の労作『世界建築集成』第1巻支那建築の部成る」	朝日新聞(朝刊)
15	1928(昭和3)	5	3「学界余談ノ奈良見聞2題(1)」	朝日新聞(朝刊)
16	1928(昭和3)	5	4「学界余談ノ奈良見聞2題(2)」	朝日新聞(朝刊)
17	1928(昭和3)	6	「歐洲近代建築史論(一)」	建築雑誌42(510)
18	1928(昭和3)	7	「歐洲近代建築史論(二)」	建築雑誌42(511)
19	1928(昭和3)	8	「歐洲近代建築史論(三)」	建築雑誌42(512)
20	1928(昭和3)	9	「歐洲近代建築史論(四)」	建築雑誌42(513)
21	1928(昭和3)	11	12「現代世相展望(43)ノ文化住宅」	朝日新聞(朝刊)
22	1928(昭和3)	11	26「図書館の建築 地方小図書館への注意」	朝日新聞(朝刊)
23	1928(昭和3)		「現代の構成」	相模書房
24	1929(昭和4)	1	「復興建築を見て感あり」	建築世界23(1)
25	1929(昭和4)	2	「地方小図書館の建築に就いて」	農業世界24(2)
26	1929(昭和4)	5	「現代とコルビュジエ」	国際建築5(5)
27	1929(昭和4)	7	「現代と建築」	建築雑誌43(523)
28	1929(昭和4)	10	「随感」	建築紀元1(1)
29	1929(昭和4)	11	「ハウハウス」	建築紀元1(2)
30	1929(昭和4)	12	「古典主義とその建築」	『世界美術全集』(平凡社)
31	1929(昭和4)	12	「陳列室と光線」	新興芸術4(4)
32	1930(昭和5)		「室内裝飾と家具」	朝日新聞社編『住宅改良の諸問題』
33	1930(昭和5)	1	「商店」	建築世界24(1)
34	1930(昭和5)	4	「建築の意匠」(1929(S4)11月25日)	東京帝国大学美学談話会編『美学研究2』(第一書房)
35	1930(昭和5)	7	「垂米利加の建築とノイトラ氏(講演要旨)」	国際建築6(7)
36	1930(昭和5)	10	「建築の様式」	
37	1930(昭和5)	11	「高層建築」	三省堂
38	1931(昭和6)	1	「博物館建築の計画」	国際建築7(1)
39	1931(昭和6)	2	「建築製図の本格化」	建築雑誌45(542)
40	1931(昭和6)	2	「新しい建築様式の話—清算さるべき今日の建築界」	新明28(10)
41	1931(昭和6)	3	31「ラビリンス 西洋「八幡の薮知らず」(1)」	朝日新聞(朝刊)
42	1931(昭和6)	4	1「ラビリンス 西洋「八幡の薮知らず」(2)」	朝日新聞(朝刊)
43	1931(昭和6)	4	2「ラビリンス 西洋「八幡の薮知らず」(3)」	朝日新聞(朝刊)
44	1931(昭和6)	4	3「ラビリンス 西洋「八幡の薮知らず」(4)」	朝日新聞(朝刊)
45	1931(昭和6)	4	6「ラビリンス 西洋「八幡の薮知らず」(5)」	朝日新聞(朝刊)
46	1931(昭和6)	4	29「蔵田周忠君の近著『歐洲都市近代相』」	朝日新聞(朝刊)
47	1931(昭和6)	6	24「何処まで延びるか ニューヨークの摩天楼街ノ岸田日出刀氏談」	読売新聞(朝刊)
48	1931(昭和6)	9	「高層建築」	島中雄作編『婦人公論大学<最新科学篇>』(中央公論社)
49	1932(昭和7)	1	「新しい建築の観方」	文芸春秋10(1)
50	1932(昭和7)	3	「アメリカの高層建築(エムハイア・ステート・ビルディング)」	工業雑誌68(855)
51	1932(昭和7)	9	3「帝都に見る高層建築の見方」=2 三井銀行(連載)」	読売新聞(朝刊)
52	1932(昭和7)	12	「アメリカ」	建築雑誌46(564)
53	1933(昭和8)	2	「滿州所見」	建築雑誌47(567)
54	1933(昭和8)	5	「(学校形態批判)学校の建物」	郷土教育(31)
55	1933(昭和8)	11	「東京の新建築を語る」	改造
56	1933(昭和8)	12	「木造家屋の火災実験に就て:6.火災実験写真」	建築雑誌47(579)
57	1934(昭和9)	1	「予は日本の建築を如何に観るか」	国際建築10(1)
58	1934(昭和9)	1	「日本の古建築を見直す」	国際建築10(1)
59	1934(昭和9)	2	「第七回建築展覧會第二部懸賞國立公園に建つホテル設計應募案審査評」	國立公園6(2)
60	1934(昭和9)	3	「佛教と日本建築」	『仏教文化大講座 第二回』(大風閣書房)
61	1934(昭和9)	3	「応募案審査の感想」	國立公園6(3)
62	1934(昭和9)	5	「年賀状」	岩本和三部『隨筆集文体』(文体社)
63	1934(昭和9)	6	「僕とスポーツ」	『研究と世間』(帝国大学新聞社)
64	1934(昭和9)	6	「クラブハウスのデザイン(図版参照)」	国際建築10(6)
65	1934(昭和9)	8	「水を飲むこと」(別頁:和風飲泉小屋の岸田案)	温泉5(8)
66	1934(昭和9)	9	「政治家の容姿」	政界往来5(9)
67	1934(昭和9)	10	「日本建築史の諸問題」	宝雲3(11)
68	1935(昭和10)	3	「建築における特殊性:モダニズムと伝統の交流」	セルバン
69	1935(昭和10)	3	「風景雑感」	風景2(3)
70	1935(昭和10)	4	「火災実験写真(木造家屋の火災実験に就て)」	建築雑誌49(597)
71	1935(昭和10)	5	「建築写真」	中村道太郎『最新写真科学大系』(新光社)
72	1935(昭和10)	8	「日本建築の再検討」	岡田復三郎『日本文化の再検討』(現代文化社)
73	1935(昭和10)	8	「東京の近代的建築」	石原憲治『建築の東京』(都市美協会)
74	1935(昭和10)	8	「槍ヶ岳山小屋の設計に就いて」	國立公園7(8)
75	1935(昭和10)	8	「大雪山雲山溪ホテルの設計」	國立公園7(11)
76	1935(昭和10)	10	「教育塔設計案審査所感」	帝国教育(682)
77	1935(昭和10)	11	「關野貞先生の御臨終」	建築雑誌49(605)
78	1935(昭和10)	11	「意匠上より見たる法隆寺伽藍建築」	佐伯啓造編『続法隆寺研究』(船政郷舎)
79	1935(昭和10)	12	「今日の住居」	星野辰男『今日の住宅』
80	1936(昭和11)	2	「賀状随感」	住宅と庭園3(2)
81	1936(昭和11)	3	「日本の民家」	ホーム・ライフ2(3)
82	1936(昭和11)	3	「都市と住宅」	建築雑誌50(610)
83	1936(昭和11)	3	「住居の姿」	住宅21(3)
84	1936(昭和11)	4	「Modern Architecture in Japan」	ジャパン・タイムス社「Architectural Japan OLD NEW(建築の日本)」
85	1936(昭和11)	4	「硝子モザイクを観る」	セメント工業(402)
86	1936(昭和11)	4	「(通俗講演)1.東京の建築に就て」	工學會大會記録
87	1936(昭和11)	4	「日本風景と建築」	風景3(4)
88	1936(昭和11)	6	6「日本のとは? 纏れたバリ博覧会の“日本館” 当局と建築家対立ノ“手を引くまで”岸田博士語るノあれでは困る 商工省当局談」	朝日新聞(朝刊)
89	1936(昭和11)	8	8「オリムピック電話ノ1000万円とは心細い ドイツの費用は9600万円 視察研究はこれから 岸田博士と語る」	朝日新聞(朝刊)
90	1936(昭和11)	10	19「オリムピック東京大会 “神宮外苑は駄目だ” お土産話をトラック一杯 爆弾を抱いて帰朝した岸田博士」	朝日新聞(朝刊)
91	1936(昭和11)	12	「序」	加藤誠平『橋梁美学』(山海堂)
92	1936(昭和11)	12	「第十一回オリンピック伯林大会 芸術競技調査報告」	大日本体育芸術協会
93	1936(昭和11)	12	「(講演)伯林オリンピック建築施設に就て」	土木業協会会報(66)

No.	年度	月	日	題名	出版
94	1937(昭和12)	1		「柏林オリムピックに就て」(1936(S11)10月30日)	建築雑誌51(622)
95	1937(昭和12)	3		「オリンピック大会と競技場」	改造
96	1937(昭和12)	3		「ナチス獨逸の建築一色化とは」	建築雑誌51(624)
97	1937(昭和12)	3	9	「槍騎兵／オリムピック競技場問題」	朝日新聞(朝刊)
98	1937(昭和12)	3	15	「建築学会編『明治大正建築写真聚覧』」	朝日新聞(朝刊)
99	1937(昭和12)	3	17	「槍騎兵／帝國ホテル増築問題」	朝日新聞(朝刊)
100	1937(昭和12)	4		「(通俗講演)柏林オリンピック大会に就て」	衛生工業協会誌11(4)
101	1937(昭和12)	4		「東京近傍のゴルフ場」	技術日本(173)
102	1937(昭和12)	4		「オリンピック芸術競技に就て」	建築雑誌51(625)
103	1937(昭和12)	4	3	「槍騎兵／都市美問題／岸田日出刀」	朝日新聞(朝刊)
104	1937(昭和12)	4	12	「競技場への注文(7)改造案は不満 精鋭で当れ」	朝日新聞(朝刊)
105	1937(昭和12)	5		「第12回オリムピック東京大會會場論」	建築雑誌51(626)
106	1937(昭和12)	6		「ゴルフ講座(一) 道具の巻」	技術日本(174)
107	1937(昭和12)	7		「ゴルフ講座(二) ゴルフ・コースの巻」	技術日本(175)
108	1937(昭和12)	7	7	「新しき美(11)／建築に探る日本的なもの」	朝日新聞(朝刊)
109	1937(昭和12)	7	8	「新しき美(12)／建築に探る日本的なもの」	朝日新聞(朝刊)
110	1937(昭和12)	8		「随筆 ゴルフ法悦」	セメント工業27(418)
111	1937(昭和12)	8		「ゴルフ講座(三) プレーの巻」	技術日本(176)
112	1937(昭和12)	8		「夏の夢」	発明34(8)
113	1937(昭和12)	9		「随筆 風薫る」	セメント工業27(419)
114	1937(昭和12)	9		「今日の一日本住宅」	洪洋社
115	1937(昭和12)	9		「ゴルフ講座(四) ルールとエチケットの巻」	技術日本(177)
116	1937(昭和12)	10		「日本風景と建築」	風景協会『日本風景読本』(古今書院)
117	1937(昭和12)	10		「恩師塚本先生を憶ふ」	建築雑誌51(631)
118	1937(昭和12)	10		「門弟總代の弔辭」	建築雑誌51(631)
119	1937(昭和12)	10		「空爆・都市」	政界往来8(19)
120	1937(昭和12)	10		「(3)火災実験活動写真」	同潤会『鉄筋コンクリート造アパートの火災実験報告』
121	1937(昭和12)	11		「日支事案とオリンピック東京大会(主として主競技場問題に就いて)」	建築と社会20(11)
122	1937(昭和12)	11		「東京の都市建築風景」	風景4(11)
123	1937(昭和12)	12	20	「山崎寛太郎氏著『海外工芸の新傾向』」	朝日新聞(朝刊)
124	1938(昭和13)	1		「那須の風除け」	住宅23(1)
125	1938(昭和13)	1		「日立ゴルフ倶楽部ハウス」	東洋建築2(1)
126	1938(昭和13)	1	31	「田辺泰、巖谷不二雄両氏著『琉球建築』」	朝日新聞(朝刊)
127	1938(昭和13)	3		「時局と建築」	政界往来9(3)
128	1938(昭和13)	3		「武田五一博士を想ふ」	帝国工藝12(4)
129	1938(昭和13)	3	26	「こんなオリンピックが見たい(C)／喜多壮一郎 岸田日出刀 諸井三郎」	朝日新聞(朝刊)
130	1938(昭和13)	4		「鉄筋コンクリート造アパートの火災実験報告」	建築雑誌52(637)
131	1938(昭和13)	5		「借家住まひの夢」	文芸春秋16(7)
132	1938(昭和13)	5	26	「時局下『汁一菜』衣と住のムダを省き、虚礼を止そう! ご本家企画院大童『住宅の豊富化』」	読売新聞(朝刊)
133	1938(昭和13)	6		「武田五一博士を想ふ」	建築雑誌52(639)
134	1938(昭和13)	8		「オリンピックと風景ー柏林オリンピックの回顧」	風景5(8)
135	1938(昭和13)	10		「左右對稱」	學鐙42(10)
136	1938(昭和13)	11		「建築學會賞技藝賞に就いて」	建築雑誌52(644)
137	1938(昭和13)	11		「住宅寸感」	住宅23(11)
138	1938(昭和13)	11		「上高地」	國立公園10(5)
139	1938(昭和13)	12		「法隆寺建築私観」	『法隆寺の新研究』
140	1938(昭和13)	12	21	「満州国の建築(1)／ある外国雑誌の悪評に就て」	朝日新聞(朝刊)
141	1938(昭和13)	12	22	「満州国の建築(2)／新興国の息吹を表現せよ」	朝日新聞(朝刊)
142	1938(昭和13)	12	23	「満州国の建築(3)／過去を忘れた新しきものを」	朝日新聞(朝刊)
143	1939(昭和14)	2		「座談会・新日本工作文化建設の為に」	国際建築15(2)
144	1939(昭和14)	3		「座談会・新日本工作文化建設の為にII」	国際建築15(3)
145	1939(昭和14)	4		「53)月島火災実験に於ける燃焼熱量と火災状況」	建築學會論文集(13)
146	1939(昭和14)	5		「学生と景気」	科学主義工業
147	1939(昭和14)	5		「(自然と造営物の調和美)」	旅16(5)
148	1939(昭和14)	1	27	「タウト教授を悼む」	朝日新聞(朝刊)
149	1939(昭和14)	5	5	「長谷川伝次郎著『印度』」	朝日新聞(夕刊)
150	1939(昭和14)	5	26	「槍騎兵／宮城前広場案」	朝日新聞(朝刊)
151	1939(昭和14)	6		「私の家」	住宅24(6)
152	1939(昭和14)	6		「生産技術と建築」	政界往来10(6)
153	1939(昭和14)	7		「新しいサンマーハウス」	ホームライフ5(7)
154	1939(昭和14)	7		「大陸と住宅」	技術評論16(7)
155	1939(昭和14)	7		「宮城外苑整備計画に就いて」	建築雑誌53(652)
156	1939(昭和14)	8		「建築と風景ー宮城外苑整備計画に対する私見」	風景6(8)
157	1939(昭和14)	8	1	「靖国神社物語(4)／社殿・見透しの美なし 建物は削り電車は地下へ」	朝日新聞(朝刊)
158	1939(昭和14)	8	6	「忠霊塔私見(上)」	朝日新聞(朝刊)
159	1939(昭和14)	8	7	「忠霊塔私見(中)」	朝日新聞(朝刊)
160	1939(昭和14)	8	8	「忠霊塔私見(下)」	朝日新聞(朝刊)
161	1939(昭和14)	9	5	「ブルーノ・タウト著、篠田英雄訳『日本美の再発見』」	朝日新聞(夕刊)
162	1939(昭和14)	10	25	「趣味／第3回文展 工芸総評／使命は極めて大 工芸のための工芸に望すな」	朝日新聞(朝刊)
163	1939(昭和14)	11		「忠霊塔の造形意匠に就て」	財団法人大日本忠霊顕彰会『忠霊塔図案応募指針』
164	1940(昭和15)	4		「立原道造君のこと」	新建築16(4)
165	1940(昭和15)	6		「廣東視察談」	建築雑誌55(663)
166	1940(昭和15)	8		「熱河遺蹟」	相模書房
167	1940(昭和15)	8		「廣東と建築」	大陸
168	1940(昭和15)	11		「文展の工芸」	美術綜覧
169	1941(昭和16)	1		「北京飯店」	文芸春秋19(1)
170	1941(昭和16)	2		「大同」	公論4(2)
171	1941(昭和16)	2		「(ブック・レビュー)法隆寺」	創元2(2)
172	1941(昭和16)	3		「序」	ブルーノ・タウト『ニッポン』(明治書房)
173	1941(昭和16)	5		「崖記念體育會館の建築に就いて」	建築雑誌55(674)
174	1941(昭和16)	5	22	「芸術院への希望(2)／国家興隆と建築」	朝日新聞(朝刊)
175	1941(昭和16)	7		「たはこ」	政界往来12(7)
176	1941(昭和16)	8	9	「時の映画として『泰国の全貌』を観る／岸田日出刀」	読売新聞(夕刊)
177	1941(昭和16)	9		「廣東二景一沙面と西●(シーカン)」	科学ペン6(9)
178	1941(昭和16)	9		「造形閑話」	造形教育7(9)
179	1941(昭和16)	9	2	「日本映画の動向(上)／余りにも自由競争主義の傾向」	朝日新聞(朝刊)
180	1941(昭和16)	9	3	「日本映画の動向(下)／低調卑俗な作品一掃に期待」	朝日新聞(朝刊)
181	1941(昭和16)	10		「教書屋一伝統芸術研究一」	俳句研究8(10)
182	1941(昭和16)	10	6	「書評／故園野貞著『朝鮮の建築と芸術』」	朝日新聞
183	1941(昭和16)	11		「辰野金吾伝」	『近代日本の科学者 第一巻』(人文閣)
184	1942(昭和17)	1		「家」	科学文化2(11)
185	1942(昭和17)	2		「新年有感」	アカツキ
186	1942(昭和17)	3		「水前寺二景」	風景9(3)
187	1942(昭和17)	4		「民族文化と建築」	科学思潮(4)



No.	年度	月	日	題名	出版
188	1942(昭和17)	4		「広東小記」	風景9(4)
189	1942(昭和17)	4		「日本の住家」	民藝4(4)
190	1942(昭和17)	6		「窓」	科学日本(3)
191	1942(昭和17)	6		「畳」	科学文化2(6-7)
192	1942(昭和17)	6	21	「書評／田辺平学著 ドイツ(防空・科学・国民生活)」	朝日新聞(朝刊)
193	1942(昭和17)	8		「屋根」	文芸春秋20(8)
194	1942(昭和17)	9		「建築と線」	図解科学(7)
195	1942(昭和17)	9		「大自然と人工美を調和させた山小屋建築」	学生と科学28(9)
196	1942(昭和17)	10		「アフガン記」に寄す」	近藤正造「アフガン記」(相模書房)
197	1942(昭和17)	11		「随筆 模型飛行機」	飛行日本17(11)
198	1942(昭和17)	12		「生活と造形」	教育11(1)
199	1942(昭和17)	12		「街の禮節」	生活科学1(12)
200	1942(昭和17)	12		「建築における日本の性格」	大阪毎日新聞社編「文化講座」
201	1943(昭和18)	1		「燃えない都市」	発明40(1)
202	1943(昭和18)	4	30	「文化勲章に輝く 伊東忠太氏 烈々たる学意」	朝日新聞(朝刊)
203	1943(昭和18)	7		「内田總長のこども」	建築雑誌57(700)
204	1943(昭和18)	12		「序文」	山本祐弘「権太アイヌの住居」(相模書房)
205	1943(昭和18)	12	1	「簡素、高雅なる殿堂 泰に建つ“日本文化会館”」	朝日新聞(朝刊)
206	1944(昭和19)	2		「在盤谷日本文化会館建築の懸賞競技設計圖案を審査して」	建築世界38(2-3)
207	1944(昭和19)	3		「序文」	原澤東吾「日本建築経済史」(富山房)
208	1944(昭和19)	6		「日本の城」	岸田日出刀、橋本興家「日本の城」(加藤版画研究所)
209	1944(昭和19)	6		「序文」	星野昌一「防空と偽装」(乾元社)
210	1944(昭和19)	7		「映画ときどき」	映画評論1(7)
211	1944(昭和19)	7		「畳」	文芸春秋22(7)
212	1944(昭和19)	8		「豊穡な印象」	風土研究会編「滿州の印象」(吐風書房)
213	1944(昭和19)	8	18	「芸術を解せぬ アメリカの建築にみる野獣性」	朝日新聞(朝刊)
214	1945(昭和20)	6		「すまひの伝統」	生活社
215	1945(昭和20)	6		「建築学者伊藤忠太」	乾元社
216	1945(昭和20)	12		「燃えぬ家」	日の出
217	1946(昭和21)	5		「筆」	翰林工芸1(5)
218	1946(昭和21)	5		「不燃家屋の多量生産方式」	乾元社
219	1946(昭和21)	7		「東京再建」	朝日評論1(5)
220	1946(昭和21)	8		「建築時感」	建築文化(4.5)
221	1947(昭和22)	2		「いこひ」	きもの国
222	1947(昭和22)	3		「新しい學會」	建築雑誌62(730-731)
223	1947(昭和22)	3		「建築美」	玄想1(1)
224	1947(昭和22)	7		「京都御所」	建築文化(12)
225	1947(昭和22)	10		「鉛筆」	翰林工芸2(11)
226	1947(昭和22)	10		「組立住宅」	建築雑誌62(735)
227	1948(昭和23)	1		「建築藝術」	建築雑誌63(737)
228	1948(昭和23)	3		「新しい室内意匠」	美術と工芸3(3)
229	1948(昭和23)	5		「吊辭(故名譽員 松井清足君)」	建築雑誌63(740)
230	1948(昭和23)	7		「1等必選」	建築雑誌63(742)
231	1948(昭和23)	7		「ラジオ・キャビネット」	放送文化3(5)
232	1948(昭和23)	9		「(巻頭言)都市の美」	サイエンスダイジェスト(4)
233	1948(昭和23)	10		「仙臺市公會堂懸賞設計圖案の審査について」	建築雑誌63(744)
234	1948(昭和23)	11		「科学者の夢 “燃えない都市、”」	こども科学教室2(10)
235	1948(昭和23)	11		「橋のいろいろ」	にじ、科学の学校2(11)
236	1949(昭和24)	3		「日本學術會議について」	建築雑誌64(749)
237	1949(昭和24)	5		「法隆寺座談会…法隆寺の建築・壁画並に国宝の問題を語る」	建築文化(30)
238	1949(昭和24)	6		「建築このごろ」	女性線
239	1949(昭和24)	11		「廣島市平和記念公園及び記念館競技設計等選圖案 審査評」	建築雑誌64(756)
240	1949(昭和24)	11		「序文」	星野昌一「建築意匠」(資料社)
241	1950(昭和25)			「健康な家」	花岡忠男編「生物と健康」(健康教育協会)
242	1950(昭和25)	5		「写真と生活」	生産研究2(5)
243	1950(昭和25)	7	3	「金閣をいたむ／岸田日出刀」	読売新聞(朝刊)
244	1950(昭和25)	9		「北海道をみて」層雲峡」	技術と社会4(7)
245	1950(昭和25)	9		「序」	須藤真金「あめりか住宅史話」(新住宅社)
246	1950(昭和25)	10		「橋梁美」	生産研究2(10)
247	1951(昭和26)	5		「52. 総合病院の設計」	日本建築學會研究報告(11)
248	1951(昭和26)	9		「日本的なもの」	社会思想研究会編「現代教養文庫9 日本文化の見方」
249	1951(昭和26)	10		「建築」	社会思想研究会編「現代教養文庫2 藝術と人生」
250	1951(昭和26)	10		「77. 国立大阪病院結核棟の設計」	日本建築學會研究報告(13)
251	1952(昭和27)	3		「日本人の秘室」	丸5(3)
252	1952(昭和27)	4		「潔齋」	政界往来18(4)
253	1952(昭和27)	9		「東京のビルディング」	随筆(9)
254	1953(昭和28)	5		「放送」	放送文化8(5)
255	1953(昭和28)	9		「マンネリズムの橋梁」	道路28(9)
256	1954(昭和29)	9		「読書と環境」	社会思想研究会編「現代教養文庫37 読書と人生」
257	1954(昭和29)	11		「日本の古建築を見直す」	日本及日本人5(11)
258	1955(昭和30)	5		「花火と拝観料」	日本文化財(5)
259	1955(昭和30)	9		「ギョーティオンの「空間・時間・建築」」	学燈52(9)
260	1956(昭和31)	9		「日本の都市」	市政5(9)
261	1956(昭和31)	10		「建築と庭園について」	日本放送協会編「日本美の発見」(日本放送出版協会)
262	1957(昭和32)	2		「佐野利器先生のこども」	建築雑誌72(843)
263	1957(昭和32)	2		「廣島の碑」	文芸春秋35(2)
264	1957(昭和32)	2		「建築學便覽」	學鏡54(2)
265	1957(昭和32)	8		「序」	「田中昌穂」
266	1957(昭和32)	11		「佐野利器先生のことども」	佐野博士追想録編集委員会「佐野博士追想録」(技報堂)
267	1957(昭和32)	12		「色はむすかしい 星野昌一教授の「色彩調和と配色」に寄せて」	學鏡54(12)
268	1958(昭和33)	3		「(建築教育に対する70氏の意見)」	建築雑誌73(856)
269	1958(昭和33)	7		「倉吉市庁舎について(表彰作品)」	建築雑誌73(860)
270	1959(昭和34)			「歐洲中世の橋梁美」	「民家：今和次郎先生古稀記念文集」(相模書房)
271	1959(昭和34)	1		「どびーず」に寄せる」	牧野正巳「土坏子くどびーず」(相模書房)
272	1960(昭和35)	5		「木かコンクリートか」	文芸春秋28(5)
273	1963(昭和38)	1		「建築家の反省」	「伝統が築く近代美—清水建設—」(フジインターナショナルコンサルタント)
274	1963(昭和38)	1	15	「放送センターに反対 岸田施設特別委員長が声明」	読売新聞(朝刊)
275	1963(昭和38)	2		「高知県庁舎の設計について」	公共建築5(4)
276	1964(昭和39)	4		「高速道路(高速道路の問題)」	建築雑誌 建築年報(64)
277	1966(昭和41)	6		「田辺平学君のこと」	田辺平学先生13回忌記念事業会「田辺平学」(相模書房)

No.	種別	整理番号	史料名	和暦	西暦	月日	寸法	材質	備考
1	図面	D-0001	Y銀行独身者倶楽部	大正11年	1922年	7月18日	27.5 x 36.3 [cm]	美濃紙	一階、二階平面図(1/300)
2	図面	D-0002	校舎設計案	大正12年	1923年	8月29日	32 x 5 [cm]	美濃紙	一階平面図(1/600)
3	図面	D-0003	校舎設計案	大正12年	1923年	8月29日	32 x 5 [cm]	美濃紙	二階平面図(1/600)
4	図面	D-0004	校舎設計案	大正12年	1923年	8月29日	32 x 5 [cm]	美濃紙	三階平面図(1/600)
5	図面	D-0005	大山邸	昭和9年	1934年	6月	69.4 x 51.5 [cm]	美濃紙	室内各部、門扉(1/50)
6	図面	D-0006	大山邸	昭和9年	1934年	6月	69.4 x 51.5 [cm]	美濃紙	東南、東北、南面、北西(1/50)
7	図面	D-0007	大山邸	昭和9年	1934年	6月	69.4 x 51.5 [cm]	美濃紙	平面(1/50)、屋根平面(1/100)
8	図面	D-0008	佐々木別荘(池の平)	昭和9年	1934年	6月	68.7 x 50.2 [cm]	美濃紙	二階、屋根平面図、断面図
9	図面	D-0009	佐々木別荘(池の平)	昭和9年	1934年	6月	68.6 x 51 [cm]	美濃紙	一階、地階平面図
10	図面	D-0010	権斎養生小屋	昭和9年	1934年	12月	79.7 x 56.4 [cm]	美濃紙	
11	図面	D-0011	権斎養生小屋	昭和9年	1934年	12月	80.4 x 56 [cm]	青焼き	
12	図面	D-0012	権斎養生小屋	昭和9年	1934年	12月	79.8 x 56 [cm]	美濃紙	
13	図面	D-0013	権斎養生小屋	昭和9年	1934年	12月	80.4 x 56 [cm]	青焼き	
14	図面	D-0014	権斎養生小屋	不明			28 x 56 [cm]	方眼紙	
15	図面	D-0015	西嶽小屋	昭和9年	1934年	12月	78.9 x 56 [cm]	美濃紙	新築小屋位置関係図
16	図面	D-0016	西嶽小屋	昭和9年	1934年	12月	80.4 x 56 [cm]	青焼き	新築小屋位置関係図
17	図面	D-0017	西嶽小屋	昭和9年	1934年	12月	79.8 x 56 [cm]	美濃紙	
18	図面	D-0018	西嶽小屋	昭和9年	1934年	12月	80.4 x 56 [cm]	青焼き	
19	図面	D-0019	西嶽小屋	昭和10年	1935年	3月	79 x 54.2 [cm]	美濃紙	一般詳細図
20	図面	D-0020	西嶽小屋	昭和10年	1935年	3月	79 x 54.2 [cm]	美濃紙	
21	図面	D-0021	西嶽小屋	不明			43 x 58 [cm]	方眼紙	測量図
22	図面	D-0022	西嶽小屋	不明			79 x 58 [cm]	方眼紙	測量図(縦横断面図)
23	図面	D-0023	「航空」停台座	昭和9年	1934年	12月	80.2 x 56.3 [cm]	美濃紙	
24	図面	D-0024	小浜喫茶寮(瀬戸内海下津井町)	昭和10年	1935年	1月	78.8 x 54.5 [cm]	美濃紙	一階、二階平面図
25	図面	D-0025	小浜喫茶寮(瀬戸内海下津井町)	昭和10年	1935年	2月	79.8 x 54.5 [cm]	美濃紙	二階出窓詳細図(1/20)
26	図面	D-0026	小浜喫茶寮(瀬戸内海下津井町)	昭和10年	1935年	2月	79.8 x 54.5 [cm]	美濃紙	
27	図面	D-0027	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	2月	79.8 x 54.3 [cm]	美濃紙	一階平面図
28	図面	D-0028	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	2月	79.9 x 54.7 [cm]	美濃紙	二階平面図
29	図面	D-0029	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	3月	79.3 x 54.4 [cm]	美濃紙	東西南北立面図、断面図
30	図面	D-0030	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	3月	56.2 x 80.4 [cm]	美濃紙	一階、二階屋根伏図
31	図面	D-0031	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	3月	79 x 54.5 [cm]	美濃紙	二階平面図
32	図面	D-0032	すみや観海楼(瀬戸内海小豆島)	昭和10年	1935年	3月	79.2 x 54.3 [cm]	美濃紙	一階平面図
33	図面	D-0033	愛山漢ホテル	昭和10年	1935年	5月	80 x 54.3 [cm]	美濃紙	断面図(1/100)、配置図(1/500)
34	図面	D-0034	愛山漢ホテル	昭和10年	1935年	6月	79.3 x 54.2 [cm]	美濃紙	屋根平面図
35	図面	D-0035	愛山漢ホテル	昭和10年	1935年	6月	79 x 54.4 [cm]	美濃紙	一階平面図
36	図面	D-0036	愛山漢ホテル	昭和10年	1935年	6月	79 x 54.1 [cm]	美濃紙	二階、地下室平面図
37	図面	D-0037	愛山漢ホテル	昭和10年	1935年	6月	79 x 54.2 [cm]	美濃紙	二階、地下室平面図
38	図面	D-0038	学生会ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	5月	78 x 54 [cm]	美濃紙	
39	図面	D-0039	学生会ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	6月	79 x 35.5 [cm]	美濃紙	建物配置、土手断面
40	図面	D-0040	学生会ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	6月	78.8 x 53.9 [cm]	美濃紙	
41	図面	D-0041	学生会ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	6月	78.8 x 54.3 [cm]	美濃紙	
42	図面	D-0042	東山荘(屋根改造)	昭和10年	1935年	5月	54.5 x 39.5 [cm]	美濃紙	屋根平面(1/100)、詳細(1/20)
43	図面	D-0043	荒野邸	昭和10年	1935年	10月28日	80 x 56 [cm]	美濃紙	平面計画(第一次)
44	図面	D-0044	荒野邸	昭和11年	1936年	3月	79 x 54.5 [cm]	美濃紙	南・東立面、断面図
45	図面	D-0045	荒野邸	昭和11年	1936年	3月	79 x 54.5 [cm]	美濃紙	北・西立面、断面図
46	図面	D-0046	日立ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	10月31日	80 x 56.4 [cm]	美濃紙	新築平面図
47	図面	D-0047	日立ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	11月	80 x 56.4 [cm]	美濃紙	クラブハウス配置図
48	図面	D-0048	日立ゴルフ倶楽部	昭和10年	1935年	12月	76 x 55 [cm]	美濃紙	一階、下階平面図
49	図面	D-0049	手白瀬山荘(奥日光)	昭和11年	1936年	2月	80 x 54 [cm]	美濃紙	
50	図面	D-0050	巴里万博博覧会日本館	昭和11年	1936年	4月	78.3 x 109 [cm]	美濃紙	平面計画面
51	図面	D-0051	巴里万博博覧会日本館	不明	不明		78.3 x 109 [cm]	美濃紙	建築平面計画面
52	図面	D-0052	巴里万博博覧会日本館	昭和12年	1937年		51.3 x 57.3 [cm]	美濃紙	英字図面
53	図面	D-0053	水澤邸	昭和11年	1936年	4月	39.6 x 40.5 [cm]	美濃紙	一階、二階平面図(1/100)
54	図面	D-0054	荘家山荘	昭和12年	1937年	3月	78.8 x 56.6 [cm]	美濃紙	1/100
55	図面	D-0055	明石砲臺土見山荘	昭和12年	1937年	5月7日	67.4 x 48 [cm]	青焼き	1/100
56	図面	D-0056	塚本家の墓	昭和12年	1937年	10月	79.8 x 53.3 [cm]	美濃紙	1月20日
57	写真(図面)	D-0057	ニューヨーク万博 日本館	昭和13年	1938年	3月3日		写真	透視図、初期案(1/200)
58	写真(図面)	D-0058	ニューヨーク万博 日本館	昭和13年	1938年	3月11日		写真	透視図
59	写真(図面)	D-0059	ニューヨーク万博 日本館	昭和13年	1938年	3月11日		写真	配置図、平面図(1/100)
60	写真(図面)	D-0060	ニューヨーク万博 日本館	昭和13年	1938年	3月11日		写真	立面図(1/100)
61	図面	D-0061	中島邸	昭和13年	1938年	3月	55.4 x 39.8	美濃紙	一階、二階平面図
62	図面	D-0062	中島邸	昭和13年	1938年	3月	79.2 x 55	美濃紙	1/50
63	図面	D-0063	中島邸	昭和13年	1938年	3月	78.8 x 54.5	美濃紙	一階、二階平面図、屋根伏(1/100)
64	図面	D-0064	岸体育館プール	昭和14年	1939年	3月5日	49.5 x 39	美濃紙	50メートル競泳プール(1/200)
65	図面	D-0065	岸体育館プール	昭和14年	1939年	3月5日	48.8 x 38.7	青焼き	50メートル競泳プール(1/200)
66	図面	D-0066	美観山小屋	昭和14年	1939年	8月10日	79.6 x 55.2	青焼き	1/100
67	図面	D-0067	高山邸	昭和15年	1940年	5月25日	51.1 x 36	透写紙	一階、二階平面図(1/100)
68	図面	D-0068	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	10月30日	39.7 x 55	青焼き	1/100
69	図面	D-0069	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	9月21日	38.7 x 55	青焼き	便所、浴室、台所、三帖(1/50)
70	図面	D-0070	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	9月16日	39.7 x 55	青焼き	座敷(十帖)(1/50)
71	図面	D-0071	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	9月13日	39.7 x 55	青焼き	玄関、ホール、書斎(1/50)
72	図面	D-0072	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	10月11日	80 x 55	青焼き	1/50
73	図面	D-0073	菅野家宅(市川自邸)	昭和15年	1940年	10月19日	39.7 x 55	青焼き	唐間、茶の間、四帖半(1/50)
74	図面	D-0074	国分寺本堂(改造)	昭和16年	1941年	7月23日	78.8 x 49	美濃紙	正面、側面図(1/50)
75	図面	D-0075	星光学院 大阪	昭和24年	1949年	5月	24.5 x 16	写真	
76	図面	D-0076	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	東・南立面図
77	図面	D-0077	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	北・西立面図
78	図面	D-0078	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	塔部、4・5・6階
79	図面	D-0079	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	
80	図面	D-0080	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	講堂部、地階、一階
81	図面	D-0081	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	
82	図面	D-0082	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	講堂部二階、会館部一階
83	図面	D-0083	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	
84	図面	D-0084	生長の家 東郷神社 共同会館	昭和25年	1950年	11月10日	54.5 x 80	青焼き	講堂部三階、会館部二階
85	図面	D-0085	清風寺	昭和29年	1954年	8月25日	53.4 x 38.4	青焼き	
86	図面	D-0086	清風寺	昭和29年	1954年	8月25日	77.5 x 53.5	青焼き	一階平面図
87	図面	D-0087	清風寺	昭和29年	1954年	9月13日	77.5 x 53.5	青焼き	屋根、3階、地階平面図
88	図面	D-0088	清風寺	不明	不明		40.9 x 26.7	青焼き	第2第3宿泊室 家具配置図
89	図面	D-0089	清風寺	不明	不明		40.9 x 26.7	青焼き	宿泊室寝台
90	図面	D-0090	清風寺	不明	不明		40.9 x 26.7	青焼き	宿泊室服タンス二人用
91	図面	D-0091	清風寺	不明	不明		40.9 x 26.7	青焼き	宿泊室服タンス一人用
92	図面	D-0092	清風寺	不明	不明		40.9 x 26.7	青焼き	宿泊室茶卓
93	図面	D-0093	清風寺	昭和29年	1954年	8月25日	77.3 x 54	青焼き	東側面、正面、縦断面、横断面
94	図面	D-0094	清風寺	昭和29年	1954年	9月13日	77.3 x 54	青焼き	2階、1階平面
95	図面	D-0095	清風寺	昭和29年	1954年	8月25日	54.3 x 38.5	美濃紙	RCA Television Box
96	図面	D-0096	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	3月26日	77.5 x 54.8	青焼き	玄関ロビー 正面
97	図面	D-0097	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	3月26日	55.6 x 39.8	青焼き	大阪会館 表示板 A案
98	図面	D-0098	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	3月26日	55.6 x 39.8	青焼き	大阪会館 表示板 B案
99	図面	D-0099	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	3月26日	77.4 x 54.4	青焼き	玄関ロビー 正面
100	図面	D-0100	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	2月27日	55.6 x 40	青焼き	大阪会館 看板裏面図
101	図面	D-0101	津村別院 大阪会館	昭和39年	1964年	2月27日	55.6 x 40	青焼き	看板裏面図 B案
102	原稿・ノート類	N-0001	日記帳	大正15年	1926年		23 x 26.5 [cm]	ノート	大正14年12月から大正15年11月までの海外渡航時の日記帳
103	原稿・ノート類	N-0002	1939年緬甸萬國博覧会日本特設館/1939年金門萬國博覧会日本特設館	昭和14年	1939年		25.6 x 28.3 [cm] 13p	ファイル	設計 岸田博士 内田祥三/成田春人、市浦龍、高木直幹ら図面写真(27枚)/内田祥三を囲う学生写真など(2枚)
104	書類	N-0003	計画 Print	不明	不明		24 x 28.3 [cm]	ファイル	授業用プリント/日本大学工学部配布用プリント(ローマの家具など) 4枚/東京帝国大学工学部建築学教室講義用 30枚/その他 2枚
105	書類	N-0004	余/好ム東京/建築(学生解答)(昭和十三年)	昭和13年	1938年		23.5 x 31.3 [cm]	ファイル	「吾方好キテ東京ノ建築 二年生試問」(昭和13年12月) 4枚/「一年生試問」(昭和14年3月) 58枚/「工学部教授会」
106	書類	N-0005	文化財保護専門委員会第二分科会	昭和30年	1955年	3月	22.8 x 30.8 [cm]	ファイル	「重要文化財指定説明 昭和三十年三月」 75頁/状況報告 8頁/浜川ツリ一倶楽部グリーン委員会/その他 133頁
107	原稿・ノート類	N-0006	日記帳	大正15年	1926年		15 x 20 [cm]	ノート	大正14年12月から大正15年11月までの海外渡航時の日記帳
108	原稿・ノート類	N-0007	日記帳	大正15年	1926年				

No.	種別	整理番号	史料名	和暦	西暦	月日	寸法	材質	備考	
110	原稿・ノート類	N-0009	日記帳	大正15年	1926年		21 x 27.3 [cm]	ノート	大正14年12月から大正15年11月までの海外渡航時の日記帳	
111	原稿・ノート類	N-0010	日本建築史(第一巻)	不明	不明		19 x 26.5 [cm]	ノート		
112	原稿・ノート類	N-0011	橋梁の構成	昭和20年	1945年	3月	17.6 x 25.8 [cm]	240頁	和紙	著作原稿/カール・シェヒテルレ、フリッツ・レオンハルト共著 橋梁の構成 三宅晋、加藤寛二訳(昭和二十年三月)
113	原稿・ノート類	N-0012	日本趣味の建築(稿・複)	不明	不明		22.8 x 31.7 [cm]			
114	原稿・ノート類	N-0013	大同の石仏	不明	不明		22.2 x 30.4 [cm]	46頁		
115	原稿・ノート類	N-0014	我が国将来の建築様式(原稿)	昭和13年	1938年	1月	22.7 x 31.6 [cm]	181頁		乾元社から出版時の原稿/表紙写真 1枚
116	原稿・ノート類	N-0015	「葦」(原稿)	不明	不明		22.8 x 31.4 [cm]	209頁		わが国将来の建築様式/飛ばしたい三角/「夢の都市」/「岡山週日」/「所感」/「乗りもの」/「建たぬ住宅」/「ライカ」/「新しい学会」/「家」
117	書類	N-0016	市川市民館建築工事費予算ほか	昭和23年	1948年		22.5 x 31 [cm]		ファイル	市川市民館建築工事費予算/建設倶楽部の案内/日本芸術院会員名簿/岸田日出刀履歴書(東京帝国大学)/平凡社社会辞典執筆要綱(十一月)/図書出版契約書「日本の建築」(日本交通公社出版部) 昭和23年1月12日/ミルバッチ(Milbach)宛の手紙/制定書 東京帝国大学第一工学部教職員資格審査委員会 昭和21年7月15日/拝観願 桂離宮、京都御所、修学院雑宮 昭和25年/日本芸術院賞・授賞の手紙 昭和24年4月7日/文部事務官 杉村隆吉の名刺
118	書類	N-0017	木業会外地引揚者慰労会開催の手紙ほか	昭和22年	1947年		22.6 x 36 [cm]		ファイル	木業会外地引揚者慰労会開催の手紙 昭和22年1月21日 1枚/受領証(寄附) 1枚/建築学科一括申告科目表 昭和22年4月10日 1枚/建築学科修学規定 昭和22年4月 1枚/2年時間割(昭和22年4月~昭和23年3月) 昭和22年4月9日 1枚/3年時間割(昭和22年4月~昭和23年3月) 1枚/1年時間割(昭和22年4月~昭和23年3月) 1枚/メモ書き 1枚/工学部第一号館給水に関する件(岸田の照会に対する東京帝国大学宮崎課長植芳男による解答 昭和22年5月27日) 1枚/各教授学生の卒業論文一覧 2枚/昭和二三年三月卒業生論文題目 昭和22年6月 1枚/研究報告「不燃家屋の多量生産方式(日・英文)」1947年6月20日/マ司令部指令の半年研究報告書の作成要領 昭和22年6月17日 1枚/期末施行試験日通知(第一工学部事務室) 昭和22年6月20日 1枚/第一学期末試験時間割 昭和22年7月1日/岸田、堀口、森田慶一、吉田鉄郎の著者紹介文 2枚/「昭和二三年年度科学研究費による研究(中間)報告書」(「鉄骨乾式構法による不燃家屋の多量生産方式」) 4枚/研究者「予算一覧 昭和22年6月25日 13頁/予算現在額通知 昭和23年10月31日 1枚/予算委員会報告 昭和22年10月22日 4枚/建築工学科新設申請理由書 昭和22年10月10日 1枚/建築学選書ニュース(1)幹事 浜田穂 昭和23年1月23日 2枚/大陸建築巡り 昭和16年9月18日放送 13枚/工学士 伊藤滋学位請求論文審査要旨(「省電線電車駅に於ける旅客施設の設計」) 昭和23年5月17日 5頁
119	書類	N-0018	シベリア鉄道座席表ほか	昭和10年	1935年		22.6 x 31.7 [cm]		ファイル	表紙に「address」の記載/シベリア鉄道座席表 1枚/「工部省に關係せる外国建築家」(田中義次から岸田への呈呈 雑誌『建築世界』抜刷 36頁/「滿洲の建築に就いて」(國務院宮繕部局)25頁/「文化史的に觀た音響」(佐藤武夫『日本音響学会誌』抜刷) 昭和15年3月30日/岸田『大同の都市計画案に就て』(内田祥三から岸田『建築雑誌』抜刷) 昭和14年11~12月号) 昭和15年4月30日 29頁/「建築製図の本格化」(岸田日出刀『建築雑誌』抜刷) 昭和16年2月号 7頁/「博物館建築の計画」(岸田日出刀『國際建築』抜刷) 昭和16年1月号) 17頁/「第12回オリンピック東京大会会場論」(岸田日出刀『建築雑誌』抜刷) 昭和12年5月号) 9頁/「田園都市と英國の計画の問題」(亀井幸次郎から岸田『建築と社会』抜刷) 昭和15年6月号) 5頁/「都市住宅の現状と産業住宅計画への試み」(亀井幸次郎から岸田『建築と社会』抜刷) 昭和15年6月号) 19頁/「興亜建築の第一断は建築士法制定から」(堀越三郎より岸田『日本建築士』抜刷) 昭和15年2月号) 6頁/「農村住宅の間取表現法に就て(案)(I号)」(平山嵩より岸田) 昭和16年6月6日 8頁/「ナチス独逸の建築一色化とは」(岸田日出刀『建築雑誌』抜刷) 昭和12年3月号) 10頁/「農村住宅の間取り表現法に就て(案)(II号)」(平山嵩より岸田) 昭和16年9月19日 11頁/「州計画への基本資料としての人口調査」(都市研究会 亀井幸次郎『都市公論』抜刷) 昭和16年6月号) 34頁/「住宅問題委員会政策小委員会調査案」(住宅問題委員会議案) 13頁
119	書類	N-0019	申請書	昭和20年	1945年	6月30日	18.2 x 25.8 [cm]		罫線紙	開野博士記念事業会
120	書類	N-0020	第十二回オリンピック東京大会準備書類	昭和12年	1937年		23 x 31.6		ファイル	「第十二回オリンピック東京大会競技場敷地調査報告書(案)」12頁/各候補地予算、敷地 陳情書/「技術的見地から射撃場跡に反対」(東京日日新聞)ベルリン大会報告会出席の願/「小委員会案を容認廿三日に原案決定」(東京朝日) 2月27日/日本陸上競技連盟からの手紙等
121	書類	N-0021	研究・論文・資料抜刷集(計画理論)	昭和16年	1941年		24 x 31.8 [cm]		ファイル	「鋸歯工場の南窓及び北窓の実験的比較研究」(『建築学会論文集』抜刷) 昭和16年4月 10頁/「一種の計算図表に依る陽当りの図表計算」(小泉鑑一『造園雑誌』抜刷) 昭和13年12月 15頁/「木造家屋の火災を対象とする加熱試験の方法に就て」(内田祥文『建築学会論文集』抜刷) 昭和15年11月 9頁/「間隙を有する障害物による風速度減少実験」(辻井静二より岸田 小倉登、辻井静二『仙台高等工業学校紀要』抜刷) 昭和16年3月 26頁/「川崎市二於ケル木造防火改修家屋火災実験/放射熱観測結果報告」(渡邊要) 昭和15年11月14日 10頁/「立体角放射写真機とその応用(第3報の2)」(渡邊要『名古屋高等工業学校学術報告』抜刷) 昭和15年11月20日 26頁/「矩形及圓形中庭の透光率に関する実験的研究(續報)」(渡邊要『建築学会論文集』抜刷) 昭和15年11月 8頁/「立体角放射写真機の透光率に関する実験的研究(第3報の1)」(渡邊要『建築学会論文集』抜刷) 昭和15年11月20日 4頁/「家屋外周の防火に関する研究」(内田祥文『建築雑誌』抜刷) 昭和15年8月 10頁/「天空輝度分布に関する実験的研究」(渡邊要『建築学会論文集』抜刷) 昭和15年8月 10頁/「焼夷弾に対する都市防衛対策の一研究」(内田祥文『建築雑誌』抜刷) 昭和13年11月 6頁/「東京に於ける防火改修家屋火災実験放射熱観測結果報告」(渡邊要) 昭和15年8月21日 9頁/「名古屋火災実験に於ける放射熱観測結果に就いて」(渡邊要『建築雑誌』抜刷) 昭和15年8月号) 昭和15年11月27日 6頁/「北海道/防火改修家屋火災実験報告(札幌・小樽・室蘭)」(東京帝国大学工学部建築学科教室) 昭和15年10月 14頁、図版3枚/「前室が火災となりたるときの防護室内空気性状に就て」(平山嵩『建築学会論文集』抜刷) 昭和15年8月

No.	種別	整理番号	史料名	和暦	西暦	月日	寸法	材質	備考
122	図面	D-0102	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	5月24日	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	立面(南・東・北・西)面図(1/100)
123	図面	D-0103	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	玄関・階段詳細(階段詳細・玄関・階段平面・玄関出入口詳細)(1/20)
124	図面	D-0104	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	浴室詳細(1/20)
125	図面	D-0105	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	食堂・宿浴室 展開図(1/20)
126	図面	D-0106	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	展開図(乾燥室・スキー置場・監理人及炊事人室・調理室・男子・女子便所・物置及便所)(1/50)
127	図面	D-0107	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	階層・式階天井伏(1/100)
128	図面	D-0108	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	家具詳細(1/100)
129	図面	D-0109	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	E~E'側、F~F'側、G~G'側、H~H'側、C~C'側、D~D'側、A~A'側、B~B'側(1/100)
130	図面	D-0110	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	小屋伏図・二階床伏図(1/100)
131	図面	D-0111	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	5月24日	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	立面(南・東・北・西)面図(1/100)
132	図面	D-0112	日光湯元(温泉)青年宿舎	昭和15年	1940年	6月	76.7 x 54.8 [cm]	青焼き	柱上表
133	図面	D-0113	日清生命新館新築設計図	昭和14年	1939年	7月	78.8 x 54 [cm]	青焼き	柱備図
134	図面	D-0114	佐藤栄蔵原豊成蔵殿復原図	昭和11年	1936年	ごろ	95.8 x 79.3 [cm]	青焼き	平面図・立面図・断面図(1/100)
135	図面	D-0115	広島県 明正寺本堂	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	平面図(1/100)
136	図面	D-0116	北海道 豊平館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	(一階)平面図(1/200)
137	図面	D-0117	北海道 豊平館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	(二階)平面図(1/200)
138	図面	D-0118	茨城県 旧道館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	正庁 至善堂 平面図(1/200)
139	図面	D-0119	茨城県 旧道館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	正門 平面図(1/40)
140	図面	D-0120	神奈川県 住宅(一条兼順旧山荘)	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	平面図(1/100)
141	図面	D-0121	山梨県 住宅(山梨県西八代郡大町農家)	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	平面図(1/100)
142	図面	D-0122	長野県 小宮神社 奥社本殿	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	平面図(1/100)
143	図面	D-0123	京都府 龍谷大学本館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	(一階)平面図(1/200)
144	図面	D-0124	京都府 龍谷大学本館	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	(二階)平面図(1/200)
145	図面	D-0125	大阪府 住吉大社撰社大海神本殿	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	平面図(1/60)
146	図面	D-0126	住宅(緒方自家および塾)	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	一階平面図(1/100)
147	図面	D-0127	住宅(緒方自家および塾)	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	二階平面図(1/100)
148	図面	D-0128	大阪府 住宅(大阪府泉南郡熊取町農家)	不明	不明		26 x 36.2 [cm]	青焼き	1/200
149	写真	P-0001	清風寺 旧本堂内仏台	不明	不明		10.8 x 7.3 [cm]	写真	1枚
150	図面	D-0129	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/断面説明図及平面説明図(其の一)
151	図面	D-0130	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/断面説明図(其の二)
152	図面	D-0131	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/地下三階平面図(1/100)
153	図面	D-0132	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/一階平面図(1/100)
154	図面	D-0133	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/四階平面図(1/100)
155	図面	D-0134	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/七階平面図(1/100)
156	図面	D-0135	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/九階平面図(1/100)
157	図面	D-0136	BBCロンドン放送局	不明	不明		77.6 x 33 [cm]	青焼き	日本放送協会の封筒/断面図(1/100)
158	図面	D-0137	NO. 13 婦人科 待合室	不明	不明		48.6 x 80 [cm]	青焼き	ランプ詳細図(現寸)
159	図面	D-0138	NO. 6 各診療室ベンダント	不明	不明		48.6 x 80 [cm]	青焼き	ランプ詳細図(現寸)
160	図面	D-0139	NO. 1 ポーチシーリング	不明	不明		48.6 x 80 [cm]	青焼き	ランプ詳細図(現寸)
161	図面	D-0140	NO. 21 院長室 副院長室 ハイペンダント	不明	不明		48.6 x 80 [cm]	青焼き	ランプ詳細図(現寸)
162	図面	D-0141	NO. 11 一階入口上部	不明	不明		48.6 x 80 [cm]	青焼き	ランプ詳細図(現寸)
163	図面	D-0142	帝室博物館	不明	不明		79 x 53 [cm]	美濃紙	一階平面図
164	図面	D-0143	帝室博物館	不明	不明		79 x 53 [cm]	美濃紙	中二階平面図
165	図面	D-0144	帝室博物館	不明	不明		79 x 53 [cm]	美濃紙	二階平面図
166	図面	D-0145	帝室博物館	不明	不明		79 x 53 [cm]	美濃紙	地階平面図
167	図面	D-0146	京大病院	不明	不明		97.8 x 71.3 [cm]	青焼き	配置図
168	図面	D-0147	京大病院	不明	不明		78.5 x 55 [cm]	青焼き	医院内科研究室新営工事設計図 正面図 巻階平面図(1/100)
169	図面	D-0148	京大病院	不明	不明		78.5 x 55 [cm]	青焼き	医院内科研究室新営工事設計図 三階平面、二階平面、地下室平面図(1/100)
170	図面	D-0149	垂箔筋交詳細図	不明	不明		77.3 x 55.3 [cm]	青焼き	『不燃家屋の多重生産方式』掲載の詳細図
171	書類	N-0021	岡村功から岸田への手紙	昭和39年	1964年		21 x 29.7 [cm]	青焼き	西本願寺津村別院工事関連の書簡
172	写真	P-0002	垂箔	昭和39年	1964年		29.4 x 20.5 [cm](台紙)	写真	西本願寺津村別院
173	書類	N-0022	堀達三から岸田日出刀、弟辞への御礼	昭和9年	1934年	12月	53 x 19.5 [cm]	和紙	2枚
174	書類	N-0023	日野義郎から岸田日出刀への手紙	不明	不明		26 x 19.5 [cm]	和紙	
175	図面	D-0150	NO.900 GENERAL ARRANGEMENT SHEET	不明	不明		127 x 79 [cm]	青焼き	船舶図面
176	書類	D-0024	広島平和記念公園計画案	不明	不明		18.3 x 25.6 [cm]	青焼き	7頁
177	図面	D-0151	①広島平和公園平面図	不明	不明		56 x 76 [cm]	青焼き	
178	図面	D-0152	②児童センター平面図	不明	不明		75.8 x 38.3 [cm]	青焼き	
179	図面	D-0153	③児童センター鳥瞰図	不明	不明		74 x 52.8 [cm]	青焼き	
180	図面	D-0154	④	不明	不明		74 x 54 [cm]	青焼き	
181	図面	D-0155	⑤児童センター美術科	不明	不明		53.8 x 80.4 [cm]	青焼き	
182	図面	D-0156	⑥造園施工順位五ヶ年計画図	不明	不明		35.3 x 37.6 [cm]	青焼き	
183	図面	D-0157	⑦霞ヶ関カンテリクラブ	不明	不明		102 x 67 [cm]	青焼き	
184	図面	D-0158	信濃宗賢村平出第三身住居址推定復原図	昭和26年	1951年	1月	20.8 x 26.1 [cm]	ノート	
185	原稿・ノート類	N-0025	鎌倉時代・産原時代	不明	不明		21 x 26.5 [cm]	ノート	
186	原稿・ノート類	N-0026	COLOR(II)	不明	不明		20.9 x 26.3 [cm]	ノート	
187	原稿・ノート類	N-0027	建築計画(昭和十五年度)	昭和15年	1940年		20.9 x 30.9 [cm]	ファイル	
188	原稿・ノート類	N-0028	建築計画総論	不明	不明		20.2 x 27.3 [cm]	ファイル	模型写真 2枚/図面 28枚
189	書類	N-0029	国立国会図書館 第一次基本設計図及説明	昭和30年	1955年	12月15日	20.8 x 27.5 [cm]	ファイル	
190	書類	N-0030	国立国会図書館 基本設計図 設計概要説明書 工事費概算書	昭和31年	1956年	3月20日	21.7 x 27.7 [cm](台紙)	写真	写真 3枚/図面26枚
191	書類	N-0031	NEW YORK WORLD'S FAIR 1939 INCORPORATED BUILDING CODE SEPTEMBER 1 - 1936	昭和11年	1936年	9月1日	22.7 x 31.3 [cm]	ファイル	84頁
192	写真	P-0003	万博日本館の写真	不明	不明		22.8 x 31.6 [cm]	写真	
193	書類	N-0032	Serap-Book Daily News	不明	不明		22.7 x 31.3 [cm]	ファイル	新聞・雑誌記事切り抜き
194	原稿・ノート類	N-0033	中等学校教科書「建築」草稿ほか	昭和21年	1946年	9月	23 x 30 [cm]	ファイル	中等学校教科書「建築」草稿 昭和21年9月 43頁/進駐軍のアメリカ建築家各位をお招きする会合のあいさつ文 3頁
195	書類	N-0034	計画資料	不明	不明		23.5 x 31.5 [cm]	ファイル	「蛍光灯」/「京都御所(二)」/「京都御所(一)」/「鶴舞コースに就いて」/「日本の古建築を見直す」/「閑談」 1954年7月29日/「東京の建築」/「東京」/「ビル」/「建築と社会」/「ビルは建てども」/「暖房のいろいろ」/「法隆寺の塔」/「空の旅」/「打つてかへし」/「乗りのもの色」/「京都御所」/「昭和25年7月27日」/「工芸」/「京都御所」/「昭和24年2月25日」/「放送」/「病院」/「社会思想研究会出版部の封筒」/「ロータリー」/「建築の取締まり」/「畳」/「床・書院」/「屋根」/「燃えぬ家」/「空の旅」/「日本の古建築を見直す」/「住まいの美」/「神宮の建築」
196	原稿・ノート類	N-0035	欧州近代建築史(原稿)	不明	不明		23.8 x 31.4 [cm]	ファイル	72頁
197	原稿・ノート類	N-0036	文集	昭和32年	1957年		22.6 x 30.2 [cm]	ファイル	「木業会名簿(昭和32年用)序文」/「僕の天狗」/「堀達三さんの絵」/「ザッツ・ゴルフ 加藤剛一」/「建築便覧」/「建築競技設計規程に関する委員会」/「佐野利器先生のごとども」/「桂離宮のごと」/「神社建築論要旨」/「私の娘女出版」/「キー・ポイント」の「空間・時間・建築」/「ゴルフ景昌」/「清風寺本堂の建築について」/「神社建築論」/「僕の力から」/「慰霊館」/「壁面」/「相川吉雄」/「湯河原カントリー倶楽部クラブハウス妻門」/「夢殿」(北川桃雄)/「倉吉市庁舎の建築」/「御芳名」/「花火と拝観料」/「京都御所」/「佐野利器先生のごとども」/「ピロチン」/「建築と就職」/「建築教育よもやま」/「日本の城」/「打つてかへし」/「打つてかへし後日譚」/「潔斎」/「古城の復興」/「鉄塔」/「日本の城」
198	書類	N-0037	学術研究会議 資料	不明	不明		22.7 x 30.8 [cm]	ファイル	
199	書類	昭和二十一年度	建築学会大会委員長時の	昭和21年	1946年		22.7 x 31.3 [cm]	ファイル	「海外に於ける建築懸賞競技制度」
200	書類	N-0039	日本学術会議	不明	不明		22.8 x 31.6 [cm]	ファイル	
201	書類	N-0040	スケッチブック	不明	不明		22.8 x 31.6 [cm]	スケッチブック	
202	書類	N-0041	空の形に関する音響学的研究 堀越義房	不明	不明		21.4 x 30.4 [cm]	ファイル	厚生省研究所講師 工学士 堀越義房
203	原稿・ノート類	N-0042	家の方位(家相) 原稿ほか	不明	不明		22.5 x 30 [cm]	ファイル	
204	原稿・ノート類	N-0043	日本の住宅 原稿ほか	不明	不明		23.3 x 30.4 [cm]	ファイル	
205	原稿・ノート類	N-0044	各種原稿	不明	不明		22.6 x 31.5 [cm]	ファイル	
206	書類	N-0045	ヴィジュアル・イリュージョン	不明	不明		23.8 x 30.3 [cm]	ファイル	
207	書類	N-0046	事務所建築・銀行建築	昭和13年	1938年		22.7 x 31.4 [cm]	ファイル	

No.	種別	整理番号	史料名	和暦	西暦	月日	寸法	材質	備考
208	書類	N-0047	ホテル建築・商業建築	不明	不明		23.3 x 31.6 [cm]	ファイル	
209	原稿・ノート類	N-0048	現代生活ノ発展勝利	不明	不明		21.2 x 26.4 [cm]		18頁
210	書類	N-0049	THE ARCHITECTURAL REVIVAL IN AUSTRIA (BY HUGO HABERFIELD)	不明	不明		21.1 x 26.6 [cm]		25頁
211	原稿・ノート類	N-0050	建築家の名前リスト	不明	不明		20.9 x 26.7 [cm]	ノート	121頁
212	原稿・ノート類	N-0051	Bridge Architecture	不明	不明		18.4 x 25.7 [cm]	ノート	
213	原稿・ノート類	N-0052	江戸時代(二)明治以降	不明	不明		21.3 x 26.3 [cm]	ノート	
214	原稿・ノート類	N-0053	スクラップブック	不明	不明		22.2 x 30 [cm]	ファイル	
215	原稿・ノート類	N-0054	朝鮮建築史	不明	不明		20.8 x 26.1 [cm]	ノート	
216	書類	N-0055	建築学会(書類)	不明	不明		23.5 x 30.4 [cm]	ファイル	4枚
217	図面	D-0159	(5)フランクフルト・アム・マイン放送局	不明	不明		53.3 x 78 [cm]	青焼き	三階平面図(1/100)
218	図面	D-0160	(5)フランクフルト・アム・マイン放送局	不明	不明		53.3 x 78 [cm]	青焼き	二階平面図(1/100)
219	図面	D-0161	(5)フランクフルト・アム・マイン放送局	不明	不明		98.5 x 75 [cm]	青焼き	一階平面図(1/100)
220	図面	D-0162	(5)フランクフルト・アム・マイン放送局	不明	不明		53.3 x 78 [cm]	青焼き	地階平面図(1/100)
221	図面	D-0163	(7)ローマ放送局	不明	不明		71 x 41.3 [cm]	青焼き	横断面図(1/100)
222	図面	D-0165	(7)ローマ放送局	不明	不明		71 x 41.3 [cm]	青焼き	縦断面図(1/100)
223	図面	D-0165	(7)ローマ放送局	不明	不明		70 x 52.3 [cm]	青焼き	三階平面図(1/100)
224	図面	D-0166	(7)ローマ放送局	不明	不明		70 x 52.3 [cm]	青焼き	二階平面図(1/100)
225	図面	D-0167	(7)ローマ放送局	不明	不明		70 x 52.3 [cm]	青焼き	一階平面図(1/100)
226	図面	D-0168	(7)ローマ放送局	不明	不明		70 x 52.3 [cm]	青焼き	地階平面図(1/100)
227	図面	D-0169	ミュンヘン放送局	不明	不明			青焼き	
228	図面	D-0170	ミュンヘン放送局	不明	不明			青焼き	
229	図面	D-0171	ミュンヘン放送局	不明	不明			青焼き	
230	図面	D-0172	ミュンヘン放送局	不明	不明			青焼き	
231	図面	D-0173	ミュンヘン放送局	不明	不明			青焼き	
232	図面	D-0174	フィラデルフィア放送局	不明	不明			青焼き	
233	図面	D-0175	フィラデルフィア放送局	不明	不明			青焼き	
234	図面	D-0176	フィラデルフィア放送局	不明	不明			青焼き	
235	図面	D-0177	シカゴ放送局	不明	不明			青焼き	
236	図面	D-0178	シカゴ放送局	不明	不明			青焼き	
237	図面	D-0179	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
238	図面	D-0180	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
239	図面	D-0181	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
240	図面	D-0182	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
241	図面	D-0183	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
242	図面	D-0184	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
243	図面	D-0185	ベルリン放送局	不明	不明			青焼き	
244	図面	D-0186	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
245	図面	D-0187	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
246	図面	D-0188	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
247	図面	D-0189	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
248	図面	D-0190	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
249	図面	D-0191	ラジオシティー-NBC	不明	不明			青焼き	
250	書類	N-0056	明治神宮造営委員会	不明	不明		23 x 30.3 [cm]	ファイル	
251	書類	N-0057	都市建設調査会	不明	不明		22.5 x 31 [cm]	ファイル	
252	書類	N-0058	第十二回オリンピック東京大会準備書類○	不明	不明		22.8 x 31.5 [cm]	ファイル	
253	原稿・ノート類	N-0059	日本建築制度考(草稿)	不明	不明		23 x 31.7 [cm]	ファイル	
254	書類	N-0060	運動建築	不明	不明		22.8 x 31.6 [cm]	ファイル	
255	原稿・ノート類	N-0061	建築意匠及装飾	不明	不明		23 x 31.6 [cm]	ファイル	
256	書類	N-0062	写真10枚	不明	不明		22.5 x 31.6 [cm]	ファイル	
257	書類	N-0063	日本学術振興会	不明	不明		23 x 31.8 [cm]	ファイル	
258	原稿・ノート類	N-0064	日本橋梁史	昭和18年	1943年	2月	21.8 x 30 [cm]	ファイル	68頁
259	書類	N-0065	文化財専門審議会	不明	不明		22 x 30.8 [cm]	ファイル	
260	書類	N-0066	愛知県文化会館美術館	不明	不明		24 x 29.8 [cm]	アルバム	写真 28枚
261	書類	N-0067	国立劇場設立準備協議会	不明	不明		22.6 x 30.1 [cm]	ファイル	
262	書類	N-0068	都市計画東京地方委員会	不明	不明		23 x 31.8 [cm]	ファイル	
263	書類	N-0069	東大橋見川総合運動場	不明	不明		22.5 x 30.3 [cm]	ファイル	
264	原稿・ノート類	N-0070	名簿ノート	不明	不明		17.8 x 25 [cm]	ノート	
265	原稿・ノート類	N-0071	COLOR(I)	不明	不明		21 x 26.5 [cm]	ノート	
266	原稿・ノート類	N-0072	広東資料	不明	不明		20 x 25.3 [cm]	ノート	
267	原稿・ノート類	N-0073	支那建築史(II)	不明	不明		21 x 26.3 [cm]	ノート	
268	原稿・ノート類	N-0074	支那建築史(論)	不明	不明		20.6 x 26 [cm]	ノート	
269	原稿・ノート類	N-0075	Russian Architecture	不明	1927年		21 x 26 [cm]	ノート	
270	原稿・ノート類	N-0076	意匠及装飾	不明	不明		21 x 26.5 [cm]	ノート	
271	原稿・ノート類	N-0077	建築家ト其作品	不明	不明		21 x 26.3 [cm]	ノート	
272	書類	N-0078	論文抜刷集	不明	不明		23.3 x 30.3 [cm]	ファイル	
273	書類	N-0079	SCORE CARDS	不明	不明		23 x 31.7 [cm]	ファイル	
274	書類	N-0080	国土計画審議会	不明	不明		23 x 31.7 [cm]	ファイル	
275	原稿・ノート類	N-0081	日本趣味の建築(稿)	不明	不明		23 x 31.4 [cm]	ファイル	
276	原稿・ノート類	N-0082	文集(昭和十五年)	昭和15年	不明		23 x 31.6 [cm]	ファイル	
277	原稿・ノート類	N-0083	文集	不明	不明		22.5 x 31 [cm]	ファイル	
278	原稿・ノート類	N-0084	日本の建築(原稿)ほか	不明	不明		23 x 31.7 [cm]	ファイル	
279	原稿・ノート類	N-0085	明治建築の一断面(草稿)	不明	不明		23 x 30.8 [cm]	ファイル	
280	原稿・ノート類	N-0086	建築計画(陸経講義)	不明	不明		23.6 x 31.5 [cm]	ファイル	
281	原稿・ノート類	N-0087	文想	不明	不明		24 x 31.6 [cm]	ファイル	
282	原稿・ノート類	N-0088	学校国民建築	不明	不明		23 x 31.7 [cm]	ファイル	
283	原稿・ノート類	N-0089	日本の趣味意匠の建築(草稿)	不明	不明		23 x 31.6 [cm]	ファイル	
284	原稿・ノート類	N-0090	現代建築史稿	不明	不明		23 x 31.6 [cm]	ファイル	
285	書類	N-0091	工場建築・市場建築・倉庫建築	不明	不明		23 x 31.4 [cm]	ファイル	
286	書類	N-0092		昭和29年	不明	11月	22.5 x 31 [cm]	ファイル	
287	書類	N-0093	都市計画よりみた密度に関する研究 高山英	不明	不明		21.4 x 29.6 [cm]	ファイル	294頁
288	書類	N-0094		不明	不明		22 x 30.5 [cm]	ファイル	